名　残 Ⅳ

— 福岡県宗像市所在遺跡の発掘調査報告 —

宗像市文化財調査報告書

第 29 集

1991

宗像市教育委員会

NA GORI

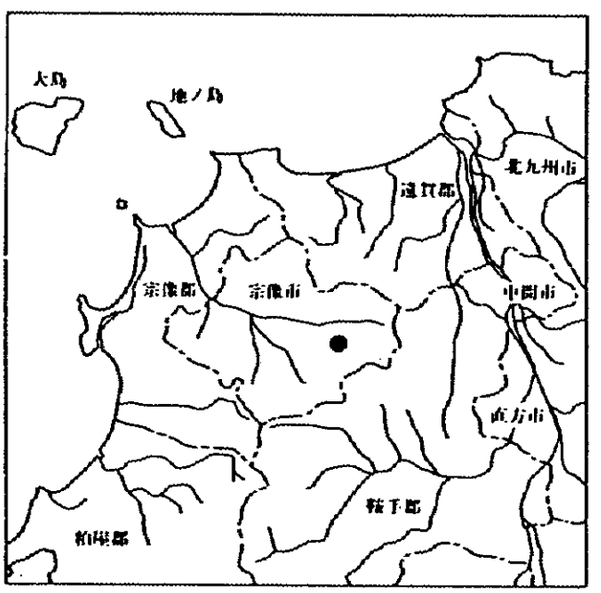
名　残　Ⅳ

FU JI WARA UMEKI

― 冨地原梅木遺跡の発掘調査報告Ⅱ ―

宗像市文化財調査報告書

第 29 集



1991

宗像市教育委員会

序　文

宗像市は福岡市・北九州市の中間に位置し、両大都市の通勤圏となっており、両大都市間のベッドタウンとしての様相を日々濃くしています。

本市はこのような状況のなかで、「学術・文化都市」としての将来構想実現のために官・民一体となって活動しております。

名残遺跡群は市東南部の大型住宅開発に先行して発掘調査を実施した遺跡です。発掘調査では弥生時代から中世にかけての集落と墳墓が検出され、数多くの重要な遺物が出土しています。前方後円墳の新たな発見や弥生時代の大型土壙墓群の確認、あるいは鏡や鉄戈の出土に見られるように非常に多岐にわたっており、古代「むなかた」の一端を垣間見ることができます。

本書は遺跡群のうち、冨地原梅木遺跡の弥生時代から中世にかけての発掘調査の中から弥生時代の集落・墓地群の調査成果を収めています。とくに大規模な土壙墓群からは鉄戈をはじめとする貴重な資料を多く呈示でき、この時期の墓制を考えるうえで重要な調査であったといえます。

本書が広く文化財の保護および学術研究の一資料として貢献することを念願するとともに、発掘調査全般にわたってご協力いただいた多くの方々に心から感謝の意を表する次第であります。

平成３年３月30日

宗像市教育委員会
教育長　森下　照清

例　言

1．本書は、宅地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査を行った名残遺跡群のうち、1983・84年度に実施した冨地原梅木遺跡の調査報告である。

2．発掘調査は、福岡県住宅供給公社の委託を受けて、宗像市教育委員会が実施した。

3．冨地原梅木遺跡の調査で得た遺構・遺物は多量にのぼり、古墳時代以降の資料は『名残Ⅲ』において前年度に報告を行っている。本書では弥生時代の遺構に関して報告を行う。これをもって本遺跡の事実報告は一応終了する。

4．遺物の整理作業は宗像市文化財整理室でその一部を行ったが、後に九州歴史資料館において同館横田義章・文化課岩瀬正信両氏の指導の下で実施した。

5．遺構の実測は主に飛野・原・福田裕士・寺島克史が行い、遺物の実測は飛野・若松・鬼木つや子・佐藤みゆき（九州歴史資料館）が行った。なお、石器の一部は水ノ江和同（文化課）・栗焼憲児（大分県中津市教育委員会）・川畑和弘（滋賀県）の諸氏の協力を得た。

　また、製図は広橋久美・清家直子・徳永映子・豊福弥生・関久江・森山シズ子・前田美奈の諸氏と飛野が行った。

6．使用した写真は出土遺物のうちの土器・鉄戈・鉄鏃を九州歴史資料館石丸洋氏が、他の遺構・遺物は飛野が撮影した。なお、空中写真は「稲富」に依頼した。

7．本書の執筆・編集は飛野が行った。

本文目次

第１章　はじめに……1
第２章　周辺の弥生時代の遺跡……3
第３章　調査の内容……11
　ｉ）　住居跡……11
　ii）　竪穴……28
　iii）　土壙墓・甕棺墓……77
　iv）　その他の遺構と遺物……114
第４章　おわりに……119
　ｉ）　弥生時代前期～中期の土器の変遷……119
　ii）　地域性について……125
　iii）　竪穴と住居跡……126
　iv）　土壙墓群について……131
　ｖ）　弥生時代後期～古墳時代初頭の住居跡……138
補記．土壙墓ＳＫ６周辺出土の土器……140

図版目次

図版１　上：調査前全景（南上空から）　下：土壙墓・Ⅱ区竪穴群（上空から）
図版２　全景（南東上空から）
図版３　全景（南東上空から）
図版４　全景（北上空から）
図版５　上：住居跡SB１（南東から）　下：住居跡SB２（西から）
図版６　上：住居跡SB３（南東から）　下：住居跡SB４（北から）
図版７　上：住居跡SB５周辺（北東から）　下：住居跡SB７・８周辺（東から）
図版８　上：住居跡SB９周辺（南東から）　下：同炉跡遺物出土状態（西から）
図版９　上：住居跡SB10・11周辺（南東から）　下：SB10屋内土坑遺物出土状態(西から)
図版10　上：住居跡SB12~17周辺（南から）　下：SB12炭化材検出状態（北から）
図版11　上：SB12炭化材検出状態（北から）　下：SB12（北から）
図版12　上：住居跡SB13（北から）　下：住居跡SB14（北から）
図版13　上：住居跡SB15（北から）　下：住居跡SB16（北から）

図版14　上：B区竪穴群（東から）　下：20号竪穴（南から）
図版15　上：23号竪穴（西から）　下：24号竪穴（北から）
図版16　上：30号竪穴（北から）　下：33号竪穴（北から）
図版17　上：34号竪穴（北から）　下：54号竪穴（北から）
図版18　上：65号竪穴（西から）　下：80号竪穴（北から）
図版19　上：土壙墓群南端（南から）　下：土壙墓群南端（北西から）
図版20　上：土壙墓ＳＫ１（北から）　下：同鉄戈出土状態（東から）
図版21　上：土壙墓ＳＫ３（北から）　下：同遺物出土状態（北から）
図版22　上：土壙墓ＳＫ22周辺（北から）　下：土壙墓ＳＫ14・15（東から）
図版23　上：土壙墓ＳＫ17（南から）　下：同（北から）
図版24　上：土壙墓ＳＫ20（東から）　下：同（東から）
図版25　上：土壙墓ＳＫ30（北から）　下：24号墳下層土壙墓群（西から）
図版26　上：土壙墓ＳＫ53（西から）　下：同鉄鏃出土状態（東から）
図版27　上：土壙墓ＳＫ54・53（西から）　下：同（東から）
図版28　上：土壙墓ＳＫ71（北から）　下：土壙墓ＳＫ75（南から）
図版29　上：土壙墓ＳＫ79（西から）　下：土壙墓ＳＫ80（北西から）
図版30　上：土壙墓ＳＫ93（北から）　下：甕棺墓（東から）
図版31　上：祭祀土坑ＳＫ200（北から）　下：18号竪穴土層（北から）
図版32　出土遺物１（住居跡）
図版33　出土遺物２（住居跡・竪穴）
図版34　出土遺物３（竪穴）
図版35　出土遺物４（竪穴）
図版36　出土遺物５（竪穴）
図版37　出土遺物６（竪穴）
図版38　出土遺物７（竪穴）
図版39　出土遺物８（竪穴）
図版40　出土遺物９（土壙墓）
図版41　出土遺物10（土壙墓）
図版42　出土遺物11（土壙墓・ＳＫ200・その他）
図版43　出土遺物12（その他）

挿図目次

第 1 図　周辺遺跡分布図（1/50,000）……2
第 2 図　光岡長尾遺跡遺構配置図（1/1,000）……3
第 3 図　曲香畑遺跡遺構配置図（1/1,000）……5
第 4 図　光岡草場遺跡２号土壙墓および同出土土器実測図（1/60、1/8）……5
第 5 図　須恵クヒノ浦遺跡遺構配置図（1/1,000）……6
第 6 図　冨地原梅木遺跡周辺地形測量図（1/3,000）……8
第 7 図　冨地原梅木遺跡弥生時代遺構配置図（1/900）……折込
第 8 図　住居跡SB１実測図（1/80）……11
第 9 図　住居跡SB２実測図（1/80）……12
第 10 図　住居跡SB３実測図（1/80）……13
第 11 図　住居跡SB４実測図（1/80）……13
第 12 図　住居跡出土遺物１実測図（土器;SB３・５・８・９）（1/4）……14
第 13 図　住居跡SB５実測図（1/80）……15
第 14 図　住居跡SB６実測図（1/80）……16
第 15 図　住居跡SB７実測図（1/80）……16
第 16 図　住居跡SB８実測図（1/80）……17
第 17 図　住居跡SB９実測図（1/80）……18
第 18 図　住居跡SB９内炉跡遺物出土状態実測図（1/20）……18
第 19 図　住居跡SB10屋内土坑遺物出土状態実測図（1/20）……19
第 20 図　住居跡SB10実測図（1/80）……19
第 21 図　住居跡SB11実測図（1/80）……20
第 22 図　住居跡SB12・16実測図（1/80）……21
第 23 図　住居跡出土遺物実測図２（土器;SB10・12・16）（1/4）……22
第 24 図　住居跡出土遺物実測図３（石器）（1/4）……23
第 25 図　住居跡SB13実測図（1/80）……24
第 26 図　住居跡SB14実測図（1/80）……25
第 27 図　住居跡出土遺物実測図4（土器;SB13・14）（1/4）……25
第 28 図　住居跡SB15実測図（1/80）……26
第 29 図　住居跡出土遺物実測図５（石器）（1/3）……27
第 30 図　住居跡SB17実測図（1/80）……28

第 31 図　A区住居跡・竪穴配置図（1/300）……折込
第 32 図　B区住居跡・竪穴配置図（1/300）……32
第 33 図　C区住居跡・竪穴配置図（1/300）……34
第 34 図　1～5号竪穴実測図（1/60）……35
第 35 図　6～14・22号竪穴実測図（1/60）……36
第 36 図　15～21・23・24号竪穴実測図（1/60）……37
第 37 図　25～33号竪穴実測図（1/60）……38
第 38 図　34～44号竪穴実測図（1/60）……39
第 39 図　45～52号竪穴実測図（1/60）……40
第 40 図　53～60号竪穴実測図（1/60）……41
第 41 図　61～69号竪穴実測図（1/60）……42
第 42 図　70～77号竪穴実測図（1/60）……43
第 43 図　78～83号竪穴実測図（1/60）……44
第 44 図　84～86号竪穴実測図（1/60）……45
第 45 図　竪穴出土遺物実測図1（土器;2、3号）（1/4）……47
第 46 図　竪穴出土遺物実測図2（土器;5、6、9、11、12、13号）（1/4）……48
第 47 図　竪穴出土遺物実測図3（土器;10～12号上方包含層、14号）（1/4）……49
第 48 図　竪穴出土遺物実測図4（土器;15、17、18号）（1/4）……51
第 49 図　竪穴出土遺物実測図5（土器;20、21、22、8号）（1/4）……53
第 50 図　竪穴出土遺物実測図6（土器;23、24号）（1/4）……55
第 51 図　竪穴出土遺物実測図7（土器;25、27、28、30号）（1/4）……57
第 52 図　竪穴出土遺物実測図8（土器;33号）（1/4）……58
第 53 図　竪穴出土遺物実測図9（土器;34号）（1/4）……59
第 54 図　竪穴出土遺物実測図10（土器;35、36～38、39、41、46、50、51、54号）（1/4）……61
第 55 図　竪穴出土遺物実測図11（土器;55、56、62、63、65号）（1/4）……63
第 56 図　竪穴出土遺物実測図12（土器;67号）（1/4）……65
第 57 図　竪穴出土遺物実測図13（土器;67、68、73、74号）（1/4）……66
第 58 図　竪穴出土遺物実測図14（土器;74、80号）（1/4）……67
第 59 図　竪穴出土遺物実測図15（土器;80、81号）（1/4）……68
第 60 図　竪穴出土遺物実測図16（土器;81、82号）（1/4）……70
第 61 図　竪穴出土遺物実測図17（土器;83号）（1/4）……71
第 62 図　竪穴出土遺物実測図18（鉄器・玉・石器）（1/3）……72

第 63 図　竪穴出土遺物実測図19（石器）（1/3、1/2）……73
第 64 図　土壙墓配置図（1/300）……折込
第 65 図　土壙墓ＳＫ１・３実測図（1/40）……78
第 66 図　土壙墓ＳＫ４・５実測図（1/40）……79
第 67 図　土壙墓ＳＫ７～14実測図（1/40）……80
第 68 図　土壙墓ＳＫ15・16・18実測図（1/40）……81
第 69 図　土壙墓ＳＫ19・21～24実測図（1/40）……83
第 70 図　土壙墓ＳＫ25～28実測図（1/40）……84
第 71 図　土壙墓ＳＫ29～31実測図（1/40）……85
第 72 図　土壙墓ＳＫ32～36実測図（1/40）……86
第 73 図　土壙墓ＳＫ37～43実測図（1/40）……87
第 74 図　土壙墓ＳＫ44～52実測図（1/40）……88
第 75 図　土壙墓ＳＫ53～58実測図（1/40）……89
第 76 図　土壙墓ＳＫ59～63実測図（1/40）……90
第 77 図　土壙墓ＳＫ64～67・69実測図（1/40）……92
第 78 図　土壙墓ＳＫ70～73実測図（1/40）……94
第 79 図　土壙墓ＳＫ74～78実測図（1/40）……95
第 80 図　土壙墓ＳＫ79～83実測図（1/40）……96
第 81 図　土壙墓ＳＫ84～91実測図（1/40）……98
第 82 図　土壙墓ＳＫ92～98実測図（1/40）……99
第 83 図　土壙墓ＳＫ99～103実測図（1/40）……100
第 84 図　土壙墓ＳＫ104・105実測図（1/40）……101
第 85 図　土壙墓ＳＫ106～109実測図（1/40）……102
第 86 図　土壙墓ＳＫ110～113実測図（1/40）……103
第 87 図　土壙墓ＳＫ17・20・68・114実測図（1/40）……104
第 88 図　土壙墓出土遺物実測図１（鉄器・玉・石器）（1/3）……105
第 89 図　土壙墓出土遺物実測図２（土器）（1/4）……107
第 90 図　土壙墓出土遺物実測図３（土器）（1/4）……109
第 91 図　土壙墓出土遺物実測図４（土器）（1/4）……111
第 92 図　土壙墓出土遺物実測図５（土器）・甕棺墓実測図（1/4）……113
第 93 図　祭祀土坑ＳＫ200実測図（1/30）……115
第 94 図　祭祀土坑ＳＫ200出土遺物実測図（1/4）……115
第 95 図　採集その他の遺物実測図１（1/4）……116

第 96 図　採集その他の遺物実測図２（1/3）……118
第 97 図　壺形土器変遷図（1/8）……折込
第 98 図　甕形土器変遷図（1/8）……折込
第 99 図　竪穴法量・垂直分布図……126
第 100 図　住居跡・竪穴時期別配置図……130
第 101 図　竪穴土層実測図（1/80）……131
第 102 図　副葬品のある土壙墓および主軸を違える土壙墓配置図……137
第 103 図　土壙墓ＳＫ６周辺出土遺物実測図……140
第 104 図　名残遺跡群事業計画図（1/3,000）……折込

表目次

第１表　冨地原梅木遺跡竪穴遺構一覧表……127・128
第２表　住居跡・竪穴時期別変遷表……129
第３表　冨地原梅木遺跡土壙墓一覧表……132～134

第1章　はじめに

この報告書は名残遺跡群として総称される諸遺跡のうち、冨地原梅木遺跡に関する第二冊目の報告書であり、昨年、1990年度に報告した古墳時代・中世の遺構・遺物（『名残Ⅲ』）に続いて弥生時代の遺構・遺物についての報告を行う。

調査にいたる経緯に関しては他の報告書でも随時記されておりここでは省略したい。周辺の遺跡については市域の弥生時代の遺跡に限って次章にまとめることにする。

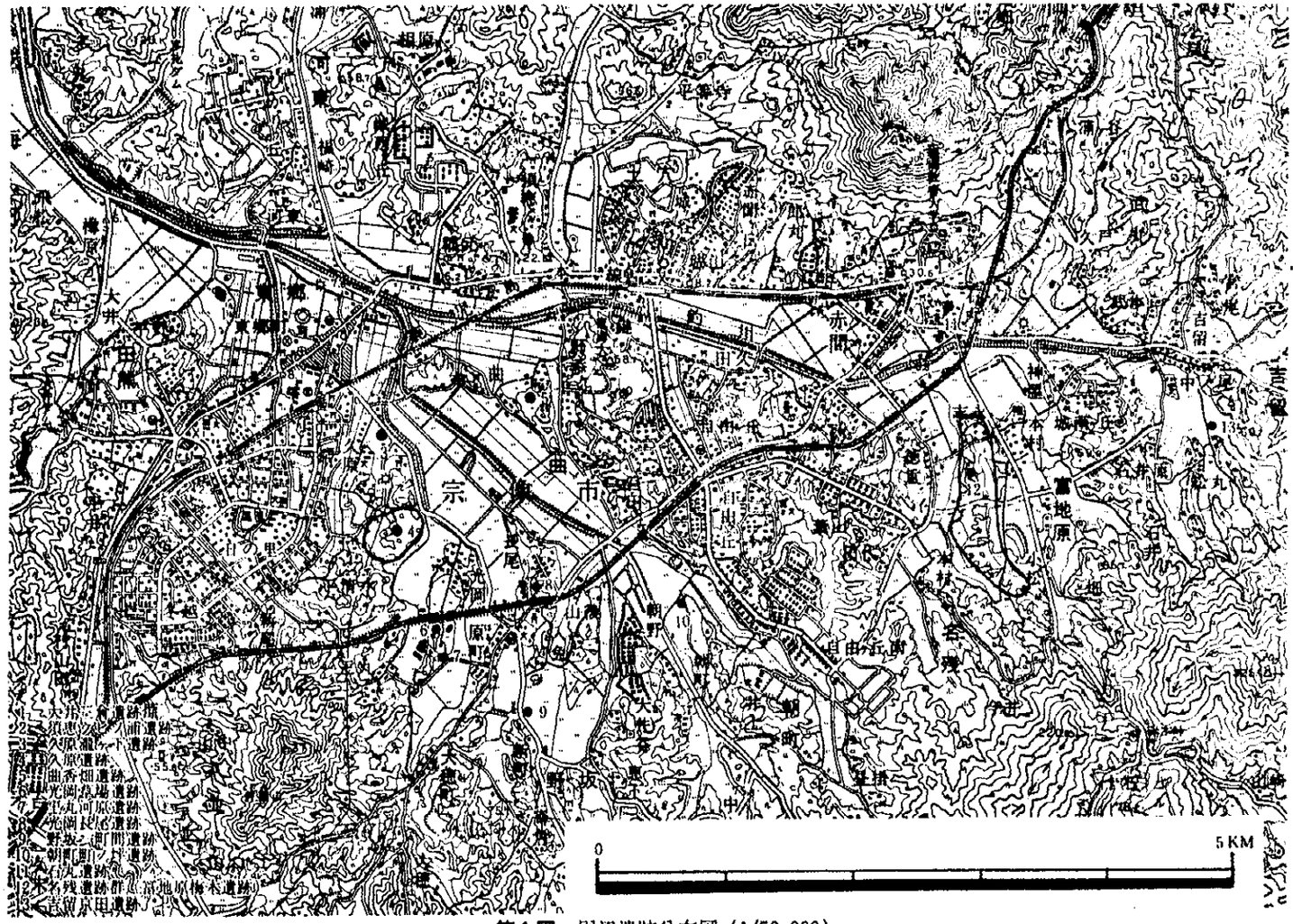
発掘・整理にあたっては以下のように組織で行った。

総　　括	宗像市教育委員会	教育長	森下　照清
		教育部	山田　政信
		社会教育課長	吉田　繁利
		文化係長	尾山　　清
庶務・会計		主事	北野　隆文
発掘調査		主事	原　　俊一
		嘱託	飛野　博文（現福岡県教育委員会）
調査指導	九州大学	助手	田中　良之（現九州大学助教授）

遺跡は約20,000m^{2}の山林・畑地を対象とするもので、古墳の墳丘を除く丘陵のほぼ全域を表土掘削し、低地には試掘溝を入れて文化財の有無を確認した。しかし、試掘溝で検出できなかったとしてもやはり全体の表土剥ぎを行っておればという後悔の念は今にして強く感じている。たとえば26号墳北側の一段落ちる平坦面（以前は畑地であった）にはたしてさらなる袋状竪穴群が存在しなかったかと。

また、予想だにしていなかった土壙墓群に遭遇したこともあって、調査の段取り等に腐心し、かえって遺構に対する集中力を欠いたことも多々あり不十分といわざるを得ない調査になったと痛感している。特に鉄戈という本遺跡でもっとも特筆すべき遺物を出土した土壙墓ＳＫＩは以下にも記すように当初は住居跡と判断したために埋葬部の詳細な把握ができないままに終わるという痛恨事であった。

不十分な調査で終わったものの多くの方々の尽力で漸く７年を経て報告の責を果たせたことを担当者として深く感謝いたします。



第1図　周辺遺跡分布図（1/50,000）

第２章　周辺の弥生時代の遺跡

ここ数年の開発行為によってそれまでほとんど知られていなかった市内の弥生時代の生活の跡が徐々に知られてきた。それらのいくつかについて概観する。

石丸遺跡(註１)

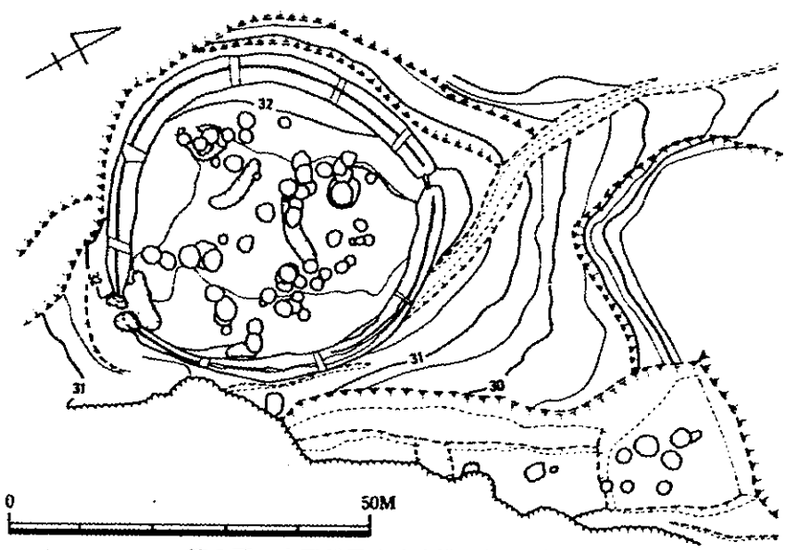
400m^{2}に満たない丘陵地を調査し、11基の（袋状）竪穴・溝状遺構・古墳等を検出している。遺物量は概して少ないが、うち、３号貯蔵穴とする竪穴から土器・獣骨・貝類等が集中して出土している。中期初頭とされる。

光岡長尾遺跡(註２)（第３図）

標高30mの丘陵頂部を囲んで、直径42～46m（溝底間）のほぼ円形を呈するＶ字溝、そして溝の内外で50基以上の袋状竪穴群を調査した。陶塤の出土で著名である。Ｖ字溝は幅４m、深さ3.0mの規模を有し、南北に幅1.5mの陸橋を削り残していた。前期末～中期初頭に属する遺跡である。注目すべきは同時期に属する住居跡等の遺構を検出できなかったことである。

大井三倉遺跡(註３)

農地構造改善事業にともなって発見・調査された。蛇行鉄器を出土した注目すべき古墳群を含むが、ここでは前期中葉頃の遺物も出土した環濠を重視したい。丘陵の先端近く、標高22m



第２図　光岡長尾遺跡遺構配置図（1/1,000）

余の地点を最高所とする一帯を画する幅５m、深さ1.9mのＶ字溝を約90mの長さにわたって発掘し、その間には幅６mの陸橋部も検出している。内部に何等の遺構も発見できなかった点は悔やまれるが、袋状竪穴のような深い遺構の存在は疑問視されている。

遺物としては一部が報告されているのみである。そのなかで円板張り付け状の底部を有し、体部最大径部に稜をもって以上が内彎して立ち上がる壺、脚部が高く延び、脚端近くに段を付けて開きが大きくなる高杯などは特徴的な遺物である。

久原遺跡(註４)

市民総合センター建設に伴う大規模な発掘調査が実施された。ここも後期の前方後円墳を含む50数基の古墳群が重複してある複合遺跡で、弥生時代の遺構としては袋状竪穴と土壙墓・甕棺墓が検出された。標高約30～40mの地点にある。

袋状竪穴は現状では平坦な地形に18基が群集していた。前期の終わり～中期に属するという。

土壙墓は前期・中期のものがあり、甕棺墓は前期に属する。前期の土壙墓（８基）・甕棺墓（５基）群は袋状竪穴群と同じ平坦地にあって、距離的にも近く、両者を区画する遺構はないようである。副葬品として土壙墓から有柄式磨製石剣１・いわゆる朝鮮式磨製石鏃４点がまとまって出土し、別の土壙墓からは供献された小型壺が出土している。中期の土壙墓群（33基）は前期の遺構から離れて丘陵上に位置する。規則的な方向性はないが、いわゆる二段掘りのものが多い点で前期のそれと異なるという。その１基から細型銅剣・銅矛（双耳）が並んで出土している。またここでは墓群の南端に祭祀土坑が設置されていた。

曲香畑遺跡(註５)

農園造成に先立って標高35m前後の丘陵が削平されることになり発掘調査を行った。竪穴群は狭い鞍部を挟んで２群に分かれ、それぞれ26・48基を検出したが、中58基が袋状竪穴である。竪穴群は調査区内に一部の空地を残して万遍なく分布するものの、住居跡は検出できず、柱穴も発見しえなかった。削平を考慮しても住居跡は元来ここには存在しなかったのではないかという疑念が残る。遺物はほとんどが未整理であるが前期後半～末を中心とするようである。

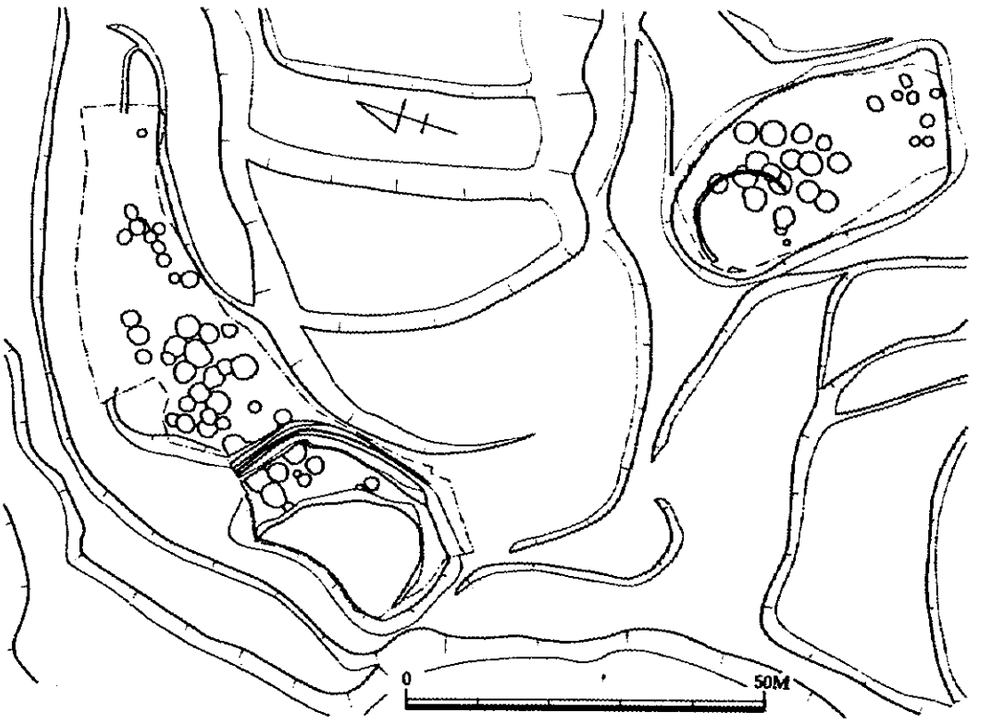
光岡草場遺跡(註６)

畑地造成にともなって調査を行った古墳の下層から大小24基の土壙墓が検出された。その内の２基では墓壙内に壺の供献が見られ、中期後半とされる。祭祀土坑は検出できていない。遺跡は標高38mの丘陵上にある。

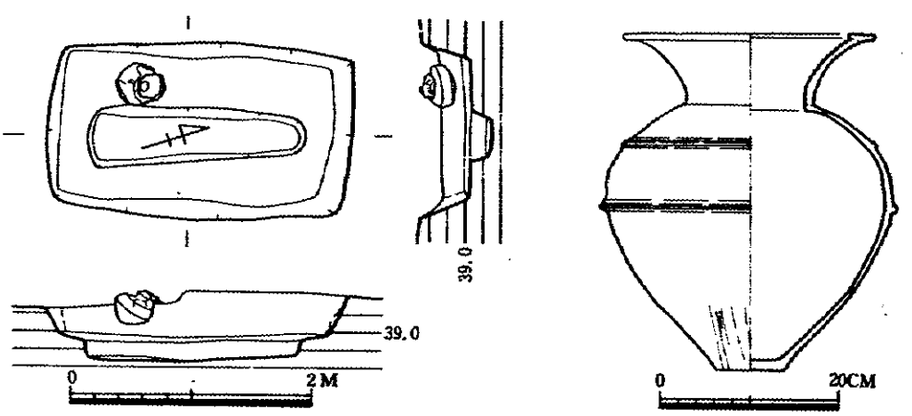
須恵クヒノ浦遺跡(註７)

釣川を眼下に見る標高30m余の丘陵上に営まれた全長40m弱の前方後円墳の下層で検出した。古墳下層で２棟の方形住居跡（弥生終末～古墳初頭）と多数の柱穴群、古墳下層および周辺で

20基前後の袋状竪穴等を調査した。袋状竪穴は前期～中期前半頃としてよかろう（未整理）。ここでは袋状竪穴とともに多数の柱穴群が存在する点で興味深い。ただ詳細は整理を待つこととしたい。

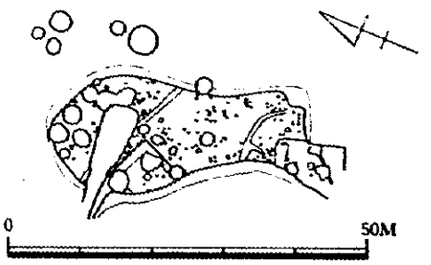


第3図　曲香畑遺跡遺構配置図（1/1,000）



第4図　光岡草場遺跡2号土壙墓および同出土土器実測図(1/60、1/8)

他に朝町町の坪遺跡では標高15～20mの低丘陵裾で弥生中期の円形住居跡を、野坂一町間遺跡ではやはり中期の倉庫跡を調査している(註8)。また東郷遺跡群として総称される、本市の大規模団地造成の嚆矢となった調査でも中期の生活跡を検出している(註9)。前者は未報告であり、後の2遺跡では集落としては不明瞭な点を残している。



第5図　須恵クヒノ浦遺跡構配置図（1/1,000）

また、後期後半以降の遺構・遺物も量的には少ないものの知られるようになってきたが、帰属時期の問題もあり個別遺跡の説明は省略する。

以上に市内の弥生遺跡について概観してきた。遺構の性格・時期を考え合わせるとまだまだ希薄な感を免れえない。すなわち、前期の環濠・袋状竪穴・墓地、中期の墓地と生活跡の一部、後期終末の住居跡などが調査されたに過ぎないのである。以下にまとめてみる。

立地をみると前～中期の遺跡は市域を東西に貫流する釣川の両側に広がる可耕地（低地）の周囲を取り巻く低丘陵上にいずれも位置している。可耕地は決して広いとはいえなが、釣川自体小河川と言うべきで、川近くに低丘陵が複雑に発達していることも初期の農耕生活には適していたと言えよう。逆の見方をすれば集落が拡大発展していく自然な現象を阻んだものも地形的要因であろう。上記の須恵クヒノ浦・曲香畑・光岡長尾・久原の各遺跡は1～1.5kmの距離を隔ててほぼ同時期の袋状竪穴群が営まれている。しかも各遺跡は互いに見える位置にある。石丸遺跡そしてここに報告する冨地原梅木遺跡も同様の位置にあり、先の4遺跡とは3～4kmの距離を保つに過ぎない。これらが相互に無縁であったとは考え難く、協力あるいは敵対関係を繰り返していたのであろう。いずれにしても大規模と呼べる弥生時代の遺跡は現在まで、そしておそらく将来的にも宗像市域に限れば予想は困難と考えている。

中～後期の遺跡はやがて可耕地縁辺の山裾へも進出する。野坂一町間遺跡などがそうである。一方で以前として丘陵状にも生活の場を求めているが、当然であろう。

遺構としては住居跡の検出例が乏しい反面、袋状竪穴の発掘例が多く、ここ数年では墓地の様相も明らかになりつつある。住居跡では確実に前期に遡る資料はなく、中期に関しても朝町町の坪の住居跡、野坂一町間・須恵クヒノ浦遺跡の竪穴あるいは柱穴の資料の他には生活跡は不明である。後期でも終末近くの遺構はいくつかある。須恵クヒノ浦・久原滝ヶ下・

王丸河原(註10)の諸遺跡がそうである。久原滝ヶ下遺跡は畿内系土器とともに鉄鏃が紹介されている。

墓地は上記の久原・光岡草場遺跡のほかに、吉留京田遺跡で後期の小児甕棺3基が発掘され、ガラス小玉・碧玉製管玉が出土している。また、名残遺跡群中、徳重高田遺跡で箱式石棺墓群が検出されているが調査は完了しておらず、細部ははっきりしない。成人用甕棺は皆無であり、墓制の主流はあくまでも土壙墓であった。

遺物の面では、かって釣川河床から出土した広型銅矛片が唯一の青銅器であり、甕棺葬文化圏の外に位置することと相まって、それまでほとんど顧みられることがなかった。しかし先の久原遺跡出土の細型銅剣・銅矛・朝鮮式磨製石鏃などは当地域の弥生文化に対する見方に一石を投じた。上記の遺物に加えて、光岡長尾遺跡出土の陶塤も弥生文化の伝播ルートに関連して注目されている。土器の様相に関しては既調査で検出した量が多量であったことも災いしてほとんどが未報告に終わっており、不明な点が多い。そうした中でも遠賀川流域として包括される地域により類似する点が指摘されている。

註1．宗像町教育委員会「石丸遺跡」(『宗像町文化財調査報告書』第4集、1980)

2．原俊一「宗像の考古学」(『福岡考古』第13号、1986)

3．宗像市教育委員会「大井三倉遺跡」(『宗像市文化財調査報告書』第11集、1987)

4．宗像市教育委員会「久原遺跡―概報　古代宗像をさぐる―」(『宗像市文化財調査報告書』第19集、1988)

5．宗像市教育委員会「曲香畑遺跡」(『宗像市文化財調査報告書』第7集、1984)

6．宗像市教育委員会「光岡草場遺跡」(『宗像市文化財発掘調査報告書』第12集、1987)

7．1983年、飛野が担当者となって宗像市教育委員会が調査。

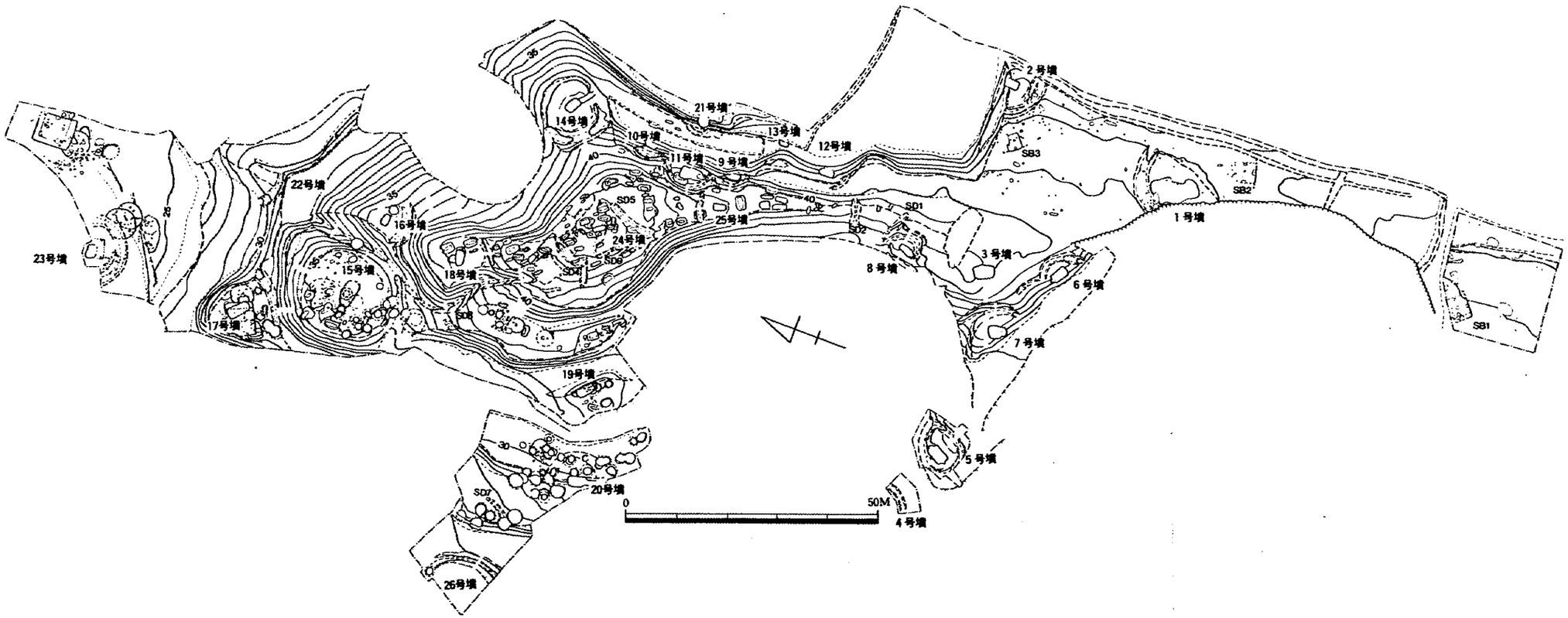
8．宗像市教育委員会「野坂一町間遺跡」(『宗像市文化財調査報告書』第9集、1985)

9．日本住宅公団『東郷遺跡群』、1967

10．宗像市教育委員会「王丸河原遺跡」(『宗像市文化財調査報告書』第9集、1985)

註を付していない遺跡については註2文献による。

第6図　冨地原梅木遺跡周辺地形測量図（1/3,000）



第7図　冨地原梅木遺跡弥生時代遺構配置図（1/900）

第３章　調査の内容

以下に調査の結果を住居跡、竪穴（以下、袋状竪穴等をこう略す）、土壙墓の順に記す。遺物の実測図は遺構の種類毎にまとめた。

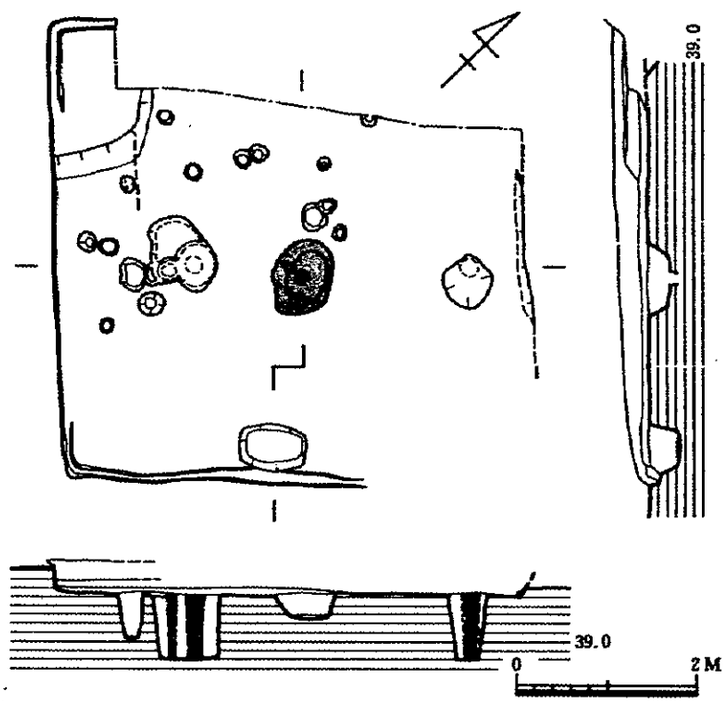
ｉ）住居跡

調査区南端に住居跡ＳＢ１～３が、北端に住居跡ＳＢ12～17が位置する。これらは畑地として利用されていたところである。その他の住居跡は丘陵上及び西側の平坦面にあって竪穴・土壙墓群と混在する。調査前は一面に櫨木が生い茂っていた。

ＳＢ１（図版５、第８図）

調査区最南端の平坦地にある。かなりの削平を受け、全体の規模は解らないが、残存する一辺は長さ5.1mを測る。深さは最大で0.27mである。西隅にベッド状遺構が一部残るが、これはおそらく南隅まで延びていたものと思われる。また、東北に位置する主柱穴の近くにやはり浅い段が遺存しており、南西・東北の両辺に添ってベッド状遺構があったことが推測される。

中央に径0.7～0.8m、深さ0.2mの炉跡があり、それを中心に３mの距離をもって２本の主柱穴がある。その深さは約0.7mである。また南東



第８図　住居跡ＳＢ１実測図（1/80）

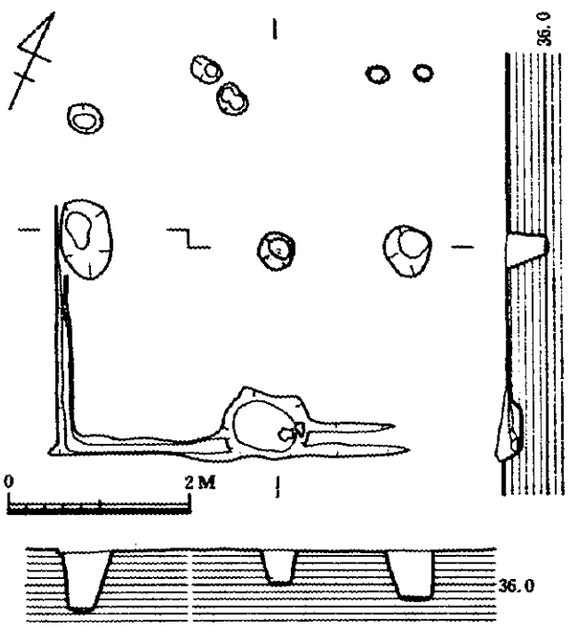
辺中央付近には辺0.5～0.7mの長方形に近い、深さ0.3mの屋内土坑がある。

出土遺物

出土遺物として柱穴から土器の小片が出土したが図示していない。甕のようで、レンズ状の底部を有し、粗い刷毛目調整が確認できる。

ＳＢ２（図版５、第９図）

ＳＢ１の北にある。これも削平が著しく、壁体は南東辺のあたりで0.1mほどが遺存するのみである。中央付近にあるピットはやや深いが炉跡であろう。南東辺に接する0.7×0.8mの土坑を屋内土坑とすれば主柱穴は断面軸にかかる２本となる。その場合には南西の柱穴は周壁溝に近すぎ、ＳＢ１と同様な配置を採るベッド状遺構があったものと思われる。



第９図　住居跡ＳＢ２実測図（1/80）

出土遺物（図版33、第29図２・７・８・12）

土器は小片が若干出土しているが、時期の判定は困難である。

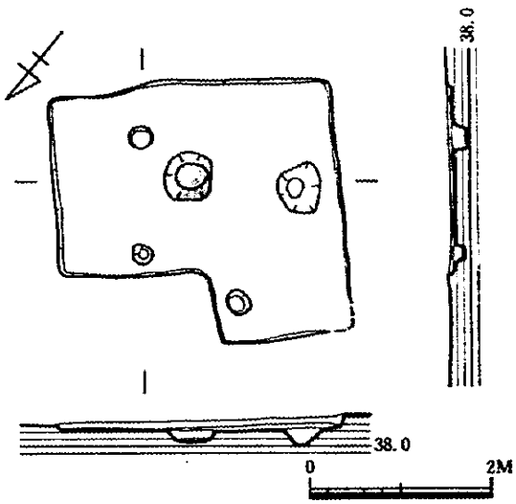
石鏃（２）　切っ先・返りの先端を欠く小型品。安山岩製で剥離の様子ははっきりしない。

砥石（７・８）　屋内土坑中から出土したもので、いずれも比較的大型で偏平な形状となる。７は２面を使用するが、片減りが著しく、石理が美しい文様となって浮き出ている。また図左の肉厚部分には直角方向の条痕が観察できる。石材は灰褐色を呈する砂岩である。目は比較的細かい。８は図の表裏及び左右両側面の４面を使用し、これもかなり片減りする。見た目以上に滑らかな面である。石材は灰白色を呈する砂岩である。

磨石（13）　直径10cm、厚さ６cmの丸い玢岩製。使用の痕跡のようなものは見えないが、手でさわると非常に滑らかな表面となっている。

ＳＢ３（図版６、第10図）

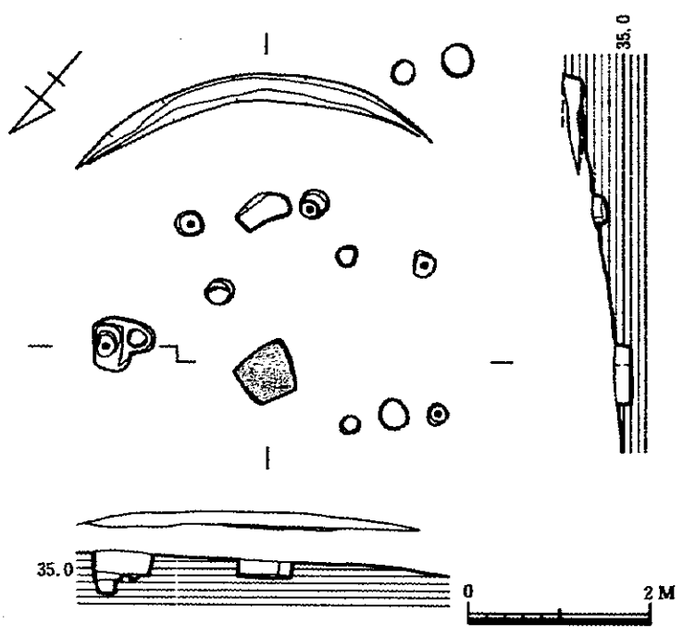
調査区南端近くの平坦地、以前は畑であったところにあり、これも壁体の立ち上がり0.1mほどを残すのみで、大きく削平されている。中央からやや偏した位置に径0.6m、深さ0.1mの炉跡があり、南西辺近く、これも中央からややずれた位置に屋内土坑がある。北隅の張り出しはここにベッド状遺構があったことを示しており、炉跡と屋内土坑の位置は北東～南東辺にかけてもベッド状遺構があったことを思わせる。



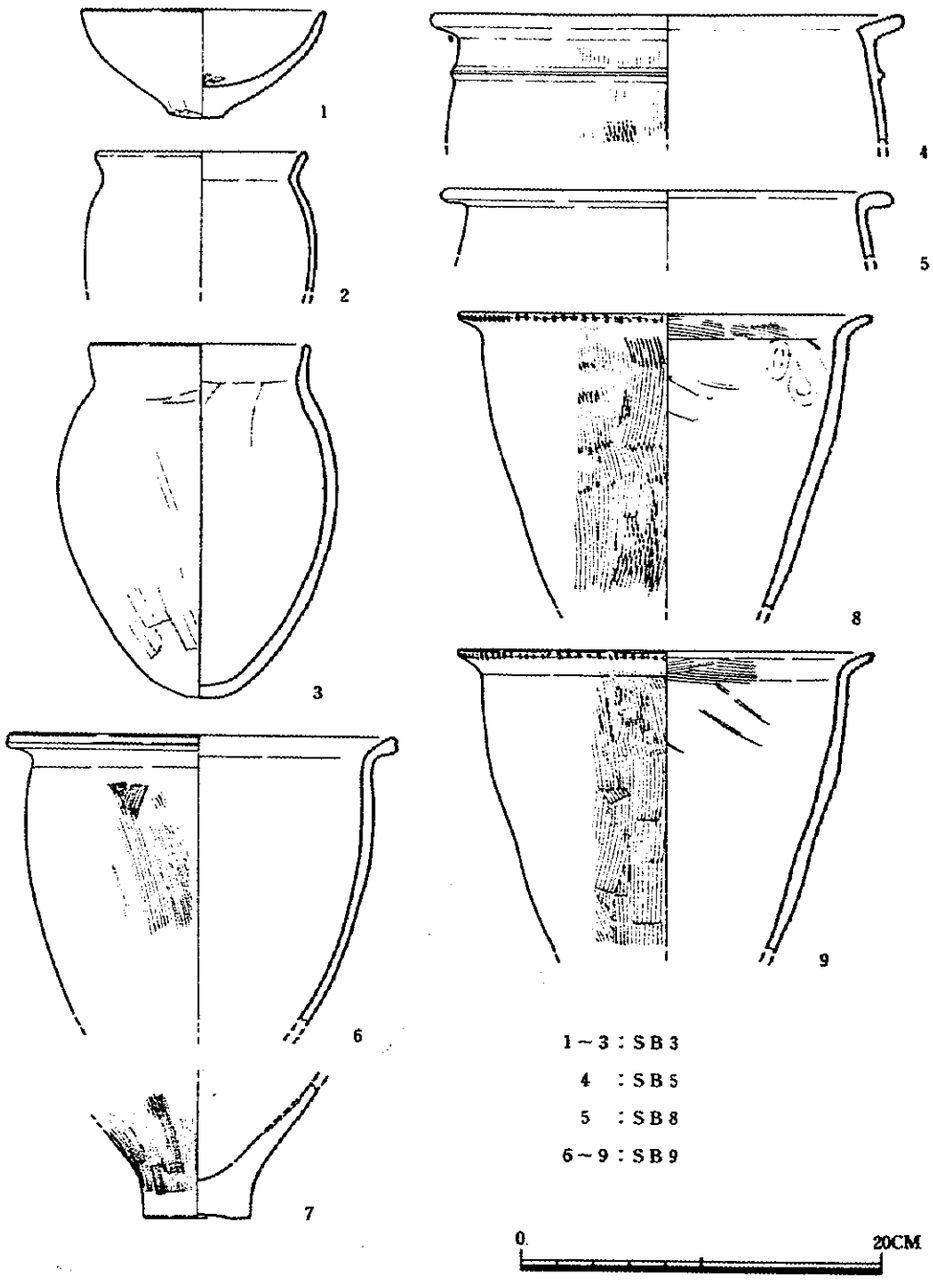
第10図　住居跡ＳＢ３実測図（1/80）

出土遺物（図版32、第12図１～３）

床面からかなりの点数の土器が出土したが細片化および器表の摩滅が甚だしく、実測に耐えるものは乏しかった。１は1/2強が残る鉢で、底部はレンズ状を呈して小さく突出する感がある。また、口縁部は内彎気味に伸びて端部が丸く終わる。２の口縁部は「く」字形に屈曲するものの、反転の度合は小さい。胴部内面は撫でで仕上げる。３は約2/3が遺存する。口縁部はほぼ直立し、頸部の締まりが弱い。胴部は長胴で、底部は尖底・丸底の中間的な形態となる。胴部内外面は箆削り様の



第11図　住居跡ＳＢ４実測図（1/80）



第12図　住居跡出土遺物実測図1（土器;SB3・5・8・9）(1/4)

調整を施すが、砂粒の移動はほとんど観察できない。

ＳＢ４（図版６、第11図）

15号墳周溝の南に接して周壁溝・柱穴の一部を検出した。方形に近い炉跡を住居の中心とすれば直径７ｍほどの円形住居に復原でき、主柱穴は環状に並ぶ８本を想定できる。50・53号竪穴を切るようで、15号墳周溝に約1/2を破壊される。

出土遺物（図版33、第29図６）

赤味を帯びる灰褐色の砂岩製砥石で、図の表面はやや膨らむ形になる。これも使用面は滑らかになる。他に土器の小片があるが時期比定は困難である。

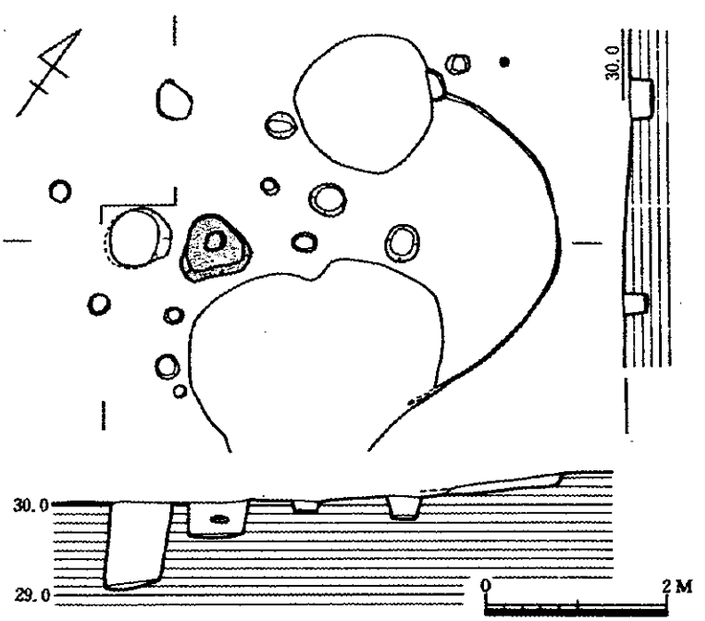
ＳＢ５（図版７、第13図）

西に延びる尾根上、20号墳の北に接する標高30mの地点に位置している。切り合い関係を確認できていないが５基の竪穴と重複していること、そして削平が著しいことが災いして不十分な調査で終わってしまった。

中央部に石を残す土坑を炉跡として６本の主柱穴を想定できる。東方の弧状の掘形は上記の柱穴群と整合せず、発掘のミスであろう。主柱穴間の距離は約３ｍとなり、小規模な円形住居跡に復原できる。

出土遺物(第12図４)

約1/8の小片である。口縁部は平坦面を成して外上方に伸び、内側へ小さく突出する。他にも小さな鋤先状口縁をもち、突帯を一条付す甕の小片がある。上述したように５基の竪穴と重複しており、その23号竪穴出土土器に似る。位置的には同時存在は考えがたく、住



第13図　住居跡ＳＢ５実測図（1/80）

居跡が浅かったこともあり誤認したものであろうか。

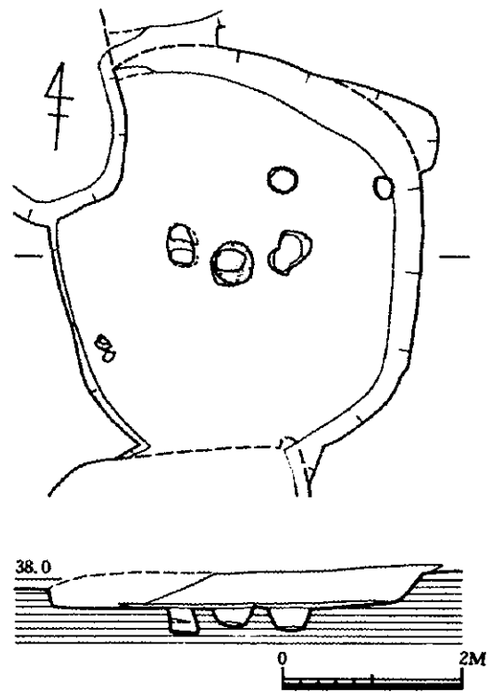
ＳＢ６（第14図）

18号墳南西側、標高38mの狭い平坦面にあり、土壙墓と切り合っている。発掘時の不注意で両者の先後関係を把握できない。

直径３m前後の不整円形プランを有し、中央土坑（炉跡と確認できていない）を挟んで２本の浅い主柱穴を配する。壁体は0.3mの高さが遺存するのみである。

出土遺物

床面から甕の底部片が、柱穴から甕の口縁部小片が出土したが図示していない。底部はほぼ平底で側縁が少しくびれるタイプである。口縁部は「く」字形に折れて端部は小さく肥厚。



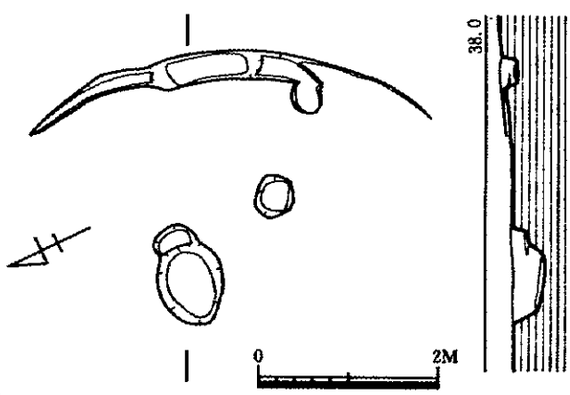
第14図　住居跡ＳＢ６実測図（1/80）

ＳＢ７（図版７、第15図）

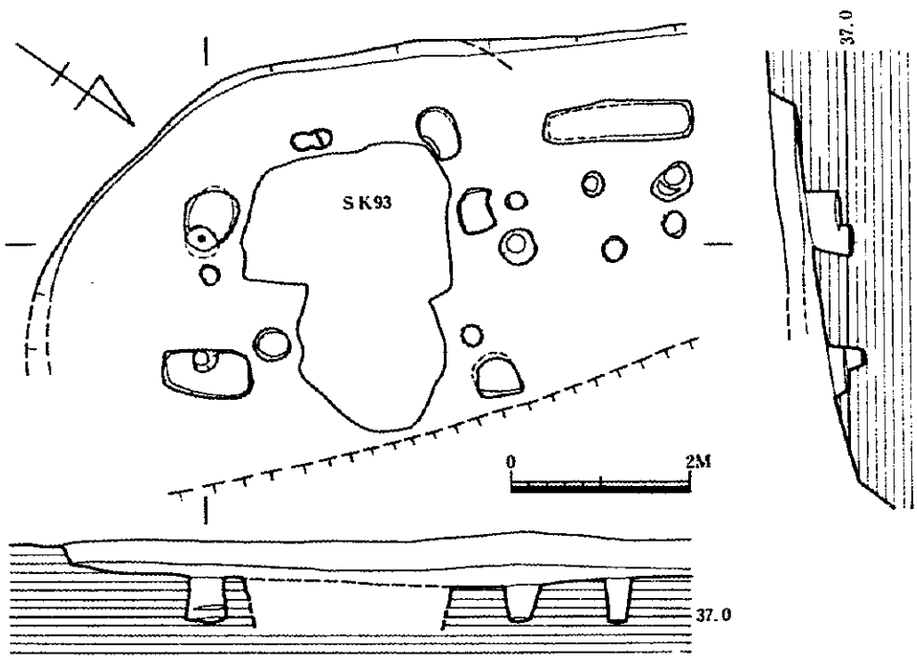
ＳＢ６の南に隣接し、その一部を検出できたのみである。必ずしも住居跡との確信を得たわけではないが、弧状溝の形態からそう判断した。

出土遺物

遺構の残りが悪く、必ずしもこの住居跡に伴うものとは断定できないが少量の土器が出土している。浅く大きく広がる壺の口縁部片、「く」字状に折れて端部が肥厚する甕の口縁部片で、中期前半に属するものである。



第15図　住居跡ＳＢ７実測図（1/80）



第16図　住居跡ＳＢ８実測図（1/80）

ＳＢ８（図版７、第16図）

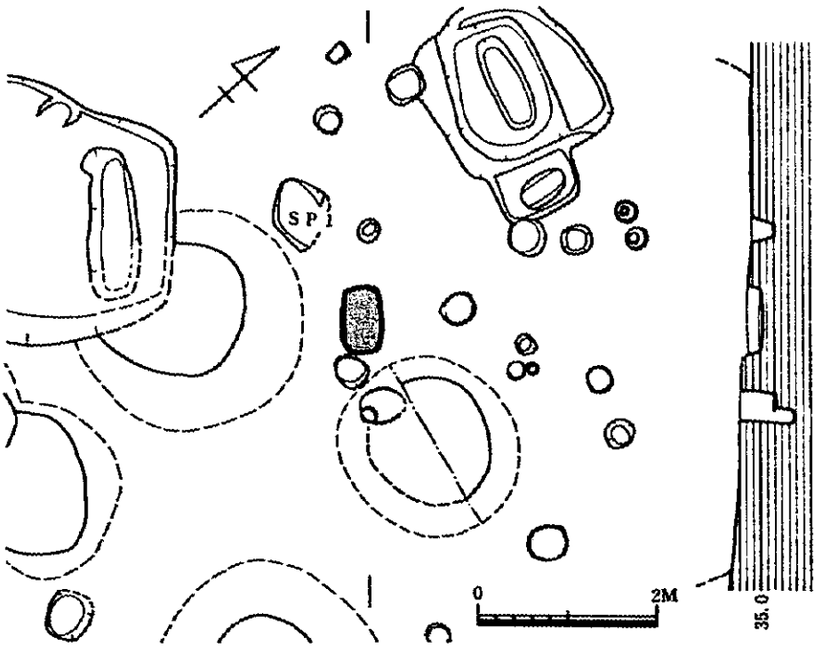
ＳＢ７の南にあり、南端は急落する崖、西側は切り通しによって大きく削平されている。住居跡の北辺は弧状、東側は直線的となるが本来は円形を呈していたと思われる。中央部に土壙墓（ＳＫ93）があり、炉跡は不明であるが６本の主柱穴配置を想定できる。その直径は３m余である。

出土遺物（第12図５）

図にドットを落とした柱穴から口縁部内面に粘土帯を張りつけて、口端面の上下両端に刻みを付す壺の小片が、また、埋土中から無軸羽状文を刻んだ小片、鍬先状口縁部片などとともに図示した土器が出土している。図示した部分の1/4が遺存する。口縁部は逆Ｌ字形に屈折し、ほぼ水平な面を作る。器面は荒れて調整痕を観察できない。

ＳＢ９（図版８、第17・18図）

15号墳墳丘下で、地山の旧地表除去後に検出した。壁体がまったく遺存していないことや、近世墓・土壙墓・竪穴が重複しているために不明な点が多い。中央部に位置すると思われる炉跡は0.75×0.5mの長方形プランを有し、埋土中に焼土を多く含むとともに、第18図に示した状態で土器を出土している。なお、炉壁は焼けていない。主柱穴は定かでないが、炉跡を挟ん



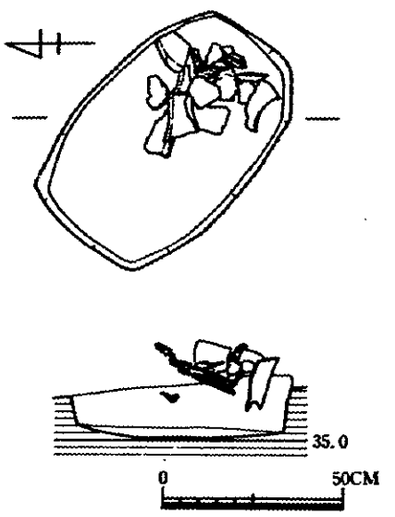
第17図　住居跡ＳＢ９実測図（1/80）

で0.6mの等距離に位置する、長軸線上の２個の柱穴の存在は評価すべきかも知れない。

出土遺物（図版32、第12図６～９）

６・７は注記が漏れているが、炉跡の土器出土状態の実測図およびひどく焼けて赤変することから炉跡出土と考えている。口縁部は如意形に反転するものの、端部が肥厚する。他に突帯を付す甕の破片も出土している。他はＳＰ１とした柱穴から出土した。８・９は如意形口縁部を有し、端部下端に刻みを付す相似た甕で、口縁部内面を刷毛目で仕上げる点も共通する。

図示した土器は二時期にまたがり、８・９は先行する別の住居跡の存在を思わせる。

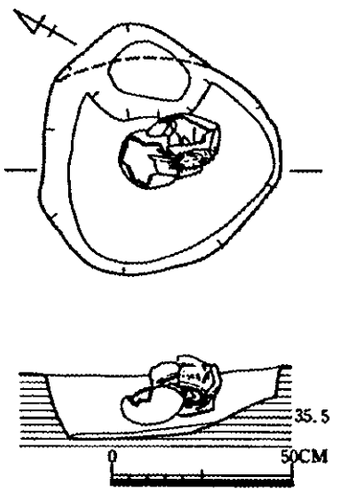


第18図　住居跡ＳＢ９内炉跡
遺物出土状態実測図（1/20）

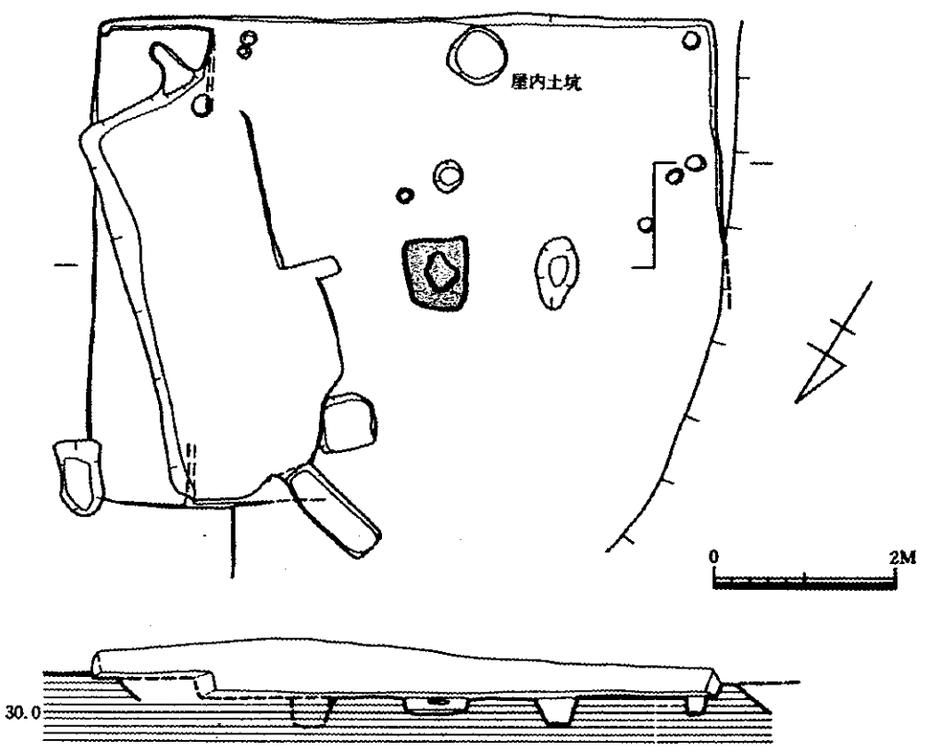
ＳＢ10（図版９、第19・20図）

17号墳下層にあり、その主体部と重複する。また、11号住居跡や３基の貯蔵穴、１基の土壙墓を切っている。現状ではきわめて狭い尾根上に位置するが、本来的に丘陵の先端であり、さほど広い場所ではなかったであろう。

平面形は一辺6.8×5.5mの長方形プランに復原でき、壁高は最大で0.5mほどである。東辺に幅1.3m、高さ0.2mのベッド状遺構を付設するが、その大部分は17号墳主体部によってすでに掘削されている。主柱穴の１本も主体部掘形内にあって未確認であるが、２本柱としてよかろう。炉跡は一辺0.7～0.8mの長方形プランで中央に焼土塊が遺存していた。また、南辺際の屋内土坑中には２点の土器が完形に近い状態で残っていた。



第19図　住居跡ＳＢ10屋内土坑
遺物出土状態実測図（1/20）



第20図　住居跡ＳＢ10実測図（1/80）

出土遺物（図版32、第28図10・11）

埋土中から中期の土器片が出土しているが、住居の形態、そして屋内土坑中から出土した土器からみてそれらは混入としてよい。

第19図に示したように土坑中程で10は倒立した状態で、11は口縁部を欠くが正立して並んで出土した。10は完形に近い直口壺で、口縁部はほぼ直立する。底部は丸底であるが、胴部はやや偏平となる。調整は全体に粗い刷毛目を多用するが、胴部最大径部分は横方向に刷毛目を施して弱い稜線が入る。11は口頸部を欠くが胴部は完存に近い。内面は細かな刷毛目、外面上半は縦方向の細密な磨きを入れて暗文とする。下半は丁寧に撫でる。

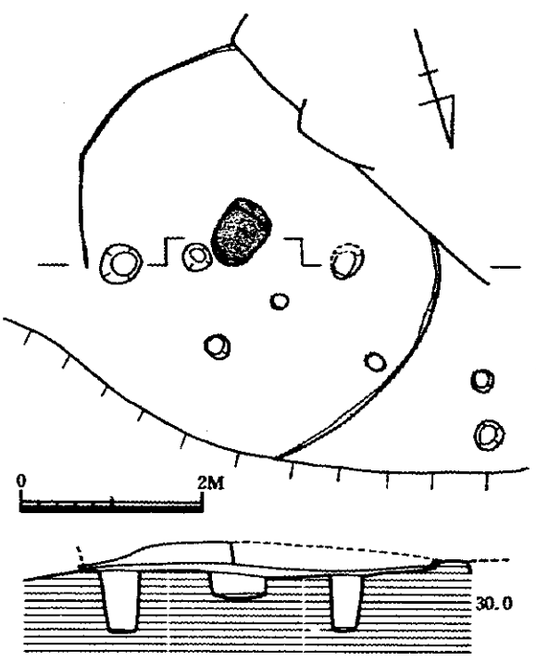
ＳＢ11（図版９、第21図）

ＳＢ10と同じく17号墳下層で検出した。径4.3mの円形住居で、遺存深度は0.2mと浅い。ＳＢ10に切られるが、70号竪穴を切るようである。

中央に長方形に近い炉跡があり、その東西の均等な位置に２本の柱穴がある。

出土遺物

中央の炉跡から甕の破片が１点出土している。如意形の口縁部を有し、やや下位に断面三角の突帯を一条付すものである。

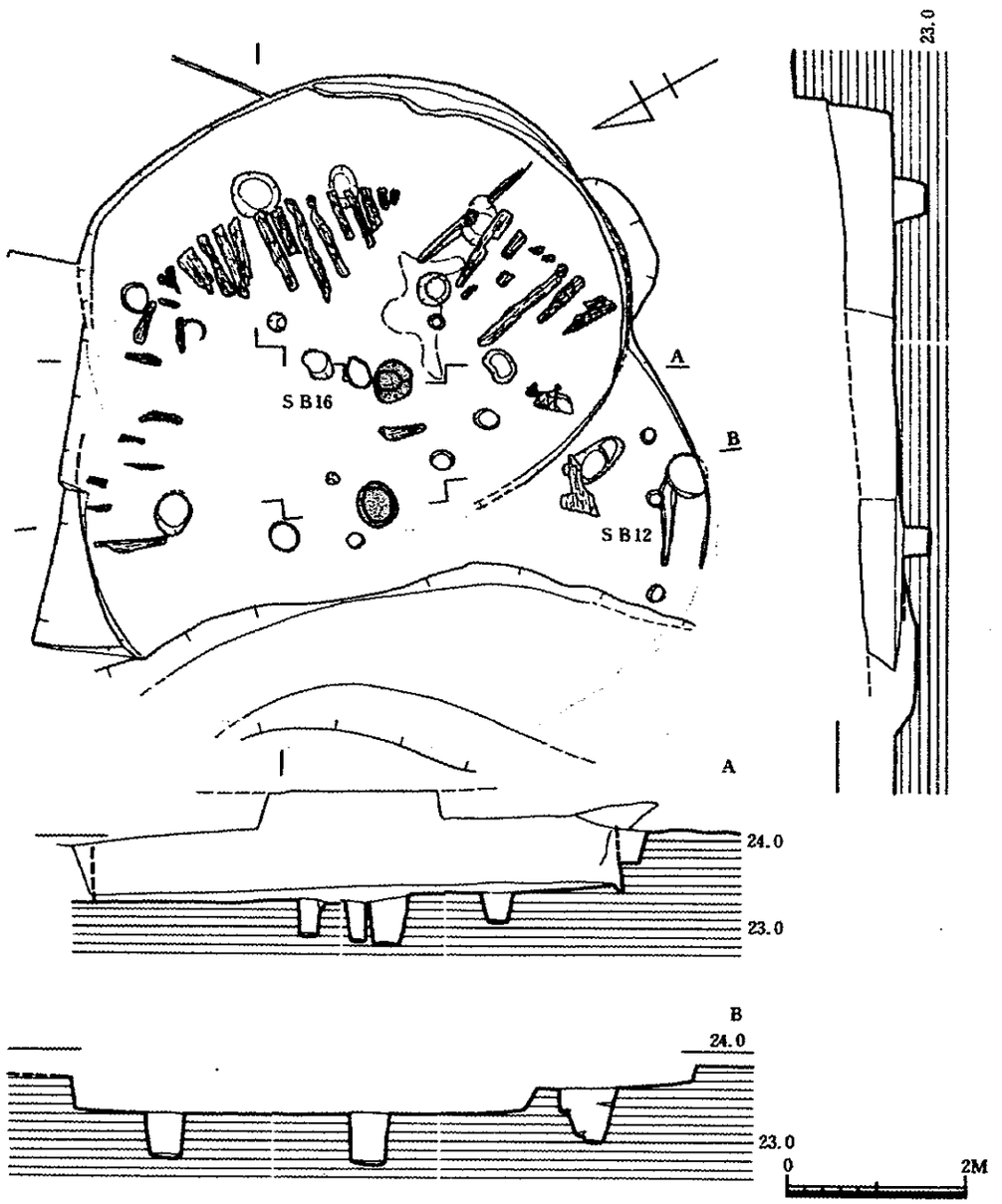


第21図　住居跡ＳＢ11実測図（1/80）

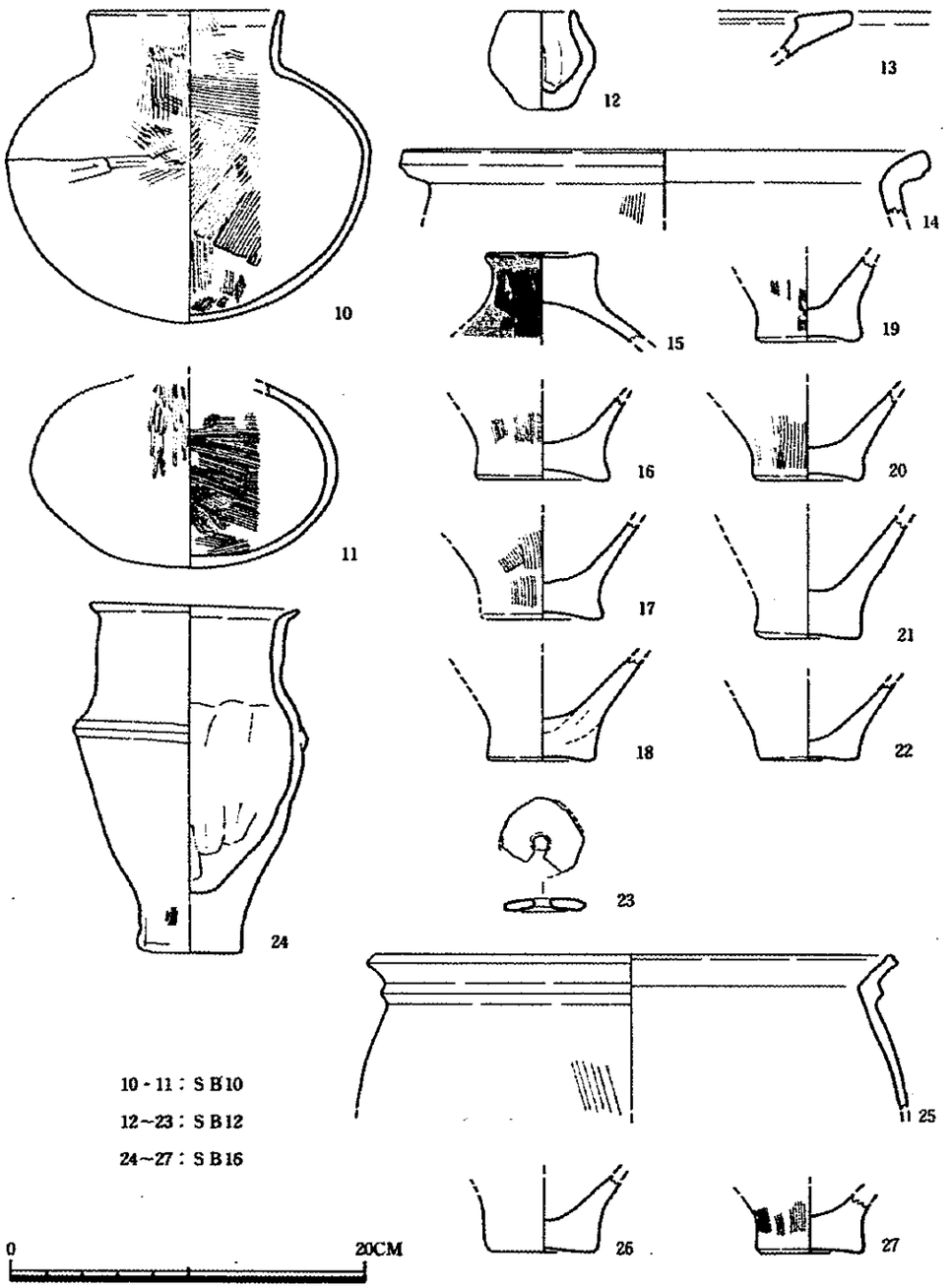
ＳＢ12（図版10・11、第22図）

調査対象地最北端の平坦地にあり、ＳＢ16を切る。この切り合い関係はＳＢ12において垂木の炭化材が整然と出土したことから間違いない。ただ、この付近から北方に向かって包含層が存在するために炭化材の出土にもかかわらず平面的に捉えることに失敗し、結果としてＳＢ16と同時に掘り上げてしまった。

炭化材の分布からみて住居跡の径は約７mに復原でき、深度は0.2mであった。23号墳周溝に南半を破壊されるが、６本の主柱穴を有していたと思わ



第22図　住居跡ＳＢ12・16実測図（1/80）



第23図　住居跡出土遺物実測図２（土器;ＳＢ10・12・16）（１/4）

れる。

出土遺物

上記のような発掘経緯でありＳＢ16との分離は必ずしもできていないのでここにまとめる。

土器（図版32、第28図12～27）

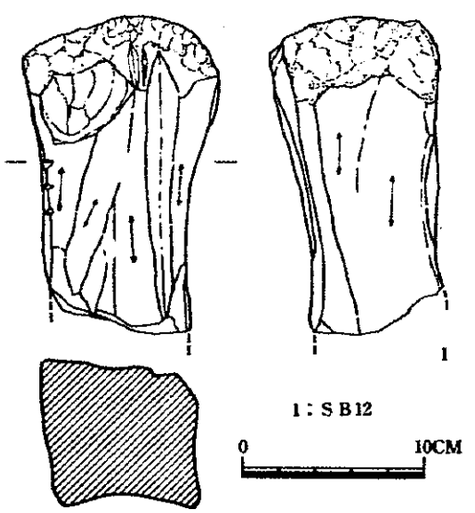
12～23が取り上げ時にＳＢ12としたものである。12はミニチュアの壺で、外面に黒色顔料を塗布しているようである。13は拡張部が未発達の鋤先状口縁部の小片。14は「く」字形に外反する口縁部の甕で、端部は断面方形に近くなる。15は開きが大きいことから甕用の蓋と思われあるものである。16～22は程度の差があるものの側縁がくびれる形態の底部で、平底あるいは若干の上げ底となる。23は土器片を再利用した紡錘車。直径は５cm弱、孔の径は0.9cm、残存部の重量は８gである。

24～27はＳＢ16として記録した遺物。24は小型の完形品。厚底の底部を有し、胴部最大径まで直線的に急角度で立ち上がり、そこに断面三角形の突帯を付す。頸部は締まらず、円筒状の形態となって小さく口縁部へと続く。口縁部は丸く終わり、内面に稜を有する。器表の摩滅が著しいが、造りはいたって粗雑なものである。25はＳＢ12の炉跡として再利用された柱穴から出土したもので、ＳＢ16に伴うもっとも確実な資料である。口縁部は「く」字形に外折し、端部を上方に小さくつまむ。頸部には断面三角突帯を巡らせる。

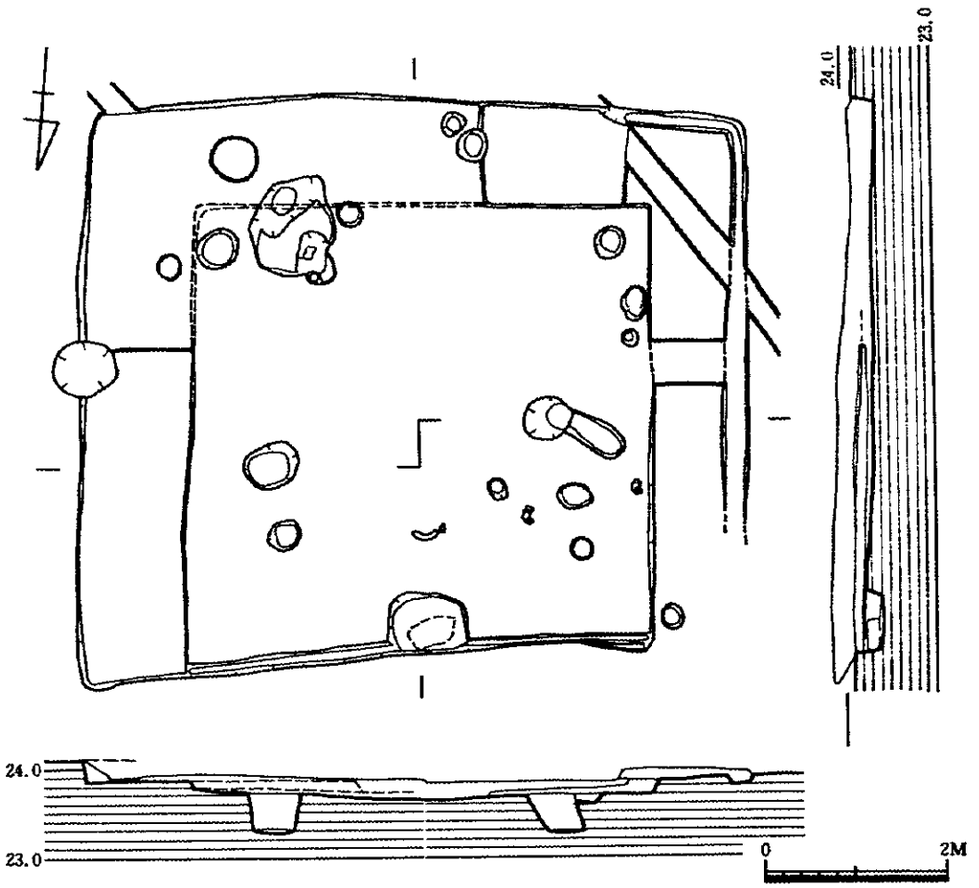
石器（図版33、第24図１・第29図２・９・10）

第29図３はＳＢ16として、３点の砥石はＳＢ12出土として記録されている。

２は安山岩製のスクレイパー形の剥片石器で折損する。刃部のみ両面から細部調整を行う。９は研ぎ減りによるものか、あるいは使用の便を図ったものか極端に厚みが異なる。平面形も円形に近いものと思われる。砂岩製。10は角柱状の砥石で、図下部を欠損する。図の上面中程に自然面が残るほかはすべての面を使用している。特に図の上面では両側縁で段が付くほどにより研ぎ込まれている。凝岩岩製。第24図は大型の砥石で、図下方を欠損する。側面の４面と一部の稜線上を使用する。主使用面はいずれも粗い条痕を伴って中央部がくぼみ、特に図表面右側では幅１～1.5cm、深さ0.5cmの溝が走る。これも砂岩製。



第24図　住居跡出土遺物実測図３（石器）（1/4）



第25図　住居跡ＳＢ13実測図（1/80）

ＳＢ13（図版10・12、第25図）

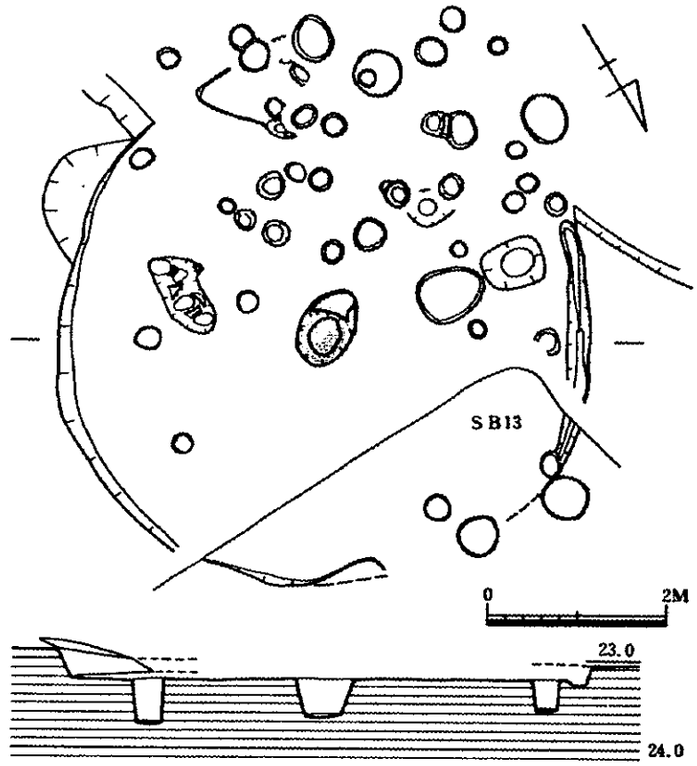
調査区最北端にあり、一辺6.5～7.5mの長方形プランを有する。地山と住居跡埋土との判別が困難であったために発掘は不十分なものとなった。

主柱穴は２本で、東辺に添って屋内土坑を有する。炉跡は確認てきていない。北辺にＬ字状のベッド状遺構を有し、かつ南辺にもベッド状遺構を付設する。通例のベッド状遺構と屋内土坑とのあり方を勘案するならば、本例は東辺を除く３辺にベッド状遺構を配していたと考えるほうがより妥当であろう。なお、ベッド状遺構は幅１m前後、高さ0.1mほどである。

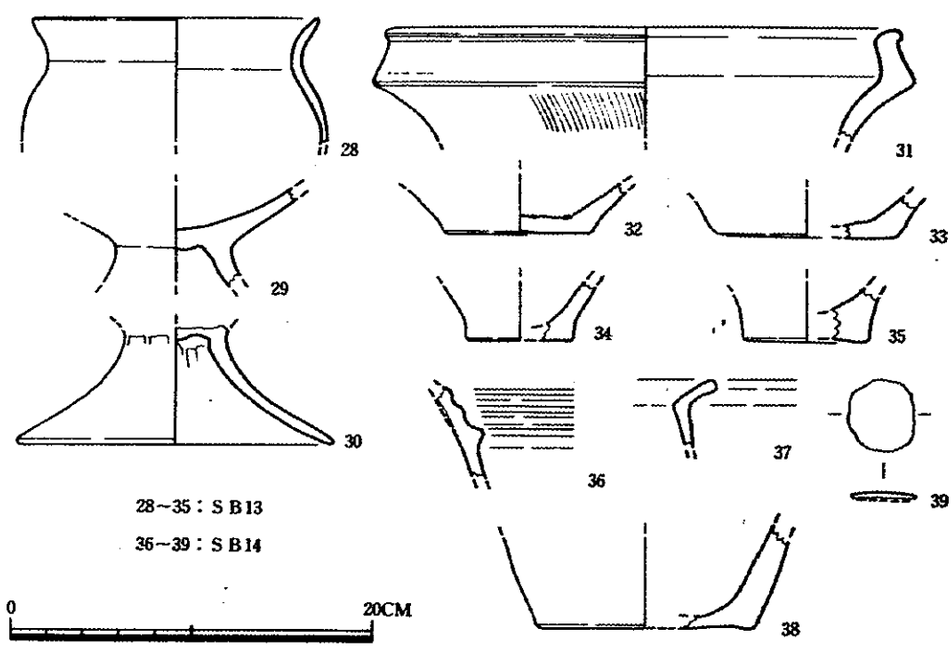
出土遺物（図版32、第27図28～35）

かなりの量の土器が床面上から出土したが、細片化するとともに遺存状態も悪く図示できたのはわずかである。

28～30は脚付き鉢であろう。口縁部は孤を描いて反転し、端部は丸く終わる。脚部は低く開きが大きい。31は複合口縁の壺で屈曲部分で剝離する。口端部上面は丸みを持つ面となり、外方に一部張り出す。32～35は平底の底部片。



第26図　住居跡ＳＢ14
実測図（1/80）



第27図　住居跡出土遺物実測図４（土器;ＳＢ13・14）(1/4)

ＳＢ14（図版12、第26図）

最北端の平坦地にあり、84・86号貯蔵穴を切り、13号住居跡に切られる。ほぼ1/2が包含層を掘り込んでいるために全体を確認できていない。また、この包含層中では多数の柱穴が検出されたが、個別の帰属等も把握できていないのが実情である。

住居跡は直径約６ｍの円形プランで、中央部に長円形の炉跡を残す。主柱穴は６本と思われる。壁体は最高で0.4mが遺存し、西北部には深さ0.1mに満たない浅い周壁溝が約３ｍの長さで掘削されていた。

出土遺物

土器（第27図36～38）

36は断面M字形の突帯を胴部に多用する壺、37は「く」字形に外折する甕でいずれも小片。39は直径４cm弱の円盤で、土器片の再利用。他に逆Ｌ字形・如意形・鋤先形の口縁部小片などが柱穴より出土している。

石器（図版33、第29図12）

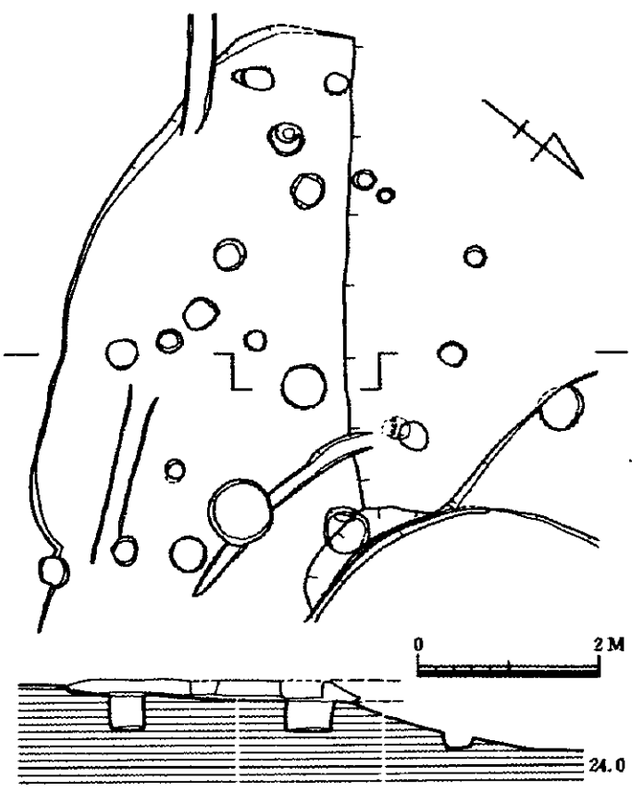
石庖丁の小片であろう。粘板岩製で表面は剥離。

ＳＢ15（図版13、第28図）

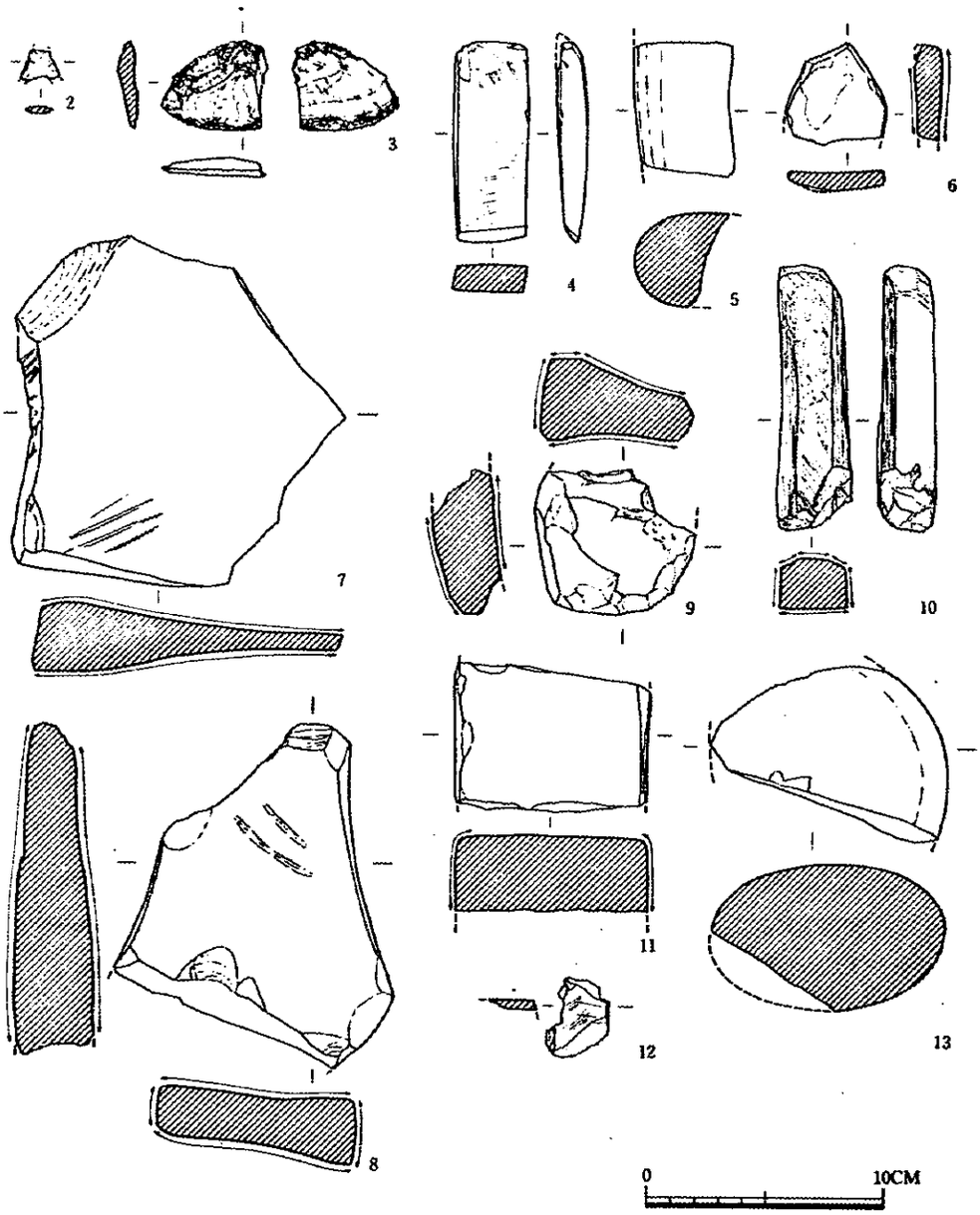
ＳＢ12・16の西隣に位置する。不整長円形を呈し、深さは0.1m強である。炉跡は定かでなく、住居跡との確信はない。あるいは単に包含層を誤認したに過ぎないのかも知れない。

出土遺物

小片が若干出土しているに過ぎない。壺には大きく開く口縁部（中期の広口壺ではない）、断面三角突帯を付した胴部があり、甕では「く」字形に反転する口縁部片、側縁がくびれ、やや上げ底となる底部などがある。



第28図　住居跡ＳＢ15実測図（1/80）



2・7・8・13：SB2　　12：SB14
6　　：SB4　　5：SB15
3・9・10・11：SB12　　4：SB16

第29図　住居跡出土遺物実測図5（石器）(1/3)

ＳＢ16（図版13、第22図）

上述したようにＳＢ12に切られる。直径５ｍ強の偏円形プランを呈し、もっとも深い部分で1.1ｍ強の壁高を残している。

中央の炉跡は径0.3～0.4ｍの長円形を呈し、深さは0.4ｍで一見柱穴を思わせる形状となっている。主柱穴は６本と推測されるがそのすべてを確認できていない。また、その中の１本はＳＢ12の炉跡と重複している。南側で一部検出した壁高は深さ0.1ｍと浅い。

出土遺物（図版33、第29図４）

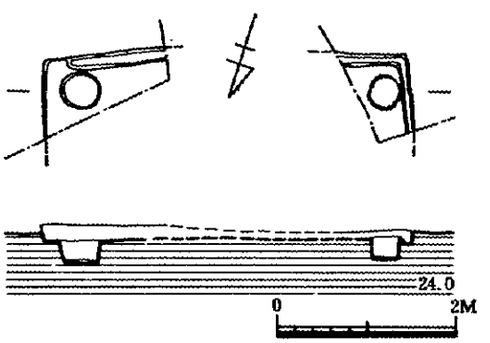
ＳＢ12の項を参照されたい。ただ、板状石斧のみは遺構実測図に位置とレベルが記録されており、本住居跡に伴うことが確認できるのでここに記す。黄白色ないし青白色を呈する頁岩製で、全長8.6cm、幅３cm、最大の厚みは1.1cmを測る。図の下端が片刃の刃部となるが、上端の形状から刃部の付け替えが行われたことがわかる。

ＳＢ17（第30図）

23号墳の下層にあり、その一部を検出した。一辺４ｍの長方形プランを有し、深度は0.1ｍに満たない。南および西辺に残る周壁溝も幅0.2ｍ、深さ0.1ｍ弱の浅いものである。コーナー近くで２本の柱穴を検出したがこれも0.2ｍと浅い。

出土遺物

柱穴から土器の小片が出土するが時期の判定は困難である。本遺跡での方形住居跡はいずれも相似た時期の遺物を出土しており、これも同様であろう。

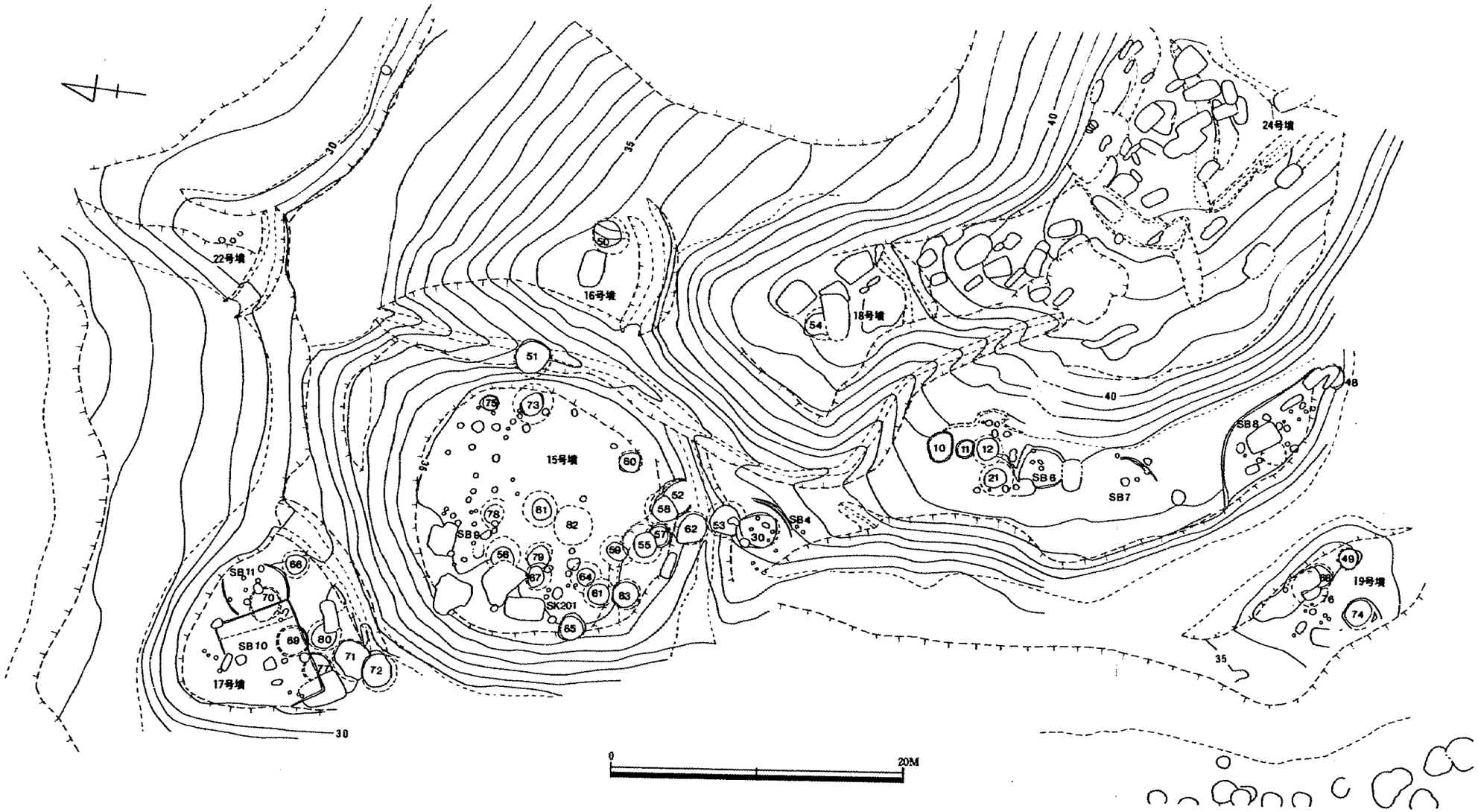


第30図　住居跡ＳＢ17実測図（1/80）

ii）　竪穴

竪穴系の主体部を有する古墳が載るほぼ南北に延びる主尾根上、およびそれから西へ分かれるやや幅広の支丘上に立地し、総数86基を検出した。古墳築造時の地山削り出し等によってかなりの部分が掘削されていること、そして先述したように15・26号墳等の間にある谷部分の全面発掘を行っていないこと等を勘案すれば元来は100基を優に越える竪穴群が群集していたと思われる。

現状では高位に位置する一群（Ａ区）、西側の中位の一群（Ｂ区）、そして最北部の低位の一群（Ｃ区）の３群に分けうる。先の古墳築造時の掘削や後世の開墾を考慮すれば安易な分割は



第31図　A区住居跡・竪穴配置図（1/300）

控えるべきであるが、ここではこの区分が一定の妥当性を持つと考えている。

上述の区別は別にして、検出した竪穴の大部分が丘陵の鞍部から西側に分布する現象は破壊を考慮しても当初の分布状態を反映していると考えられるものである。また丘陵最高所の付近に存在しない点も問題となろう。隣接する冨地原小嶺遺跡との関係もその報告を待たなければならない。

以下に竪穴の記述を行うが、そのすべてについて説明を行うには構造が単純に過ぎるのでいくつかを抽出して行う。他は一覧表（第１表）を参照されたい。また、遺構番号は調査時のものをそのまま使用しており、整然と配列していない。第１表には先にＡ～Ｃ区とした地区分けを記している。また、「１号（袋状）竪穴」を「Ｐ１」のように簡略化して表記する。

Ａ区（第31図）

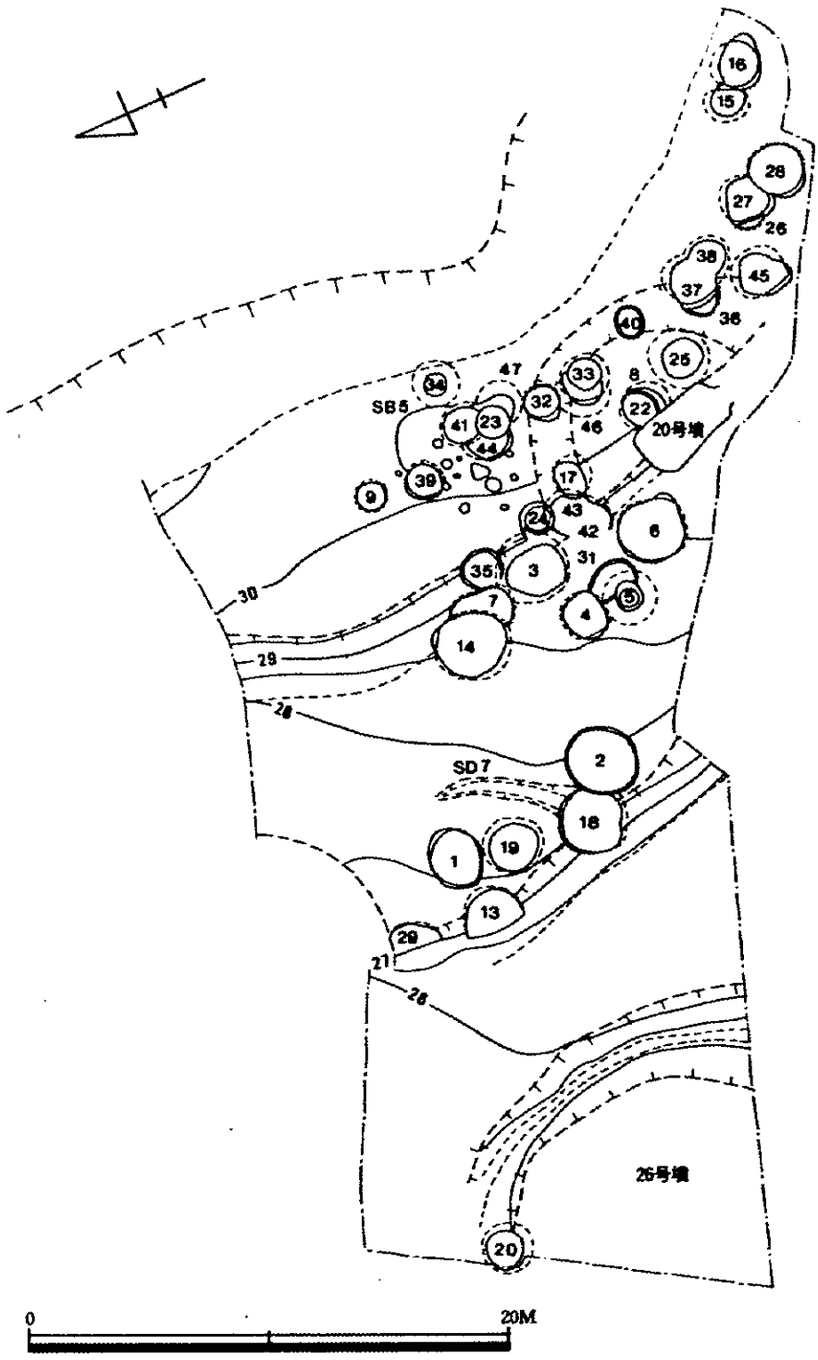
18号墳下層、標高約40mの最高所にＰ54が単独で位置する。その南西、標高36～38mの地点に３棟の住居跡とともに９基がある。19号墳下層の遺構は現状では独立した様を呈するが、北東の低い部分は古墳築造時の掘削および山道（切り通し）によって破壊されたもので本来は一連のものであったと考えている。同様に15～17号墳の下層にある諸遺構も当然一連のもので、以下に述べるＢ・Ｃ区とは異なる。標高31～40mの間に40基ある。

Ｐ10～12・21・住居跡ＳＢ６の付近は小さなテラス状をなし、かなりの厚さの堆積層が覆っていた。その中に多種の遺物を含んでおり、除去後にこれらの遺構を確認したものである。Ｐ11（第35図）としたものは図のように床面から土器を出土しているが、他の竪穴の深さに比して浅い。他の竪穴も削平をかなり受けており、Ｐ11の旧状がもっと深かったことは自明であるが果たして袋状であったかどうかはっきりしない。

Ｐ30（図版16、第37図）は住居跡ＳＢ４の下層で検出した。ＳＢ４を完掘してはじめて気付いた遺構であり、住居跡に先行すると考えている。床面の北寄りに径0.4m、深さ0.1mの柱穴がある。図に見るように北側から投棄した状態で土器群が出土しており、柱穴の位置も勘案すれば生活の主体は15号墳下層に求められよう。

Ｐ50（第39図）は16号墳下層で検出した。床面のほぼ中央に幅0.4～0.7m、深さ0.2m強の溝が蛇行して掘削されている。水抜きにしては大掛かりであり、本遺跡中唯一の例で性格は不明である。

Ｐ54（図版17、第40図）は18号墳主体部に切られていた。床面近くから礫とともに小型壺の完形品２点が出土した。出土状態は図に示したように必ずしも意図を思わせるものではない。



第32図　B区住居跡・竪穴配置図（1/300）

B区（第32図）

P20が調査区西端の崖際に単独であり、東に12mの距離をおいて約1.5mの高位にP1・2を含む6基が、さらに4m離れて以東に群集する35基がある。標高は26～30mである。繰り返すがこの地点の北に入りこむ谷部は試掘溝を入れたのみで全面発掘を行っていないためになかったと断定はできないが、東は比高6m弱の崖が立ち上がり、南・西は谷に急落していることから北を除く三方はここをもって限界と言える。分布をみると地区の南に偏しており、北側には概して疎である。したがって竪穴群の中心部を調査したと考えてよかろう。

20号墳北東にあるP5（第34図）はその中でもっとも遺存状態の良好な遺構である。上端はやや崩れるが最小径は0.8m、深さは2.8mで、底径が2.2mと典型的なフラスコ状の断面形態をとる。

P4・5に切られるP31（第37図）は長円形に近い平面形をとり、袋状竪穴とは言い難いものである。

同東にあるP33（図版16、第37図）も比較的良好に残り、床面から土器が出土している。

C区（第33図）

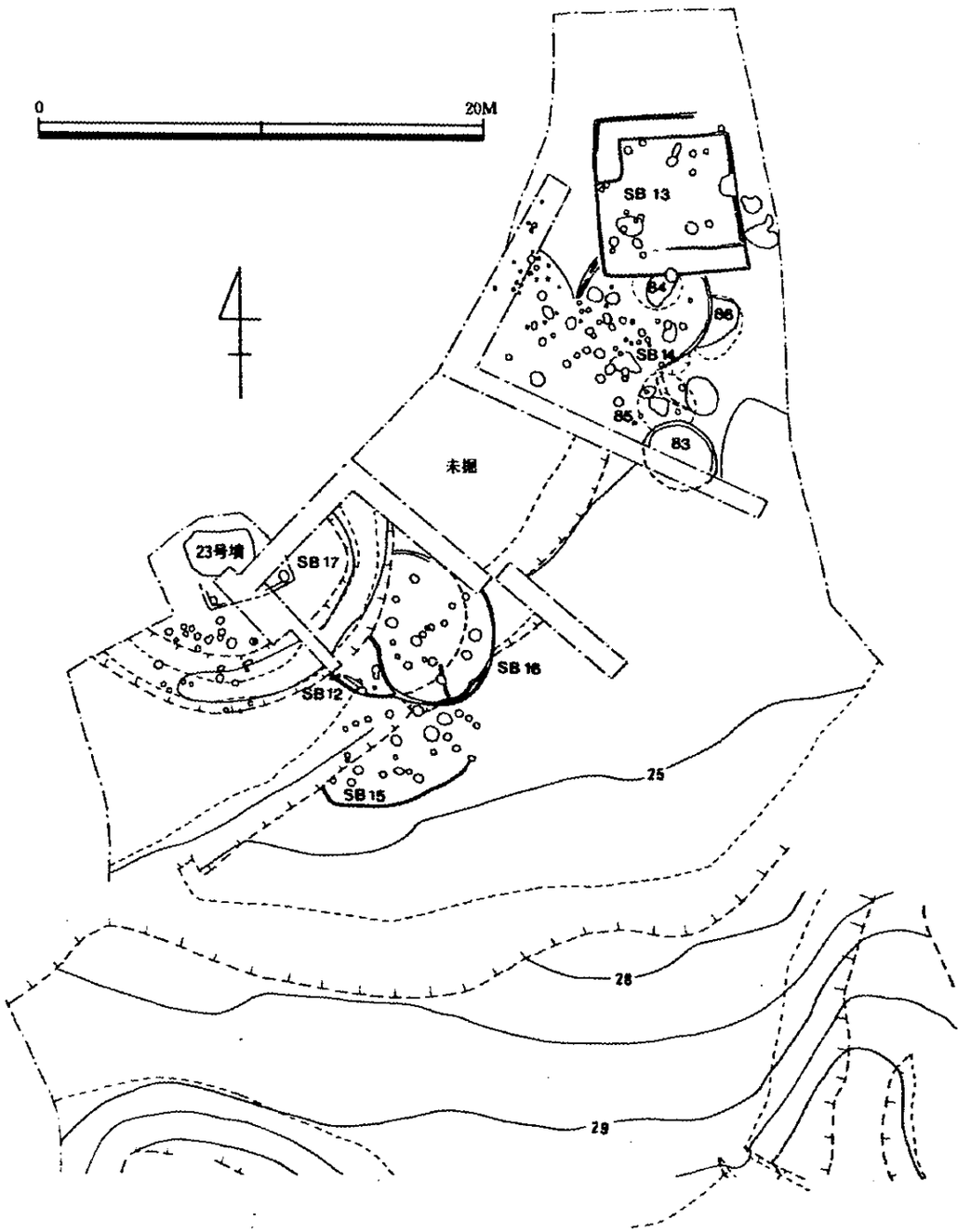
調査区最北端の標高24m強の平坦地に4基が位置する。B区との比高は約7mあり、袋状竪穴よりも高位に住居跡が検出されていることからみて竪穴の空白地があったと思われる。もっとも図のP83と住居跡SB16の間には黒色系の包含層が自然堆積しておりその発掘を行っていない。したがってその間、標高24.5mの付近から北にはさらに数基の竪穴が存在した可能性を否定できないが、以南の地域では存在しなかったとほぼ断言できる状態であり、B区と分離したものである。また、竪穴は東端に近く集中するが、それ以東は谷が深く入り込んでおり本来は緩斜面となっていたと考えられ、未掘の遺構が予想されるものの群集の規模はさほどではなかろう。他方、西および北側は大きく落ちる崖となり、遺構配置の限界を示している。竪穴・住居跡ともに小規模な群であったとしてよかろう。

4基の竪穴は住居跡SB14周辺に集中するが、P84・P86はSB14に切られる。

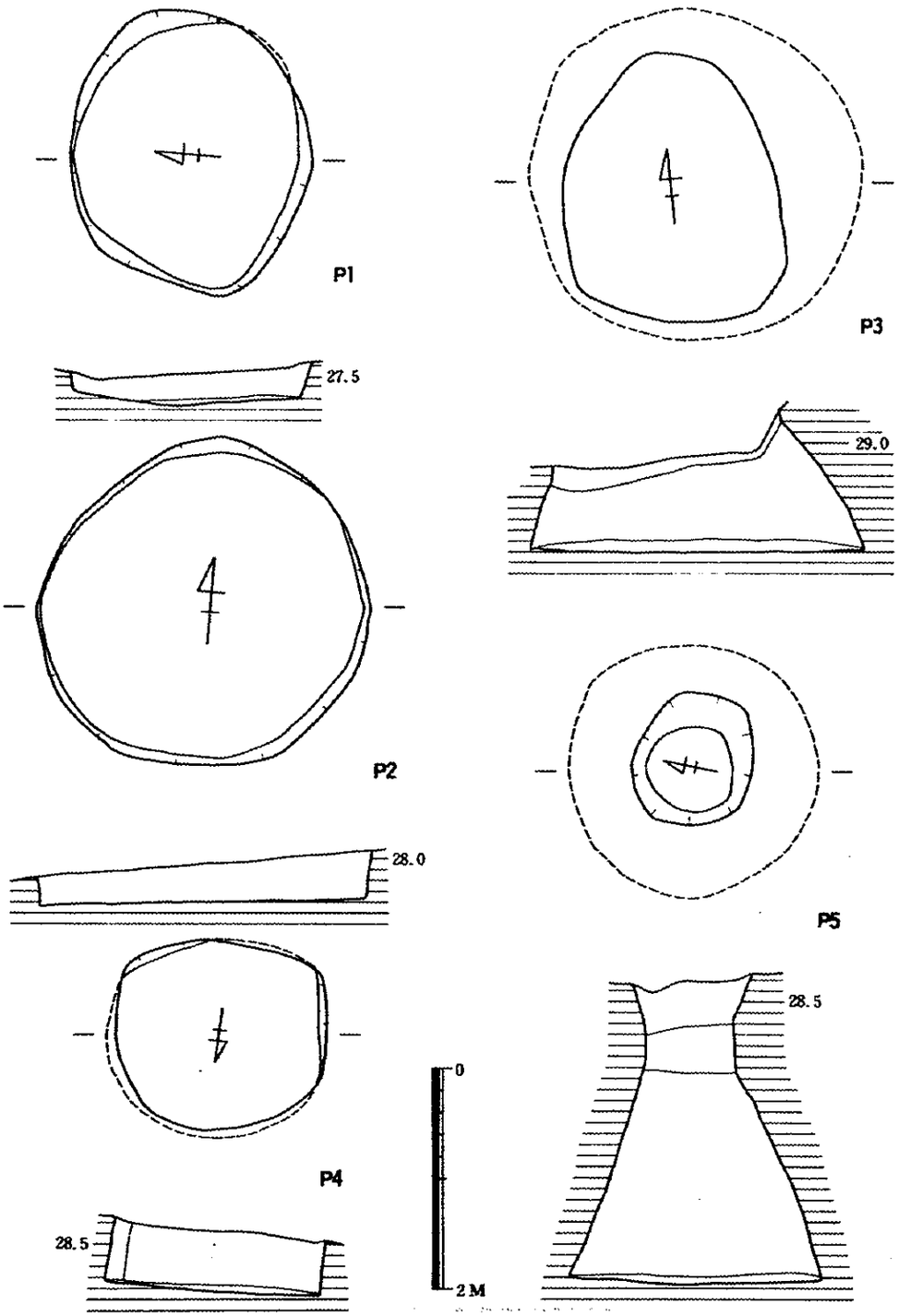
P83（第43図）は平面で捉えることができず、トレンチで半分を破壊して後に気付いた。上半は大きく崩壊したようで床面径・口径は3.1・3.6m、深さは2.4mを測る。

P85（第44図）は壁体が良好に遺存する例である。上端の一部を発掘ミスしたが、口径は0.7m前後に復原でき、0.5m下位で径0.5mとややすぼまり、以下は膨らみをもってフラスコ状に広がって径2.6mの床面へと続く。

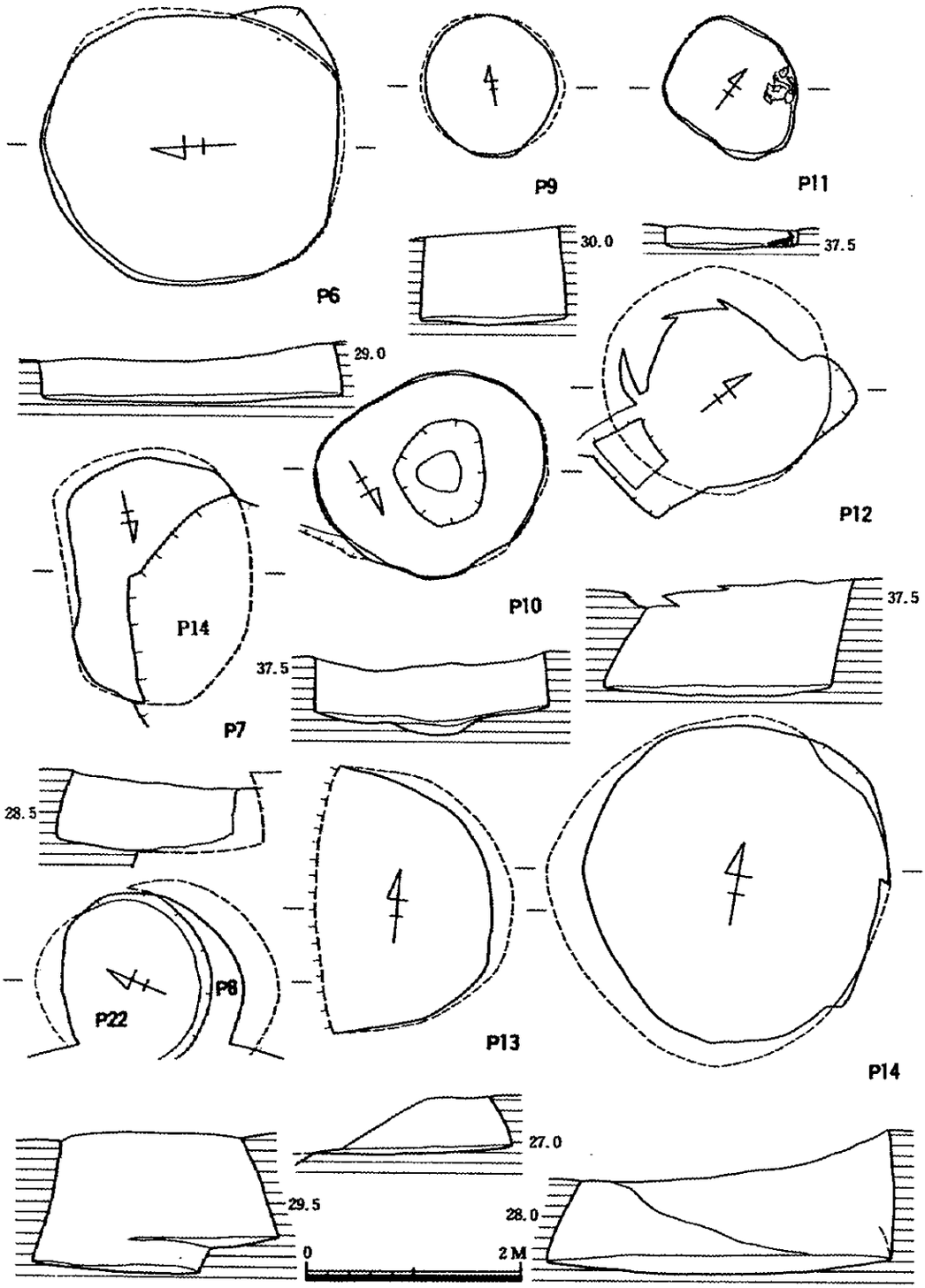
P86（第44図）も大型の部類で、床面西端近くに深さ0.4m、径0.2m強の柱穴を有する。



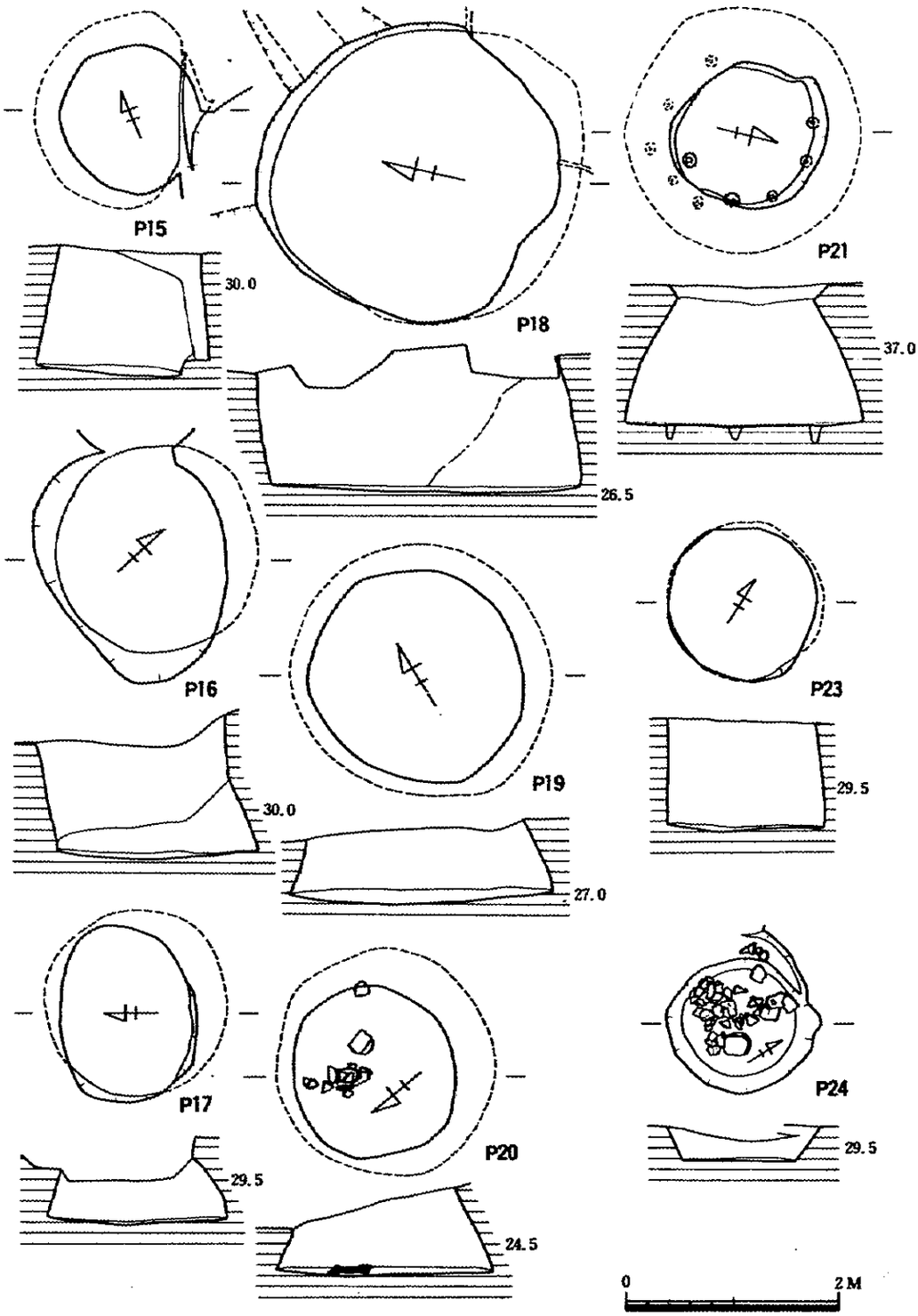
第33図　C区住居跡・竪穴配置図（1/300）



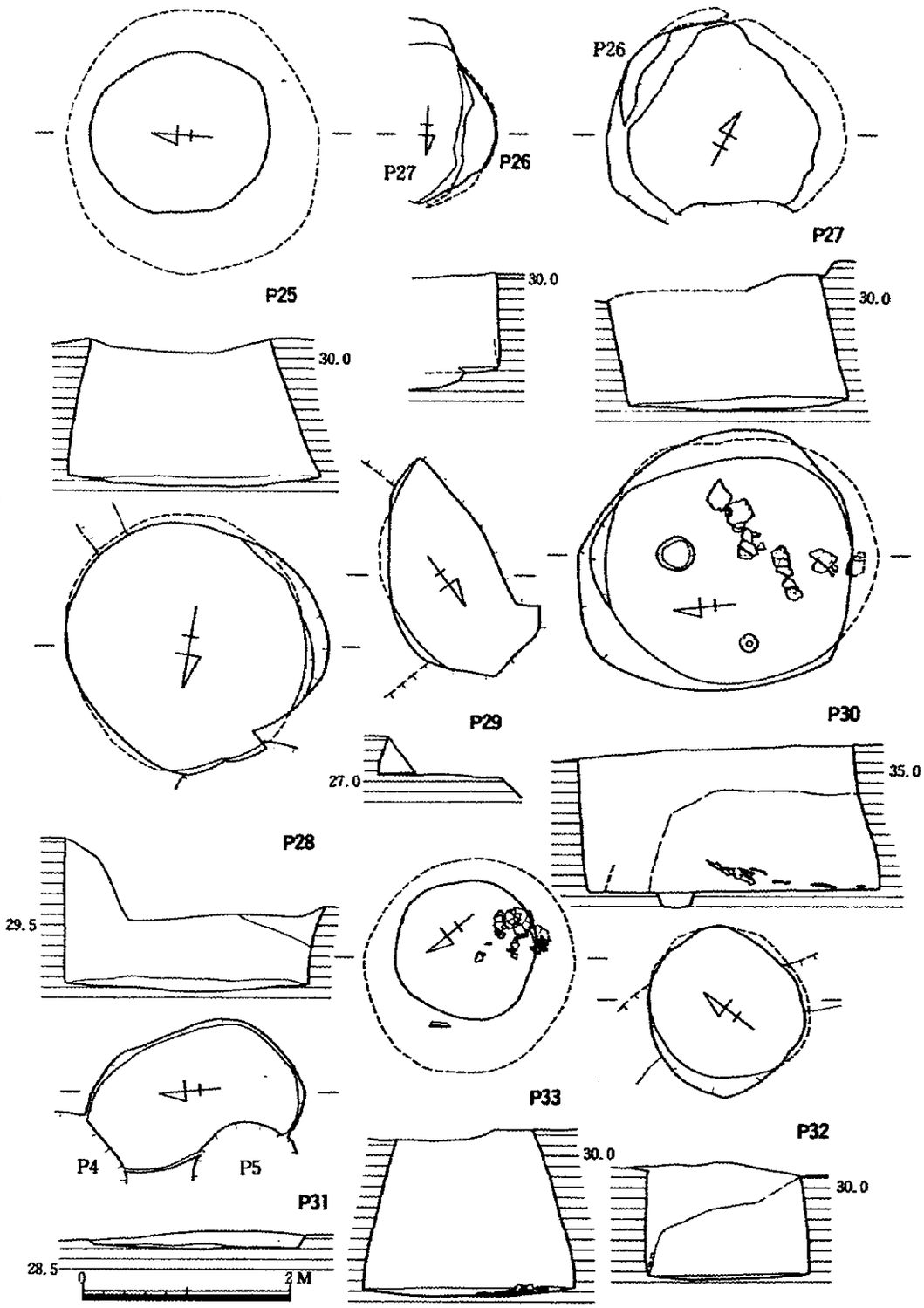
第34図　1～5号竪穴実測図（1/60）



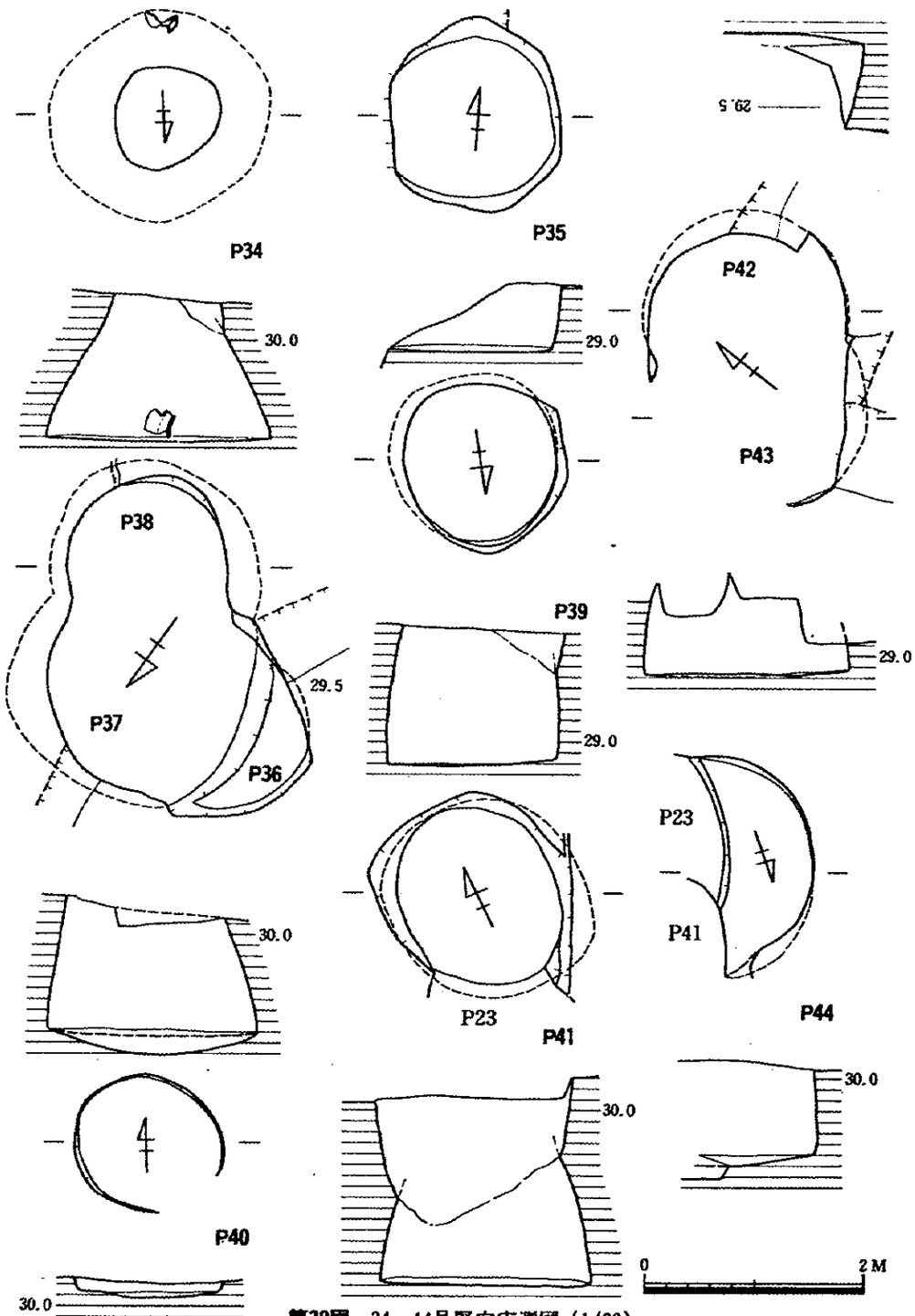
第35図　6～14・22号竪穴実測図（1/60）



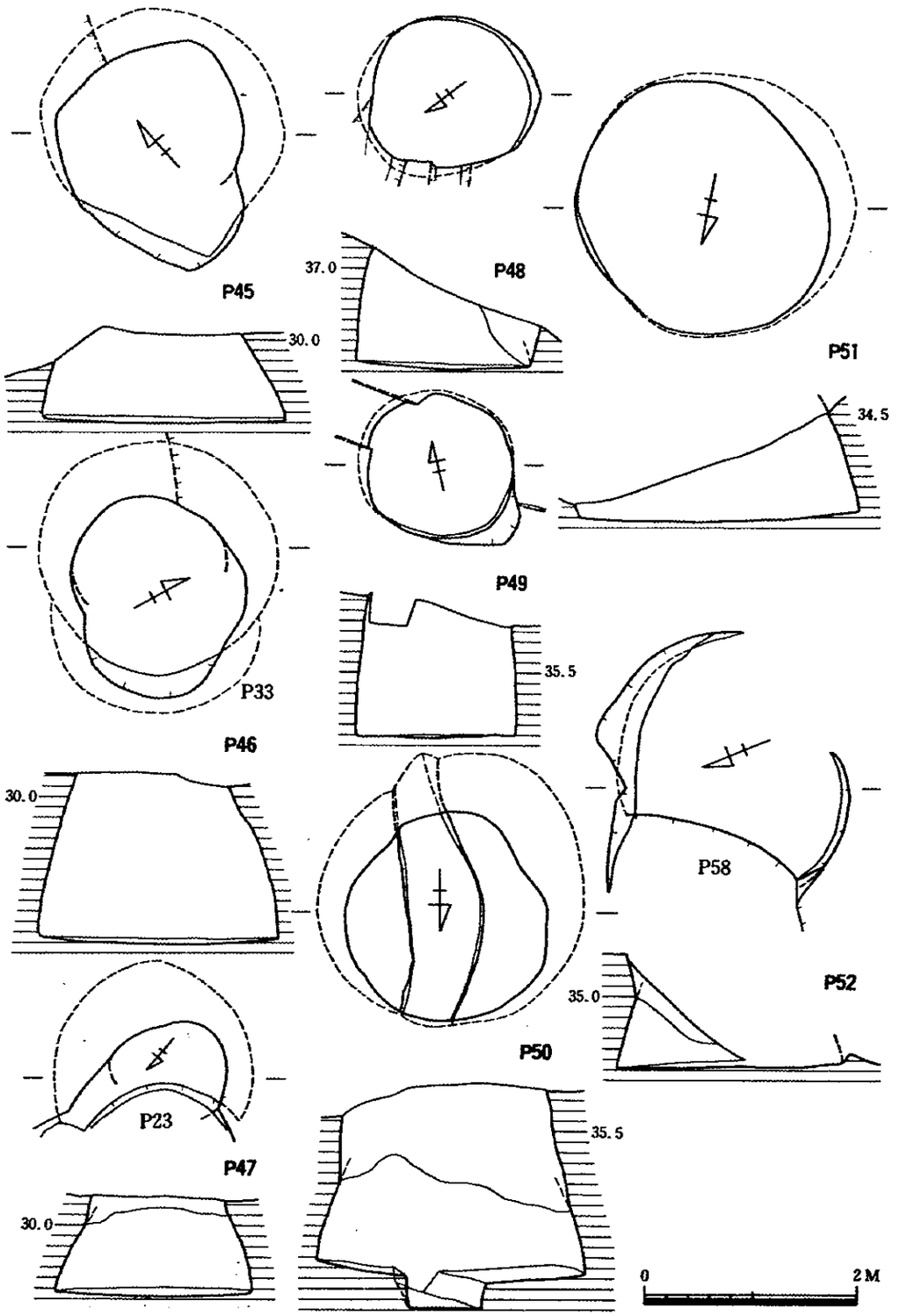
第36図　15～21・23・24号竪穴実測図（1/60）



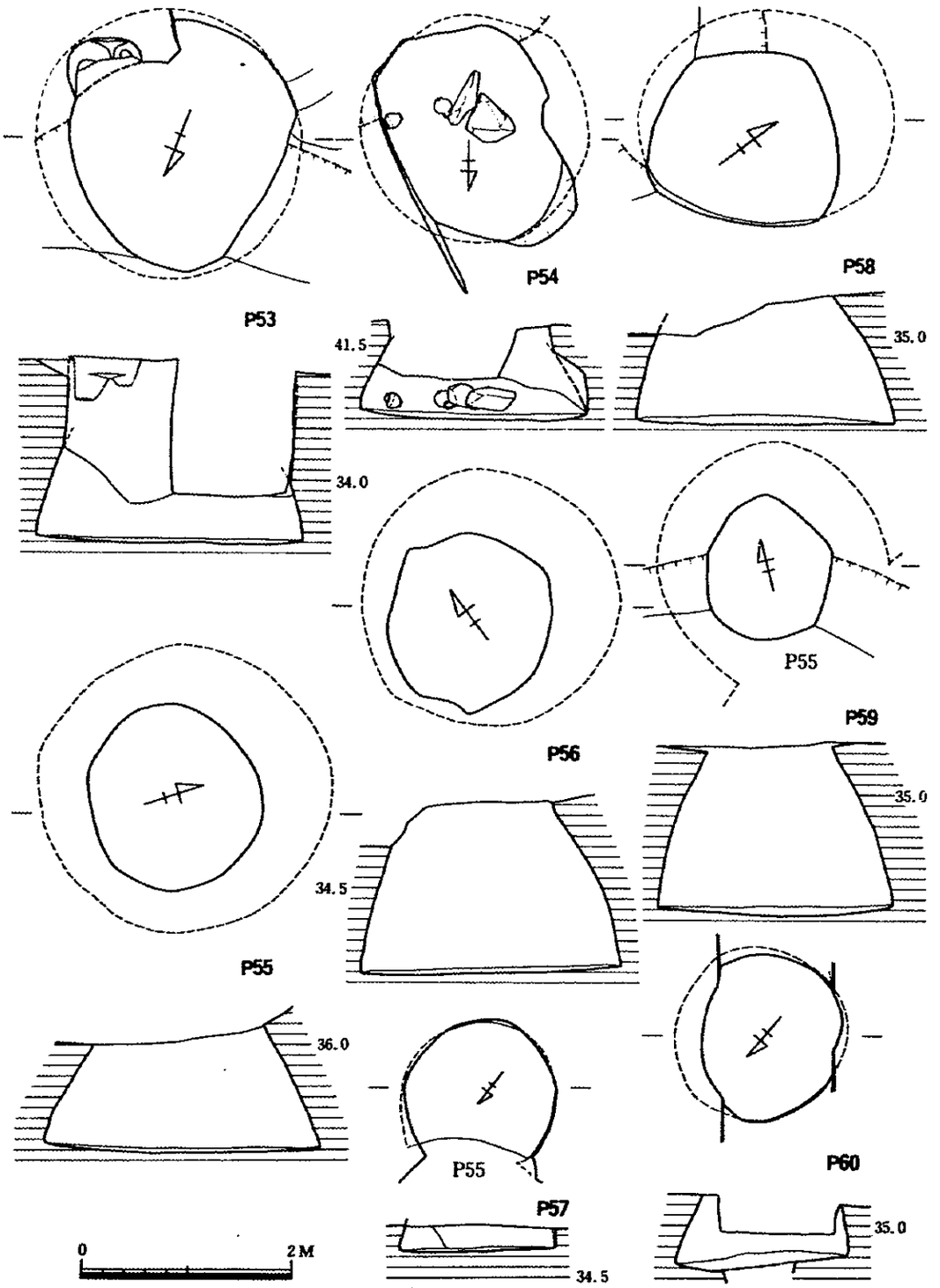
第37図　25～33号竪穴実測図（1/60）



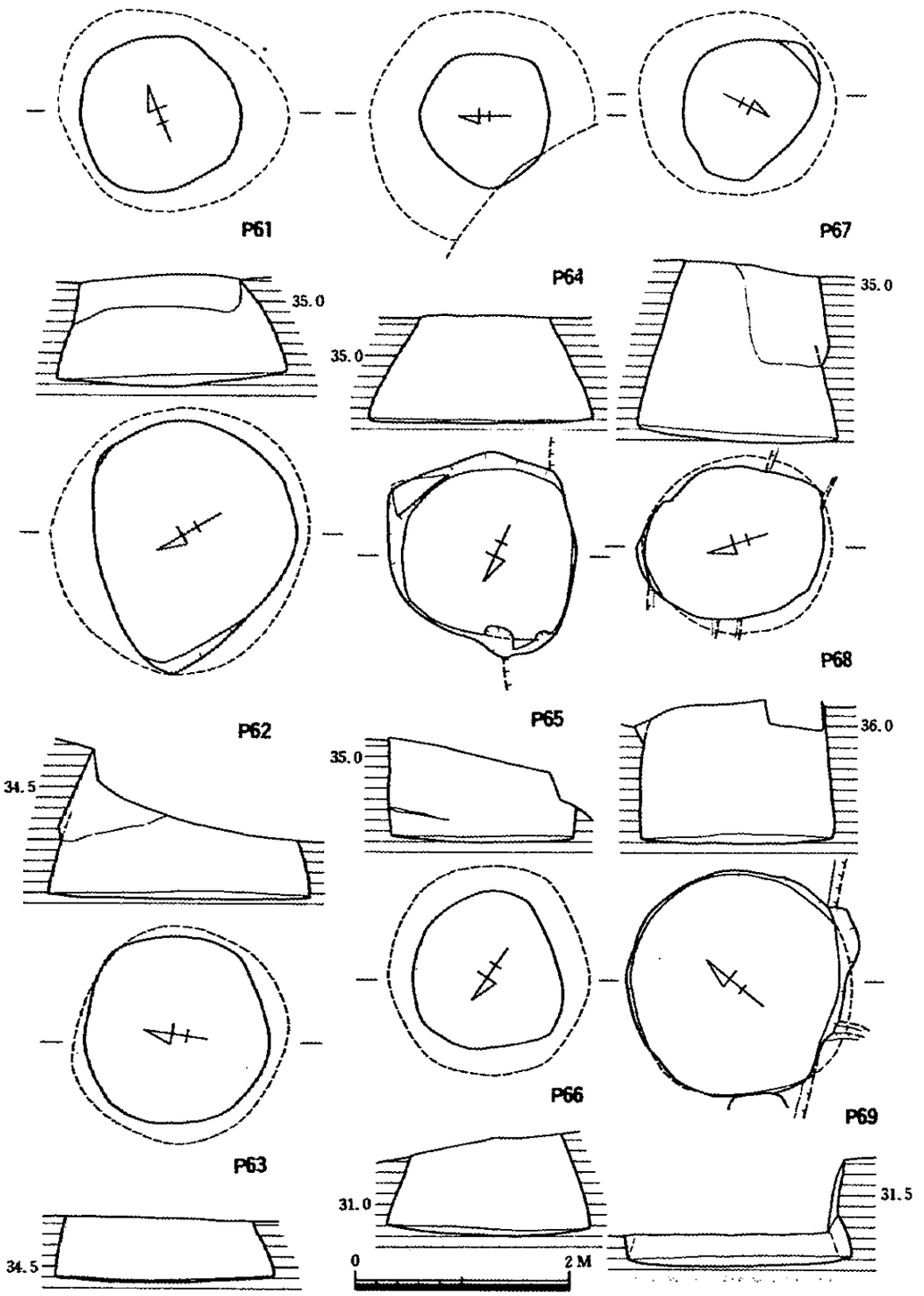
第38図　34～44号竪穴実測図（1/60）



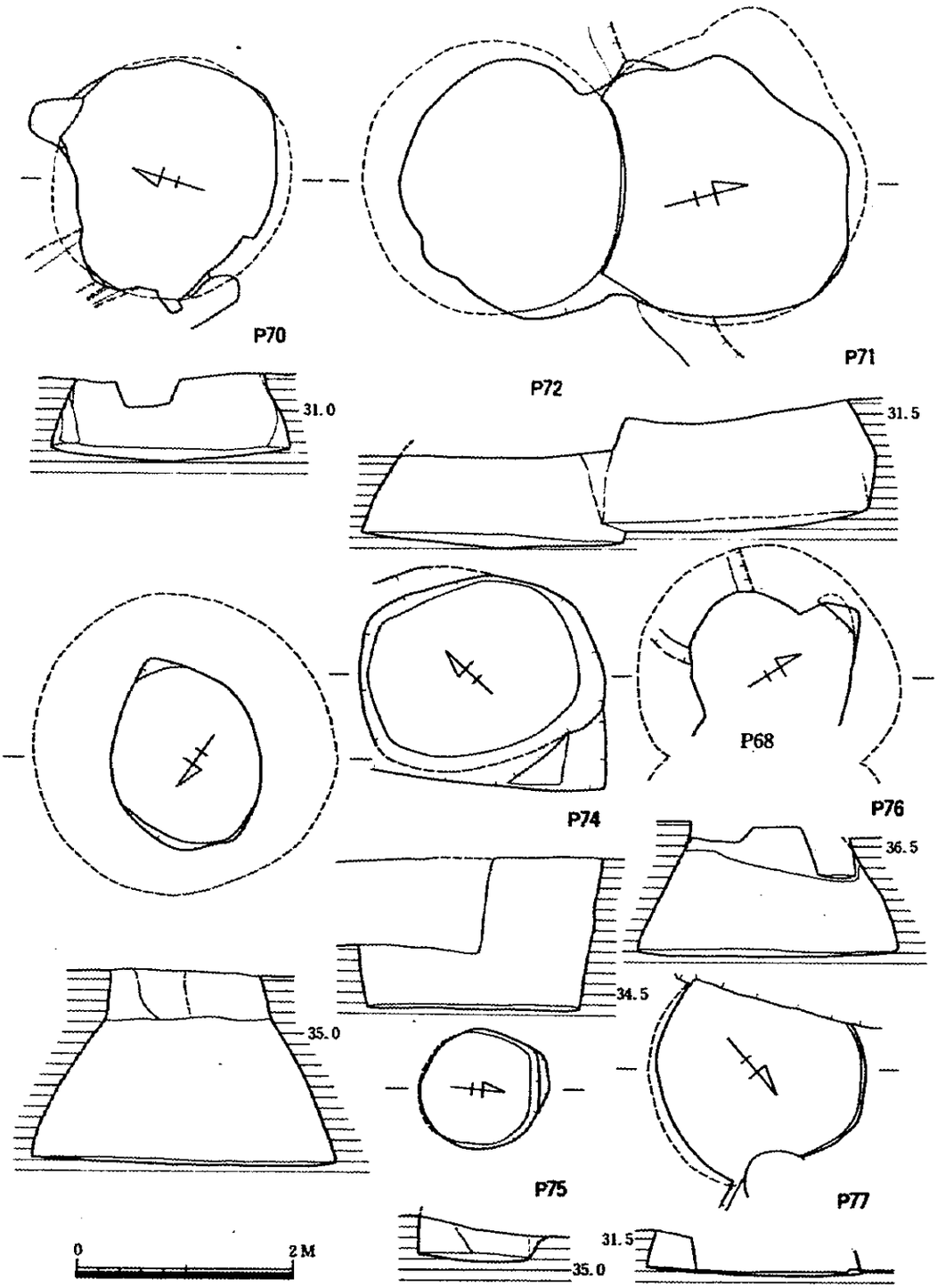
第39図　45～52号竪穴実測図（1/60）



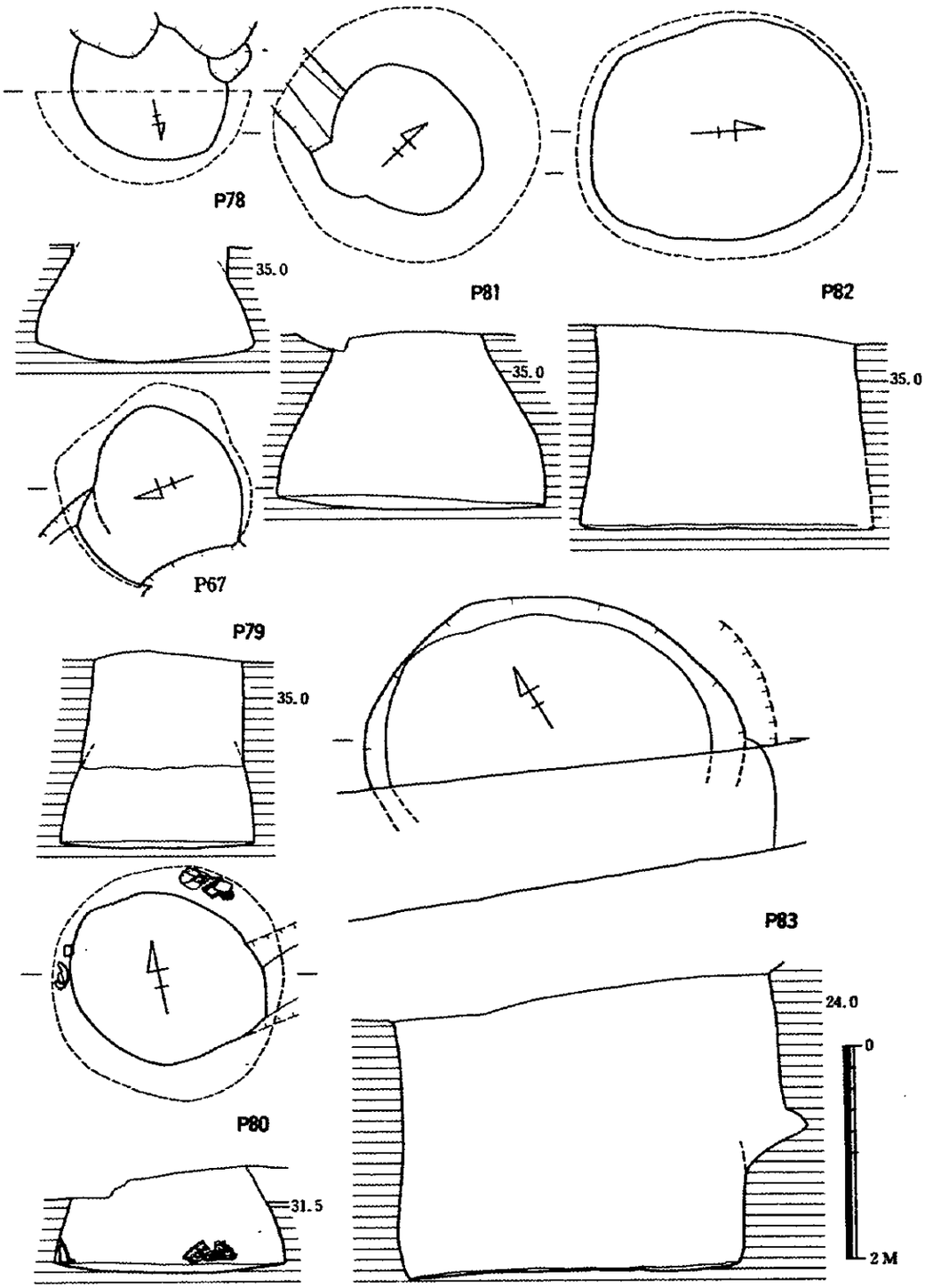
第40図　53～60号竪穴実測図（1/60）



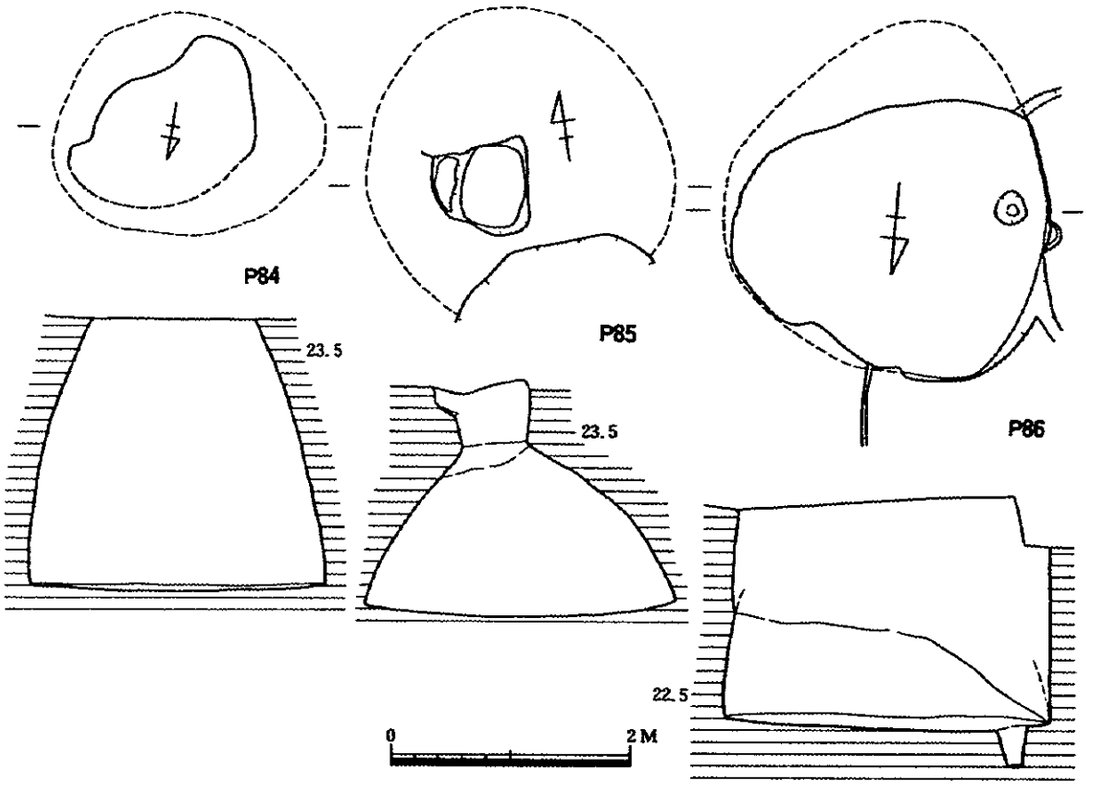
第41図　61～69号竪穴実測図（1/60）



第42図　70～77号竪穴実測図（1/60）



第43図　78～83号竪穴実測図（1/60）



第44図　84～86号竪穴実測図（1/60）

出土遺物

Ｐ１

如意形口縁を有する甕の小片等が数点出土している。

Ｐ２

土器（第45図１・２）

いずれも復原口径が50cm前後の大型壺である。１は口端部を方形に近く成形し、段を有さない。頸部との境には１条の箆描き沈線を刻む。２も形態は１に似るが、口縁部の肥厚が弱い。また、肩部にも沈線を刻む。他に如意形口縁を有する甕の破片がある。

石器（図版39、第63図18）

砥石というには器面が粗い感がある。図の背面は自然面のままである。砂岩製。

Ｐ３

土器（図版34、第45図３～８）

３・４はいずれも1/6の破片である。如意形口縁を有し、端部は断面方形に近く仕上げられ

る。5は小片。6は3/4が残存する小型の鉢で、口縁部は小さく外反する。他に甘い段を有する大型壺の破片などがある。

石器（図版39、第62図15）

平面が長円形、断面が偏円形を呈し、器面は滑らかとなる。両端部に敲打したと思われる荒れた面が観察できることから叩石を想定できる。玢岩製。

Ｐ４

数点の土器の小片があるのみである。甕は平底となる。

Ｐ５

土器（第46図９～11）

９は頸部内面に弱い稜を見せる。口端部下端に刻みを入れ、頸部下には箆描き刺突文を挟む箆描き沈線を巡らせる。10は如意形口縁の小片で、やはり口端部下端に刻みを入れる。両者ともに口縁部内面を横刷毛で仕上げている。

石器（図版39、第62図６）

磨製石鏃である。鏑ははっきりと確認できず、断面形はレンズ状に近い。基部は面取りを施している。粘板岩製。

Ｐ６（第46図12～14）

12は段や文様を観察できないが、他の破片に胴部最大径付近に３条の箆描き沈線を付すものがある。13は小片で、口縁部が短いものである。14は内面に炭化物らしきものが付着し、外面は焼けて変色しているように見える。

Ｐ７（図版39、第62図12）

石庖丁１点のみである。背が弧を描き、刃部が直線に近い形状となる。器面は滑らかで、背部も丸く丁寧に仕上げている。刃部は使用痕が著しい。硬質砂岩製。

Ｐ９（第46図15）

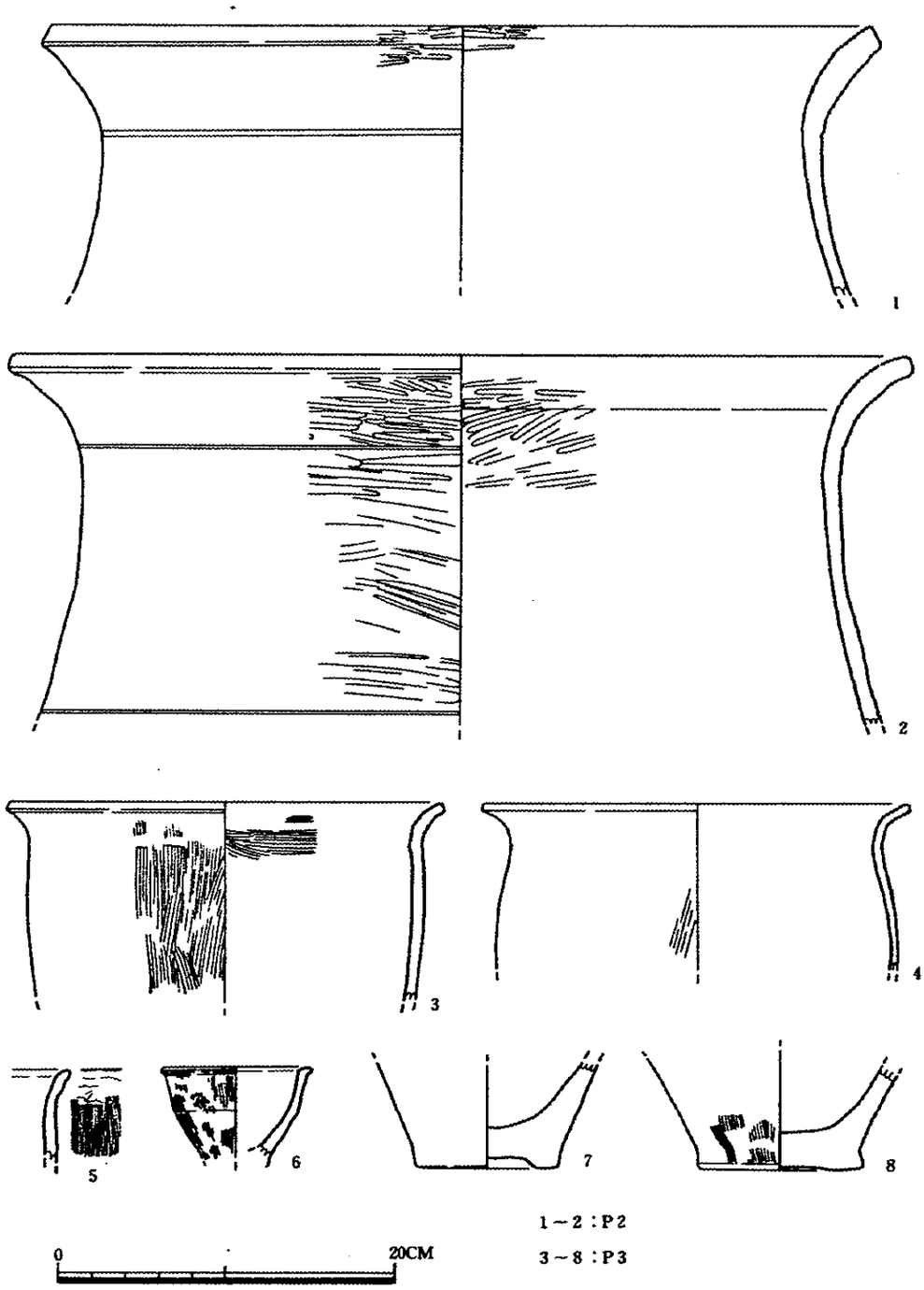
甕の底部。側縁がややくびれ、底部は若干上げ底となる。他に如意形口縁の小片がある。

Ｐ11（図版34、第46図10～19）

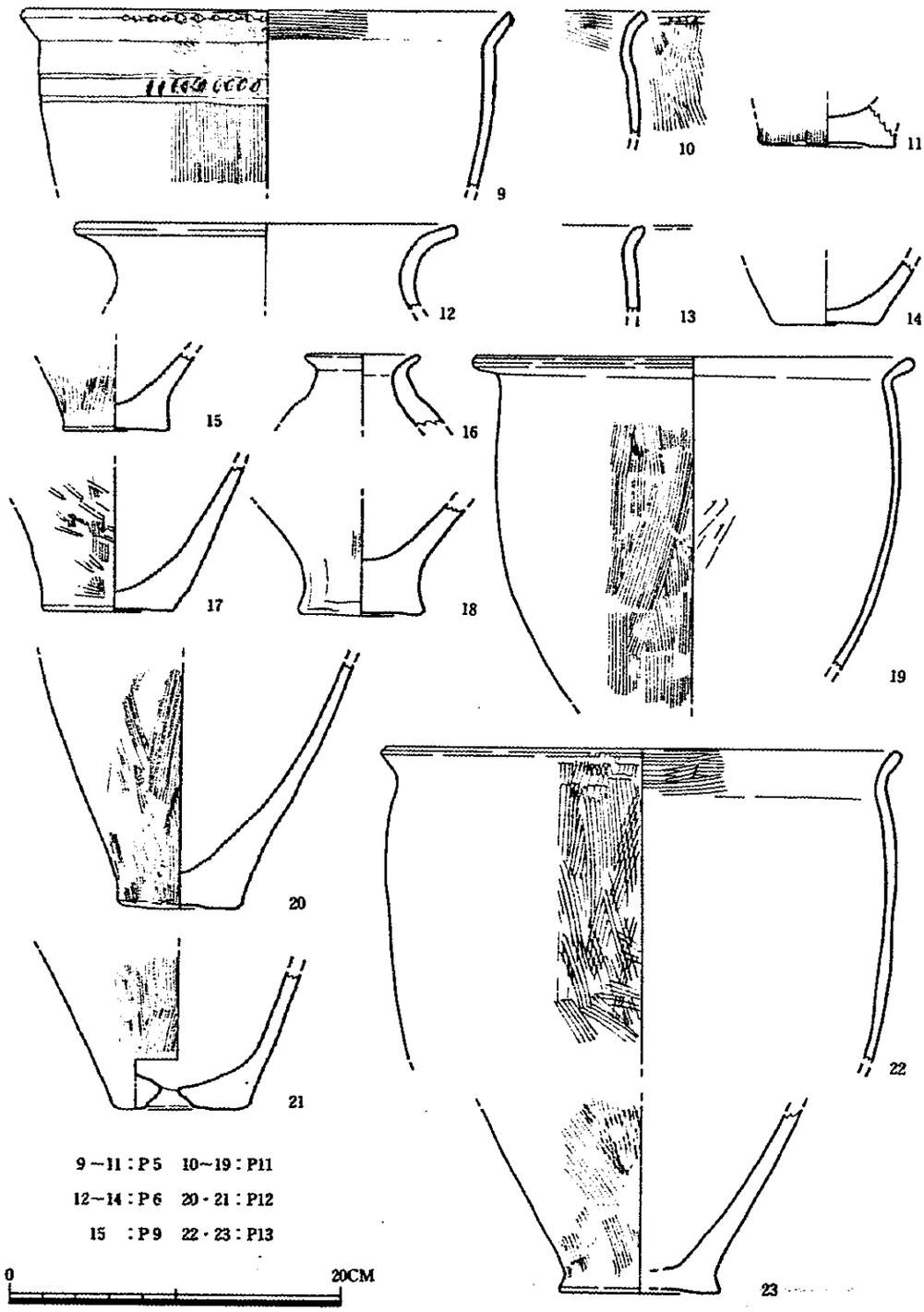
10は小型壺で、仕上げはごく丁寧である。口縁部の外反は強く、厚みが極端に薄くなる。口縁部・頸部・胴部のそれぞれの境界に段・沈線等は施されてない。17・18は甕の底部。17は側縁がほぼ直線的に立ち上がり、18はくびれるものの上げ底とはならないものである。19は端部が丸みを帯びて肥厚する「く」字形に折れる口縁部を有する。胴部はやや膨らみを持つ。

Ｐ12（第46図20・21）

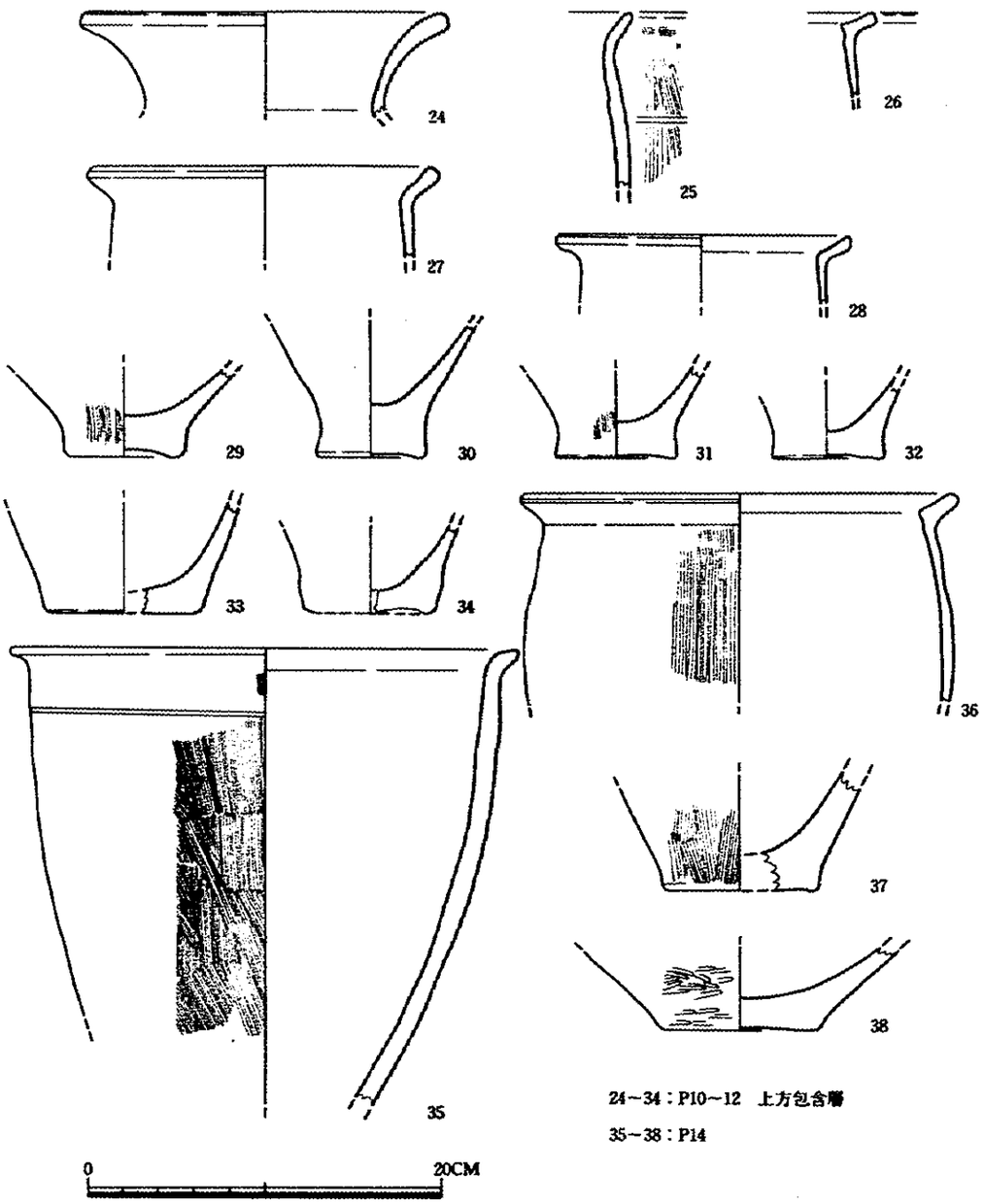
ともに底部から直線に近く立ち上がる甕・甑の一部である。21は焼成後に外面からの穿孔を行う。他に箆描きの無軸羽状文を装飾する壺の破片がある。



第45図　竪穴出土遺物実測図1（土器;2、3号）(1/4)



第46図　竪穴出土遺物実測図２（土器；５、６、９、11、12、13号）(1/4)



第47図　竪穴出土遺物実測図３（土器;10～12号上方包含層、14号）(1/4)

P10～12

先に記したようにこれらの竪穴および住居跡ＳＢ６の上方には包含層が堆積しており、その除去時に出土した遺物をここにまとめた。

鉄器（図版39、第62図１）

4.5×5.5cmの方形に近い、厚さ0.3cm強の鉄板である。図のように鏨で断ち切ろうとしたかのような痕跡があり、一部で屈曲する。

土器（第47図24～34）

24は壺の口縁部で、広がりはさほどでないが高く伸びて端部が肥厚する。25は如意形口縁を有し、頸部下に１条の篦描き沈線を巡らせる。内面調整は観察できない。26は逆Ｌ字形に屈曲する甕の口縁部小片。27・28は「く」字形に近い口縁部を有し、端部は若干肥厚する。29・32は側縁がややくびれる形態となるが、底部の上げ底の程度はまだ弱く、30を除いては厚みも乏しい。33・34は平底の底部から急角度で立ち上がるものである。

石器（図版39、第62図３・８・11・第63図19・20・23）

石鏃は灰白色に近い安山岩製で、剥離痕は不明瞭である。８はいわゆる大型石庖丁で完存に近い。刃部のみ丁寧に研磨されるが、上端左右の突起・抉り部を除く他の大部分は自然（剥離）面のままである。突起のうち、左端は原形に近いようであるが、右側のそれは折損する。砂岩製。11は片岩系の石庖丁の小片で、図の表裏両面とも剥離する。19・20・23は砥石。19は図の上下・左側を欠くようで、背面は自然面に近い様を呈する。20は完存に近いようである。図の上下両端を除く４面を使用し、特に表裏両面は中くぼみとなる。23も研ぎ減りの著しいもので、これも４面を使用している。

Ｐ13（図版34、第46図22・23）

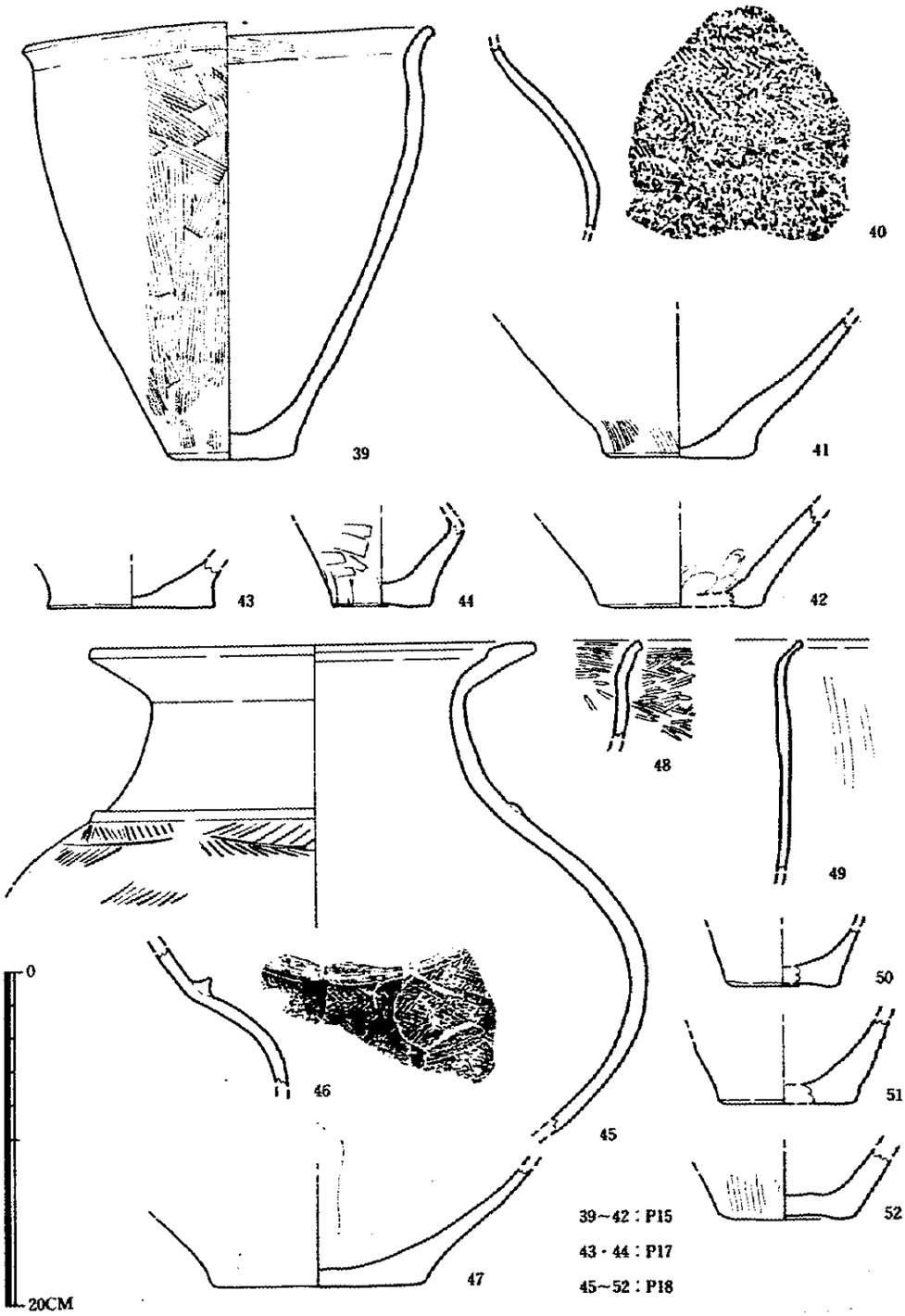
同一個体と思われるが胴部下半を欠く。上半部は約1/4が遺存する。頸部は緩くくびれ、開きの小さな如意形口縁へと続き、口端部の下端には細かい刻みが付されている。底部は側縁がくびれるものの、厚みが薄く立ち上がりが浅い。外面は全体に粗い縦刷毛で口縁部内面は同横刷毛、そして胴部内面は撫でて仕上げる。

Ｐ14（図版34、第47図35～38）

35は如意形の短い口縁を有し、頸部下方に篦描き沈線を１条刻む。胴部外面は細密な刷毛目で、同内面は撫でて仕上げるようである。二次的な火熱を受けている。36は逆Ｌ字形の口縁部となる。端部は断面方形に近い。他に無軸羽状文を有する壺の破片もある。

Ｐ15（図版34、第48図39～42）

39は全体が窺える資料である。口縁部は如意形を呈するが頸部内面に弱い稜を有し、端部下端が小さく垂下する。底部は平底で、胴部へと直線的に連なる。調整は外面では縦刷毛を主とし、口縁部内面を横刷毛、胴部内面は撫でて仕上げるようである。なお、胴部外面には煤が、



第48図　竪穴出土遺物実測図４（土器;15、17、18号）(1/4)

内面には炭化物が付着する。40は摩滅が著しい破片。篦描きの沈線と無軸羽状文が辛うじて観察できる。

P17

土器（図版34、第48図43・44）

壺・甕の底部片である。43は側縁が一旦くびれ、内面はほとんど平坦面を持たない。44の側縁はほぼ直線的に胴部へと続く。他に口縁部が肥厚する大型壺・羽状文を有する壺の破片、平坦部の発達しない鋤先状口縁部の破片２点を含む整理箱１箱分の土器が出土している。

石器（図版39、第62図９・17・第63図22）

９は大型石庖丁で、全体を研磨するものの、低くなった部分は自然面をそのまま残す点で大雑把に仕上げたといえる。砂岩製。17は玢岩製の叩石。これも長側縁はきわめて滑らかな曲面となっており、図下端の一部のみ敲打される。22は砂岩製の砥石。図の表面・左側面および右側面の一部が平滑化しているが、背面は自然の凹凸面となる。

P18（図版34、第48図45～52）

45は器表の摩滅が著しく細部の調整は不明である。口縁部は強く外反し、頸部との境に弱い稜を残す。端部は内面に粘土紐を貼付して肥厚させ、有段とする。肩部には断面三角形の突帯を１条巡らせ、直下に有軸羽状文を刻む。47は同一個体であろうか。48は如意形口縁として端部を断面方形に成形する。内外面を篦磨きで調整しており、鉢であろう。49も如意形口縁となるが端部が小さく跳ね上げ状となる。胴部の張りも弱い。底部はいずれも平底あるいは若干上げ底となり、側縁は直線的である。

P20（図版35、第49図53～55）

52・53は床面から出土した。52は緩く外反する如意形口縁を有し、端部が小さく垂下する。胴部はやや膨らみをもって底部へと続く。外面は縦刷毛を主として、口縁部内面は横刷毛、胴部内面は撫でで仕上げる。底部には焼成後に穿った孔があり、二次的な火熱を受ける。他に口縁部が大きく開き、無軸羽状文を刻んだ壺の破片等がある。

P21（第49図56～58）

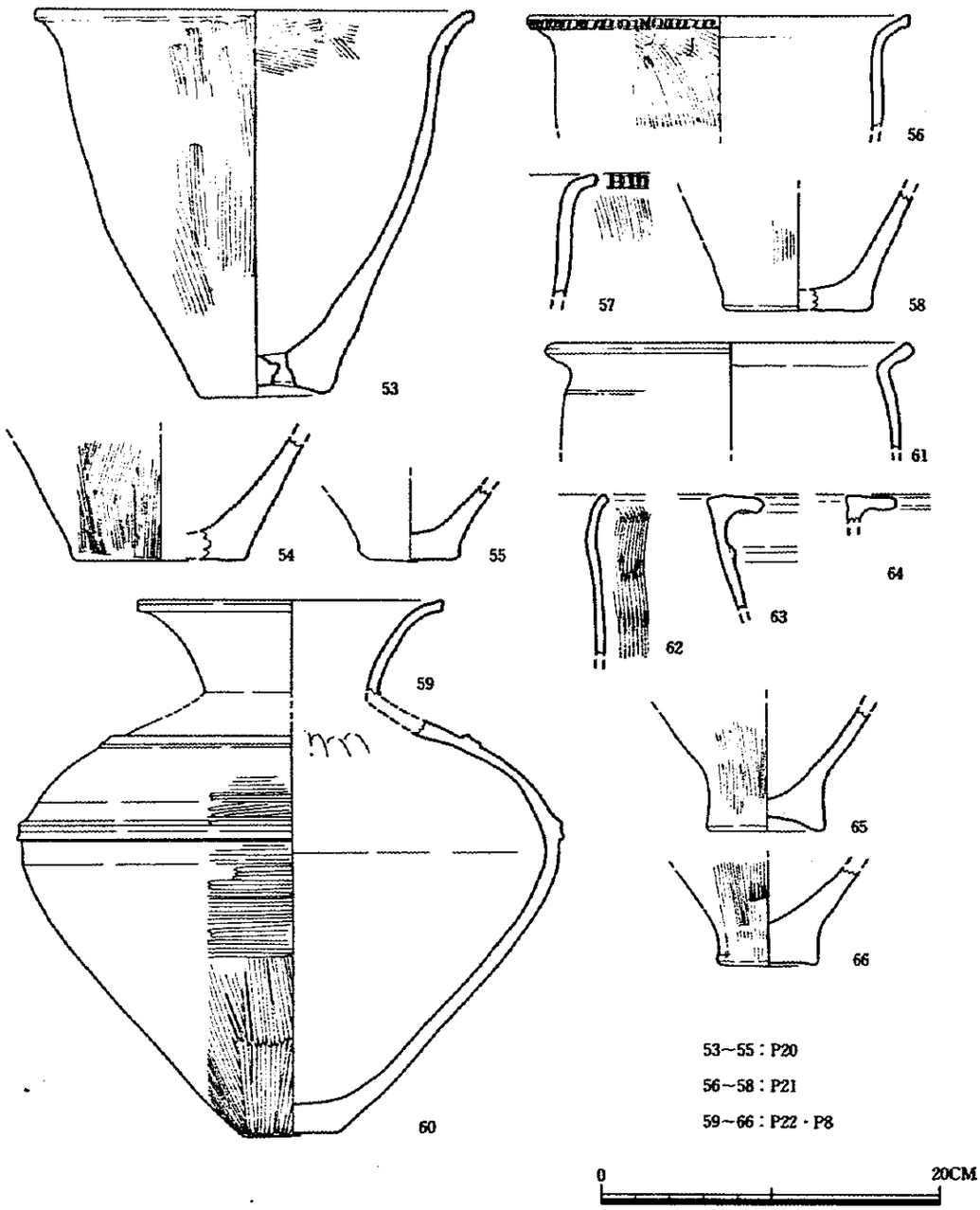
56・57は口縁部の長さが異なるものの、いずれも如意形を呈し、端面に刻みを付す。調整は外面に縦刷毛を用い、内面は撫でで仕上げる同巧の甕である。

P22・P８

上・中層では２基の竪穴の遺物を分離できなかったが、さいわいにより深いP22の床面近くで59・60に示した壺が出土したことから、古い一群（62・66）がP８に、他の新しい一群がP22に属することが推測される。

土器（図版35、第49図59～66）

62は如意形口縁を呈するが外反度がごく弱く、端部は断面方形に近い。外面調整は縦刷毛を



第49図　竪穴出土遺物実測図５（土器;20、21、22・８号）(1/4)

使用する。66は側縁が小さくくぼむ厚手の底部であるが、上げ底は強調されていない。

59・60は同一かどうかはっきりしない。壺の破片として他に断面三角突帯を2条巡らせるものが出土しているからである。しかしいずれの個体に伴うにしても大差はないと考えている。59は大きく開くが、まだ角度が急である。胴部には断面口唇状となるM字突帯を肩・最大径部分に付し、最大径部分は中位よりやや上に位置する。口縁部内面から外面にかけては丁寧に篦磨きを施すようであり、肩部内面には指撫での痕が見える。63・64は逆L字形に近い口縁で、平坦面は小さく、内面への突出も見られない。65は側縁がくびれ、大きな上げ底となる甕の底部。ただ、底部の厚みはそれほどでもない。

石器（図版39、第63図21）

図の表面1面のみが平滑化する砥石で、使用面は緩くくぼむ。砂岩製。

P23（図版35、第50図67～74）

67は底径が大きく、胴部の張りの小さい壺で、最大径部分に断面三角形の突帯が1条巡る。68も胴部からの立ち上がりが急で、67に似る器形となろう。69は広口となる壺であるが口縁部が高く広がり、端部は断面方形になる。70・71は逆L字形の口縁を持つ甕の小片。71は口縁上面が内彎し、内側へ突出する。甕の底部はいずれも側縁があまりくびれない。73・74は上げ底となる。

P24（図版35、第50図75～79）

75は「く」字形口縁となり、端部の肥厚が著しい。胴部の張りが大きく、頸部のわずか下に断面三角形の突帯を付す。約1/4が残存する。76・77は広口の壺で、やはり高く広がる。76は口端部を断面方形に近く成形し、端面を小さくくぼませる。76は端部近くでより大きく外反し、端部内側を上方に小さくつまみ上げる。78・79は小さな底部・中位よりやや上に最大径部分があって胴部の張りが強い点などで共通する。なお、図では各一個体に復原しているが個体識別はできない。

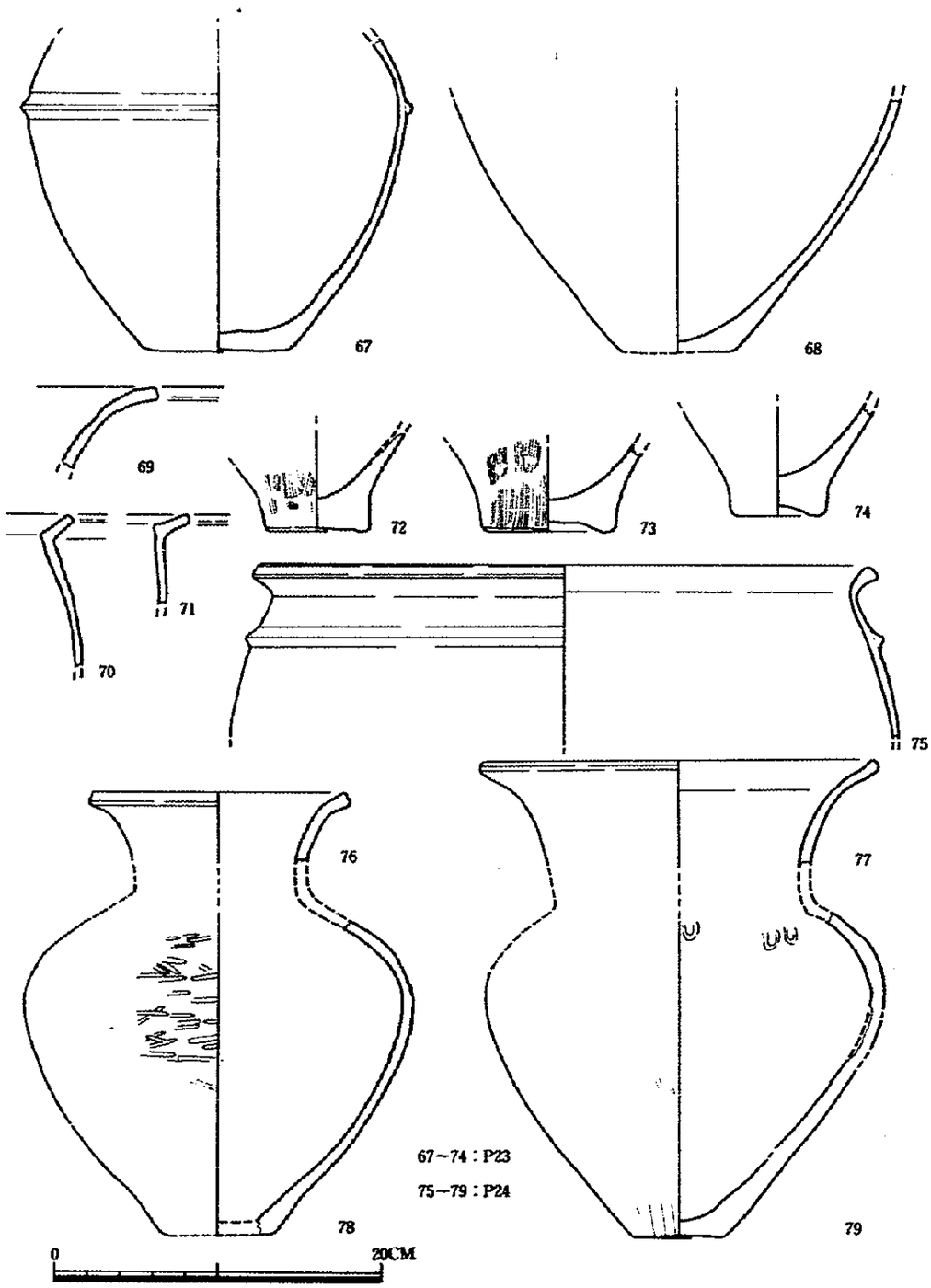
P25

土器（図版35、第51図80～85）

80・81は同一個体であろう。頸部は大きく内彎して如意形の口縁部へ続く。口端部は上方に小さくつまむ感じとなり、端面に刻みを付す。内面は全体に横撫で・撫でで仕上げる。82・83も如意形を呈するが外反の度合が弱い。端部は前者が内側へ小さくつまみ、後者は丸くおさめる。84・85は平底から直線的に立ち上がる。

石器（図版39、第62図10）

3孔が残る大型石庖丁。これも研磨は刃部に限られ、他は剥離面をそのままに残す。図表面の剥離面を残す部分のみが灰赤色となっている。粘板岩製。



第50図　竪穴出土遺物実測図６（土器;23、24号）(1/4)

P26

如意形・「く」字形の甕の口縁部の小片などが若干ある。後者は端部が若干肥厚する。

P27（第51図86・87）

86は端部がやや肥厚する「く」字形口縁の小片。87は側縁が緩くくびれ、上げ底ではないが肉厚の底部となる。

P28（図版35、第51図88～93）

88は口径3㎝強のミニチュアで完形。口縁部を拡張したというよりは突帯を付した感があり、全体に灰黒褐色を呈する手捏ねである。89は逆L字形の口縁形態となる。90も頸部内面に稜を有して逆L字形に近い。91はまだ如意字形と言うべきで、口縁部内面の横刷毛調整も古式の名残りであろう。92・93は側縁がくびれる肉厚の底部。他に断面M字突帯を巡らせる壺などがある。

P30（図版35、第51図94～99）

甕の底部は側縁が小さくくびれるものの概して直接的に立ち上がり、95の壺の底部とともに前期の趣を残す。他に篦描き沈線1ないし2条付す如意形の口縁部もある。

P33（図版36、第52図100～104）

100～102は口縁部内側が突出する鋤先状口縁部と直下に断面三角突帯を有する甕で、発達度にいくぶんの違いがある。100は輪台状の上げ底で肉厚となる。なお、102は口縁部上面から外面にかけて赤色顔料が塗られている。103は短く大きく開き、口端部は肥厚して端部がくぼむ。104は甕の底部で、小さな上げ底となる。

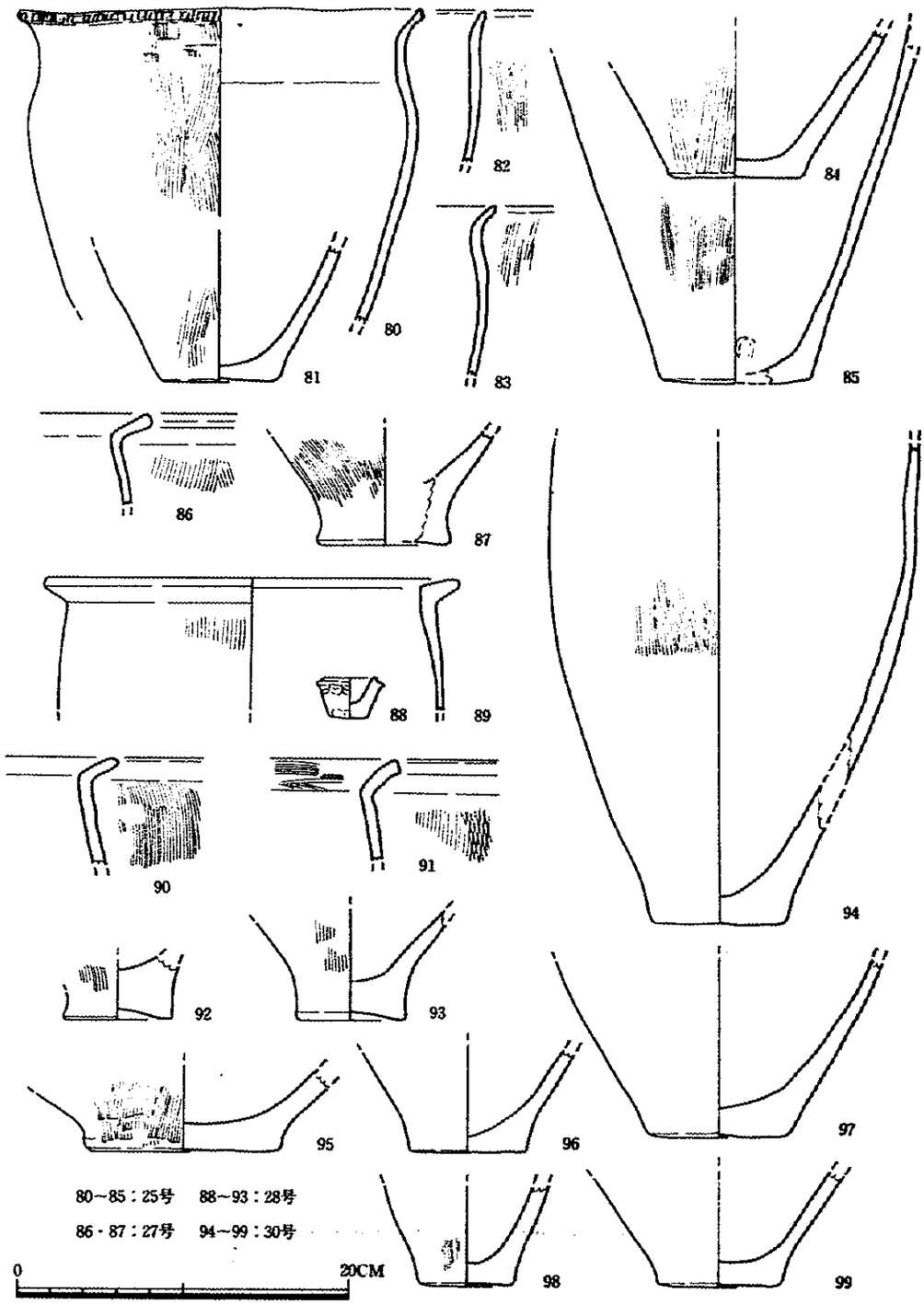
P34（図版36、第53図105～109）

105は口縁・頸部間には段を、肩部・胴部間には甘い沈線を1条巡らせて各々を区別する。口縁部は強く外反し、内面に粘土紐を張りつけてここにも段を形成している。他に文様はない。胎土は大粒の砂粒を多く含む粗いもので、そのほとんどが沈み込むが器表に凹凸が顕著である。外面の主調整である篦磨きも粗雑と言うべきである。106は105と対照的に丁寧な篦磨きで仕上げている。如意形口縁の端部は断面方形となり、内面に横刷毛を施す。107は頸部・肩部間に断面三角突帯を巡らせ、その上下を装飾する壺の破片。突帯のすぐ上位には連続する鋸歯文がある。下位には3条の平行線文・無軸羽状文・2条の平行線文そして突帯上と同様な鋸歯文が順に施文される。原体は平行線文のみが篦描きとなり、他は貝殻腹縁を使用している。

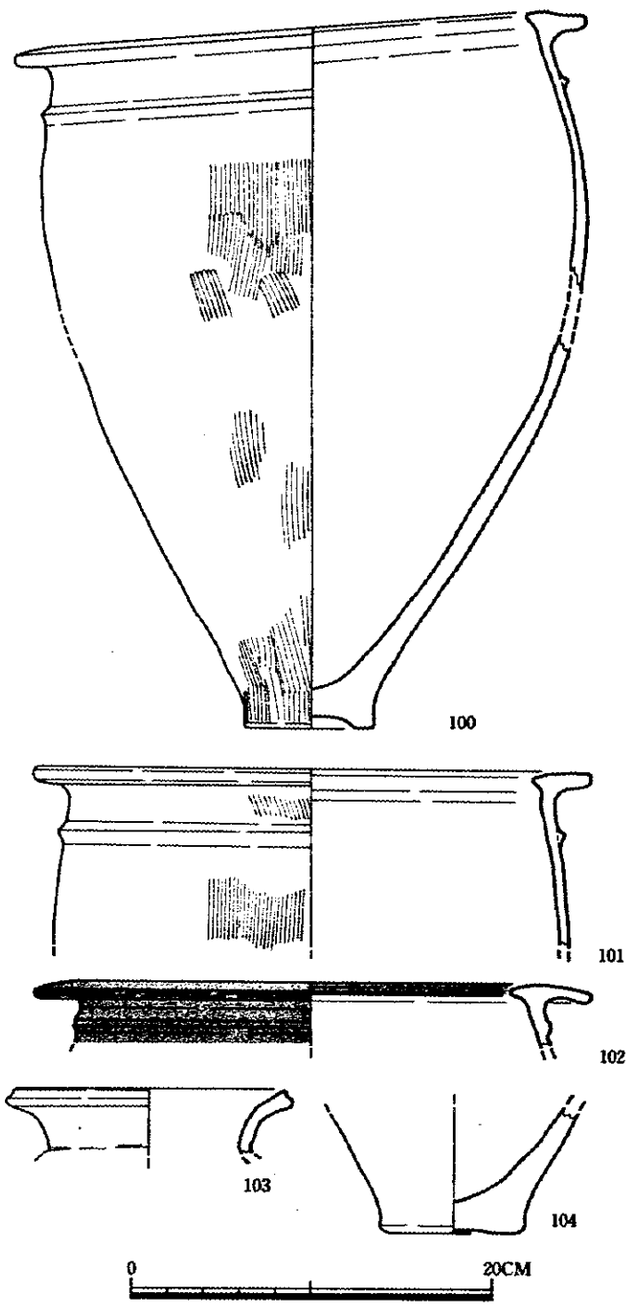
108はあまり外反しない如意形口縁を有し、端部に刻みを付す。その下方には刻み目突帯を巡らせる。口縁部内面は横撫でで仕上げ、胴部内面は撫でている。109は全体がわかる。口縁部は如意形となり、端部が小さく垂下する。胴部の張りは弱く、下半から底部へと直線的に続き、底部は小さな上げ底となる。

P35（第54図110・111）

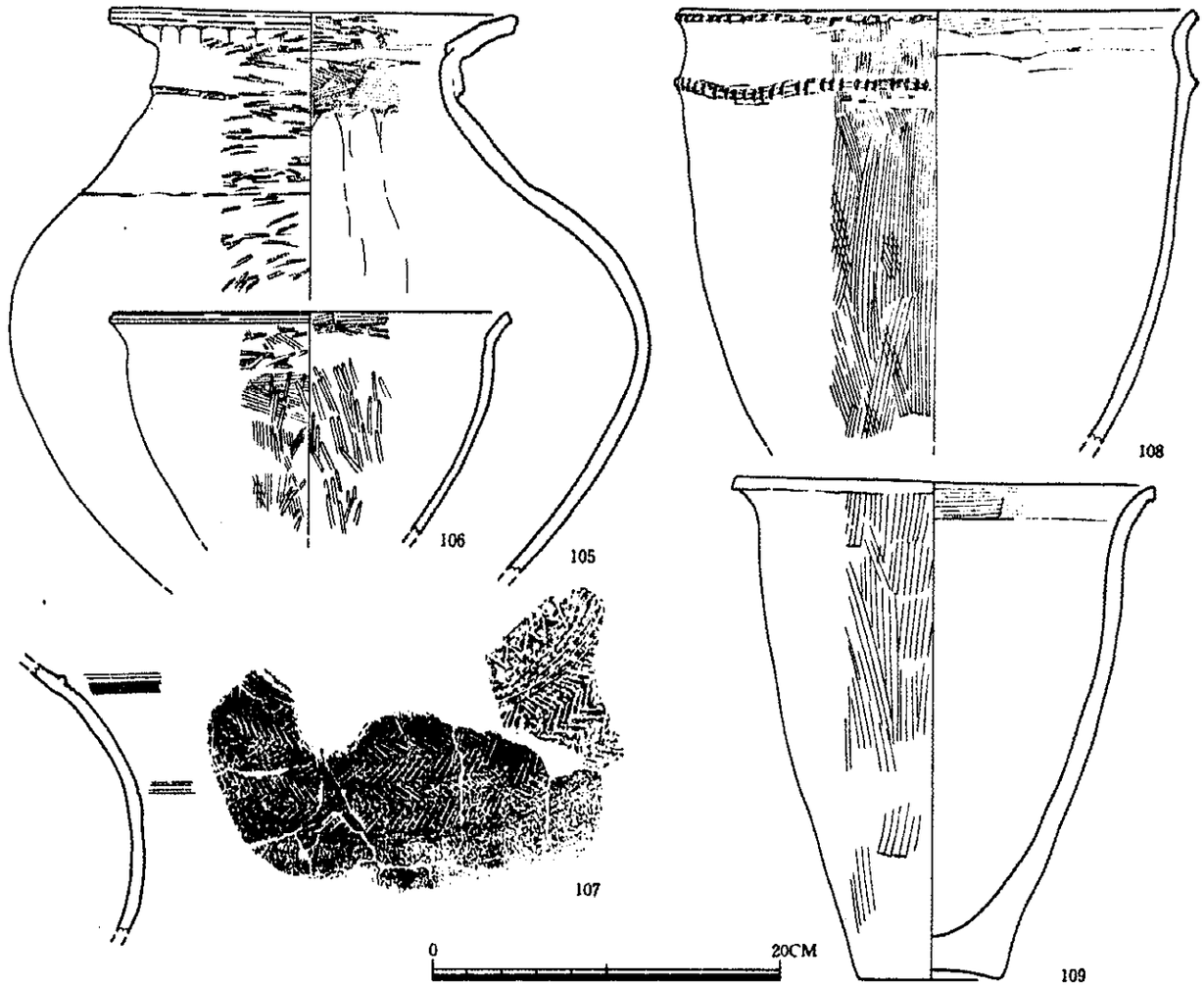
110は口縁部内面を肥厚させる大型壺の小片。端面上下端に刻みがあるようだが器表が荒れ



第51図　竪穴出土遺物実測図７（土器;25、27、28、30号）(1/4)



第52図　竪穴出土遺物実測図８（土器;33号）(1/4)



第53図　竪穴出土遺物実測図９（土器;34号）（1/4）

てはっきりしない。111も小片。弱く反転する如意形口縁を有する。これも器表の摩滅が甚だしく細部は不明。

P36～38（第54図112～115）

3基が切り合い、各々を分離できなかったのでまとめる。遺物量もわずかである。

112は「く」字形に外反し、端部はやや肥厚する。113は鋤先状口縁を有し、断面三角突帯を付す。115は器表の剥離が著しいが、如意形口縁となって頸部下に沈線を1条巡らせるものである。114の側縁はあまりくびれない。

P39

土器（第54図116）

肉厚・上げ底の底部片。他に特徴をつかめる個体がない。

石器（図版39、第62図16）

P3・P17出土例と同様な形態であるが、やや小型となる玢岩製叩石。

P41（図版36、第54図118）

口縁部を欠くが他は完存に近い。頸部・肩部間に低い三角突帯を付し、最大径部分よりやや上位に1条の沈線を刻んで文様帯を画す。文様は篦描きの無軸羽状文で、均整がとれている。仕上げも丁寧に篦磨きを行っている。他は如意形口縁の破片など10数点が出土したのみである。

P46（図版36、第54図117）

側縁がわずかに内彎する曲線を描く肉厚の底部で、平底となる。他に数点出土。

P49

逆L字形を呈する甕の口縁部片等が数点出土している。

P50（第54図119）

口端部を欠く。3条の幅広い篦描き沈線の間に篦状工具による刺突文を配したものである。外面は縦刷毛、口縁部内面は横刷毛で仕上げる。

P51（第54図120～122）

120は如意形口縁であるが、内面に弱い稜線が入る。口縁部内面を横刷毛、胴部外面を縦刷毛で仕上げる。121・122は薄手の平底で、側縁は直線に近く立ち上がる。他に肩部に1条の沈線を刻む大型壺の破片がかなりあるが復原しえなかった。

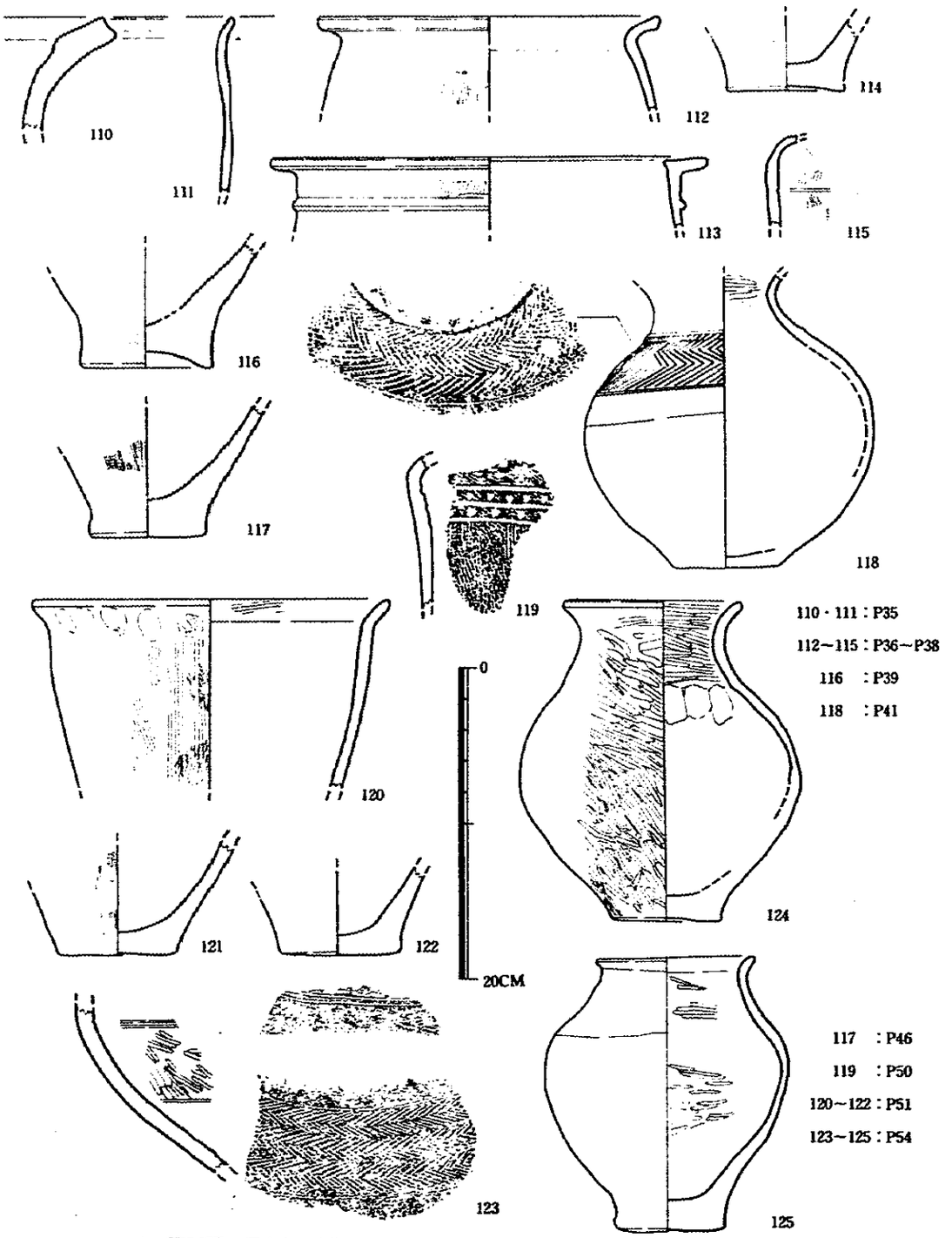
P53

大型壺の残片、如意形口縁・平底の甕などがある。

P54

土器（図版36・37、第54図123～125）

123は頸部下端に2条の平行線文、肩部に貝殻腹縁を用いて施文した無軸羽状文帯の上下端を篦描き沈線で画した文様帯を配する。その間は丁寧に篦磨きするものの無文となる。124・



第54図　竪穴出土遺物実測図10(土器;35、36～38、39、41、46、50、51、54号)(1/4)

125は完存する。124は口縁部から底部までS字形の曲線を描いて移行し、明確な区別は刻されていない。125は上記の土器に比べて歪になるが部位の区別はつく。口縁部は短く外反し、肩部・胴部の境には鈍い稜線が入るからである。なお、外面の一部に黒色の付着物があり、当初は黒塗りであった可能性がある。甕の破片には如意形口縁の例がある。

石器（図版39、第63図25）

漆黒を呈する黒曜石製の薄片石器。全長5.3cmを測る。縦長状薄片を素材とし、左側縁に簡単な刃部加工を施す。両側縁には肉眼で見るかぎり使用痕らしきが観察できる。

P55（第55図126）

側縁が若干くびれる、ほぼ平底の甕の底部。他に赤色塗彩した鋤先状口縁の甕片がある。

P56（第55図127）

如意形口縁を有し、加飾は見られないが全体に篦磨きを多用しているようである。鉢であろう。他に甘い沈線を刻む大型壺片等がある。

P58

大型壺片を含む数点のみ出土。

P59（図版39、第62図5）

基部が欠損する柳葉形の磨製石鏃。石理が文様風に表れる。粘板岩製。

土器には緩く反転する如意形口縁を有する甕の破片等が若干ある。

P62（図版37、第55図128・129）

口縁部は如意形に反転して薄く終わる。調整痕はほとんど観察できない。底部は平底で、側縁は直線に近く立ち上がる。

P63（図版37、第55図130）

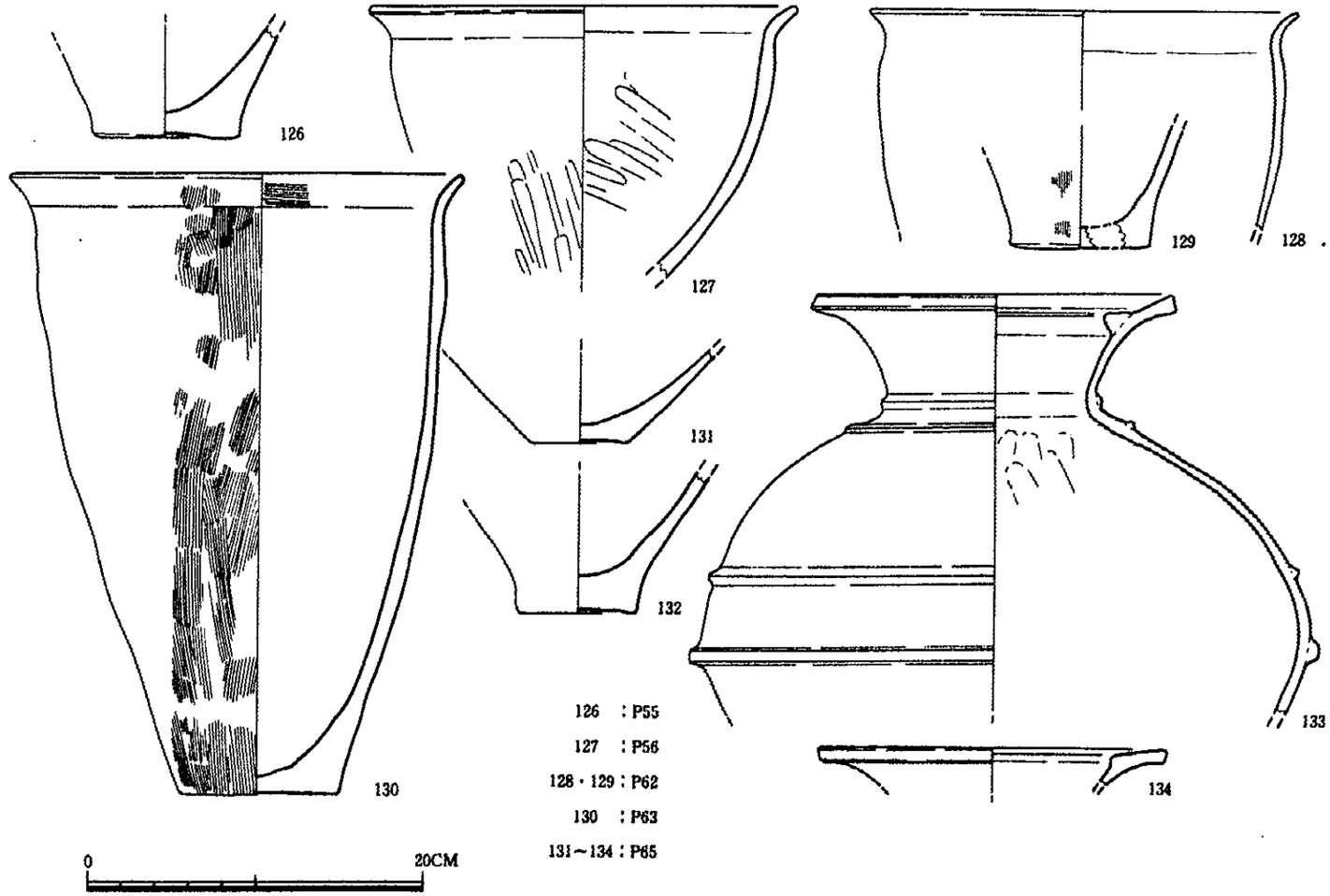
如意形口縁を有する甕で全体がわかる。胴部は膨らみに乏しく、口径に比して高さが強調される。底部は平底で、側縁は直線的に立ち上がる。外面は縦刷毛を主とし、口縁部内面は横刷毛、以下は撫でて仕上げる。

P64

口端部が上方に小さくつまみ出される跳ね上げ口縁の小片などがある。

P65（図版37、第55図131－134）

133は約2/3が残る。口縁部はラッパ状に開き、端部が肥厚する。内面上半に断面三角形の突帯を巡らせて受け口状にする点特徴的である。胴部は球形に近く、最大径部分に断面梯形の突帯を付すほか、その上位・頸部・同下にも断面三角形の突帯を飾る。134は鋤先状口縁となる壺であろうか。内側への突出は見られず、ほぼ垂直の段となる。131は壺の、132は甕の底部。甕の口縁部では「く」字・逆L字形を呈し、跳ね上げ気味のものもある。



第55図 竪穴出土遺物実測図11(土器:55、56、62、63、65号)(1/4)

P66

如意形口縁を有し、2条の沈線を巡らせる甕などがある。

P67

管玉（図版39、第62図2）

断面形が三角形に近く、青灰色を呈する。図の下端は欠損するが、上端端面とともに摩滅して角が取れる。

土器（図版37、第56図135～143・第57図144・145）

135は口端部が折れて水平面をなす広口の壺で、頸部外面には縦方向に暗文を刻む。残存部の全面に赤色顔料が塗彩される。136はあるいは135の胴部であろうか。胴部に2条の断面梯形の突帯を付し、外面全体に赤色塗彩を施す。137・138は鋤先状口縁の壺。内面への突出度が異なるほかはよく似た形態となる。139・140はやはり鋤先状口縁となる甕で、内面の突出は大きく、口端部は丸くおさめている。突帯は見られない。141・142は「く」字形口縁を有するもの。141は端部を小さくつまみ、142は下膨れの形になる。144・145は同一個体であろう。口縁は逆L字形に近く、胴部の張りが弱い。底部は薄い。

これらの土器群は任意に上・中・下層に分層したものの型式変化は見られないといってよい。

P68（第57図146・147）

「く」字形に外反する口縁部と、膨らみつつ立ち上がる壺の底部であろう。口縁部内面は横刷毛で仕上げる。

P70

如意形口縁を有し、篦描き沈線4条を巡らせる甕の破片がある。

P71（図版37、第57図153）

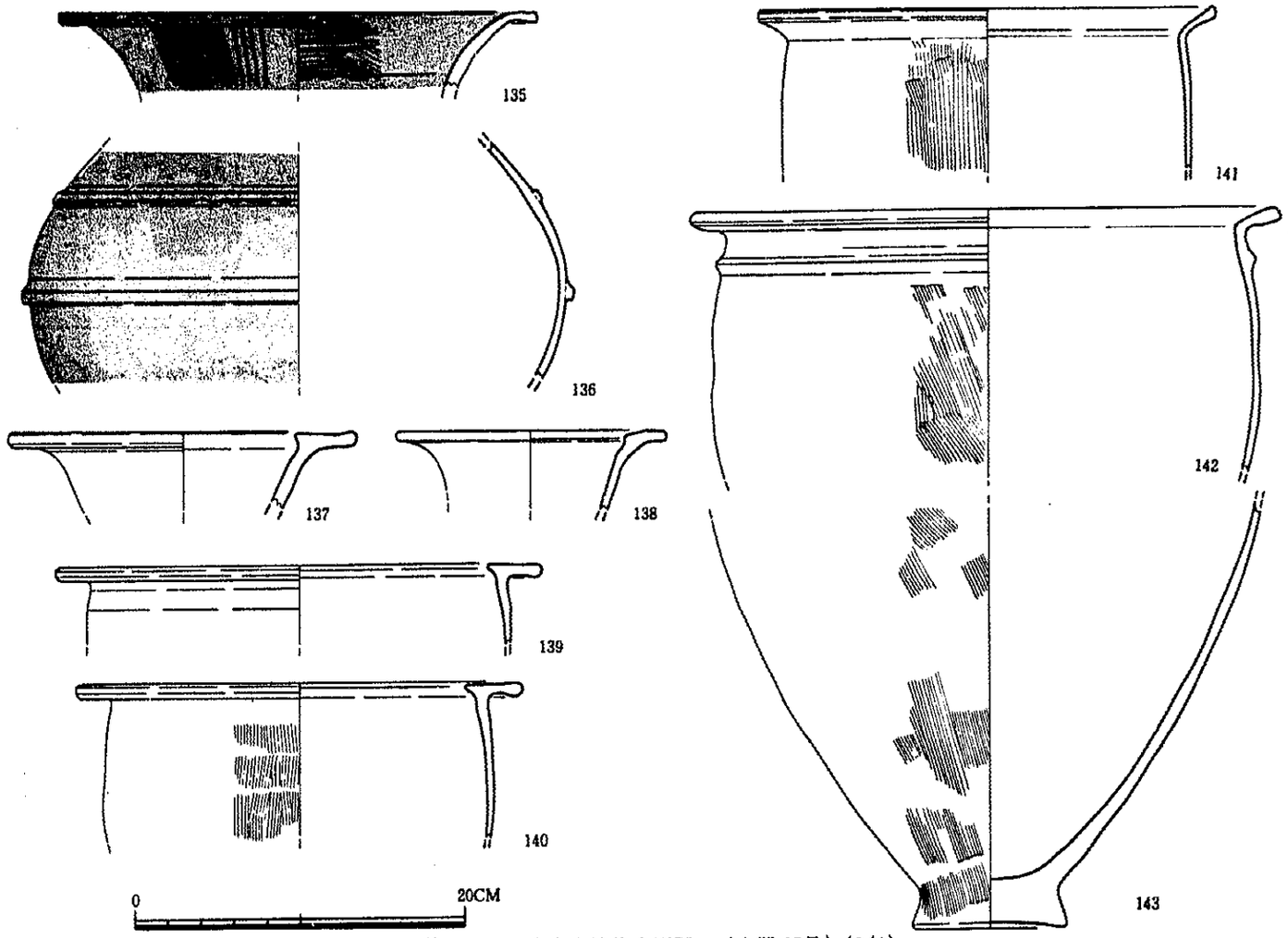
直径4.6～5.6cmの土製品。重量は118g。形は歪で、指頭痕が著しい。他に如意形口縁の甕小片等が出土している。

P73（第57図148～152）

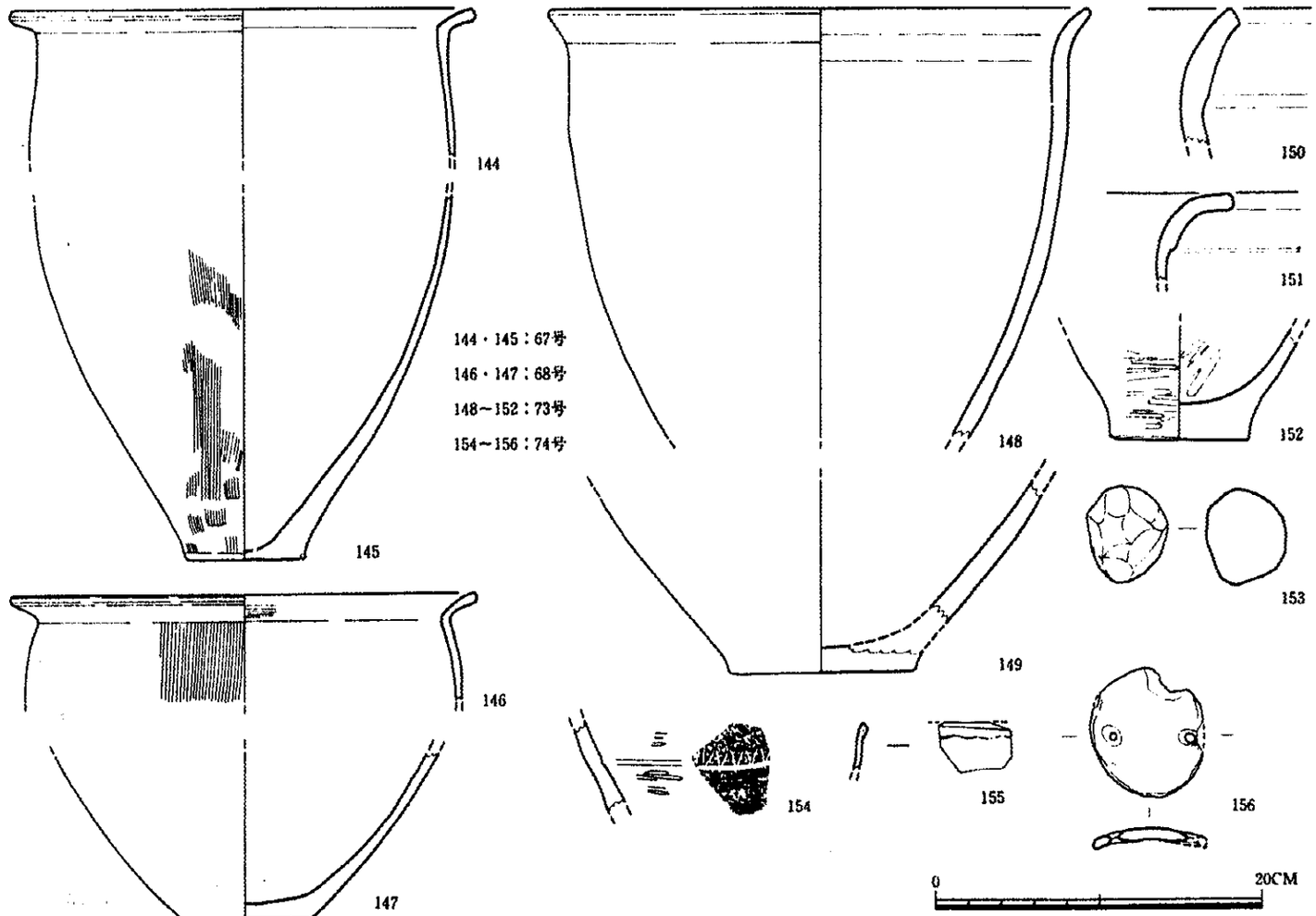
148は如意形口縁の甕で、反転は弱い。器面調整は一切不明である。149は壺の底部。150は外面に粘土帯を付して段を成形する大型の壺で、外反の度合は小さい。151は大きく開く壺の口縁部。これも外面に粘土を付して頸部との境に段を有する。

P74（図版37・38、第57図154～156・第58図157～166）

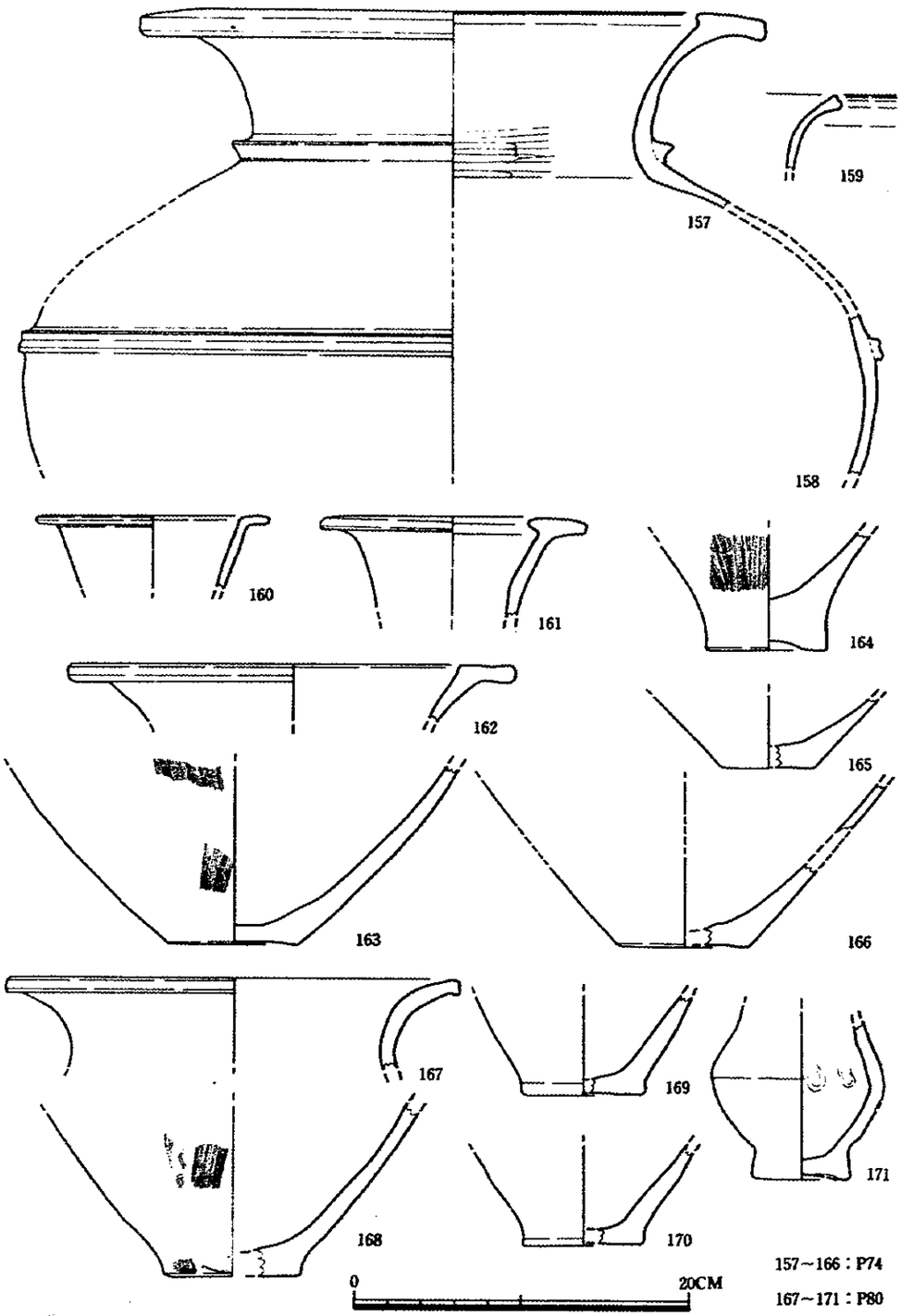
154は頸部・肩部界の小片。原体（篦状工具）を変えて、直線文と鋸歯文を刻む。155も小片。口端部を折り曲げて断面三角形に成形し、端部は外傾する面となる。折り返し部下端の接着は稚拙で、部分的に撫でつけた結果波打つ。これは後藤直氏の言う朝鮮系無文土器Ⅲ類に似る(註1)が、断面は口端部で厚く、下方で薄くなる。



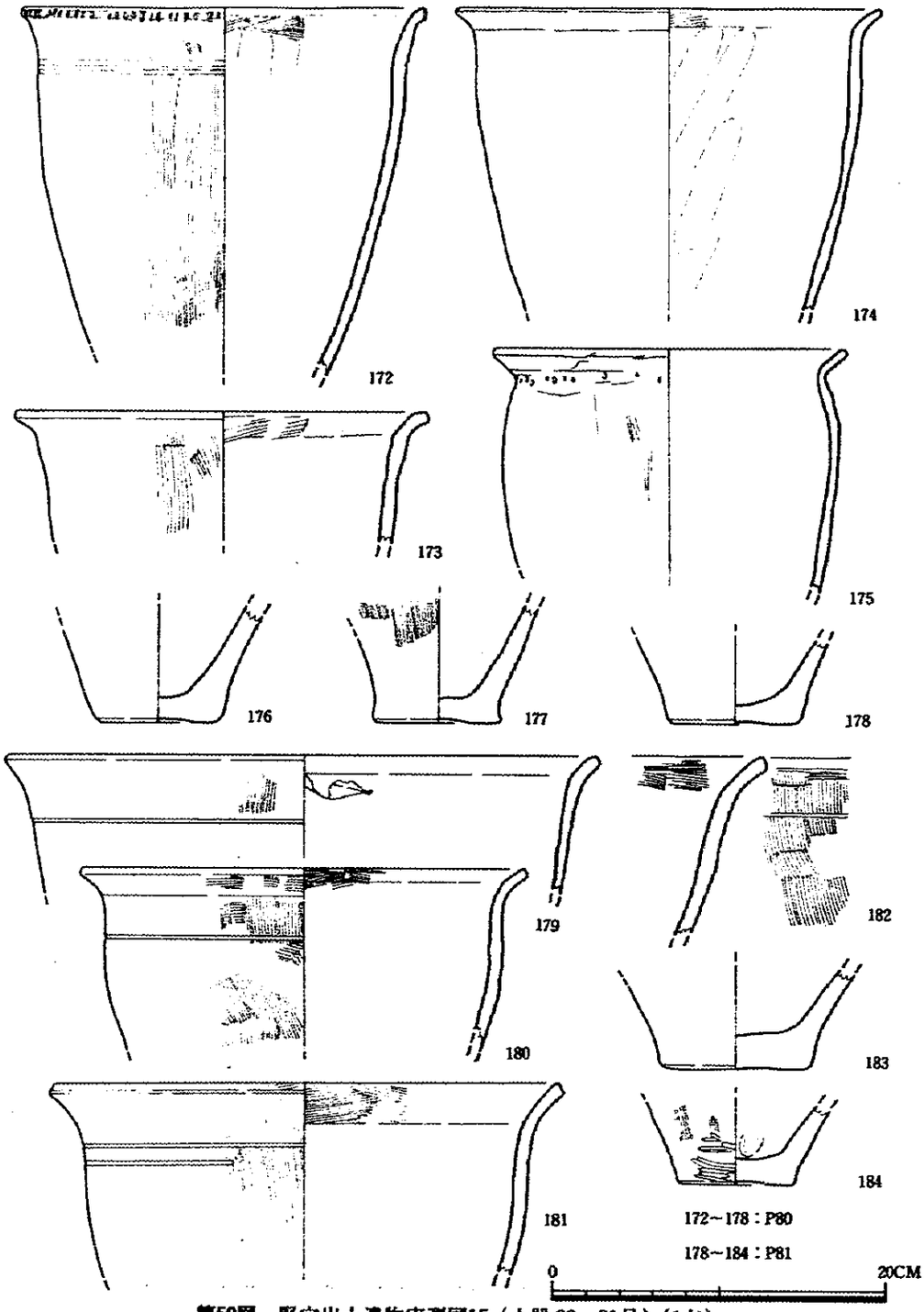
第56図　竪穴出土遺物実測図12（土器;67号）（1/4）



第57図　竪穴出土遺物実測図13（土器;67、68、73、74号）（1/4）



第58図　竪穴出土遺物実測図14（土器;74、80号）（1/4）



第59図　竪穴出土遺物実測図15（土器;80、81号）（1/4）

156は甕の胴部片を直径８cmほどの円形に加工し、２孔を穿ったもの。

157・158は同一個体であろう。上端面が外傾する鋤先状口縁を有し、頸部は短い。頸部・胴部の境界には断面三角形の高く突出する突帯を付し、胴部最大径部分には断面M字の突帯を巡らせる。159は先の口縁形態から鋤先状部分を外したような形となる。口端部は肥厚し、端面が小さくくぼむ。160は口縁部が外折して平坦面をなす。頸部も直線的である。161の頸部は開きが小さく高く伸びる。鋤先状をなす口縁部は上面が外傾し、内側へ大きく突出する。162は内側への突出が見られない。164は甕の底部で、輪台状となるが上げ底の程度は小さい。163・165・166は通有の壺の底部。

Ｐ75

中期の特徴を示す壺などの小片が数点出土するのみである。

Ｐ76

１条の沈線を刻む如意形口縁を有する甕の破片等が若干出土している。

Ｐ79

「く」字形に反転して端部が肥厚し、頸部下に断面三角突帯を付す甕などがある。

Ｐ80

土器（図版38第58図167～171・第59図172～178）

167は口縁部が大きく外反する壺で、残存部分には頸部との境界はない。171は小型の壺。底部は高く、最大径部分が胴部中位にある。172は口縁部の外半が弱く、端部のみが折れる感がある。胴部の張りも弱い。外面は横位、口縁部内面は縦位の細密な刷毛目で仕上げる。173は頸部がまったく締まらない甕で、原体は異なるが刷毛目の使用法は172と同様。174も如意形を呈するが短く小さい。175は「く」字形に近く、他例に比して胴部に張りがある。また、頸部に箆描きの刺突文がある。外面に縦刷毛を用いる点は他例と同様であるが、口縁部内面の横撫で、仕上げは異なる。

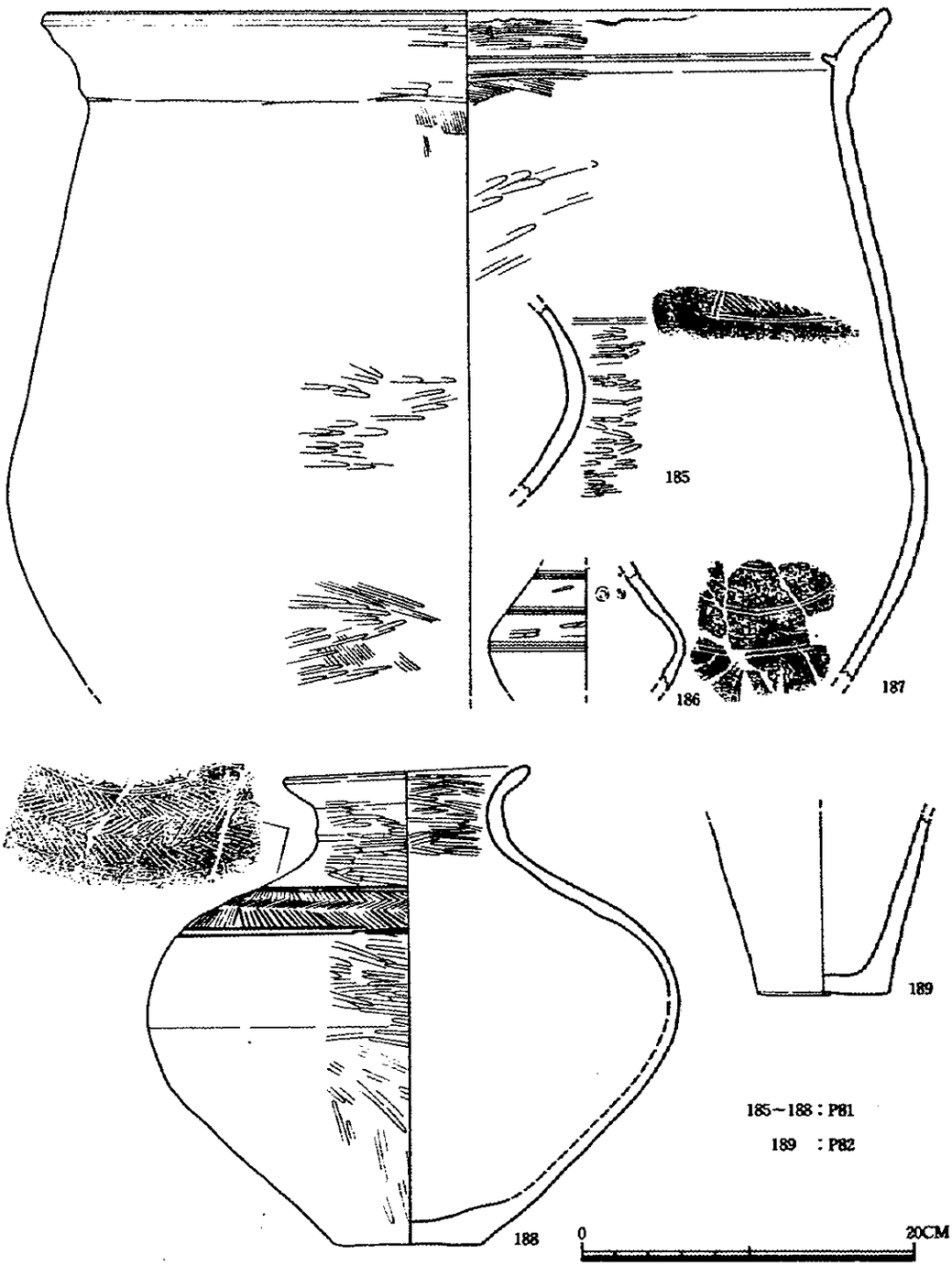
石器（図版39、第62図７）

破損の著しい石戈。欠損するものの茎が大きく、身との境に明瞭な段が付く。表面が摩滅しており、鎬ははっきり見えない。頁岩製。

Ｐ81

土器（図版38、第59図179～184・第60図185～187）

甕はいずれも如意形口縁を有するが長さにおいて差がある。いずれも頸部下に１～２条の沈線を刻み、179は摩滅して確認できないが内外面の調整法も共通する。また、179の内面頸部下には葉の圧痕がある。部分的に器表面に覆われているが、葉の大きさからして偶然にしてはできすぎており故意に青葉を混入したとも考えられる。185は胴部上半に貝殻腹縁を用いた無軸羽状文と複線鋸歯文を組み合わせた文様を配する。区画する直線文は箆描きである。他に箆描



第60図　竪穴出土遺物実測図16（土器;81、82号）(1/4)

きの有軸羽状文を有するものもある。186は造りが精巧な小型の壺。頸部から胴部最大径部分にかけて２条一対の平行線文が３単位巡らされるが、原体は半截竹管ではなく篦描きのようである。187は大型の壺。口縁部は短く外半も弱い。頸部との間には段があるが、形状は乱れる。頸部内面には断面三角形に近い高く突出する突帯を巡らせている。外面は全体に縦刷毛の後に粗い篦磨きを施し、内面は頸部以上に横刷毛を、以下では部分的に篦磨きが観察できる。

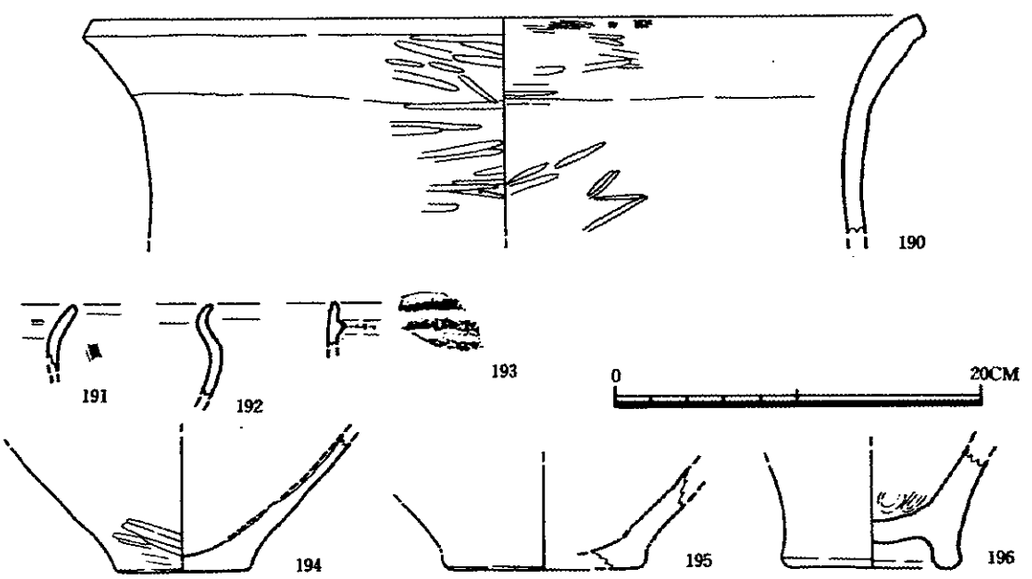
188は完形。余談であるが、この壺は15号墳主体部発掘中に底部が露出し、あるいは粘土槨中に埋め込まれた祭祀の土器かと一度は興奮したが、結果は竪穴中の土器であった。胴部の張りが著しく、頸部はほぼ直立して短く反転する口縁部へと続く。頸部下には段があるものの不明瞭なものである。文様は上下端を２条の篦描き沈線で画された文様帯中に充填された無軸の羽状文で、篦描きである。この文様の割り付けは乱れ、篦磨きの粗雑さと相まって全体に美しさを欠く。

石器（図版39、第62図13・第63図24）

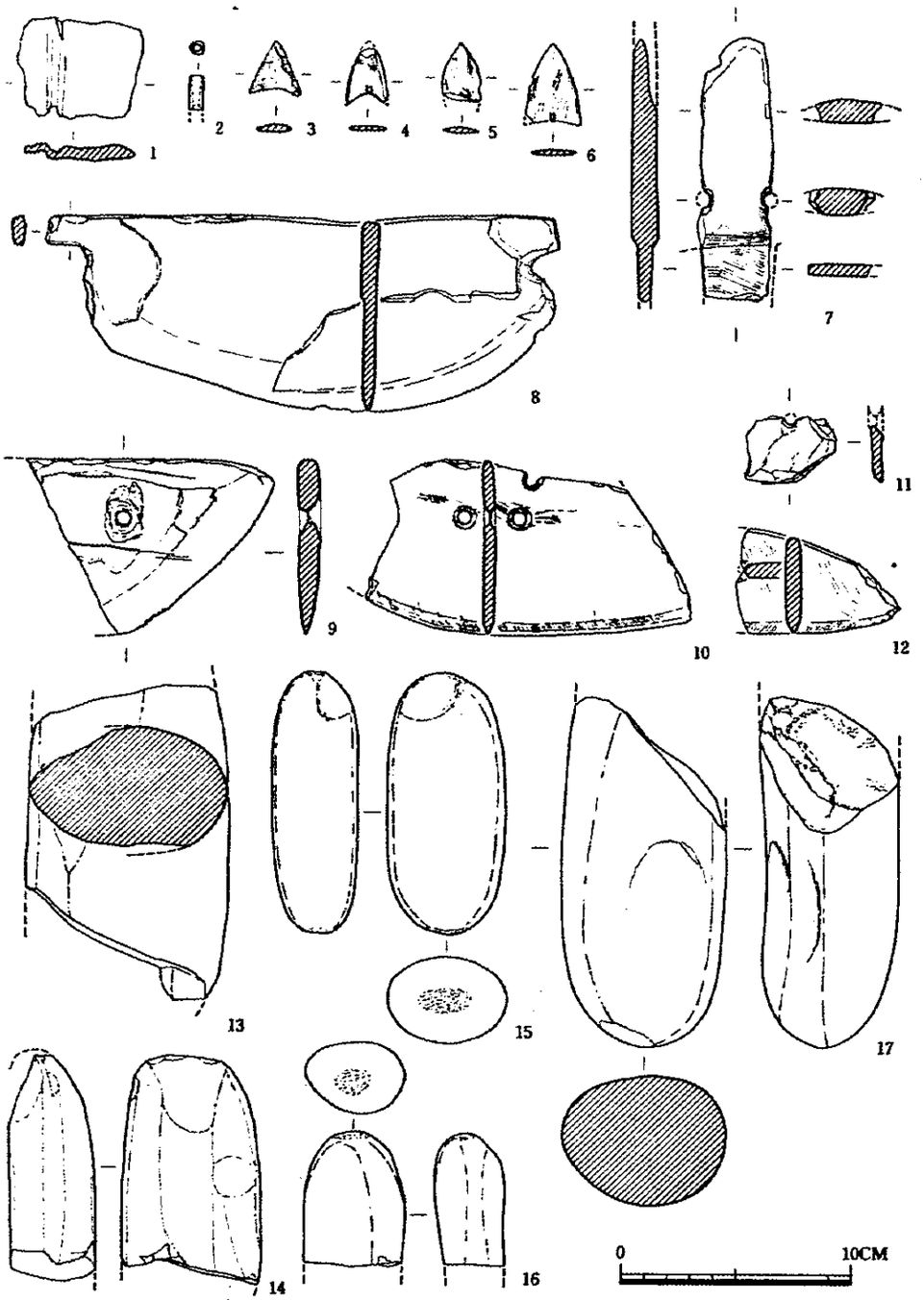
13は破損の著しい太型蛤刃石斧で、表面の風化も進んでいる。玄武岩製であろう。

24は全体に風化が著しい礫器で、二次加工の状況は必ずしも明瞭ではない。原石に対し多方向からの薄離作業を行って全体の形状を整え、一部に二次加工を施す。玄武岩製であろう。

Ｐ82（第60図189）



第61図　竪穴出土遺物実測図17（土器;83号）（1/4）



1・3・8・11
：P10～12上方包含量
2：P67　10：P25
4：SK201　12：P7
5：P59
6：P5
7：P80
9・17：P17
13：P81
14：P83
15：P3
16：P39

第62図　竪穴出土遺物実測図18（石器）（1/3）

壺には貝殻復縁を用いた有軸羽状文が施文された破片がある。189は平底をなし、直線的に立ち上がる甕の底部。

P83

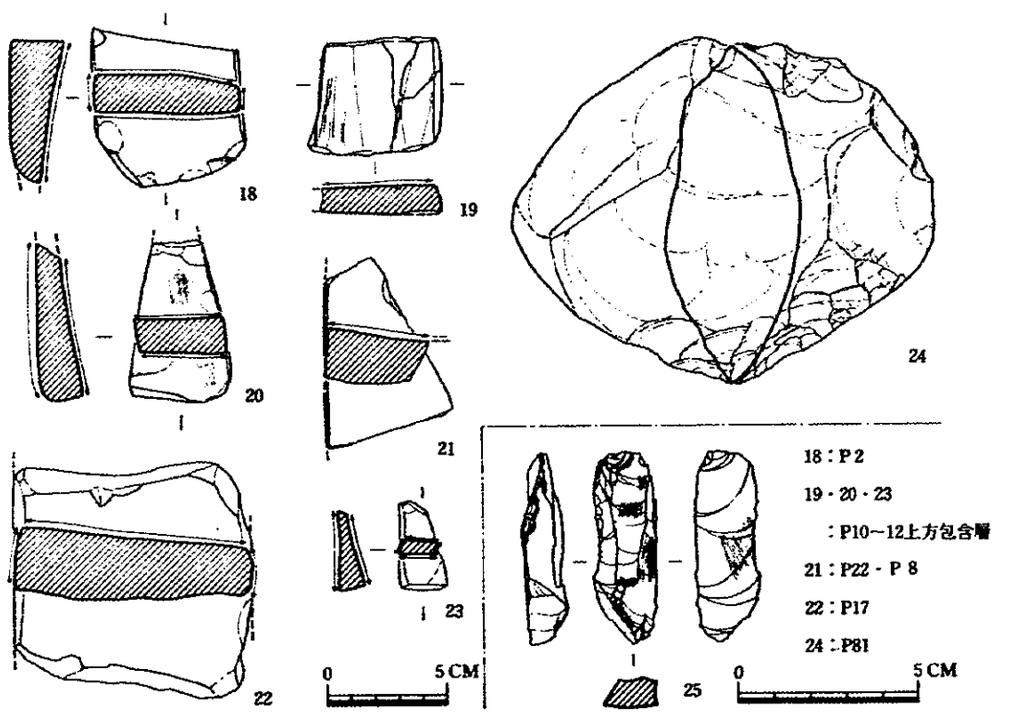
土器（図版38、第61図190～196）

190は大型の壺で、頸部・口縁部の明瞭な境はないが口縁部は強く反転する。また端部は断面方形に成形される。191は弱く外反する如意形口縁の甕の小片。192は頸部が締まり、口縁部が短く反転する。胴部の張りが著しい。鉢であろうか。193は丸く終わる直口縁の直下に断面三角形の刻み目突帯を付す特異な甕あるいは鉢である。東九州に分布する下城式に似る。196は高台状の底部。

石器（図版39、第62図14）

玄武岩製の太型蛤刃石斧。刃部を欠損するほか破損が甚だしく、表面の風化も進む。

註1　後藤直　「朝鮮系無文土器再論—後期無文土器系について」（『東アジアの考古と歴史—中—』岡崎敬先生退官記念論集、1987）



第63図　竪穴出土遺物実測図19（石器）（1/3、1/2）

iii）土壙墓・甕棺墓

ほぼ南北に展開する丘陵は中央やや南付近に谷が入り込み非常に痩せた部分が存在する。土壙墓はその辺りを南限として南北130m、東西60mの幅をもって分布する。数字的には上記の広大なものとなるが、実質的には尾根線上の一部分を占めるに過ぎない。また、他の弥生時代の遺構と同じく古墳築造時、そしてそれ以降の地形改変によって大きく破壊されており、検出した数は111基であるが当初の実数は数十基を加えていたと思われる。

これも調査の進行に伴っておおむね南から北へと遺構番号（SK）を配し、変更は行っていない。ただし一部は整理時に古墳として扱ったために欠番が生じている。これも一部の記述に留め、一覧表を参照されたい。

ＳＫ１（図版20、第65図）

25号墳主体部の南にあり、最初に手掛けた土壙墓である。当初は土壙墓の存在にまったく留意しておらず、小型の住居跡であろうと思って試掘溝を開け、鉄戈の一部を不用意に取り上げた。その後にＳＫ４を発掘、土壙墓の存在を認識したがＳＫ１に関しては明らかに発掘ミスを犯した。土層の確認を試みて図のように復原したが、他の土壙墓と異なり地山を掘り残さずに覆土をもって下段墓壙を成形していたようで気付かないまますべてを掘り上げてしまった。

掘形規模は本遺跡中で最大とはいえ、決して卓越した大きさではない。位置的に見ても若干の空白地はあるものの、２～３ｍの距離に他の土壙墓が営まれていることは被葬者が決定的な地位を獲得していたとは考え難い状況を示している。主軸が他の多くと異なる点は注目される。

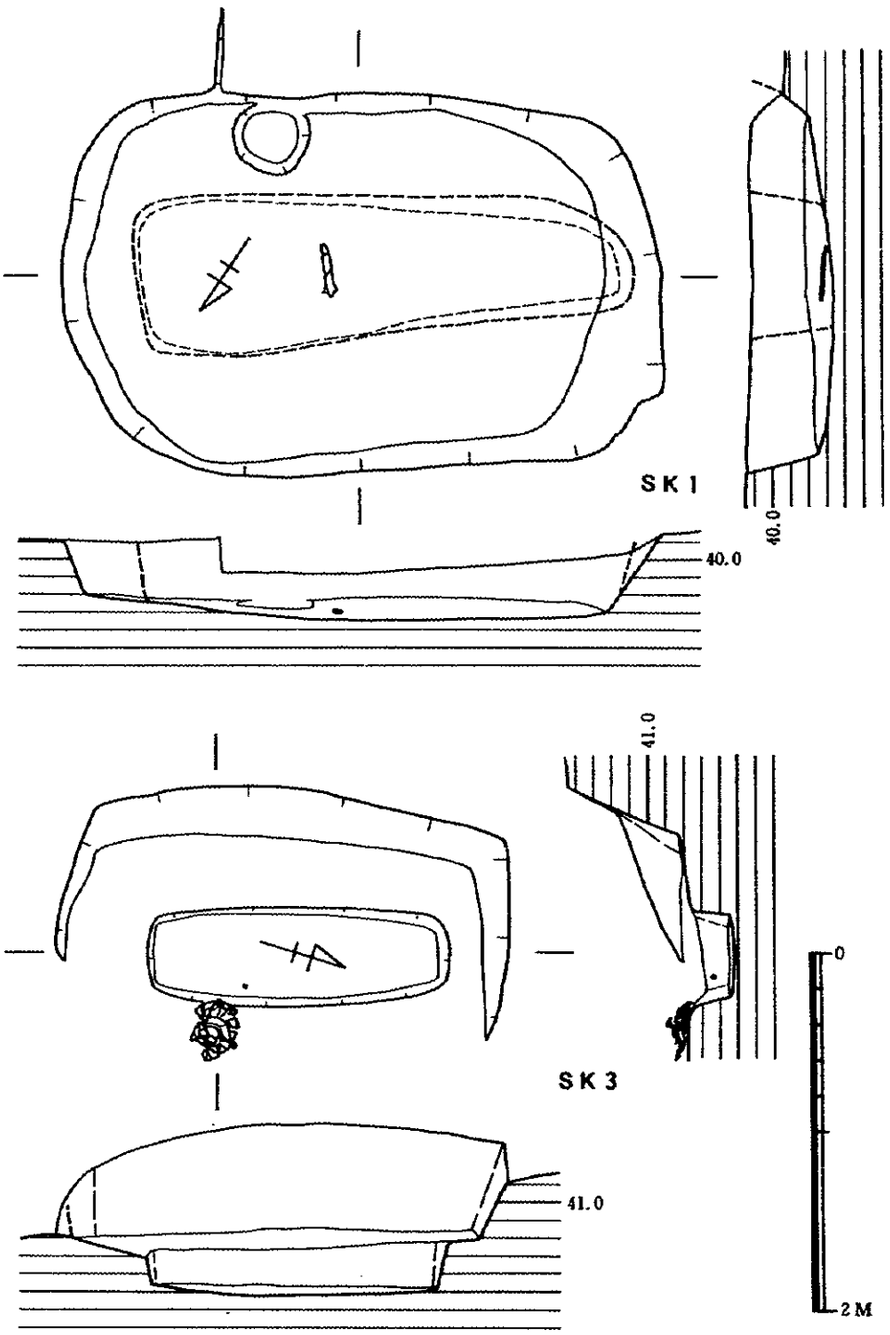
なお、鉄戈は図のように被葬者の胸部に相当する付近の床面からほぼ水平の状態で出土した。

ＳＫ３（図版21、第65図）

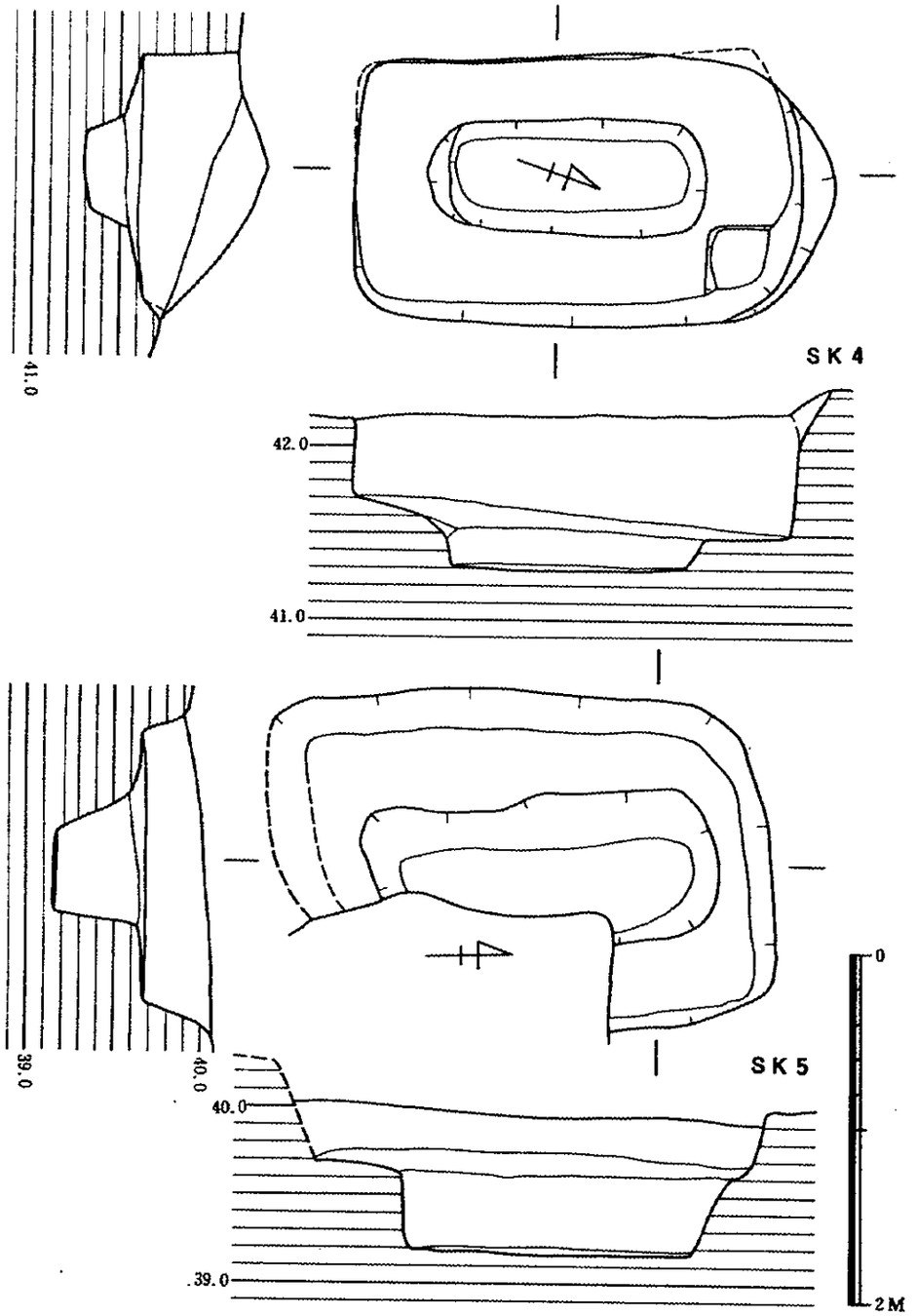
10号墳の西側にあり、斜面に位置するために上段の墓壙は完周しない。下段墓壙の上端に壺形土器を副葬していた。これは正立しており、上から押し潰されたような状態で出土した。頭位は墓壙床面の高低差からみて壺が供献された南に求められる。また、被葬者の胸に相当する辺りから黒曜石製の打製石鏃が出土しているが、床面より15cm程浮いていた。

ＳＫ５（第66図）

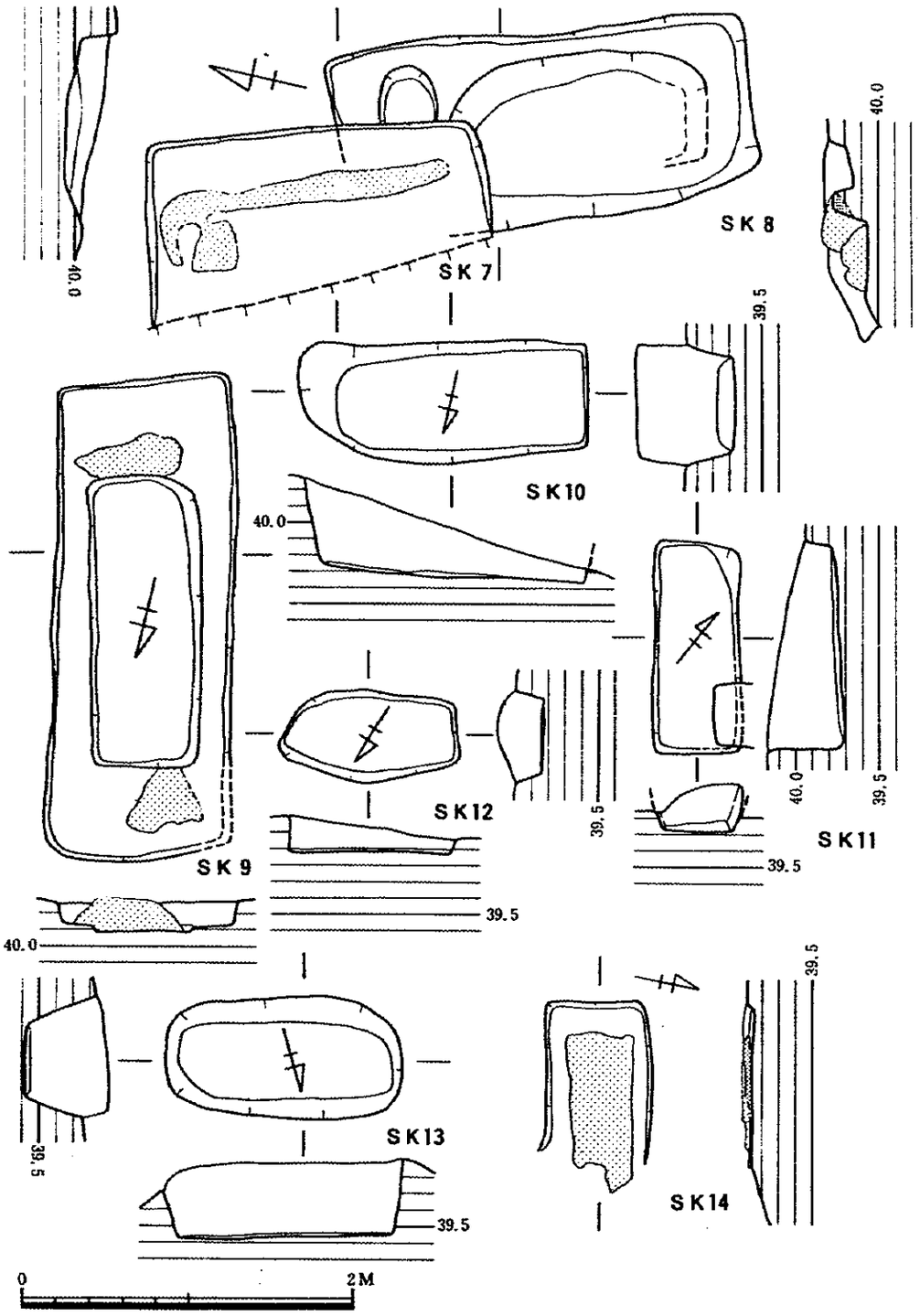
11号墳の北西にあり、古墳の掘形に一部を壊されている。この発掘時に整理箱１箱ほどの土器が細片化して出土している。他例では供献土器は頭位の東に置かれることが多く、本例でもそこにあった土器が古墳築造時に掘り出され、ふたたび埋め込まれたものと思われる。



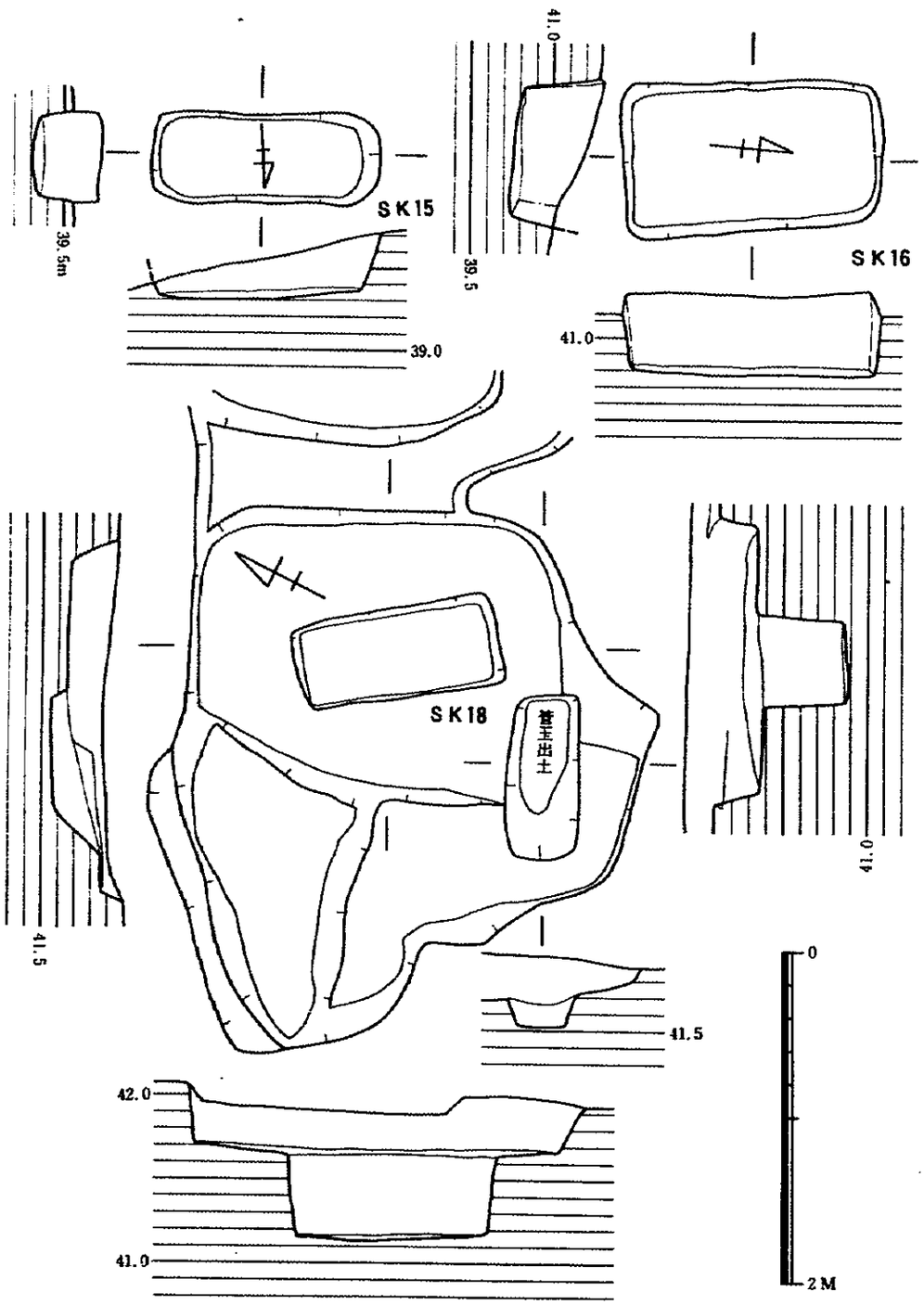
第65図　土壙墓ＳＫ１・３実測図（1/40）



第66図　土壙墓ＳＫ４・５実測図（1/40）



第67図　土壙墓ＳＫ７～14実測図（1/40）



第68図　土壙墓SK15・16・18実測図（1/40）

ＳＫ７・８（図版22、第67図）

ＳＫ１の南、尾根線が痩せた部分に６基が集中し、その中ＳＫ７はＳＫ８を切っている。いずれも削平が著しく、平面プランも一部確認できずに終わった。

ＳＫ７は東辺および北小口に粘土を用いており、東辺・北小口の北側のそれは天井板の目張りに供されたものであろう。北小口南側の粘土は小口板の裏込めであろうか。しかし小口材の掘形は検出していない。

ＳＫ９（図版22、第67図）

ＳＫ７・８の東にあり、これも削平が著しい。南北の小口に粘土が広がっているが、これも小口板の裏込めとして用いられたものであろう。

ＳＫ14（図版22、第67図）

土壙墓群の最北端近くにある小型の土壙墓で、東端はすでに削られていた。墓壙中央に薄い青灰色粘土層が敷かれ、かつそれは微妙な違いで上下の二層に分けうるものであった。下層は棺床として、上層の粘土は天井板を覆っていたものであろうか。これも棺材の掘形はなく、ベンガラも用いられていない。

ＳＫ17（図版23、第87図）

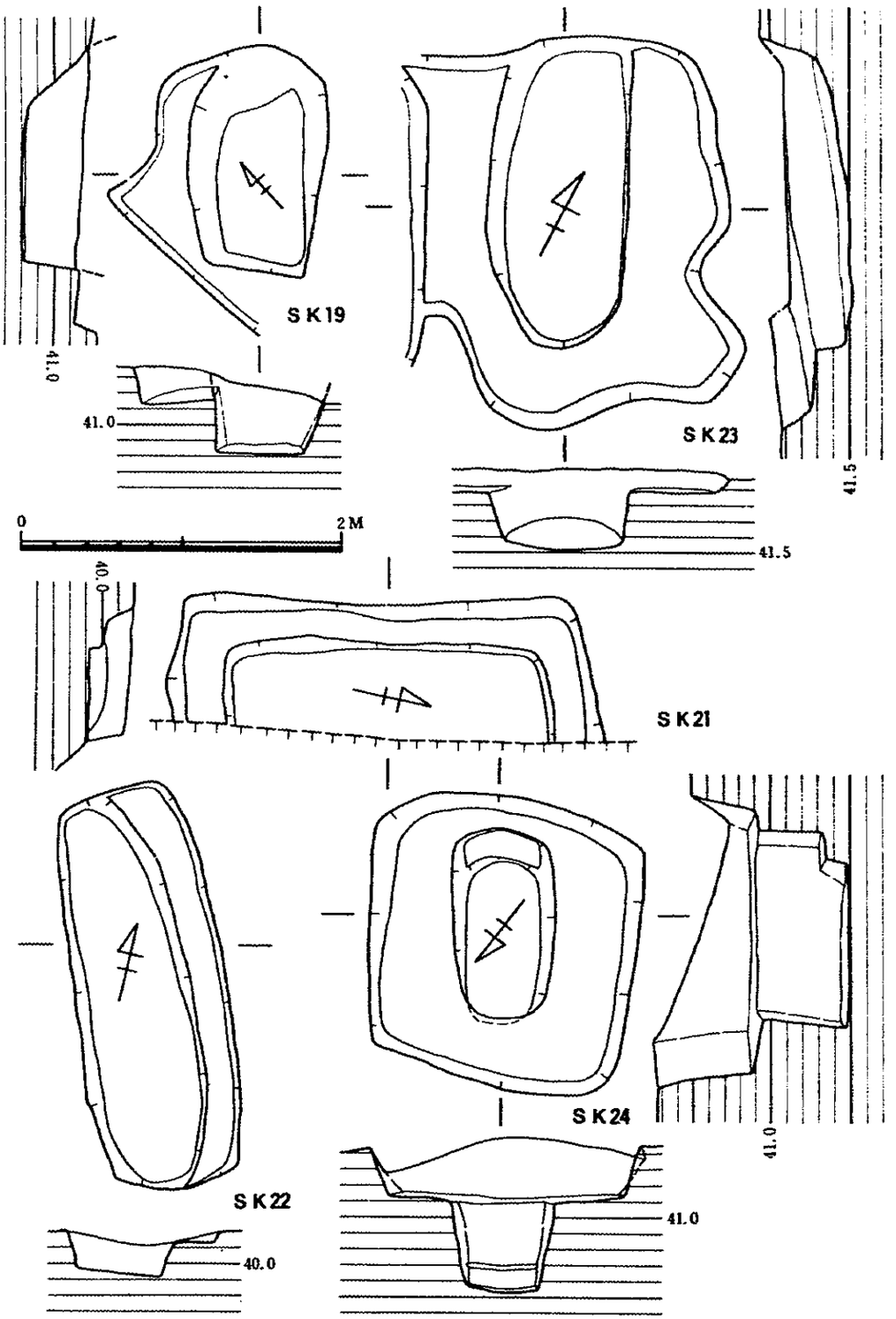
ＳＫ３の北側、斜面の下位にある。長軸1.35m、深さ0.4m強の小型の墓壙を有し、４枚の自然石をもって天井を架構する。南小口、天井石直下のレベルに供献された土器が潰れていたが、あるいはこの上にも１枚の天井石がかぶさっていたのかも知れない。

ＳＫ18（第68図）

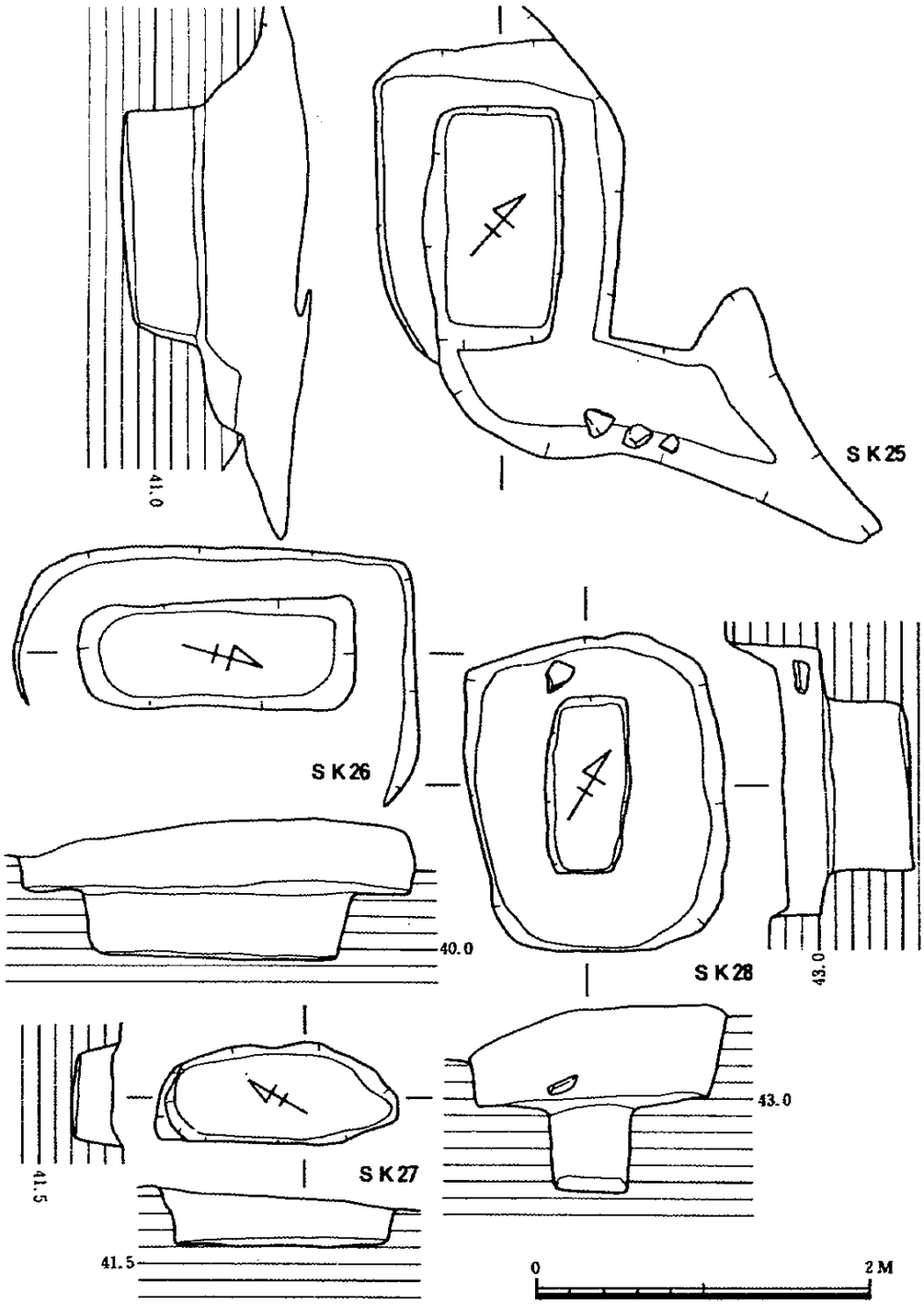
不定形の落ち込みを発掘してようやく平面形を確認できたもので、24号墳の南にある。上下の墓壙の軸がやや異なるものの通有の形態を持つ。南小口近くで検出した、0.4×0.1mの長方形プランの土坑から碧玉製管玉２点が出土している。出土状態が把握できていないためにこれが単独の土壙墓であったか、あるいはＳＫ18に付属する性格であったかはっきりしない。後者であった可能性がよりたかいであろう。

ＳＫ20（図版24、第87図）

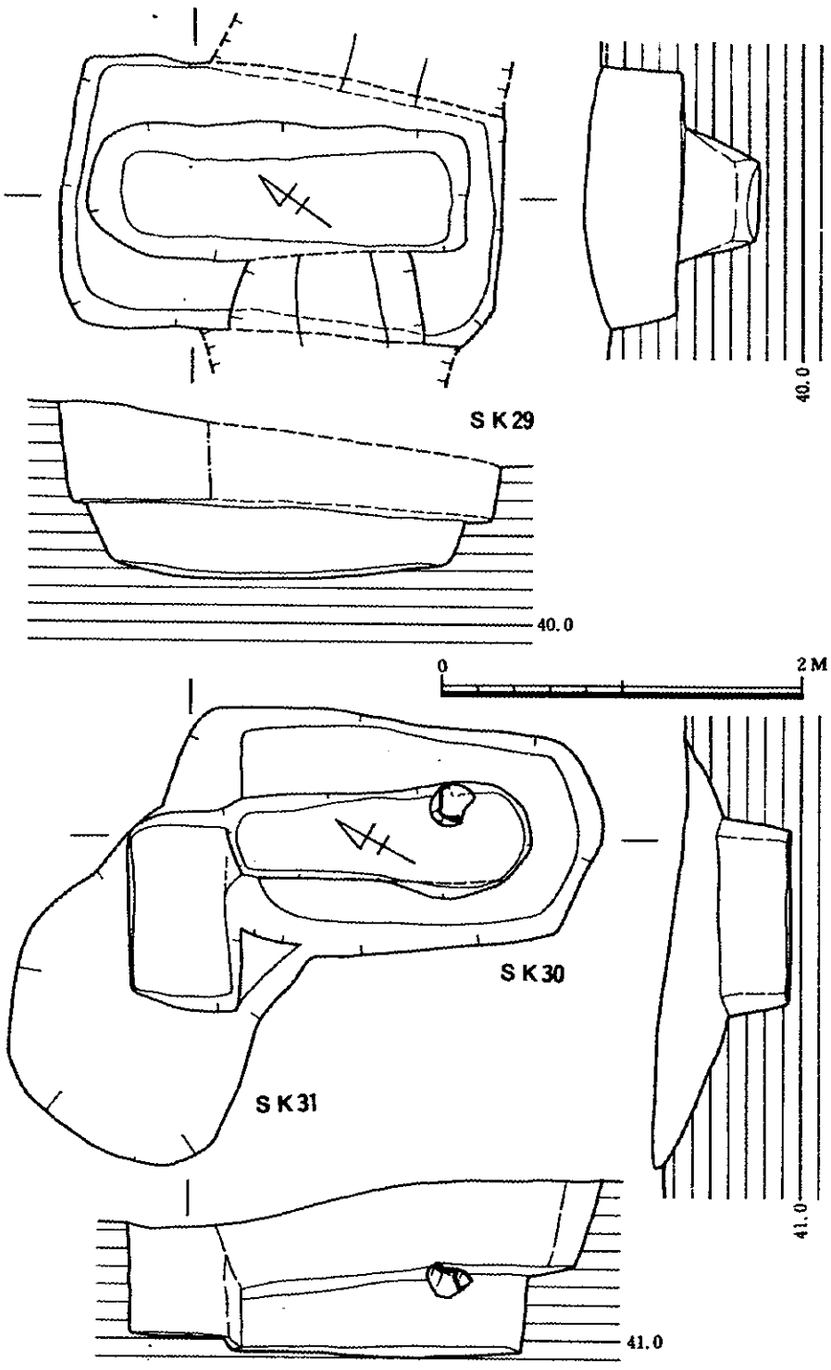
11号周溝西側の尾根線上にある小型の石蓋土壙墓である。２枚の偏平な石材を主とし、頭位部分にはさらに石で覆い、北半を粘土で目張りする。石材に加工痕はない。



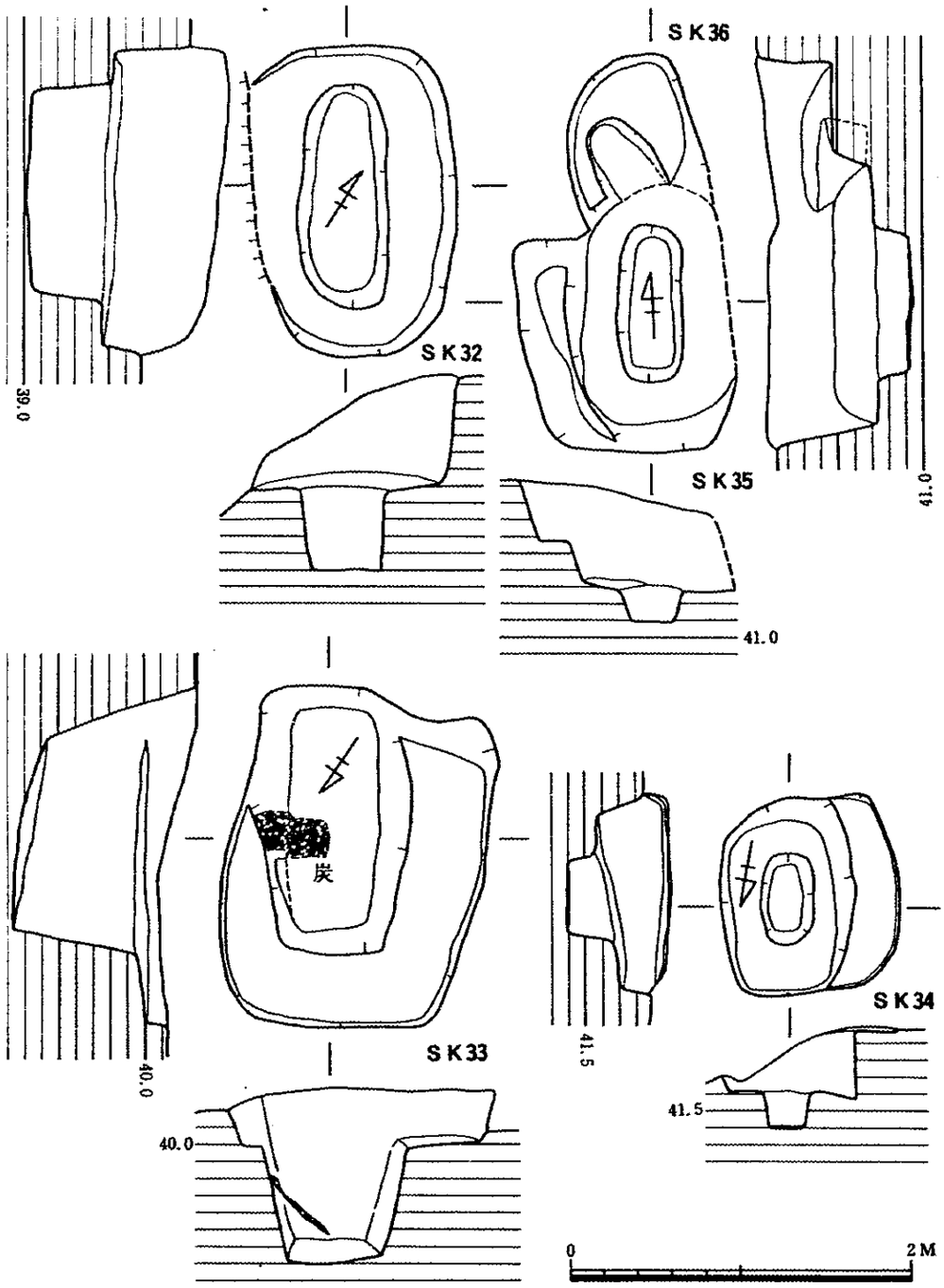
第69図　土壙墓SK19・21～24実測図（1/40）



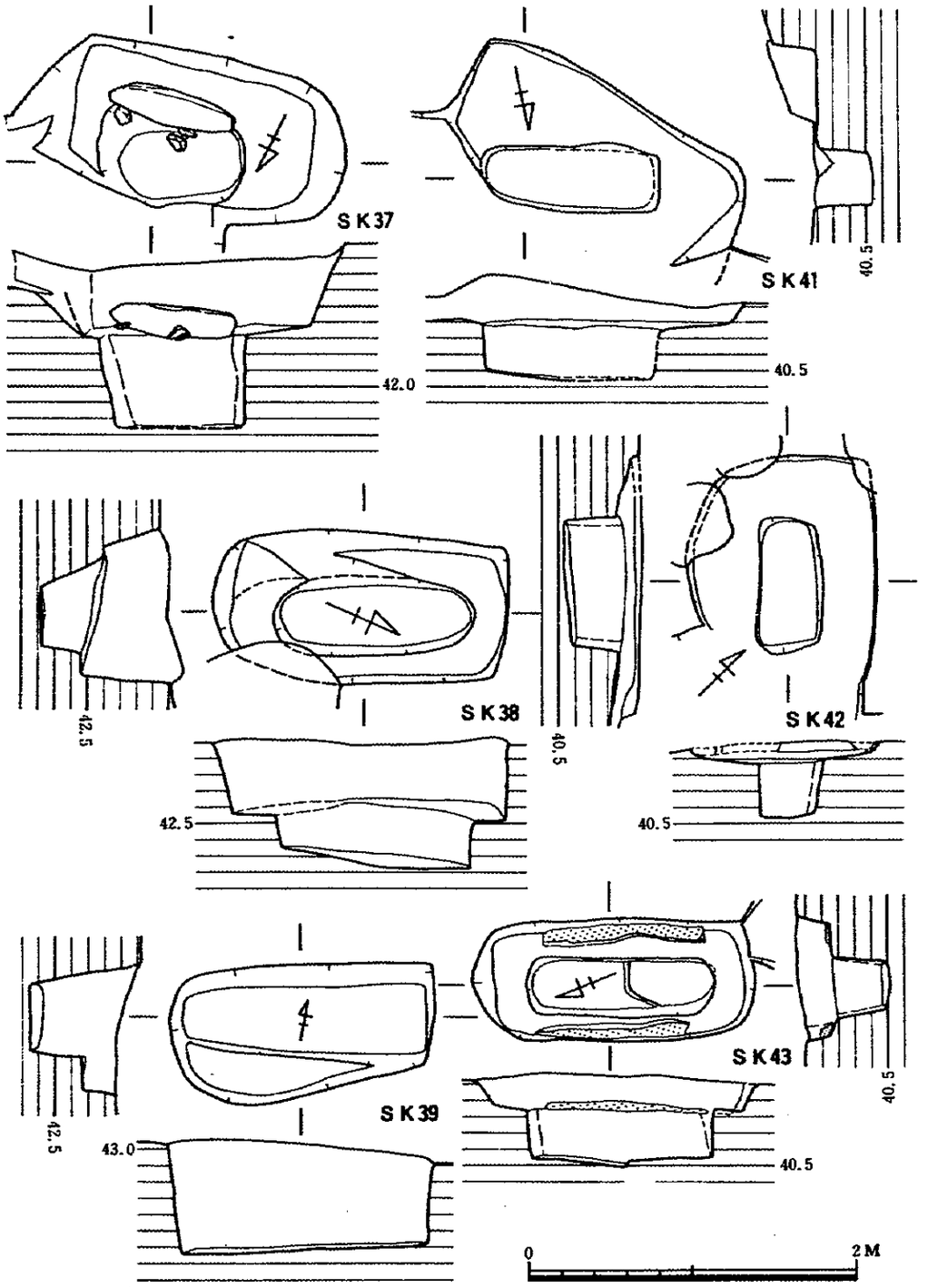
第70図　土壙墓ＳＫ25～28実測図（1/40）



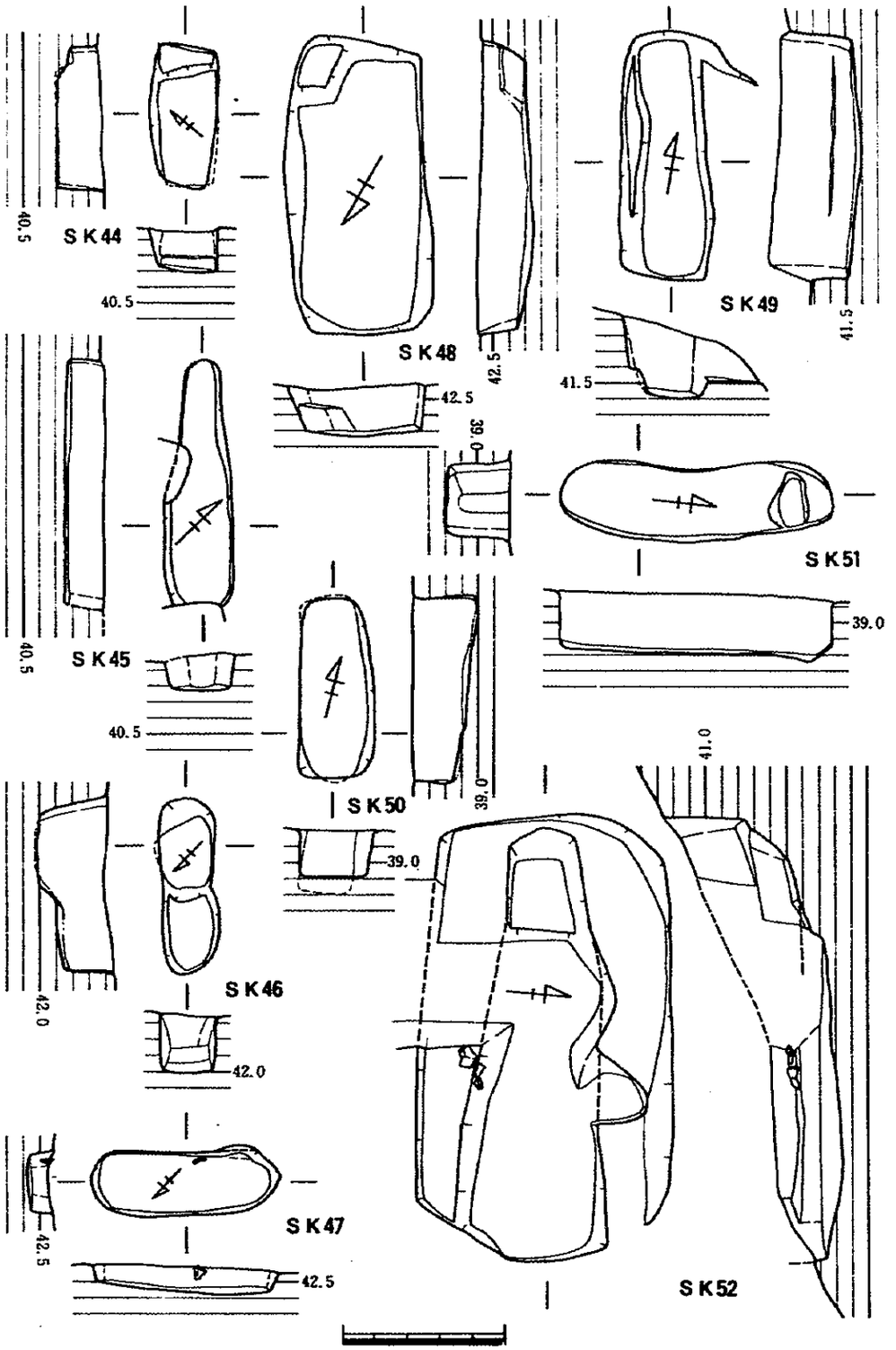
第71図　土壙墓SK29～31実測図（1/40）



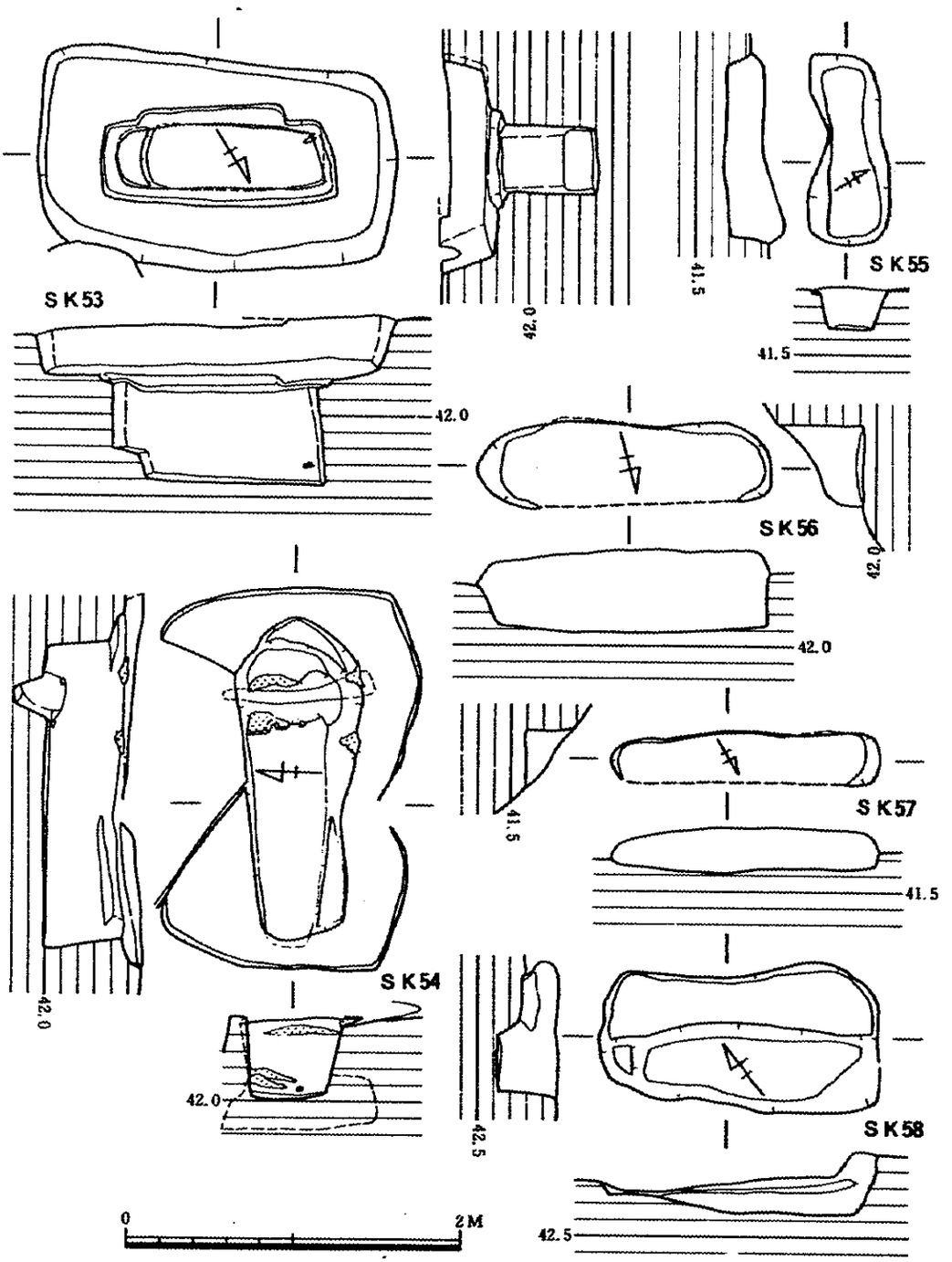
第72図　土壙墓ＳＫ32～36実測図（1/40）



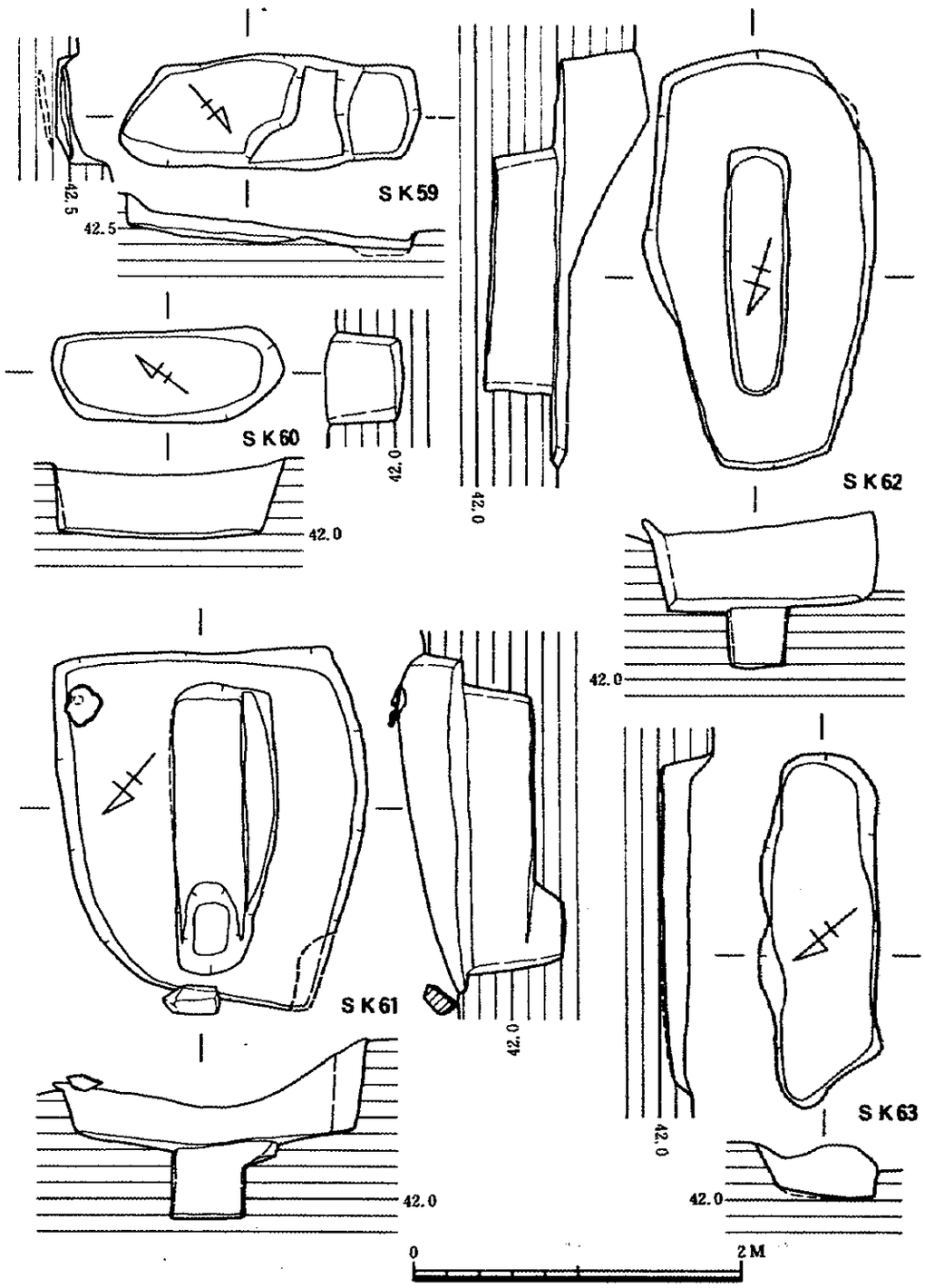
第73図　土壙墓ＳＫ37～39・41～43実測図（1/40）



第74図　土壙墓ＳＫ44～52実測図（1/40）



第75図　土壙墓ＳＫ53～58実測図（1/40）



第76図　土壙墓SK59～63実測図（1/40）

ＳＫ24（第69図）

25号墳周溝の北、西斜面の肩にある。下段墓壙の長軸は1.2mと小型であるが、南小口に高さ0.2mの削り出しの枕を付設している。全体に遺存状態は良好である。

ＳＫ30・31（図版25，第71図）

24号墳の東、これも傾斜面の肩に位置する。２基が切り合うようだが確認できなかった。

ＳＫ30は南小口付近に壺形土器を供献していたが押し潰されており、写真撮影・実測図作成時には上半を除去した。

ＳＫ37（図版25、第73図）

24号墳主体部の南に隣接し、ＳＫ37→ＳＫ38→ＳＫ39の順に営まれていた。長軸0.9mと小型の下段墓壙を有するものであるが、墓壙に匹敵する大きな偏平な石材を標石としていたようである。

ＳＫ43（第73図）

24号墳の下層で検出した。下段墓壙の長軸は1.1mであるが、その半分近い0.5mが５cm程高く削り出されて枕状となる。また、上段墓壙底には下段墓壙に添って帯状に粘土が張られていた。これは木蓋の目張りとして用いられたものであろう。

ＳＫ52（第74図）

11号墳の北、斜面にあってＳＫ26に切られる。斜面に位置し、かつ等高線に直交する数少ない例である。下段墓壙の肩から土器片が出土している。

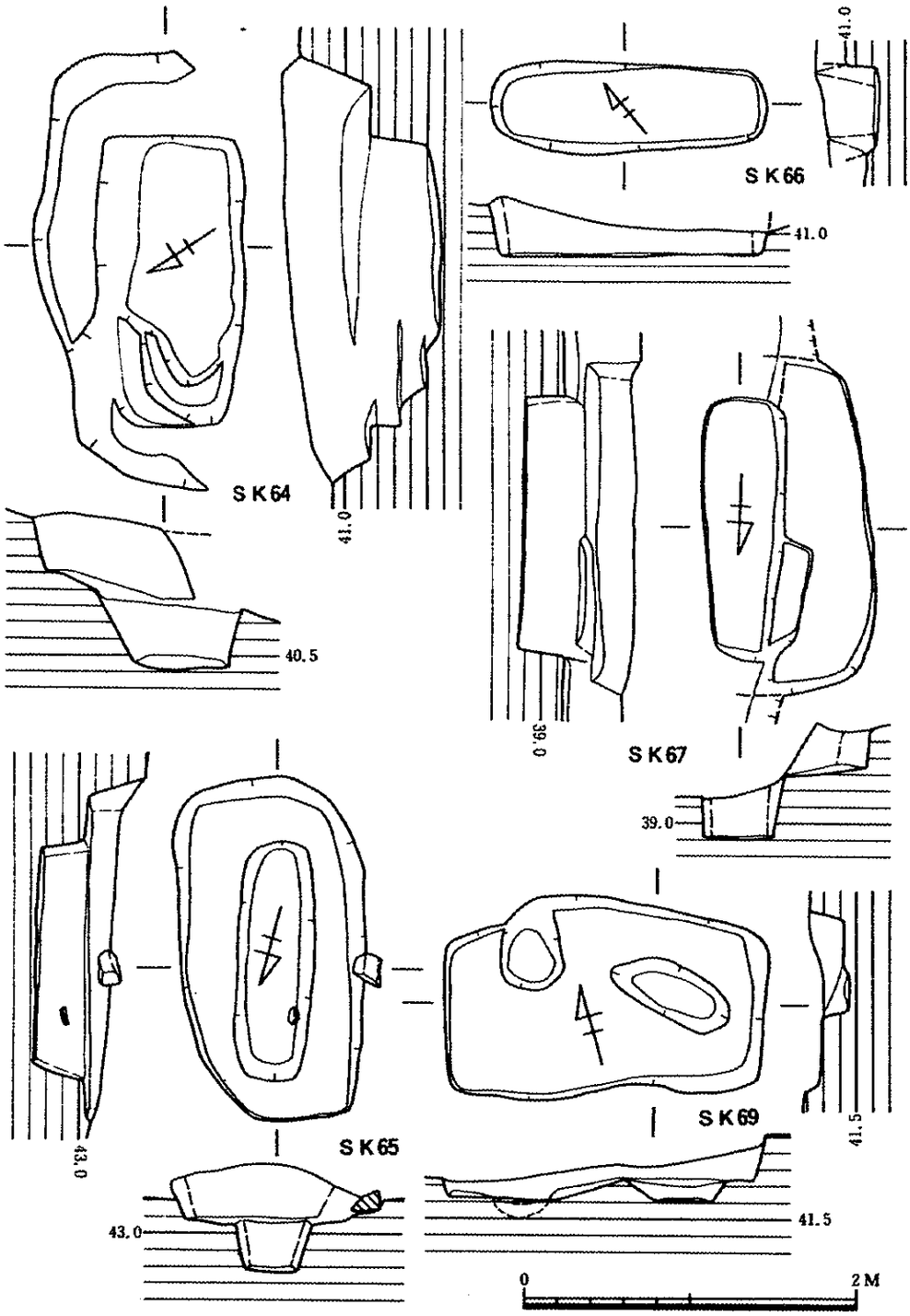
ＳＫ53（図版26・27、第75図）

24号墳の下層にあって、ＳＫ54を切る。下段墓壙は長軸1.3mと短いが、深さは0.6mを測り、膝を折れば大人でも十分に埋葬できる大きさである。下段墓壙の床面東側小口には高さ0.15～0.2mの削り出しの枕があり、上端の四周には0.5～0.6×1.4mの範囲で深さ0.05mの浅い天井受けを掘り込むといった入念な構造を見せる。

図示したように、被葬者の足位、床から0.1m浮いた状態で鉄鏃が出土した。

ＳＫ54（図版27、第75図）

ＳＫ53の上段墓壙に切られるが、本来は他例のように長方形プランの二段墓壙を復原できる。幅広くなって頭位を想定できる下段墓壙東側小口付近に横切る形で小口材の掘形を思わせる掘



第77図　土壙墓ＳＫ64～67・69実測図（1/40）

り込みがあり、ほとんどその周囲にのみ粘土を検出できた。ただ、小口材とするにはやや内側に入りすぎており、両側から粘土を添えるなど疑問の点があるので保留して置く。

ＳＫ61（第76図）

24号墳下層、主体部の東にある。上段墓壙の北西小口の肩に標石を配し、墓壙内の東の隅に壺形土器を供献する。供献土器は墓壙を埋め終えて、あるいは削平を考慮すれば埋める途中の段階で据えている。また、足位と考えられる小口に長さ0.5m、深さ0.2mの掘り込みを加えることも少ない例である。

ＳＫ68（第77図）

24号墳の北側斜面にある。これも墓壙は小型で、かつ平面形も整っていない。天井は偏平に近い自然石を４枚架構しただけで、粘土等は用いていない。

ＳＫ71（図版28、第78図）

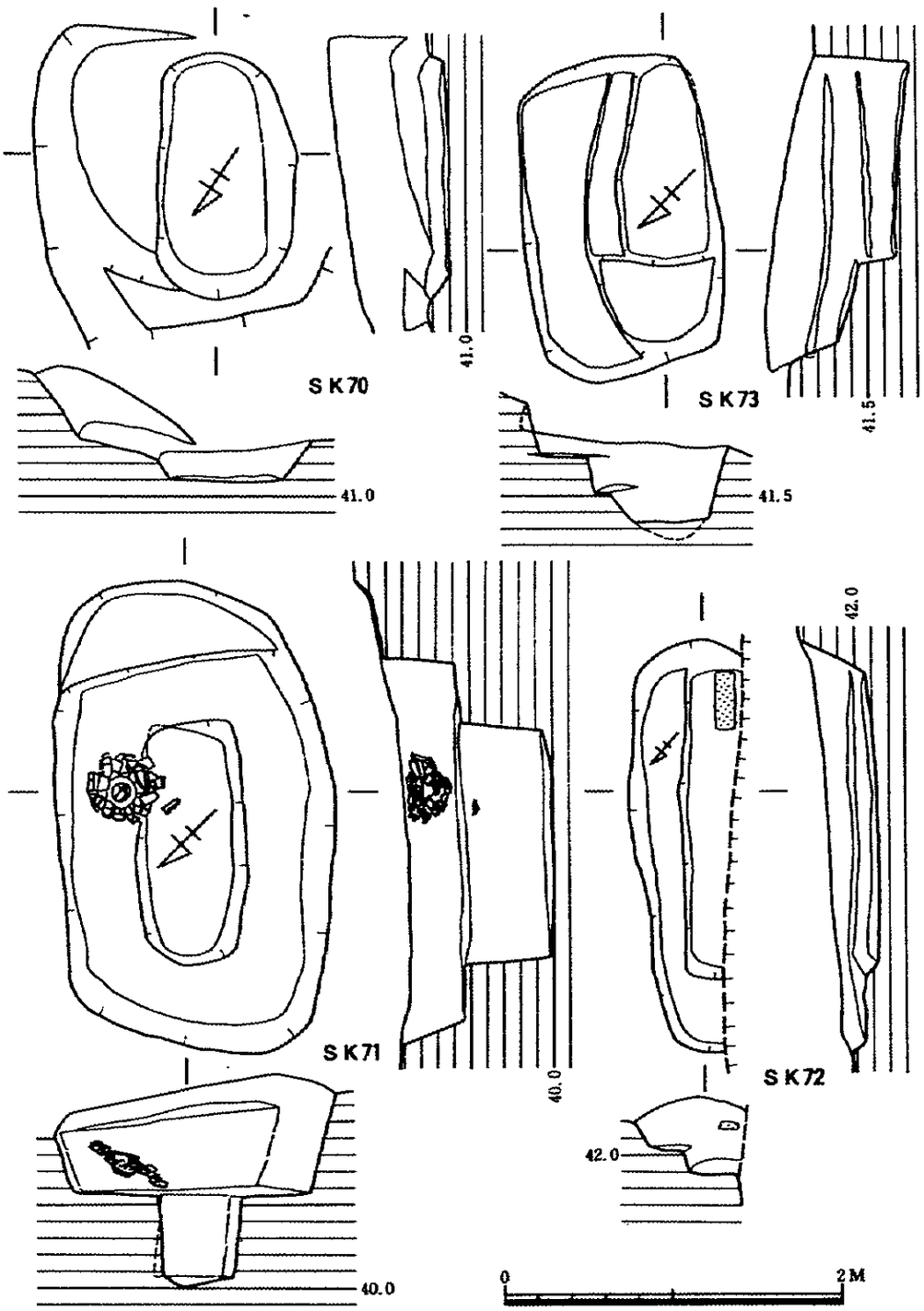
18号墳南の尾根線上にある。下段墓壙は長軸1.5m、短軸0.7mと平面的にはさほど大きなものではないが、深さは0.5mを測る。南東小口近くの上段墓壙中で押し潰された壺形土器を検出した。出土状態はＳＫ61と同様で、ここでは上段墓壙を埋め戻す途中で供献されたことが窺える。が、土器の全体が埋め込まれていたならば図のような潰れ方をするものか疑問点はある。土器の上半は露出していたという考えもできよう。意図的に壊したとするには破片がまとまりすぎている。

ＳＫ75（図版28、第79図）

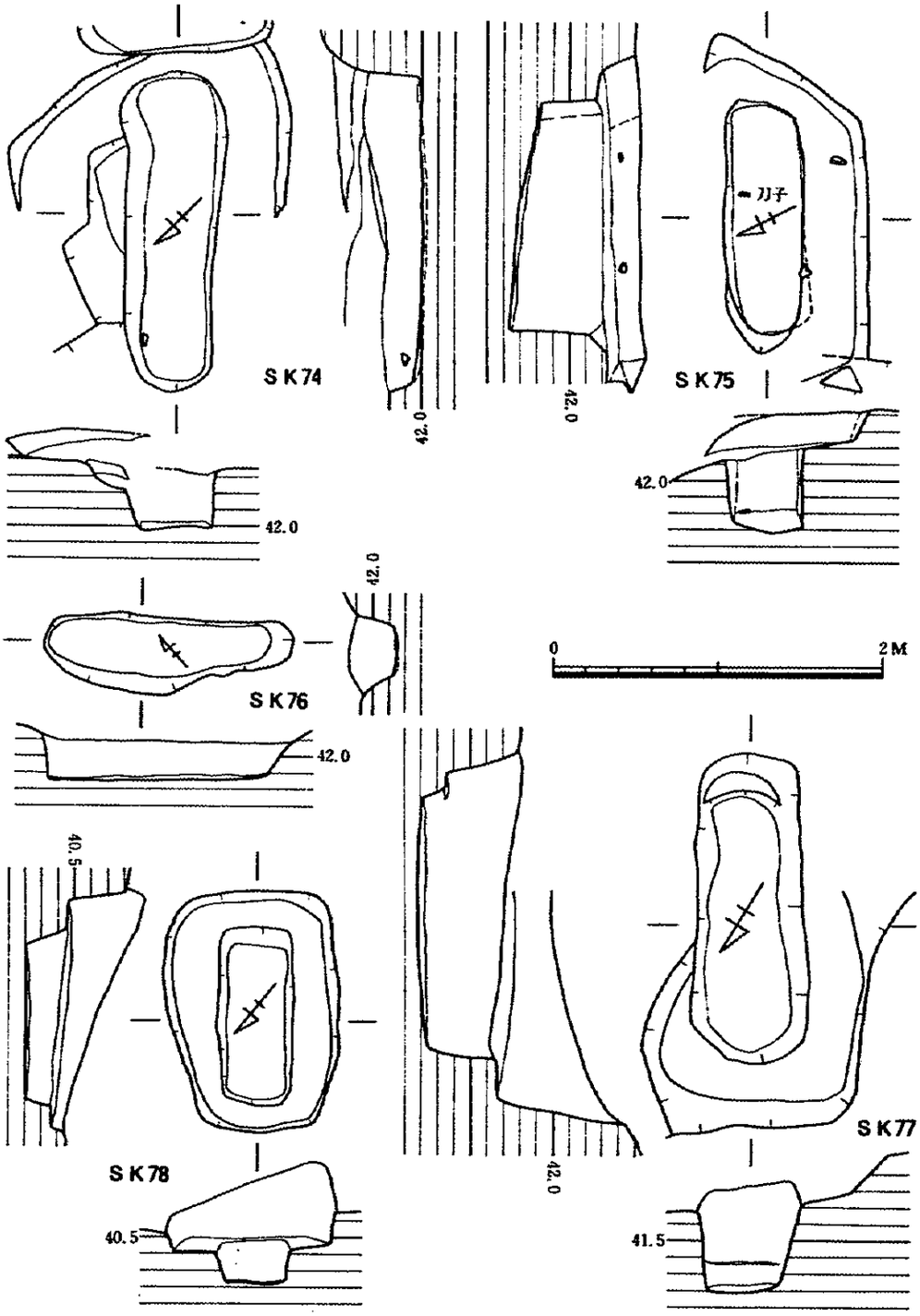
24号墳の下層で検出した。斜面の肩であり、かつ24号墳の周溝によって上段墓壙は約1/2が削られる。下段墓壙床面の高低差は大きく、約0.2mを測り、頭位を北東小口に想定できる。図のように被葬者の胸部付近、床面より0.1m弱浮いた位置で刀子を、ほぼ同じレベルの足位に相当する部分から石剣片を検出した。また、土器小片も出土している。

ＳＫ79（図版29、第80図）

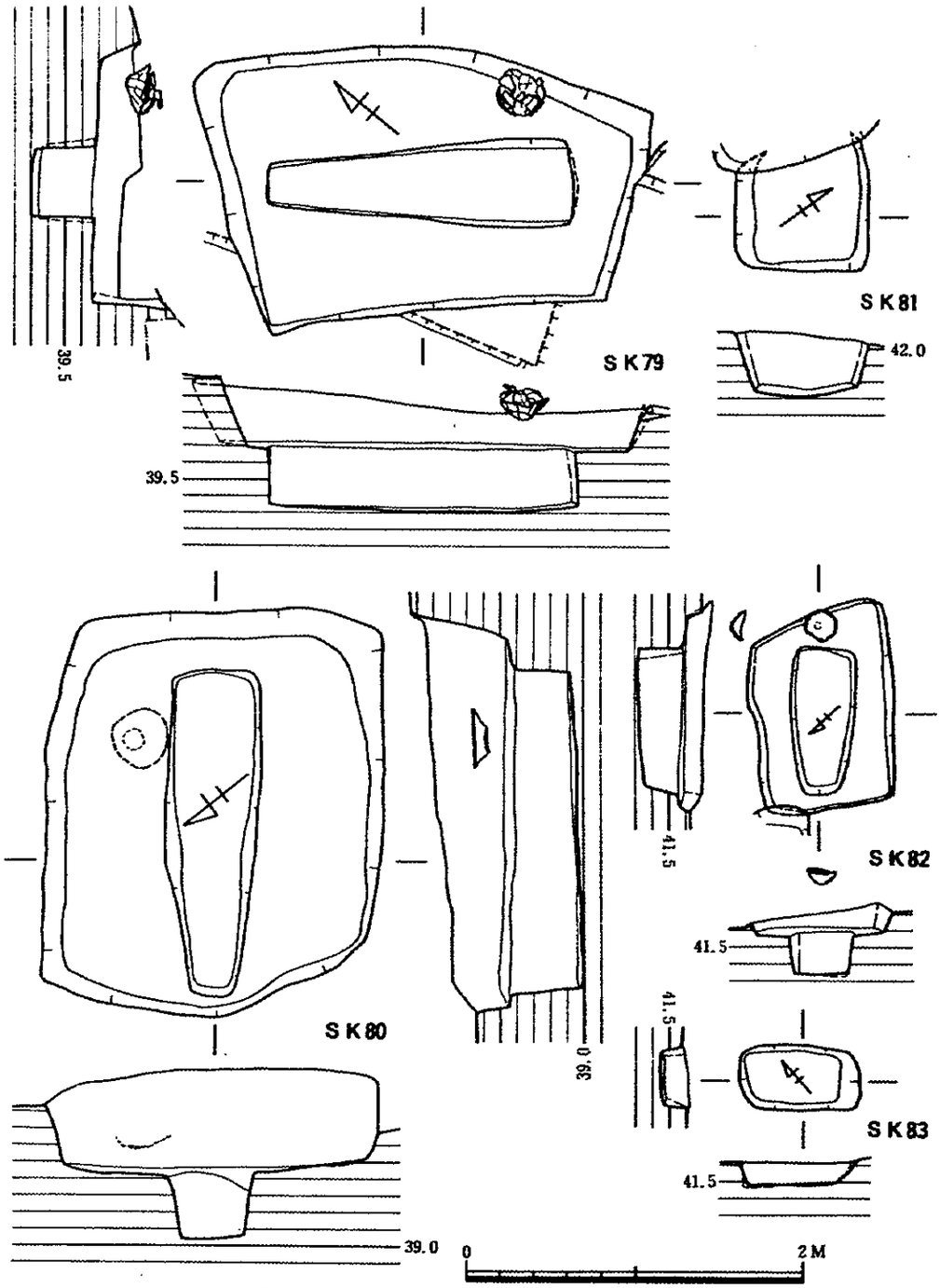
18号墳主体部の近くの尾根線上に位置する。上段墓壙はやや歪んだ矩形プランであるが、下段墓壙は整った梯形を見せ、長軸1.8m強、深さ0.4mと通有の土壙墓の規模である。頭位は当然広い南東に求めるが、その脇、上段墓壙中に供献の壺形土器が置かれていた。これも胴部最大径部分で割れて潰れていた。



第78図　土壙墓ＳＫ70～73実測図（1/40）



第79図　土壙墓ＳＫ74～78実測図（1/40）



第80図　土壙墓ＳＫ79～83実測図（1/40）

ＳＫ80（図版29、第80図）

ＳＫ79の北西尾根上にある。規模・形態ともにＳＫ79によく似ており、壺形土器を供献する点も同様である。残念ながら土器は調査時に悪戯されて取り上げられた。

ＳＫ82（第80図）

ＳＫ71の南西に隣接する。下段墓壙の長軸0.9mと小型の土壙墓である。この上段墓壙の埋土中、頭位側の小口上で壺形土器を検出した。図で土器が浮き上がっているのは重機を用いての表土掘削時に気付いて掘り残したためである。胴部上半はあるいは重機で飛ばしてしまったものかも知れない。

ＳＫ93（図版30、第82図）

19・24号墳の間の平坦面にあり、住居跡ＳＢ８とした遺構と重なる。1.3×2.6mのほぼ長方形となる平面プランを有する上段墓壙を検出したが、下段墓壙は風倒木痕が重複していたものか検出に失敗した。しかし図のように供献の土器が出土した。位置的には他の土壙墓と同様で、上段墓壙の床面に近く据えられている。唯一長頸壺を用いているが、口縁部はすべて失われていた。

ＳＫ96（第82図）

24号墳の西にあり、ＳＫ65に切られる。ＳＫ65の状態をみるならば一概に大幅な削平を受けているとも考えられず、元来浅いものであったようである。遺存する深さは約0.2mで人頭大の礫を配置する。南小口付近に壺が供献されていたが、整理の過程で所在を確認できず実見していない。

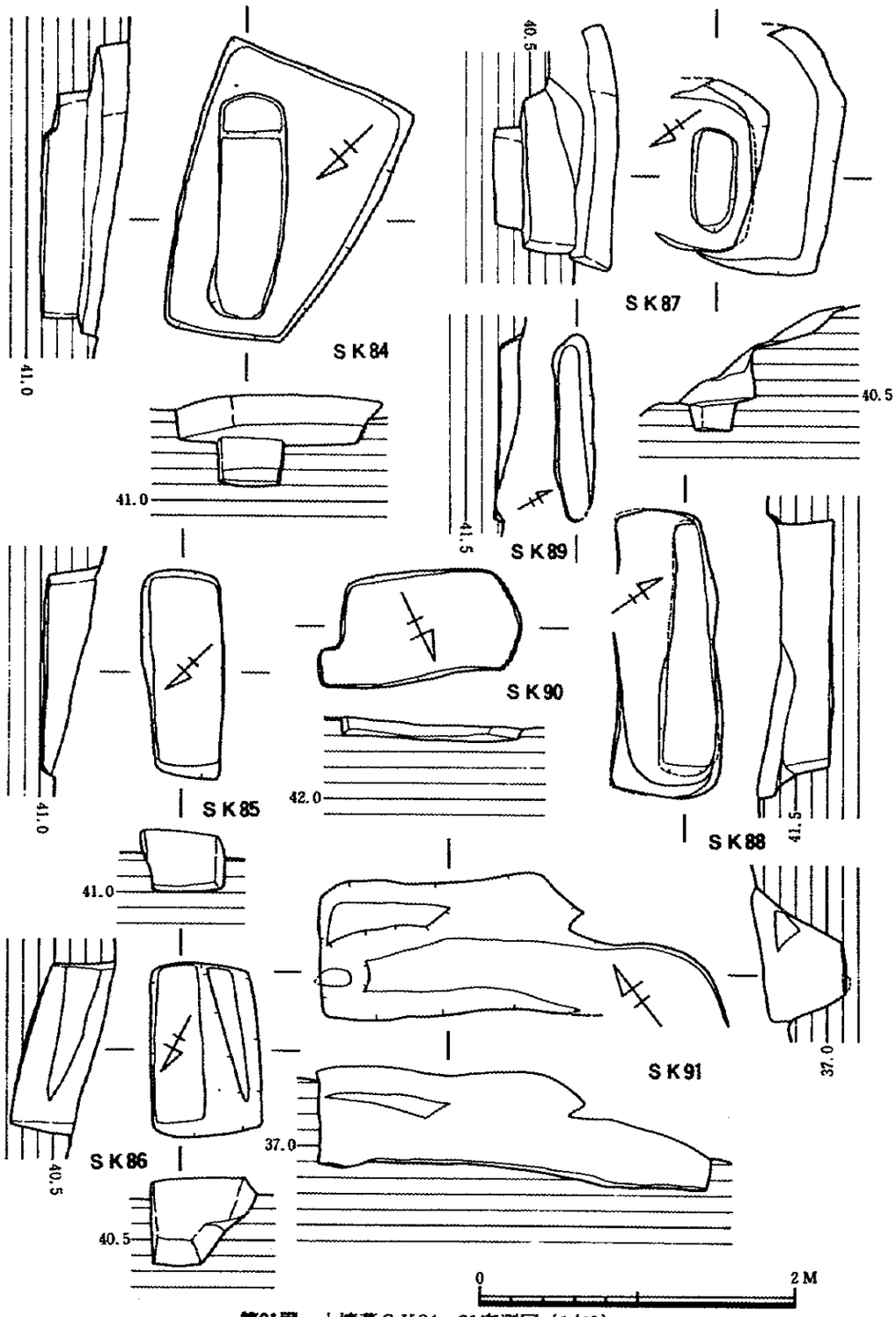
ＳＫ103（第83図）

15号墳の下層にあり、古墳の旧地表を除去して検出した。上段墓壙発掘時に２点の磨製石鏃を出土したが、細かな地点・レベルは確認できていない。

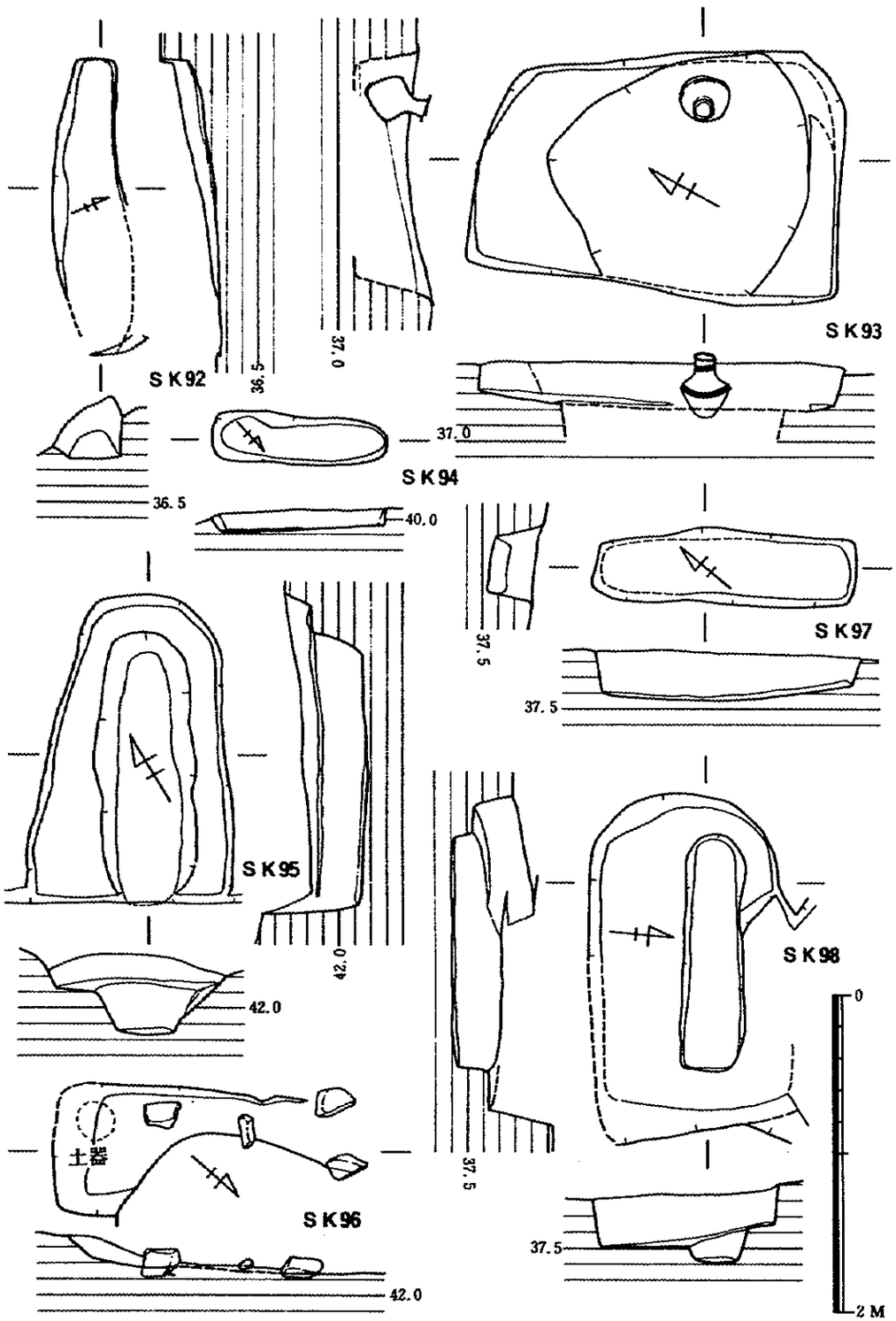
ＳＫ114（第87図）

出土位置・写真の記録を怠っておりかつ記憶もなく、所在がわからないものである。

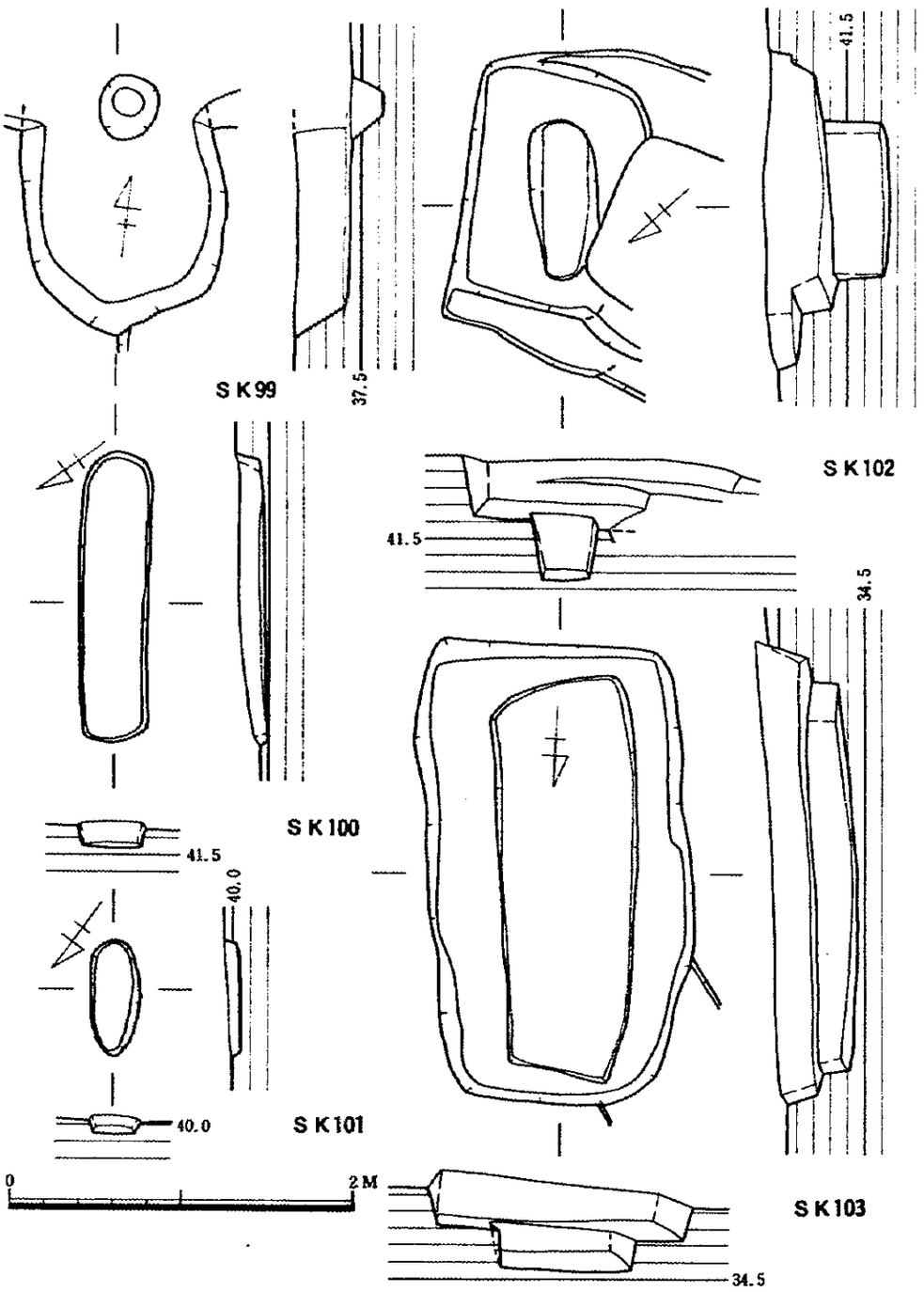
これも他の石蓋土壙墓と同様小型の墓壙を有し、自然石を架構して蓋とする。ＳＫ17・ＳＫ20に似ており、時期的にも近いものと思われる。



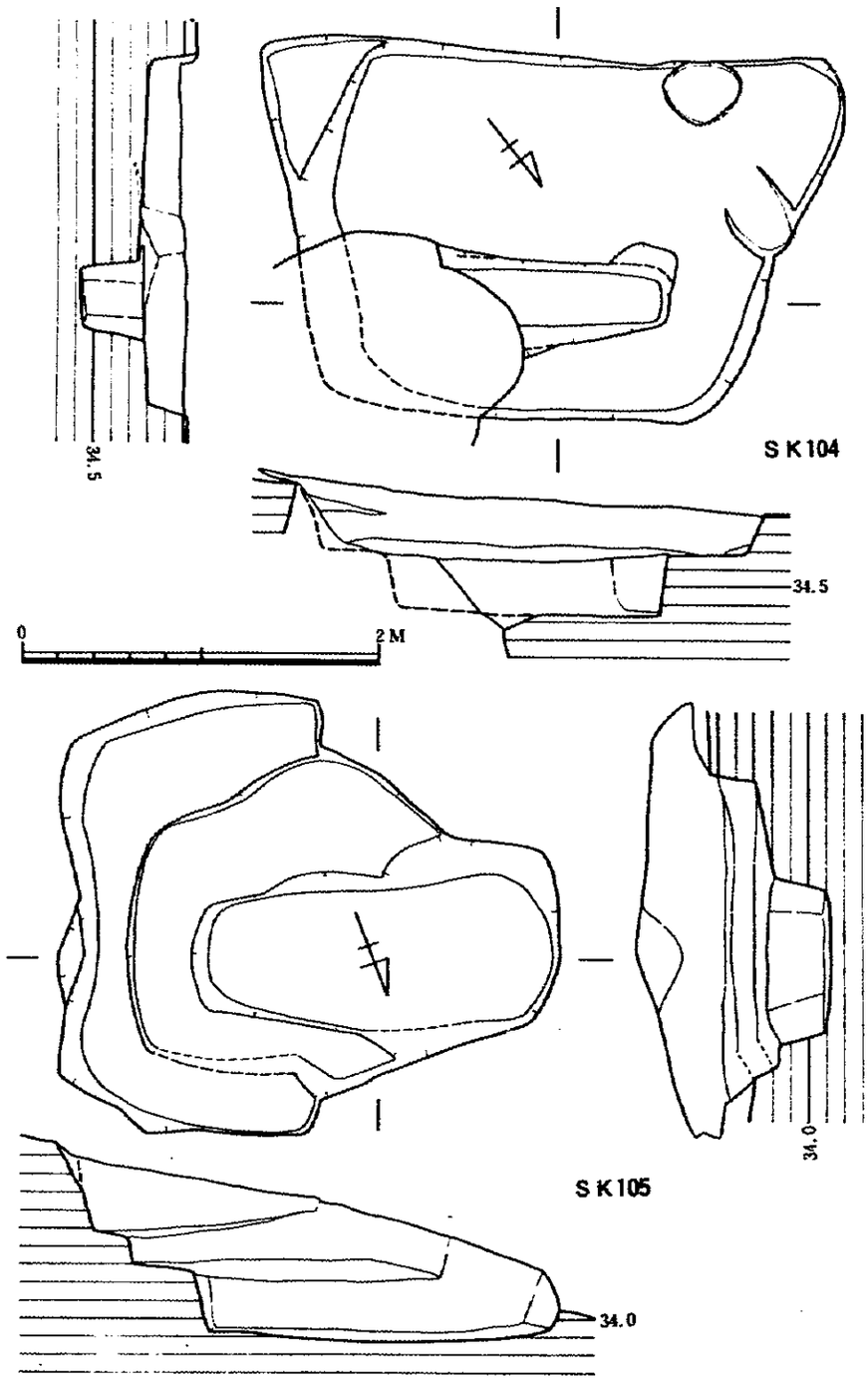
第81図　土壙墓SK84～91実測図（1/40）



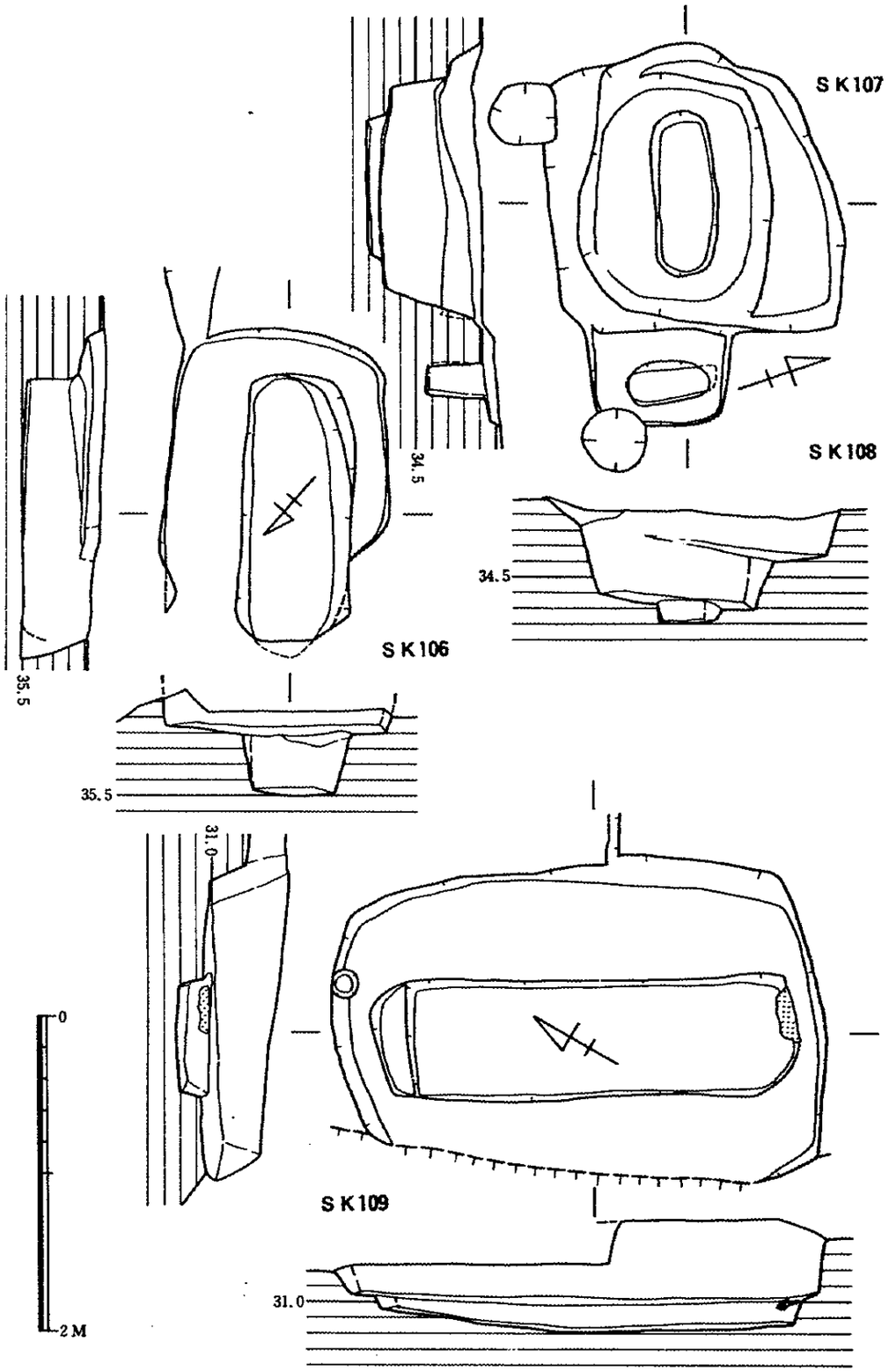
第82図　土壙墓ＳＫ92～98実測図（1/40）



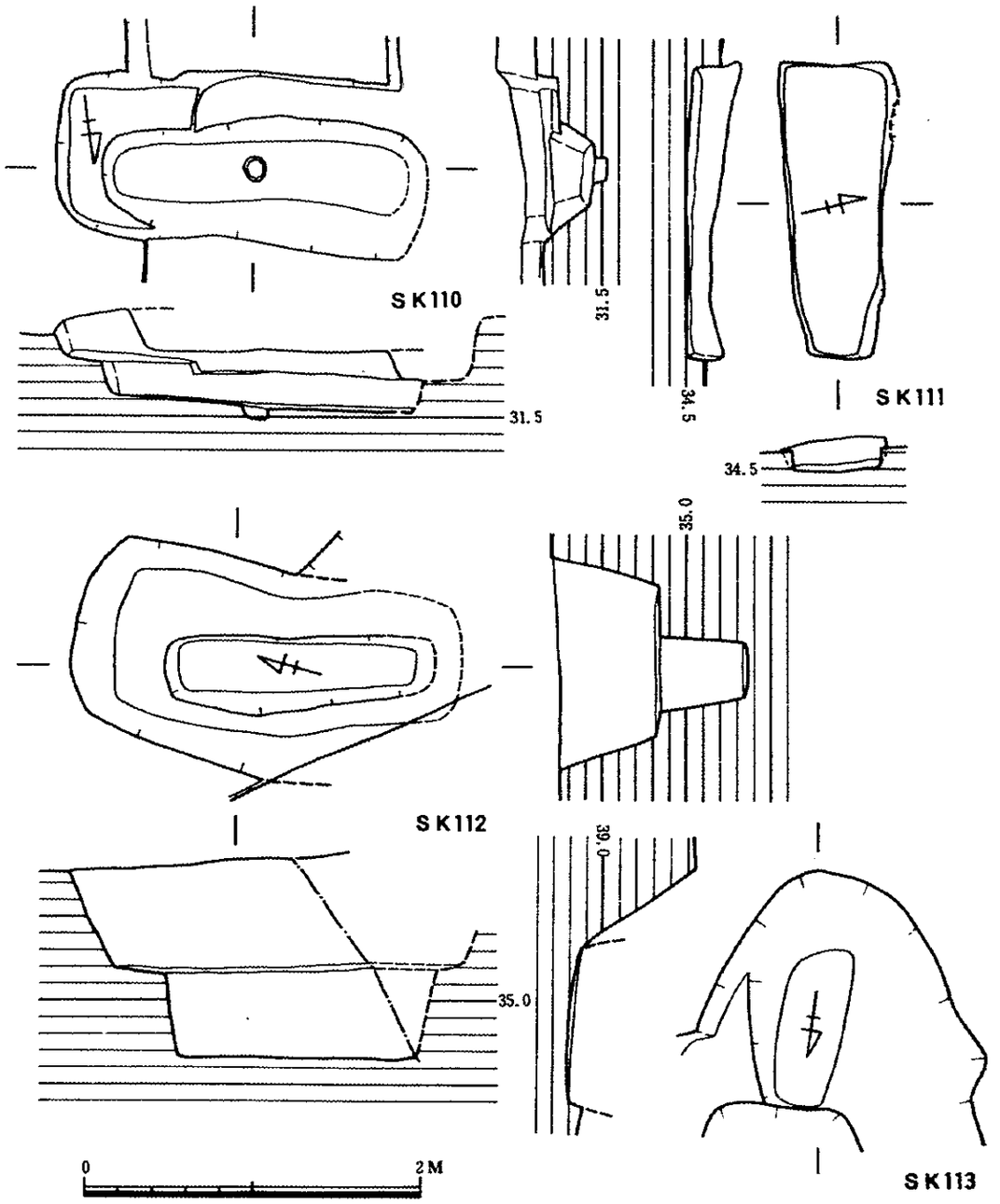
第83図　土壙墓SK99～103実測図（1/40）



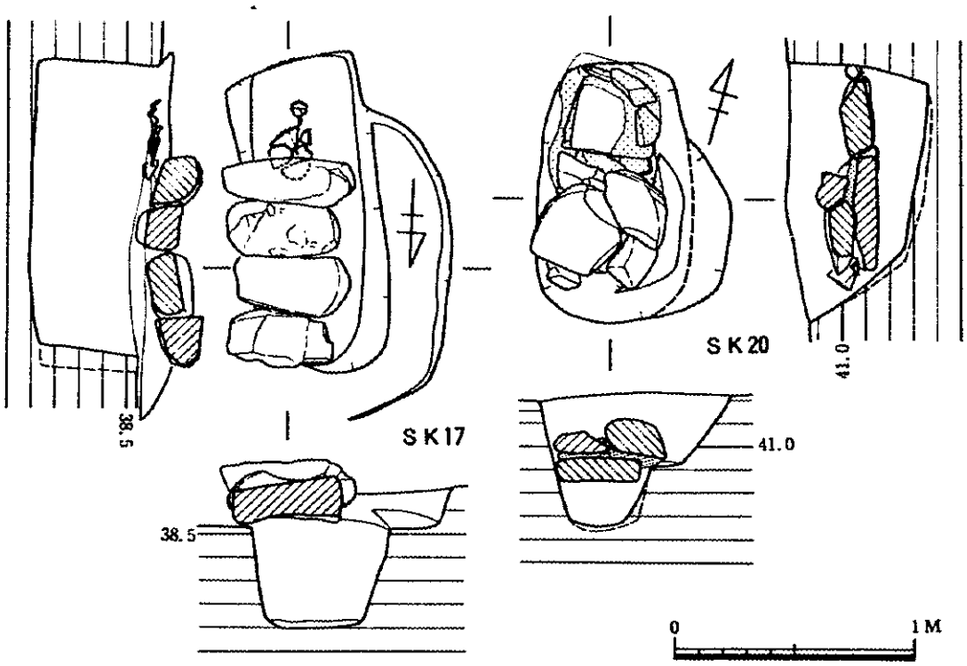
第84図　土壙墓SK104・105実測図（1/40）

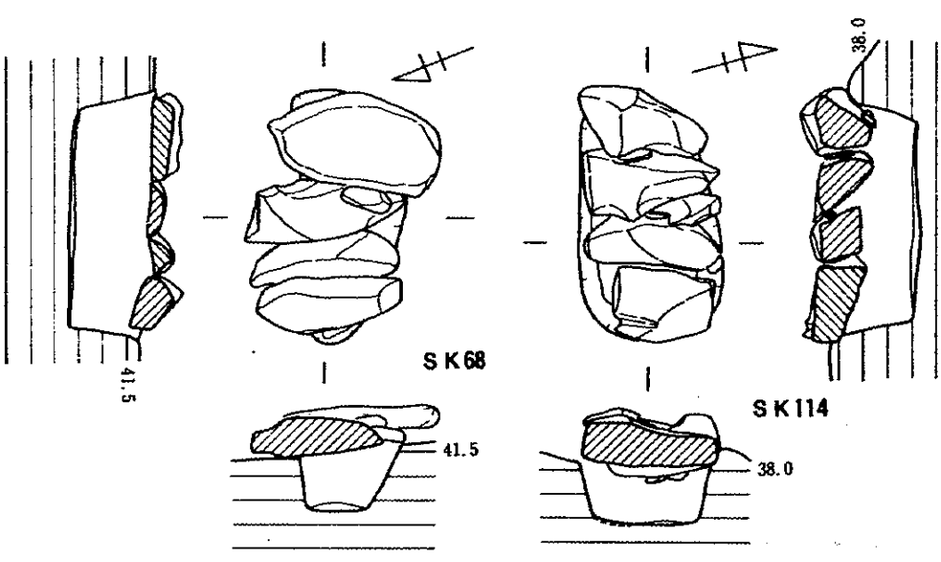


第85図　土壙墓SK106～109実測図（1/40）



第86図　土壙墓ＳＫ110～113実測図（1/40）





第87図　土壙墓ＳＫ17・20・68・114実測図（1/30）

甕棺墓（図版30、第64図）

住居跡ＳＢ７・８の間にある。検出した段階でこれも悪戯されてすべて取り出されたために図化していない。掘形もほとんど残らず、直径0.9～１m、深さ0.2mの円形に近い浅いものであった。中央東よりの小坑は底部を入れた部分であろう。

出土遺物

土壙墓からの出土遺物をここにまとめる。ただし、数点の土器小片を出土してもその時期比定等ができないものは一部省略している。

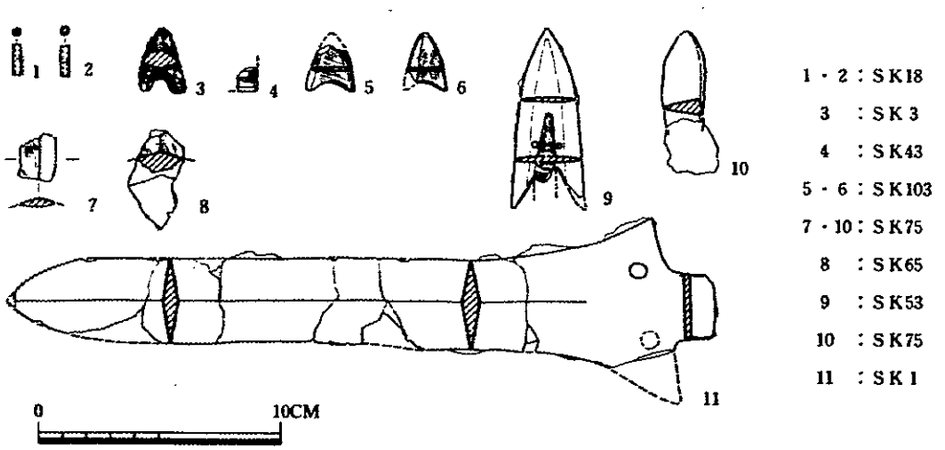
ＳＫ１（図版40、第88図11）

鉄戈が１点出土している。上記したような状態であり、一部を欠損したが、本来は副葬品として納められたものであろう。推定の全長は29.5cmを測る。刃部の幅は3.5～3.8cm、身のほぼ中央を走る鎬部分の厚みは0.6cm前後である。

形態上の特徴としては、全体が短く、関が未発達であり、茎が短いものの幅広く大きく造られていることが第一にあげられ、緊縛孔が径0.6cmの円形を呈することなどがある。また、身から関へと移行する部分に段や刻線等はなく、滑らかに造られる。

この鉄戈を含めた論考を藤田等氏が発表しており、それを参照されたい。ただし、氏が「欠失例」としている論点は、調査時の破損であり、調査担当者としては当初は完形品であったと考えている。

土器等他の遺物は出土しなかった。



第88図　土壙墓出土遺物実測図（1/3）

ＳＫ３（図版41、第88図３・第89図１・２）

供献された壺と黒曜石製の打製石鏃が１点、そして埋土中から高杯が出土した。

壺(1)は第65図に示したように押し潰された状態であり、上半部と下半部を接合しえなかったために図上復原をしてある。口縁部は鋤先状となって、やや外方に下がり、内側へも突出する。頸部はほぼ直角に近く立ち上がり、筒状の形態になる。頸部から肩部への移行は屈曲が顕著で、胴部は張りが強く、小さな底部へと直線的にすぼまって行く。全体に摩滅が著しく、調整痕等ははっきりしない。彩色は施されていないようである。高杯は約1/3の残片である。口縁部は鋤先状を呈し、小さく反るがほぼ水平となる。これも器表の摩滅が進むが、なお赤色顔料の痕跡を留める。

石鏃は床面から15cmほど浮いた状態で出土した。全長2.8cm、厚さ0.8cmで、漆黒を呈する。

ＳＫ４

上段墓壙中から土器小片が数点出土している。口端部上下両端に刻みを付す大型壺、肩部に重弧文を線刻あるいは断面三角突帯を巡らせる壺等である。

ＳＫ５（図版41、第89図３・４）

整理箱一杯分の土器が出土したが、大部分は細片化した同一の壺である。他例を参考にすればこの壺も墓壙南東隅に供献されていたと考えられる。壺(3)は図上復原したもので、全体に器表が荒れているが赤色顔料が散見される。胴部最大径部分に断面M字突帯を巡らせ、頸部にも突帯を多用する。口縁部は鋤先状を呈する大きなもので、上面には円形付文を配している。小型の鉢(4)は出土状態の記録を怠っているが、ほぼ2/3が遺存する。粗製品である。

ＳＫ16

埋土中から壺の底部及び口縁部の小片が出土している。底部はＳＫ３出土例に似る薄手のもの、口縁部は広口壺であろうか。

ＳＫ17（図版41、第89図５・６）

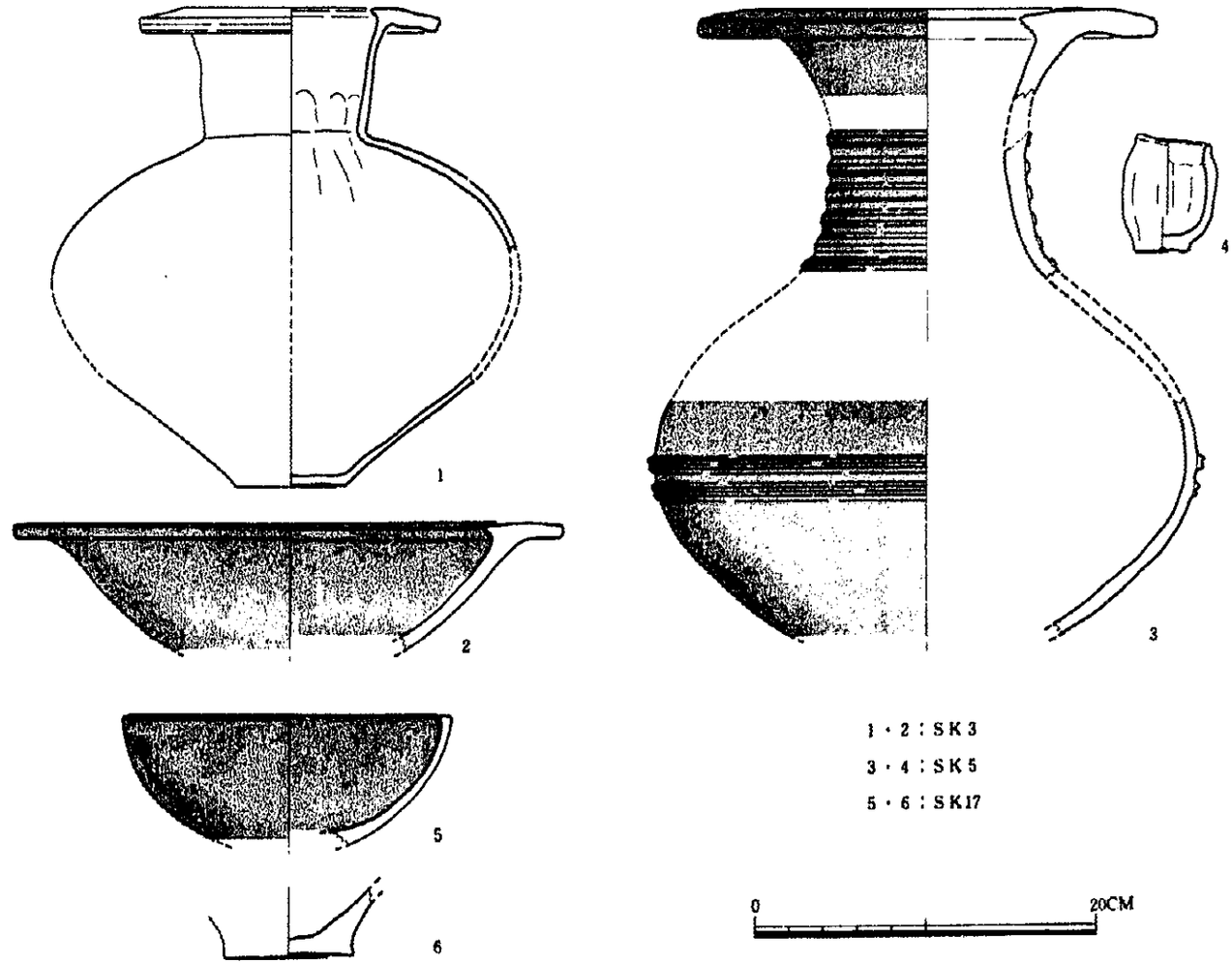
５は約3/4が残存する高杯の杯部で、全体に器表は摩滅するが赤色顔料の痕跡が認められる。６は掘形の西肩付近から出土したもので、この石蓋土壙墓に伴うものではなかろう。

ＳＫ18（図版40、第88図１・２）

墓壙南西の小土坑から碧玉製管玉２点が出土した。この小土坑自体があるいは独立した土壙墓であるかも知れないが、床面の形状に疑問があり付属する遺構としておく。なお、管玉の出土状態は不明である。長さ1.3cm、直径0.3～0.4cmのほぼ同形同大の製品で、穿孔は両面から行う。石材は明るい灰緑色を呈し、緑色の石理が文様風に走る。

ＳＫ19

薄手の土器数点が出土しているが、時期比定は困難である。周辺出土としてＳＫ３出土例に近い高杯片がある。



第89図　土壙墓出土遺物実測図2（土器）(1/4)

ＳＫ25

土器小片が数点出土してるが、これも時期比定は困難である。

ＳＫ28

土器小片が１点出土したのみである。

ＳＫ30（図版41、第90図７）

平面的には下段墓壙中から、胴部下半を下段墓壙に少し落とし込むような位置で供献の壺が出土した。頸部以上も検出時には存在したが、外して図化した。また頸部以上は接合しえず、図上復原した。出土状態から見ると下段墓壙の天井上に置かれたものであろう。出土の位置、そして器表の摩滅がさほどでもないことからそう判断される。

やや特異な形態を有し、胴部上半からそのまま口縁部へと連なる。口縁部は外方に少し垂下する鋤先状口縁で、端面が小さく凹む。胴部最大径はほぼ中位にあり、張りは弱い。また、底部はまだ厚みを有する。肩部以上は横撫でで、以下は縦方向の刷毛目の後に丁寧な篦磨きを施して仕上げる。内面は一部に指頭痕が見えるが、大部分は撫でて仕上げるようである。

ＳＫ36（第90図８）

ＳＫ35・36・49は検出時には分離できず、ＳＫ６と称して発掘を行った。その途次で若干の土器を出土したが細片化しており残せなかった。後、完掘後に土器の出土地点はＳＫ36の埋土中に位置していたことが判ったのでここに報告するが、切り合い関係等の把握ができておらず、不確定な要素は残る。図示した以外にも点数はかなりあるが小片であり除外した。

この高杯も細片化しているが、全体を窺える資料であり図上復原を試みた。全体に器表の剥離・摩滅が著しいが、赤色顔料を塗布した痕跡が随所に見られる。口縁部はほぼ水平に拡張された鋤先状口縁となるが、まだ未発達と言える。脚部の伸びもさほどではなく、端部はやや踏んばる形になって小さな面を持つ。

ＳＫ43（図版40、第88図４）

石鏃の小片である。出土位置等は記録していない。粘板岩製。

ＳＫ47（第90図11）

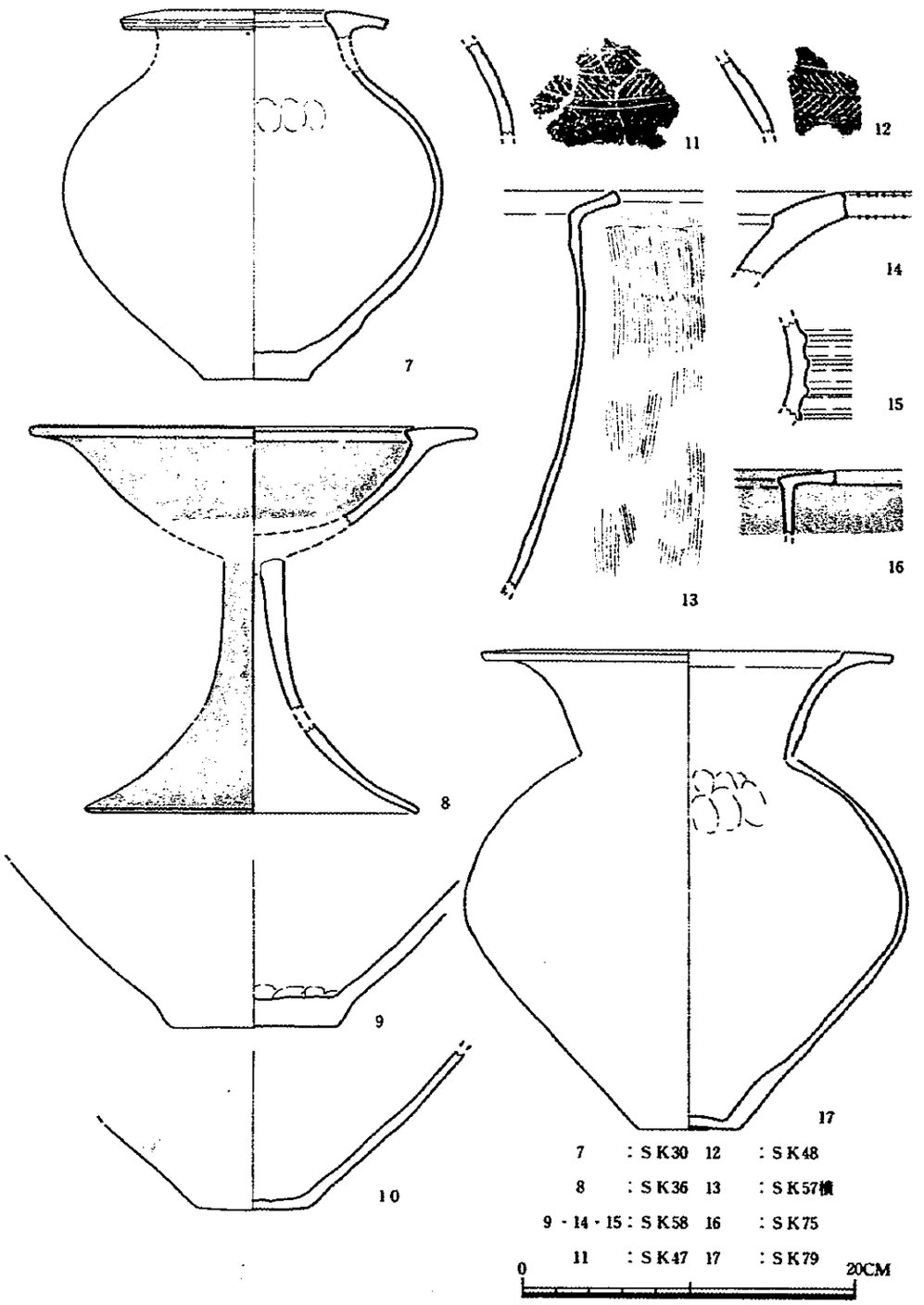
胴部の小片である。篦描きによる有軸羽状文を施文する。

ＳＫ48（第90図12）

これも胴部の小片で、篦描きの有軸羽状文を施す。

ＳＫ52

上段墓壙底で数点の土器を検出したが、今回の整理の過程で実現できなかった。確認できれば改めて報告したい。調査時の所見では土師器と考えていたが、古墳とした以外に土師器を出土する例は他になく、ＳＫ26との切り合い関係においても他例と明らかに異なる様相があり、ＳＫ52に対する評価は保留しておく。



第90図 土壙墓出土遺物実測図3（土器）(1/4)

ＳＫ53（図版40、第88図９）

鉄鏃が床から約10cm浮いた状態で、足位の隅で出土した。返りの一部を欠くが完形に近く、全長は7.5cm、最大幅は3.1cmである。鎬はなく、断面形は厚さ２mmのレンズ状になる。基部には矢柄とそれを緊縛した糸の一部が遺存する。図に破線で示した位置にも何かが剥離したような痕跡が残るが、矢柄に巻きついた糸が孔に続いていることからこの剥離痕が矢柄のそれではないことは確かである。なお、孔は直径２mmの円形を呈する。

ＳＫ57（第90図13）

厳密にはＳＫ57の横から出土したものであって土壙墓に伴うものではないと考えている。外面に煤が付着する甕で径は復原できなかった。

ＳＫ58（第90図９・14・15）

いずれも出土状態を把握できていない。９は約1/2が残る壺の底部で、他例からみて供献されていたものかも知れない。14は小片。口縁部を肥厚させ、端部に刻みを付す。15は断面梯形の突帯を多用する壺で、あるいは９と同一個体であるかも知れない。

ＳＫ59

突帯を付す薄手の土器片が数点出土している。

ＳＫ61（第90図10）

第76図に示したように上段墓壙の上端近くから供献された壺の底部が座った状態で出土した。底部は全体に器表の剥離が著しい。あまり発達しない鋤先状口縁部の小片が１点出土している。

ＳＫ63

薄手の土器片数点と共に高杯の小片が出土している。ＳＫ17出土例に似る椀形の杯部片で、赤色顔料が残る。

ＳＫ65（図版40、第88図８）

埋土中から石剣の小片が出土している。頁岩製である。

また、厚手の土器片が１点出土したが、時期比定は困難である。

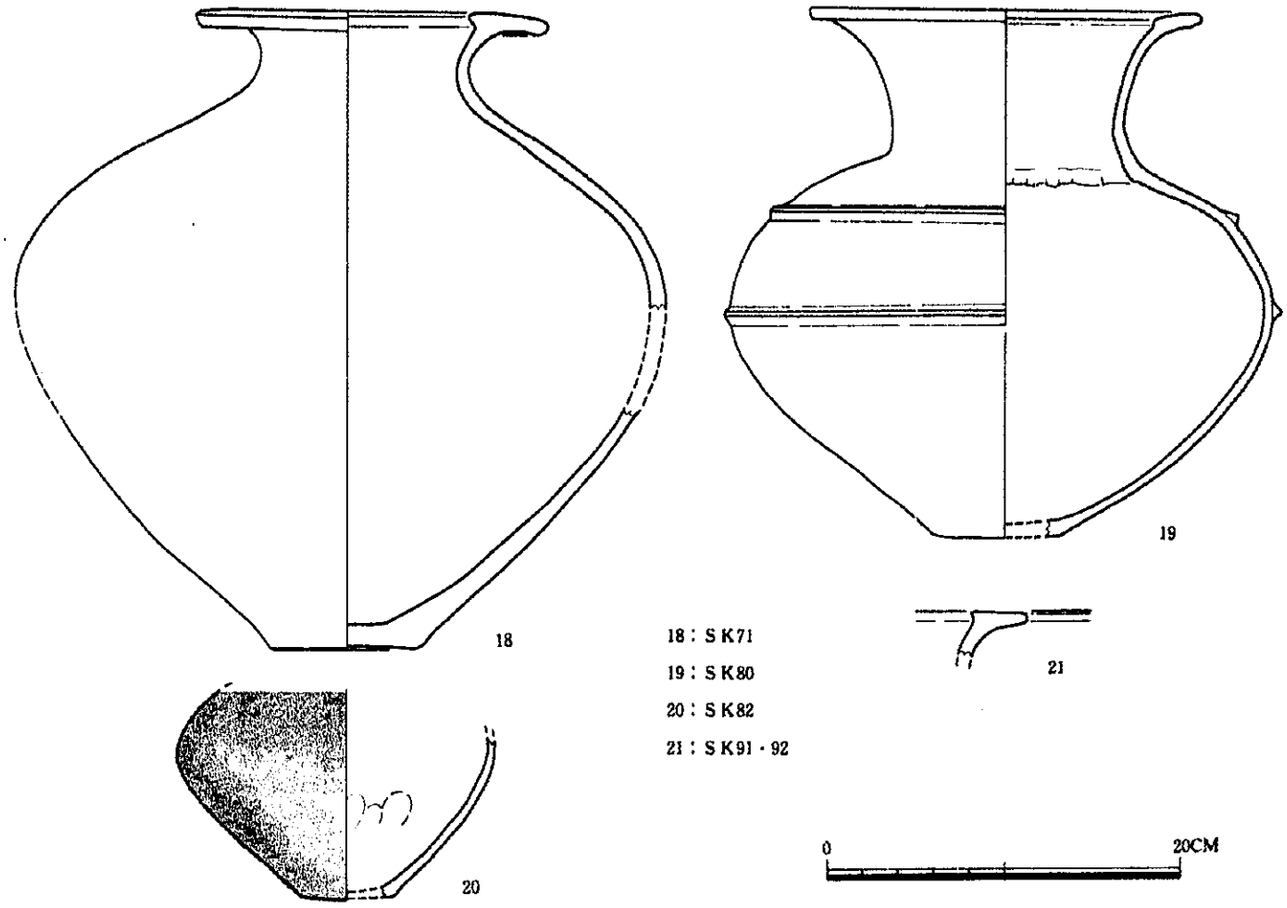
ＳＫ71（図版41、第91図18）

第78図のように上段墓壙の床から10cm程浮いた状態で出土したが、これも押し潰されて細片化し、接合しえなかった箇所がある。

鋤先状の口縁部は外方に垂下し、頸部は短くくびれる。胴部は中位のやや上方が最大径部となり、胴張りが強い。全体に器表の風化が著しく、調整痕ははっきりしないが化粧土を施しているようである。

ＳＫ75（図版40、第88図７・10・第90図16）

被葬者の胸部付近、床から10cmほど浮いた位置から刀子が、足位で同20cm浮いたところから石剣片が、埋土中から土器片が出土した。



第91図　土壙墓出土遺物実測図1（土器）(1/4)

刀子は全長6cm、最大幅1.8cm、身の最大の厚みが0.6cmの大きさで、当初は鉄鏃であろうと思っていたものの形状から考えを改めた。しかし、使い減りしたにしては小さすぎる感があり、鉄鏃として再利用したこともありうる。

石剣は身の小片。図の下図も剥離する。頁岩製であろう。

第90図16は赤色顔料を塗布した甕の小片。鋤先状の口縁部は小振りに仕上げ、器肉も薄い。

ＳＫ79（図版41、第90図17）

上段墓壙の上方から供献された壺が出土した（第80図）。これも潰れて細片化し、完全に復せないまま図上復原したものである。胴部最大径部分はかなり上位にあって腰高となり、頸部は大きく高く広がる。鋤先状の口縁部は外方にやや垂下するがおおむね水平な面となる。この内側端部は摩滅のせいもあって突出が小さい。器面の調整法は遺存状態が悪くてはっきりせず、赤色顔料の有無も判らない。内面下半に光沢を持つ黄褐色の付着物がある。

ＳＫ80（図版41、第91図19）

これも上段墓壙の中位に底部を据えた供献土器であるが、調査中に悪戯されて出土状態の図化はできなかった。図示したものは残された土器のスタンプ（圧痕）のみである（第80図）。

鋤先状の口縁部は外縁がやや高くなり、内側への突出も小さい。肩部から頸部にかけては曲線的に移行し、頸部の締まりは弱い。胴部最大径は中位にあって張りが強く、断面三角形の突帯を１条付す。器面の風化が進み、調整痕ははっきりしない。これも内面下半に光沢を持つ黄褐色ー暗赤褐色の付着物がある。

ＳＫ82（図版42、第91図20）

他例の供献土器が頭位の東横に埋置するのに対して、頭位に近い主軸線上に置く点で異なる。図では随分浮き上がっているが、この土器は表土掘削時にすでに露出しており、遺構の深さは元来土器のレベルまで達していたと考えられる（第80図）。

上記したような状況にあり、上半部はすでに失われていた。底部は器肉が薄く、立ち上がりも大きく開く。器表はこれも摩滅が甚だしいが、赤色顔料が一部観察できる。

ＳＫ84

断面三角突帯を付す壺の小片などが数点出土する。

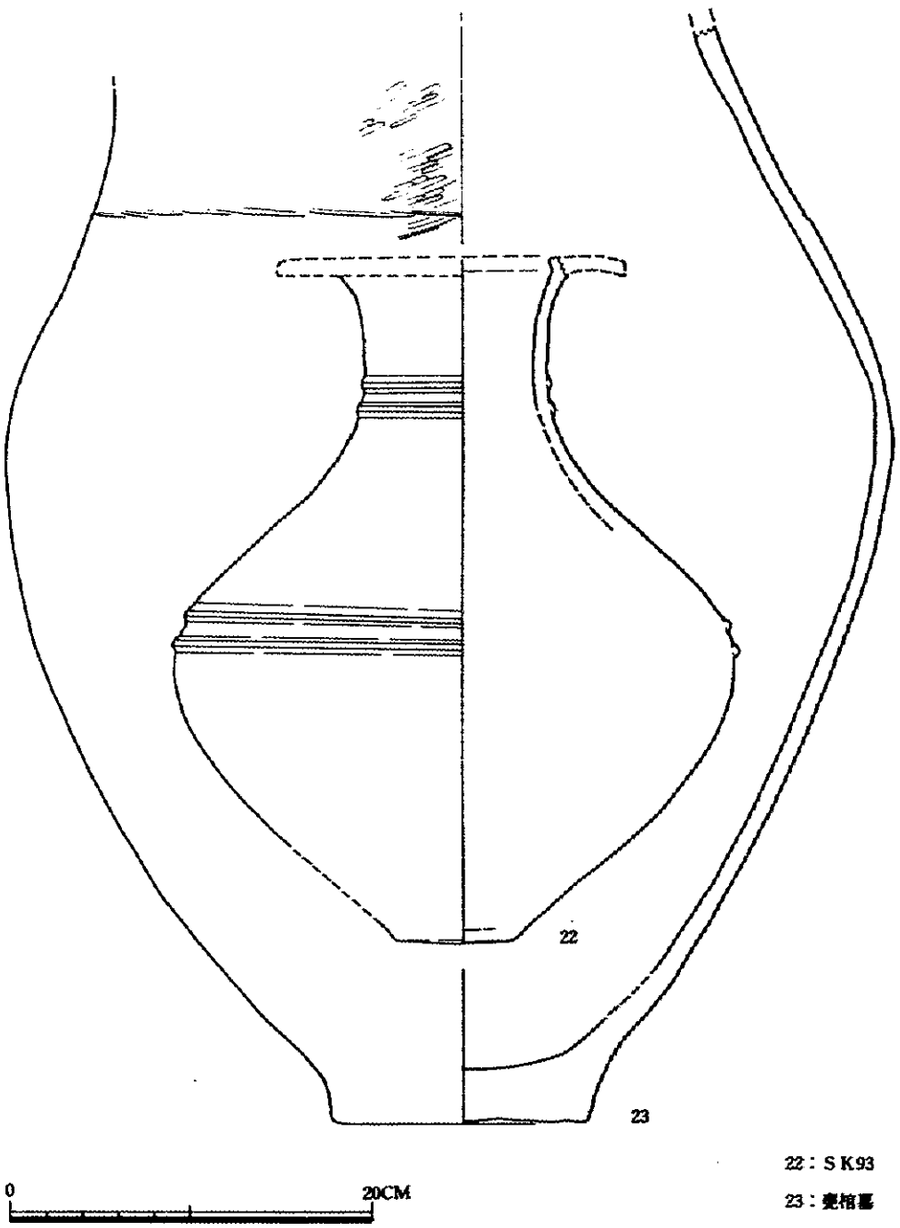
ＳＫ87

これも断面三角突帯を付す壺の小片などが数点出土する。

ＳＫ91・92（第91図21）

袋状竪穴と重複していたこともあって、２基の土壙墓を平面的に分離することができず、遺物もどちらに伴うのか確認できていない。

鋤先状口縁を有する壺の小片で、器表は剥離する。形態的にもあまり発達していない。



第92図　土壙墓出土遺物実測図5（土器）・甕棺墓実測図（1/4）

ＳＫ93（図版42、第92図22）

発掘には失敗したが他の例からみて土壙墓に供献された土器と見なしてよい。

鋤先状口縁部の拡張部を欠くものの他はほぼ完存する。胴部最大径部分はほぼ中位にあり、少し上に２条の突帯を巡らせる。肩部から頸部にかけては曲線的に移行し、頸部にも２条の突帯を付す。器表の風化が著しく、赤色顔料の塗布ははっきりしないが化粧土を施しているようである。

ＳＫ95

浅く開く薄手の壺の底部片が出土している。

ＳＫ96

南隅の墓壙中で供献土器を出土しているが整理の段階では実見できなかった。

調査直後に作成したメモではあまり発達しない鋤先状口縁の壺の破片や、断面M字突帯を付す壺の体部片がかなり出土している。

ＳＫ103（図版40、第88図５・６）

埋土中から出土したが、細かい地点・レベルの確認はできていない。いずれも発掘時に損傷した。ほぼ同形・同大の磨製石鏃で、身は鎬を持たない偏平な断面となり、抉れた基部には面取りを施す。ともに粘板岩製。

ＳＫ105

数点の土器小片が出土。壺で小さな断面三角突帯を巡らすもの、口端面下端に刻みを付すものがあり、甕では逆Ｌ字形口縁・跳ね上げ口縁、そして鋤先状口縁部を有するものなどがある。ただ、この15号墳の下層には袋状竪穴や住居跡などがあり、出土状態や破片の程度からして土壙墓に伴うものとは言い難い。

ＳＫ106

甕の小片がある。逆Ｌ字形口縁で端面に刻みを付し、頸部下に断面三角突帯を巡らせるものである。これも下層に袋状竪穴が存在しており、混入と考えられる。

甕棺墓（図版42、第92図23）

口縁部を欠く、残存高62cmの大型壺で、肩部に１条の箆描き沈線をめぐらせるが不連続となる。器表の風化が進行するが、上半部には粗い箆磨きを観察できる。

iv）その他の遺構と遺物

上記のほかに柱穴・不定形土坑・溝などを検出しているが、以下に顕著な遺物を出土した遺構、および石器を中心に包含層・表採資料等について記す。

祭祀土坑ＳＫ200（図版31、第93図）

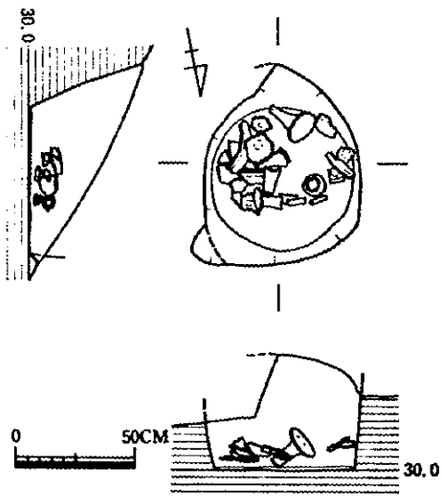
調査時に「SP100」と称していた遺構を改称する。

22号墳の東、標高30mの斜面にある小土坑である。土壙墓群からは30m以上の距離をもって位置するが、大きく見れば遺跡群の立地する谷の入口にあたる。出土遺物からみても通常の生活遺構とは考えられず、年代的にも土壙墓出土土器に近いことから関連する遺構と考えている。

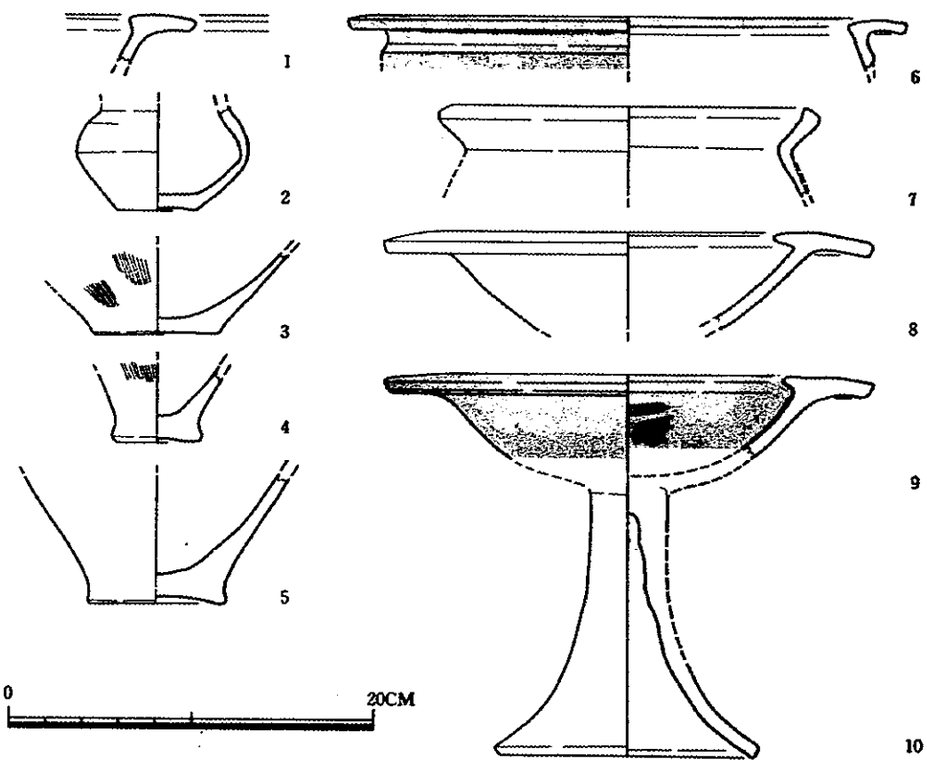
形状は底径1.2m、深さ0.9mの円形を呈し、床面近くで散乱して多くの土器が出土した。いずれも破損した状態であった。

出土遺物（図版42、第94図）

かなりの点数が出土したが完形に復原しえるものはない。意図的なものであろうか。



第93図　祭祀土坑ＳＫ200実測図（1/30）



第94図　祭祀土坑ＳＫ200出土遺物実測図（1/4）

1は壺の口縁部小片。器表の摩滅が甚だしい。2は小型壺で、図示した部分はほぼ完周する。これも調整の細部はわからないが、全体に粗雑な感を受ける。6は口縁部上面から胴部外面にかけて赤色顔料を塗布す精製品で、口縁部上面には放射状の暗文を付す。8～10の高杯も精製品で、確実に顔料を確認できるのは9に示したものだけであるが、8・10も化粧土を掛けておりおそらく赤色塗彩していたものであろう。9の口縁部上面には放射状の暗文が観察でき、10と同一個体であると思われる。

ＳＫ201（図版39、第62図４）

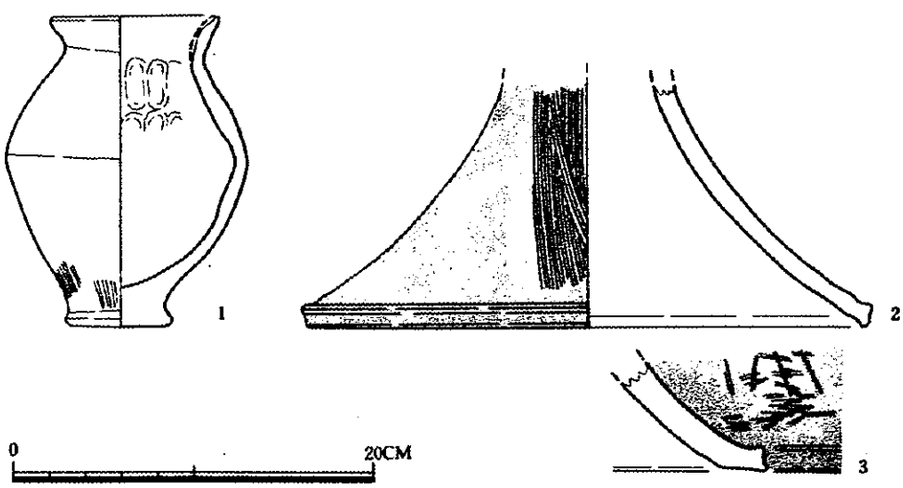
調査時に仮称SP101としていた遺構である。住居跡ＳＢ９の南にある直径0.8mの浅い土坑で、埋土に特徴はなかったものの図示した石鏃・中期の広口壺の残片等が出土した。

石鏃は発掘時に先端を欠く。土壙墓ＳＫ103出土例によく似た形態の粘板岩製品である。

９号墳南崖面採集の資料（第95図２・３）

８・９号墳の間、土壙墓群の南端近くの主尾根東側斜面にはいくつかの小さなテラスがある。９号墳の南、13号墳のすぐ西側上位斜面に一つ、12号墳の南７mの地点に一つそしてより下位に下った21号墳の南に長く延びる二段の平坦面などである。これらのテラス自体の形状は開墾時に大きく改変されているのであろうが、その辺りの採集資料（遺構としての掘り込みを確認できなかった）中に注意すべきものがあるのでここに紹介する。

第95図２・３に示したのは９号墳南の斜面で採集した大型器台である。２は復原底径が30cm強を測るもので、約1/4が遺存する。３は径を復原するには小片に過ぎるがこれも大型品である。脚端部内面を匙面状に成型する。いずれも丁寧に造作され、外面に赤色顔料を塗布する。



第95図　採集その他の遺物実測図１（1/４）

住居跡ＳＢ１西側採集の資料（図版42、第95図１）

本遺跡の南端、ＳＢ１周辺で採集した資料である。遺構配置図で判るように弥生前期の資料は遺跡の北半に集中し、南端部分には方形住居跡および若干の柱穴･古墳があるのみである。里道を挟んで位置する冨地原小嶺遺跡でも弥生前期の遺構･遺物はやはり北半に集中する。したがってこの完形に近い土器がどのような経緯で採集地点にもたらされたかの由来は不明である。

口縁部の一部を欠くのみの小型壺である。文様はない。体部の張りが小さく、器高が高いためか均整に欠ける感がある。全体に器表が摩滅するが、底部近くの外面に刷毛目を、肩部内面に指頭痕を観察できる。

包含層その他の資料

古墳下層の包含層・古墳周溝を含む溝等から出土したものである。また、ここで言う「谷状落ち込み」とは17・23号墳の間の標高28～30mの付近にある二次堆積層を指す。

鉄器（図版43、第96図１）

「トレンチ」出土とするのみで地点・遺構が特定できない。残存長19cm、鎬部分の厚さ0.7cm、刃部幅3.1cmを測る。図下端の左は彎曲しつつ広がり、同右は発掘時と思われる新しい破断面となる。先端付近に布目痕が残る。形態からは鉄戈を想定せざるを得ないものの、出土地点が不明であり憶測に留めるほかない。鉄戈とすればSK１出土例よりも細身で、より古相を示す。

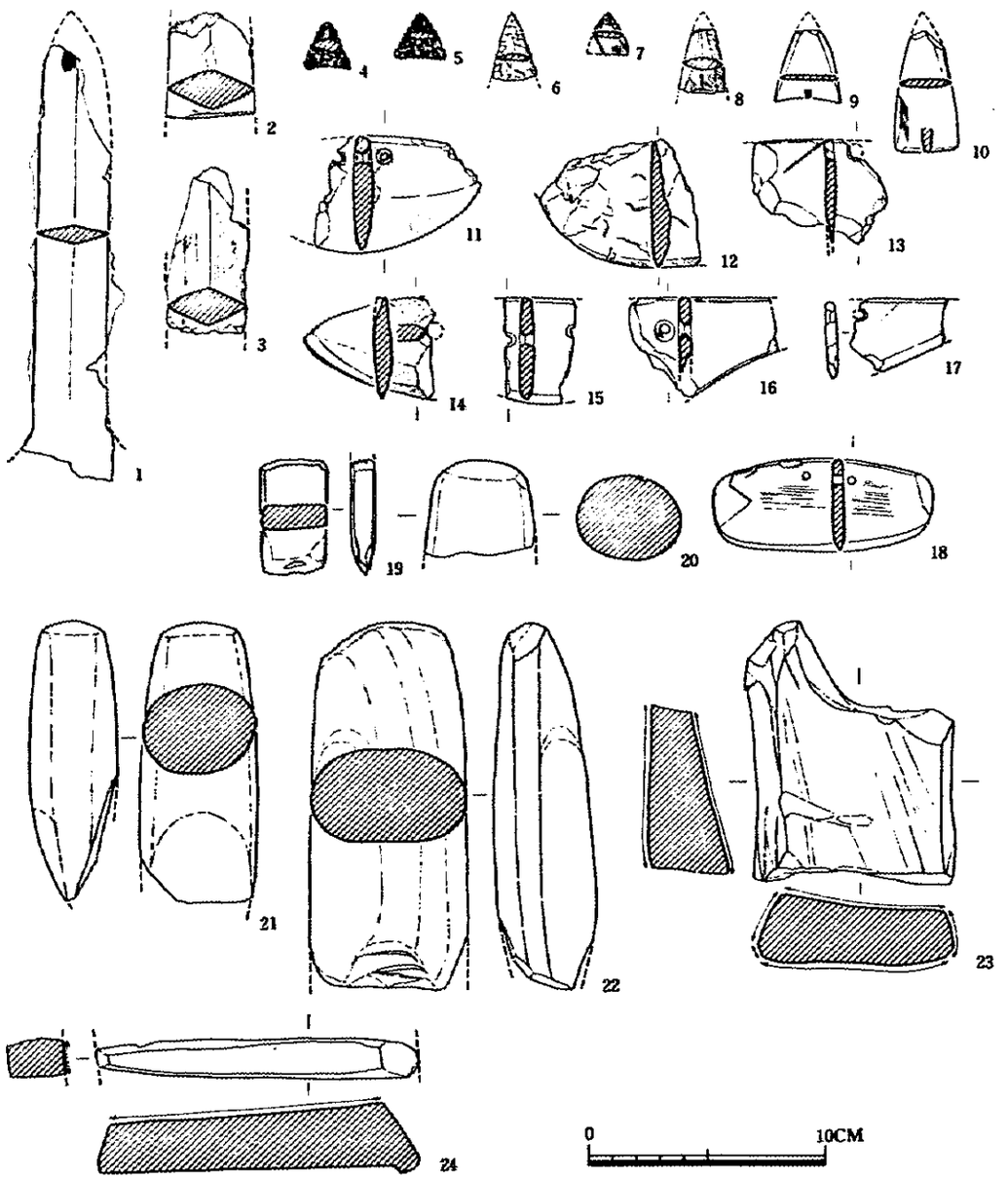
石器

石剣（図版42、第96図２・３）　２は20号墳周溝、３は15号墳地山から出土。いずれも断面菱形となり、刃は鋭利。２は硬質砂岩、３は緑泥片岩製。

石鏃（図版42、第96図４～10）　４・５は谷状落ち込み出土の黒曜石製。６は19号墳下層出土の安山岩製品で、基部を欠く。７は17号墳主体部掘形出土の粘板岩製。偏平で、基部に面取りを施す。８は15号墳下層出土で、あるいは剣であろうか。身の断面はレンズ状となって鎬を持たない。これも基部を欠く。頁岩製。９は溝状遺構SD４出土。身の断面は長方形に近く、刃部は鋭い。基部は面取りする。青灰色を呈する粘板岩製。10は切っ先を欠くが、残存長5.2cmの大型品。明瞭な鎬はなく、身は断面レンズ状となる。頁岩製品。

石庖丁（図版43、第96図11～18）　11は刃部の稜がなく、断面が緩い曲線を描く。15号墳地山出土の硬質砂岩製。12は住居跡SB17周辺の柱穴出土。これも11に似た形態となり、石材も同じである。13は23号墳主体部掘形出土の硬質砂岩製品。穿孔は片面から行う。14はいわゆる立岩製で、形態に特徴がある。15も硬質砂岩製で、器面調整が丁寧。16は器表の風化・剥離が進む硬質砂岩製品。谷状落ち込み出土。17は焼けたためか灰赤色を呈し、器表が荒れる。18号墳盛土中出土。立岩製品であろう。18も立岩製。穿孔は直に行われる。26号墳周溝出土。

偏平片刃石斧（図版43、第96図19）　15号墳地山出土。刃部は片刃で頭部は欠損する。



第96図　採集その他の遺物実測図２（1/3）

石理が縦方向に走る。住居跡ＳＢ16出土例と同じ頁岩製品。

太型蛤刃石斧（図版43、第96図20～22）　20は24号墳周辺出土の硬質砂岩製の頭部。21は表採品。玄武岩製で刃部を欠く。22は15号墳地山出土。器面の風化が著しい花崗閃緑岩製品。

砥石（図版43、第96図23・24）　23は23号墳周溝出土。長軸に添う４面を使用するが、背面の一部は未使用である。砂岩製。24は谷状落ち込み出土。１面のみ使用痕が残る。

第４章　おわりに

以上に発掘調査の内容を記述してきた。遺漏の多い調査となったが注目すべき内容を含む遺跡であることは間違いない。以下に若干のまとめをしょうと思うが、すべての基本となる土器編年が「むなかた」においては未だなされていないという状況がある。この調査で得た資料は決して良好な状態にあったとはいえず、また量的にも心細いものである。そうした制約があるために詳細は望むべくもなく、大雑把な編年を組み立ててみた。補完する資料は石丸遺跡(註１)・大井三倉遺跡(註２)を用いた。宗像市内ではすでに200基近い竪穴の調査が行われており、それらの整理とともに弥生前期～中期の土器編年は完成されようが、一端を垣間見て地域色なりを見てみたい。

ｉ）弥生時代前期～中期の土器の変遷（第97・98図）

まとまった量の土器を出土した遺構に恵まれないことから、従来の編年観に添って個別に抽出する方法を取らざるを得ない状況であり、大雑把な分類にとどめたい。器種は壺・甕を取り扱う。

Ｉ期（前期中葉～後葉）

大井三倉遺跡で検出したＶ字溝出土資料である。紹介されたものはごく一部であり、かつ出土状態等、担当者の言及が乏しいために同時性は定かでない。紹介された資料を見るかぎりでは二時期にまたがるようであるが、次期に比定した土器群よりは古相を示しておりここにまとめる。前期中葉ないし後葉の幅を有すると思われる。

壺　３～５・７～９などの小型壺は口頸部・肩胴部間の境が明瞭であり、頸部が直線的に内傾する。底部も一部に円盤貼り付け状を呈するものがあるなど古い要素を残す。１・２は胴部最大径部分が上位に上がる。肩部が曲線的となり、口縁部の開きも大きくなるなど新しい様相を見せる。６も後出的な形態である。

甕　如意形口縁を持つもの、口端部あるいはやや下位に刻み目突帯を付す直口縁を有するものがある。如意形口縁といっても変化に富む。緩く反転し、口縁部が短いもの（34～36)、

長く伸びるもの（37)、「く」字形に近く反転する例（38・39）などである。装飾としては口端部全面あるいは下端に刻みを巡らせたり、頸部のやや下位に1条の沈線を刻む例、同様な位置に段を付す例などがある。胴部は全体に張りが弱く、底部は平底か若干上げ底になる。調整法としては口縁部内面に横刷毛を用いることが一般的のようである。37～39は後出的である。

他に脚部が直接的にラッパ状に開き、端部付近で屈曲してさらに大きく開くタイプの高杯等が紹介されている。

Ⅱ期（前期後葉～末葉）

本遺跡の竪穴出土資料を用いた。

壺　口頸部・肩部に境を有するものと底部から口縁部にかけて連続して続くものがある。中型品は概して胴部の張りが大きく、最大径部分が胴部の中位に下がる。また文様は割り付けが雑になる。小型壺では胴部が球形に近くなり、底部から口縁部にかけて曲線を描いて移行するが、口縁部の開きは小さい。15は無頸に近い壺で、これはやや肩が張る形となる。大型壺では16に示したものがよく遺存する例。他には口縁部を肥厚させず、頸部・肩部に沈線を刻む例（2号竪穴)、無文とする例（83号竪穴)、口縁部内面に粘土帯を貼って肥厚させる例（35号竪穴)、同様にして頸部外面に段を巡らせる例（73号竪穴）などがある。甕棺もこの時期に属するものであろう。

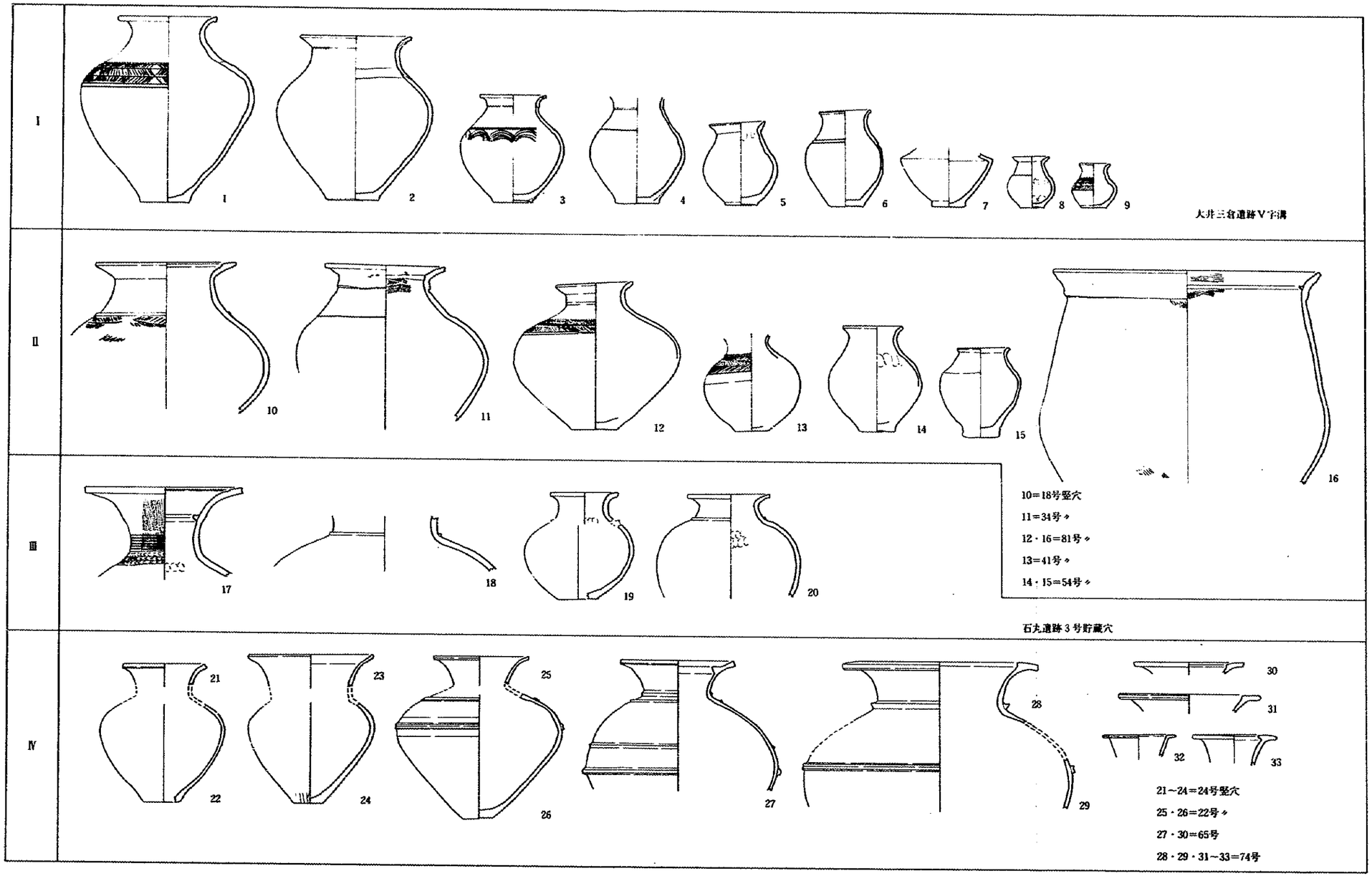
甕　口縁形態はⅠ期としたものとほとんど区別がつかない。ただ、全体の器形を見ると長胴化が著しい点特徴的である。胴部の張りはむしろ弱くなる。文様としては依然頸部下の沈線・口端部下端の刻み目が一般的であるが、沈線を巡らせる位置は頸部に近くなる。47のように篦状工具を用いた刺突文が1例見られる。

Ⅲ期（中期初頭）

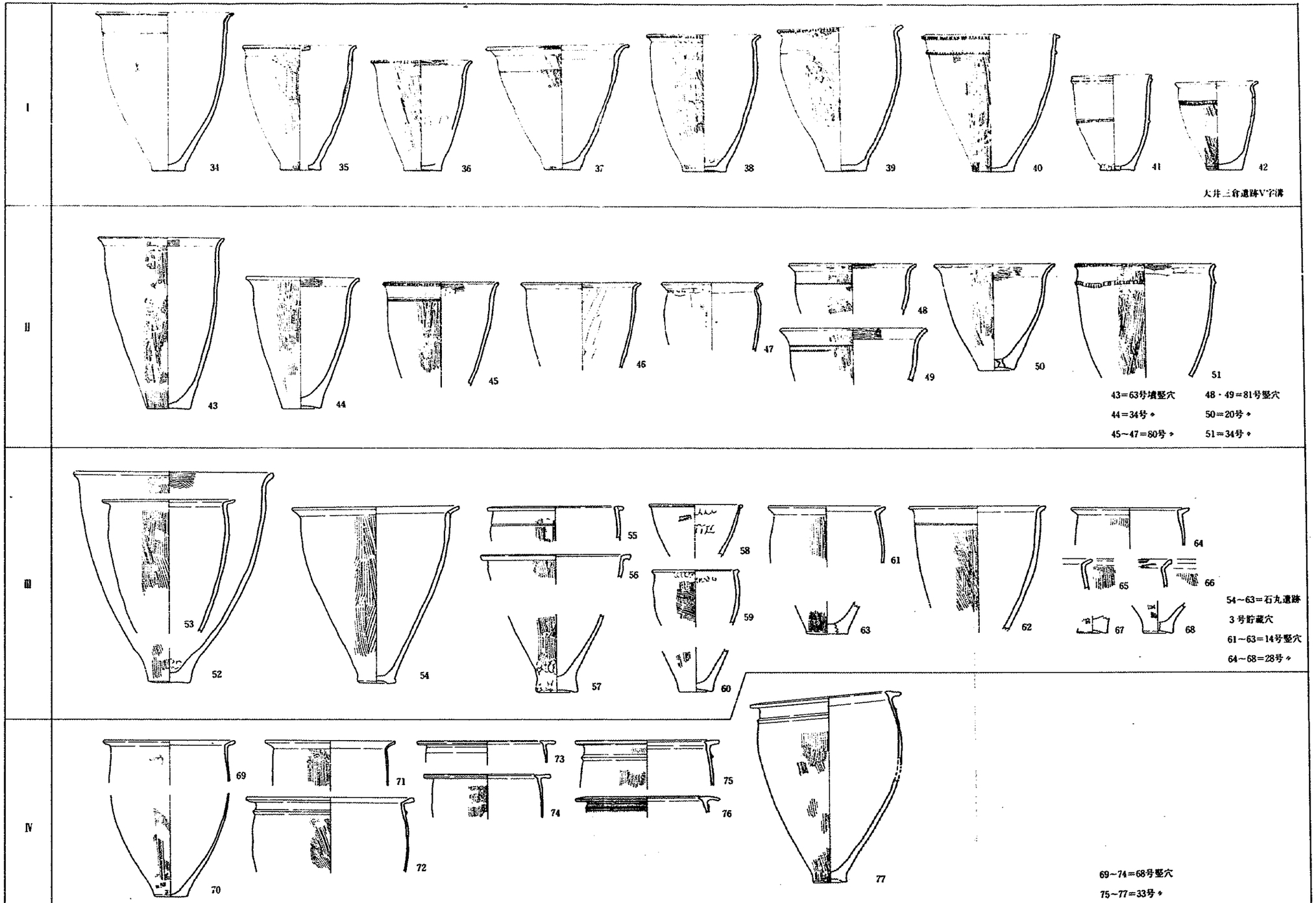
石丸遺跡3号貯蔵穴の資料を中心とし、本遺跡竪穴の資料を一部加えた。石丸遺跡の他の竪穴からはほとんど遺物が出土しておらず、この竪穴の状況は際立つ。いくつかを抽出した。

壺　底部を除いてこれが図示されたすべてである。17は口端部内面を肥厚させ、かなり下がった位置に突帯を巡らせる。頸部は長く、外面に多条の沈線を付し、その直下にも施文する。北九州・下関周辺によく見られる土器である。18～20はC字形にカーブする口頸部・球形に近い胴部など城の越式としてよく紹介される形態を有する。

甕　55～59・61・64に示す土器が当該期の典型として挙げられる資料である。口端部外面に粘土帯を付して断面を逆L字形に成形する。断面三角形に仕上げる例は本地域では乏しいようである。底部は一般的には極度の肉厚・上げ底にするが、この点は随分と弱められて表れる傾向がある。52～54などは旧態を残して如意形口縁となるが、胴部の張り、口径・器高の比率に



第97図　壺形土器変遷図（1/8）



第98図　甕形土器変遷図（1/8）

おいて前者が大きくなる点で前代のものと異なる。

Ⅳ期（中期前葉）

本遺跡の竪穴出土資料を充てた。

壺　口縁形態には彎曲しつつ大きく開く広口のものと鋤先状となるものとがある。前者は口端部が小さく肥厚して上方につままれる例が多い。67号竪穴出土例のように水平に近い平坦面となるものもある。29のように内面に突帯を巡らせるものもある。鋤先状口縁を有するものは器形の大小によってやや形態が異なる。28・29は大の部類にはいる唯一の例であるが、広口壺の口縁部内面を肥厚させたと言うべき様相を呈する。小型壺は直行して開く頸部の上端に平坦面を付した形となる。いずれにしても内側への突出はまだ小さいものが多い。

甕　口縁部が内面に稜をもって「く」字形に屈曲するタイプ、そしていわゆる鋤先状となるものとがある。「く」字形口縁を有するものは口端部が断面方形になる例、上方につまみ出されて跳ね上げ状になる例、口縁部外面が小さく膨らむ例などがある。鋤先状口縁をもつ例は上面が水平に近く、内側への突出も小さい。胴部はいずれも口径に近くなり、張りをもつ。

以上、今まで公表された資料を用いて前期中葉から中期前葉にかけての土器の変遷をⅠ～Ⅳ期に分類してみた。同一竪穴出土の土器群を検討なしに一括とするなどの手続き上の問題や筆者自信の不勉強も災いして不備な点が多々あると思う。たとえば、Ⅲ器に比定した14号竪穴出土の甕の口縁形態は板付遺跡(註3)では中期前葉―ここで言うⅣ期に相当―としている。そうした点の検討も含めて今後の修正・補塡を待ちたい。

ii）地域性について

この問題に関しても資料の絶対量の不足は否めないところである。ここでは大きく前期・中期に分けて若干の指摘を行いたい。

前期（Ⅰ・Ⅱ期）の土器

中葉に比定した小型壺の一群は弥生文化の流入からさほど時期を経ておらず、当然ながら福岡平野のそれに近似する。しかし、後葉に近くなると壺の胴部は極度に張りを持つようになり、北九州・関門地域の形態に近くなる。施文原体に二枚貝の腹縁を使用する点も彼の地の特徴である。甕では後葉に至っても長胴化するものの旧態を留め、文様は発達しない。80号竪穴出土例に見る刺突文はやはり東方の影響であろう。

以上の他に、大井三倉遺跡の亀の甲タイプの甕、83号竪穴の下城式と思われる口縁部片、74号竪穴の朝鮮系無文土器の小片など、各地との交流は確実に行われていた。

中期（Ⅲ・Ⅳ期）の土器

中期初頭、いわゆる城の越式に典型的な口端部を断面逆L字形に仕上げる甕はこの地域では必ずしも大勢を占めてはいない。また三角形に仕上げる例はより希少となる。本遺跡自体当該期の遺構が希薄であった可能性も排除できないが、比較的近くに位置する古賀町花見遺跡・同浜山遺跡の資料と比較すればかなり異なっている。本遺跡では依然として如意形口縁甕そして「く」字形口縁が主流といえる。また、やはりこの時期の特徴である極端に肉厚で側縁が強くくびれる上げ底の底部も本遺跡では特徴が薄められた形で表れるのみである。

前業にいたっても鋤先状口縁・「く」字形を呈し端部をつまむ跳ね上げ口縁が混在するが、今後統計的な処理も必要になろう。

以上、簡単に見てきたように、この地域では弥生文化が波及してほどなく、より東方との関係を強めるようになる。西方の人々が大陸を志向してこの地を含む東方を顧みなかったものかあるいは先進地域としての西方に吸収されることを恐れてこの地の人々が東方を志向したものか。現在から見ればこうした状況がやがて甕棺墓の風習する地域外に位置づけされることにもつながり、青銅器分布圏からも取り残されることになる。もちろん背景として可耕地の狭さ、生産力が乏しかったであろう点も大きな要因である。

iii）竪穴と住居跡

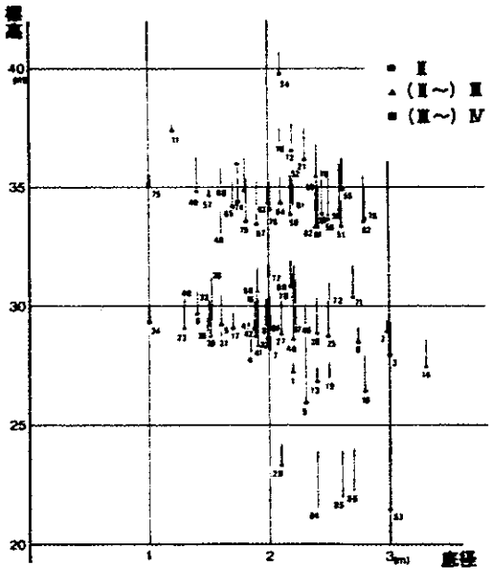
竪穴

竪穴の形態について少しまとめておく。

床の平面形は円形を基本とするが、歪んだものや長円形を呈するものがかなりある。時期的、位置的な偏りは見られない。

床面の規模（直径）は１～3.3mの中に収まり、特に1.8～2.6mの範囲に集中する。この点に関しては概して古いものほど大きく、新しい例が小型化する傾向が窺える。また、市内曲香畑遺跡(註６)では底径３m前後の規模の例が多いのに比してより小型である。

深さに関しては削平の程度もあるので参考とはしがたいが、良好に遺存する５・85号竪穴を見てみよう。５号竪穴ではフラスコ状部分の高さが1.9m、それ以上に直径0.



第99図　竪穴法量・垂直分布図

第1表　冨地原梅木遺跡竪穴遺構一覧表

遺構番号	地区	床面形状	底径(m)	深さ(m)	出土遺物	時期	備考
1	B	不整円形	2.2	0.3	土器	Ⅱ～Ⅲ	
2	B	〃	2.9	0.4	〃	Ⅱ	
3	B	円形	3.0	1.3	〃	Ⅱ	P3→P7→P14
4	B	不整円形	1.8～1.9	0.6	〃		
5	B	円形	2.3	2.7	〃	Ⅱ	
6	B	不整円形	2.6～2.8	0.6	〃	Ⅱ	
7	B	〃	1.7～2.4	0.6	石鏃丁		P3→P7→P14
8	B	円形	(2.0)	1.0	—	Ⅱ	P8→P22
9	B	〃	1.4	0.9	土器	Ⅱ	
10	B	不整円形	2.1	0.6	—		底に浅い土坑
11	B	〃	1.2	0.2	〃	Ⅱ	袋状呈せず
12	B	円形	2.2	1.1	〃	Ⅱ	
13	B	〃	(2.4)	0.5	〃	Ⅱ	
14	B	〃	3.3	1.1	〃（1箱）	Ⅲ	P3→P7→P14
15	B	長円形	1.3～1.9	1.2	〃（1）	Ⅱ	
16	B	円形	2.0	1.3	〃		
17	B	〃	1.7	0.6	〃（1）砥石、石鏃丁	Ⅱ	P42→P17・P24
18	B	〃	2.8	1.4	〃（1）	Ⅱ	
19	B	〃	2.5	0.7	—		
20	B	〃	2.1	0.8	土器(1)	Ⅱ	
21	A	〃	2.3	1.3	〃	Ⅱ	床に小ピット10個
22	B	〃	～0.8	1.2	〃（1）	Ⅳ	P8→P22
23	B	〃	1.4	1.0	〃	Ⅲ	P41→P23
24	B	〃	1.0	0.5	〃（1）	Ⅳ	P42→P17・P24
25	B	〃	2.5	1.4	〃（1）	Ⅱ	
26	B	円形？	—	1.0	〃	Ⅲ	
27	B	不整円形	2.1	1.3	〃	Ⅲ	
28	B	円形	2.4	1.4	〃	Ⅲ	
29	B	円形？	—	0.4	—		
30	A	長円形	2.3～2.6	1.4	土器	Ⅱ	P53→P30 P30→SB4
31	B	〃	1.2～2.0	0.2	—		袋状呈せず
32	B	円形	1.5	1.1	—		
33	B	〃	2.0	1.6	土器	Ⅳ	P46→P33
34	B	〃	2.0	1.3	〃	Ⅱ	
35	B	〃	1.5	0.6	〃	Ⅱ	
36	B	〃	(1.5)	0.3	〃	Ⅱ～Ⅳ	P37・P38→P36
37	B	円形？	(2.2)	1.3	〃	Ⅱ～Ⅳ	各遺構に分離できず量
38	B	円形	1.9	1.4	〃	Ⅱ～Ⅳ	も少ない
39	B	〃	1.5	1.3	〃	Ⅲ	
40	B	〃	1.3	0.2	—		袋状呈せず
41	B	長円形	1.8～2.0	1.9	土器	Ⅱ～Ⅲ	P41→P23

遺構番号	地区	床面形状	底径(m)	深さ(m)	出土遺物	時期	備考
42	B	円形	1.9	0.9	土器	Ⅱ	P42→P17・P24 P42・P43は分離できず切合不明
43	B	円形？	—	0.9	—		
44	B	円形	(2.0)	1.0	土器	Ⅱ	P44 P47→P41→P23
45	B	〃	2.3	0.9	—		
46	B	〃	2.2	1.6	土器	Ⅱ	P46→P33
47	A	〃	1.9	0.9	—	Ⅱ	P44 P46→P41→P23
48	A	〃	1.6	1.1	—		
49	A	〃	1.4	1.4	土器	Ⅲ	
50	A	長円形	2.5~2.7	1.9	〃	Ⅱ	床に溝あり
51	A	円形	2.6	1.0	〃 (1)	Ⅱ	
52	A	長円形？	2.2	1.1	—		P52→P58
53	A	円形	2.6	1.8	土器、砥石	Ⅱ	P53→P30
54	A	〃	2.1	0.9	〃	Ⅱ	
55	A	〃	2.6	1.2	〃	Ⅳ	P57→P55
56	A	〃	2.5	1.6	〃	Ⅱ	
57	A	〃	1.5	0.2	—	Ⅱ	P57→P55
58	A	〃	2.4	1.2	土器	Ⅱ	P52→P58
59	A	〃	2.2	1.6	〃	Ⅱ~Ⅲ	P55→P59
60	A	不整円形	1.6	0.7	—		
61	A	円形	2.4	0.9	—	Ⅱ~Ⅲ	P64→(P61→P63)
62	A	〃	2.4	1.4	土器	Ⅱ~Ⅲ	
63	A	〃	2.0	0.6	〃	Ⅲ~Ⅳ	(P61→P63)
64	A	〃	2.1	1.0	〃		P64→P61
65	A	扁円形	1.7	1.0	〃	Ⅲ	
66	A	円形	1.9	0.9	〃	Ⅳ	
67	A	〃	0.9	1.7	〃、管玉	Ⅳ	P79→P67
68	A	〃	1.8	1.3	〃		P76→P68
69	A	〃	2.2	0.9	—	Ⅱ~Ⅲ	
70	A	〃	2.2	0.8	土器	Ⅱ~Ⅲ	P70→SBII
71	A	〃	2.7	1.3	〃、球状土製品		(P72→P71)
72	A	〃	2.5	0.8		Ⅱ	(P72→P71)
73	A	〃	2.8	1.8	〃、石庖丁	Ⅱ~Ⅳ	
74	A	隅丸長方形	1.5~2.0	1.4	〃 (2)	Ⅳ	
75	A	円形	1.0	0.4	〃	Ⅱ~Ⅲ	
76	A	〃	2.4	1.3	〃		P76→P68
77	A	〃	2.0	0.4	〃	Ⅲ~Ⅳ	
78	A	〃	2.0	1.1	〃	Ⅳ	
79	A	不整円形	1.8	1.8	〃	Ⅱ	P79→P67
80	A	円形	2.2	1.0	〃 (2)	Ⅱ	(P71→P80)
81	A	〃	2.5	1.7	〃 (1)太型蛤刃石斧	Ⅱ	P82→P81
82	A	長円形	2.8	1.9	〃	Ⅱ	P82→P81
83	C	〃	~3.0	2.9	〃、太型蛤刃石斧	Ⅱ	(P85→P83)
84	C	不整円形	2.4	2.3	—		
85	C	円形	2.6	2.0	土器		(P85→P83)
86	C	不整円形	2.7	1.9	—		床に柱穴

8mの筒状部分が0.9m続く（上半の開く部分は壁が崩落したと見なした)。85号竪穴ではそれぞれが1.5m、0.5mと同じような形態となる。もっとも理解しやすい例である。しかし、5号竪穴に隣接する4・9号竪穴では、壁の立ち上がりこそ内傾するが、0.6m・0.9mの高さが残るにすぎない。一方で5号竪穴の存在からみて大きく削平されたとは考えられない。したがって、いわゆる袋状竪穴に上記のような異なる形態のものがほぼ同時期に存在することは疑いない。

住居跡

17棟の住居跡はいずれも遺存状態が悪く、住居跡とすることにためらうものもある。中、ここでは竪穴との同時存在が推定できる例を扱うが、遺構そのものを対象にするには資料不足であり、専ら変遷を跡付けてみたい。

竪穴との同時性が確認・推定できる住居跡は11棟あり、いずれも円形プランを有する。位置的にはA区とした主尾根上の西側にＳＢ４・６～８・９・11の６棟が、Ｂ区とした西側に派生する支丘上にＳＢ５が１棟、そしてC区とした最北部の一段低い部分にＳＢ12・14～16の４棟がそれぞれ位置する。そのほかにも柱穴の一部を確認できた19号墳・22号墳下層（Ａ区)、多数の柱穴を検出した15号墳下層（Ａ区）・Ｃ区などにも住居跡があったと考えられる。

Ａ区では各時期を通じて１～２棟の住居跡があったと推測され、地形的にみてもこの集落の中心的な位置を占める。谷を挟んで対峙する冨地原小嶺遺跡を含めて考えても、梅木遺跡の集落跡が小嶺遺跡に背を向けるように西側に集中して立地する点を考慮すれば、両者は同一の共同体を形成しているものの、単位としては別個のものであったと考えられる。

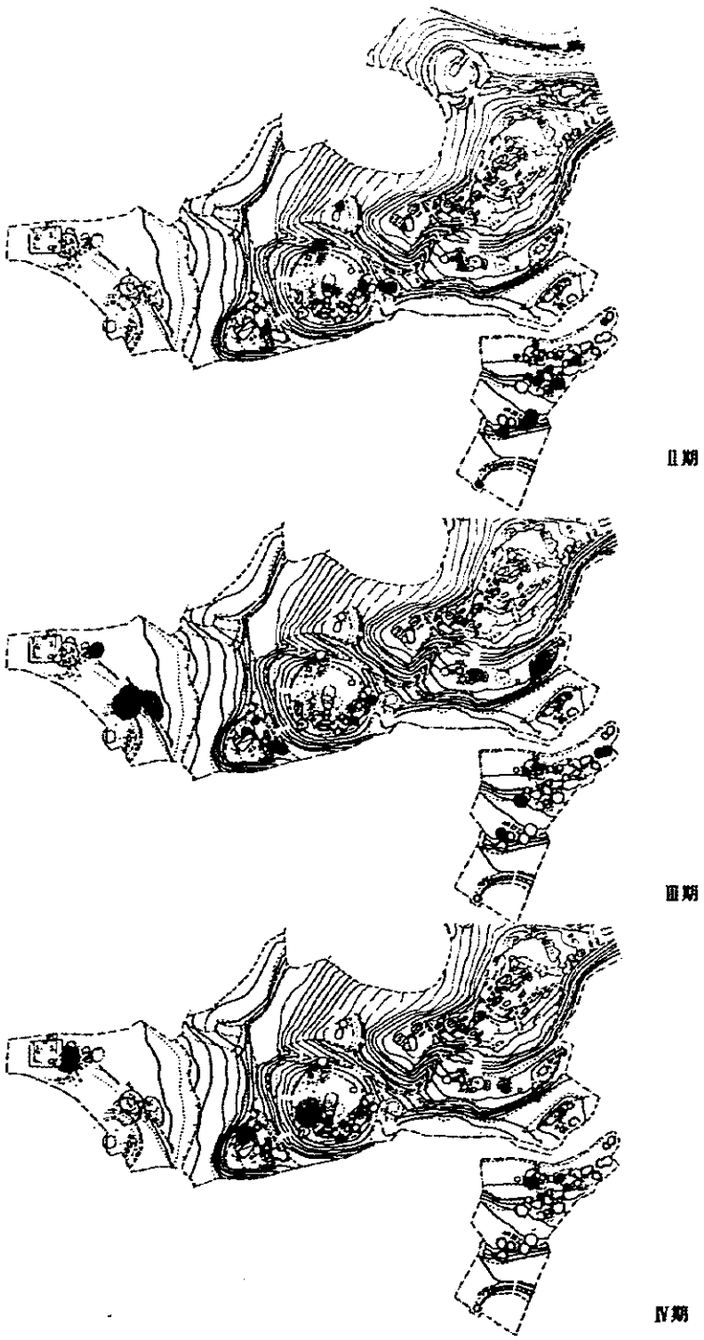
Ｂ区では住居跡としてはⅣ期に属するＳＢ５を１棟確認できたのみであるが、もちろん削平されてしまった住居跡がないと言い切れない。しかしいずれにしてもＡ区に比して集中の度合は顕著に異なる。このことはこの区画が当初は居住域とはされず、光岡長尾・曲香畑遺跡の状況に似て竪穴群のみを配置していた可能性を残す。

Ｃ区では住居跡とした遺構は４棟であるが、多数の柱穴の存在、そして丘陵がさらに北へ細く延びることから他にも数棟が存在したものと思われる。しかし、周辺地形測量図をみてわかるように尾根線は痩せており、東西は谷となって落ちることからさほどの規模は想定しがたい。竪穴の密度をみてもそうである。

第100図に住居跡・竪穴を時期別に分類

第２表　住居跡・竪穴時期別変遷表

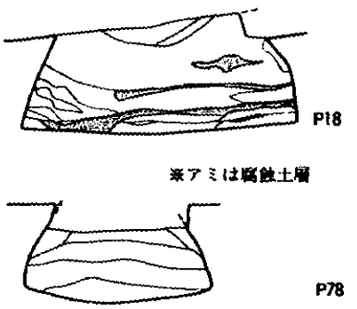
地区	時期	住居跡	竪穴
A	Ⅱ	15号墳下層	15
	Ⅱ～Ⅲ	ＳＢ６	6
	Ⅲ	ＳＢ８	2
	Ⅲ～Ⅳ	ＳＢ11	1
	Ⅳ	（ＳＢ７）　ＳＢ９	6
	不明	24・19号墳下層　ＳＢ４	10
B	Ⅱ		18
	Ⅱ～Ⅲ		2
	Ⅲ		5
	Ⅲ～Ⅳ		0
	Ⅳ	ＳＢ５	2
	不明		15
C	Ⅱ		1
	Ⅱ～Ⅲ	ＳＢ15　ＳＢ16	
	Ⅲ	ＳＢ12	
	Ⅲ～Ⅳ		
	Ⅳ	ＳＢ14	
	不明		3



第100図　住居跡・竪穴時期別配置図

してみた。

その前提として、竪穴の時期比定の問題がある。周知のように竪穴内で使用時の状態を残して遺物を出土した例はほとんどなく、大部分がごみ捨て場として役割を終えた状態で検出する。その場合は竪穴を使用した時期は厳密に言えば出土遺物の年代を遡ることがわかるのみである。一方で、竪穴を発掘すれば、埋土と地山土との区別がつかず検出に苦慮することは往々に経験することであり、大部分の埋土が地山土を掘削した直後の汚れのない土からなり、遺物を含む腐食土層が貫入していることもごくありふれた現象である（図版31、第101図）。このような竪穴内の堆積状況は意図的に埋めて塞いだと考えて間違いないであろう。一般に袋状竪穴はその名の通り断面がフラスコ状を呈し、管理を止めれば壁は容易に崩落する。群集することも考慮すればなおさら埋め戻しが必要となる。したがって埋め戻しは廃棄してほどなく行ったとするのが穏当であろう。出土遺物との時間差は一型式に想定される時間差に比べれば無視できるものといえる。



第101図　竪穴土層実測図（1/80）

また、すべての竪穴から等質に遺物を出土せず、皆無あるいは数点の土器を出土するに過ぎない場合が多々ある。前者のうちで切り合い関係を有する遺構については本遺跡で確実にⅠ期に属する遺構がないことから、Ⅱ期の遺構に切られるものはやはりⅡ期に比定した。後者の場合も強引に時期比定したが、上述したように如意形口縁の甕は小片では確定しがたいために幅を持たせ、ここでは新しい時期に含めている。

各時期を通じて言えることはⅢ期以降竪穴が激減すること、傾向として丘陵の西側に分布する点、住居跡が削平されていることを考慮しても最低単位に近い点を指摘できる。

以上、弥生時代の集落跡について簡単にまとめてみた。幾度も記してきたように集落のすべてを調査できなかったかも知れない不安と、浅い谷を挟んで東に位置する冨地原小嶺遺跡の整理が終了していないこともあって充分な検討ができなかった。機会があれば改めて考えてみたい。

iv）土壙墓群について

先述したように111基を検出しており、すでに削平された数を加えれば150基近い一大土壙墓群であったと思われる。この近くでは鞍手郡若宮町汐井掛遺跡で弥生時代後期後半～古墳時代中期にいたる（石蓋）土壙墓・木棺墓・箱式石棺墓280基が調査(註７)されており、鞍手

第3表　冨地原梅木遺跡土壙墓一覧表

遺構番号	上段		下段		切合	遺物	備考
	形	法量（長×幅×深）	形	法量（長×幅×深）			
1	隅丸長	3.3×2.2×(03)	隅丸楕	2.7×0.9×0.2		鉄戈	調査不充分
2							24号墳
3	隅張長	2.5×(1.4)×0.6	隅張長	1.7×0.6×0.2	SK35→SK3	供献土器(壺高杯)石鏃	
4	隅丸長	2.6×1.6×0.8	隅丸長	1.5×0.7×0.3			
5	＋	2.8×1.9×0.4	＋	2.0×0.9×0.5		土器多し(供献土器)	
6							3基重複欠番
7	長	2.2×(1.1)0.1			SK8→SK7		下段未確認
8	＋	2.5×1.2×0.2	楕　円	1.6×(0.7)×0.3	SK8→SK7		上段南側に意味不明の土壙
9	＋	3.0×1.1×0.1	長	1.8×0.7×0.1			下段両小口に粘土
10	—	—	＋	1.8×0.8×0.5			
11	—	—	＋	1.3×0.5×0.5	SK11→SK12		
12	—	—	不整長	1.1×0.5×0.2	SK11→SK12		
13	—	—	隅丸長	1.4×0.7×0.4			
14	—	—	矩	(1.1)×0.6×0.1			長方形に近く粘土敷く
15	—	—	隅丸長	1.4×0.6×0.3			
16	—	—	＋	1.6×0.9×0.5			
17	—	—	＋	1.3×0.6×0.4		供献土器(高杯)	石蓋土壙
18	隅丸長	2.3×(1.8)×0.5	長	1.3×0.6×0.5		管玉2(臨小土壙)	
19	—	—	不整長	1.5×0.8×0.4			
20		—	丸　長	1.1×(0.6)×0.6			石蓋土壙
21	隅丸長	2.7×(0.8)×0.2	隅丸長	2.0×(0.6)×0.1			
22	＋	2.6×1.0×0.1	長　円	2.6×0.7×0.2			
23	不　整	—		1.9×0.9×0.2			
24	隅丸長	1.8×1.7×0.6	隅丸長	1.2×0.6×0.5			削出枕
25	＋	(2.1)×1.0×0.7	長	1.5×0.8×0.4			
26	隅丸長	2.4×(1.6)×0.4	隅丸長	1.7×0.7×0.4			
27	—	—	不整円	1.5×0.6×0.3			
28	隅丸長	1.9×1.5×0.5	長	1..1×0.5×0.5			上段宗に礫1
29	＋	2.5×1.5×0.5	隅丸長	2.1×0.8×0.4	SK29→24号墳周溝		
30	＋	2.3×1.3×0.5	＋	1.7×0.5×0.4	SK30↔SK31	供献土器(壺)	
31	?	—	長	1.1×0.6×0.4	SK30↔SK31		
32	隅丸長	1.9×(1.2)×0.6	長　円	0.8×0.5×0.5			
33	＋	2.0×1.5×0.3	長	1.6×0.8×0.6			下段に傾斜する炭化物
34	＋	1.1×0.8×0.4	隅丸長	0.5×0.3×0.2			
35	＋	(1.7)×(1.0)×0.6	＋	0.9×0.4×0.2	SK35↔SK36		発掘ミスか
36	不整円	(0.8)×0.8×0.3	＋	(0.5)×0.4×0.3	SK35↔SK36	供献土器(高杯)	発掘ミスか

遺構番号	上段		下段		切合	遺物	備考
	形	法量（長×幅×深）	形	法量（長×幅×深）			
37	隅丸長	1.8×1.0×0.5	隅丸長	0.9×0.6×0.6	SK37→SK38→SK39		礫石落込む
38	長	1.8×1.0×0.5	長円	1.2×0.5×0.4	SK37→SK38→SK39		
39	—	—	楕	1.6×0.7×0.7	SK37→SK38→SK39		
40							25号墳
41	隅丸長	1.9×(1.0)×0.3	隅丸長	1.1×0.4×0.4	SK41→SK42		長下段の主軸が異なる
42	〃	(1.4)×1.1×0.1	〃	0.8×0.4×0.3	SK41→SK42		
43	〃	1.7×0.8×0.2	〃	1.1×0.4×0.3	SK43→SK45	石製片	下段上端、両長側に粘土
44	—	—	長	0.9×0.4×0.3	SK45→SK44		刷出枕
45	—	—	隅丸楕	1.5×0.2×0.4×0.2	SK45→SK44		
46	—	—	隅丸長	1.1×0.3×0.3			中程に段(0.1m)
47	—	—	長円	1.1×0.4×0.2	SK74→SK47	羽状文土器小片	
48	—	—	隅丸長	1.9×0.9×			コーナーの1角に段
49	(0)	(0)	〃	1.6×0.5×0.5			
50	—	—	〃	1.1×0.5×0.4			
51	—	—	長円	1.7×0.5×0.4			
52	丸長	(2.7)×1.6×0.5	矩	2.7×0.9×0.2	SK52→SK26(?)		土師器出土？
53	隅丸長	2.1×1.3×0.3	隅丸長	1.2×0.4×0.5	SK54→SK53	鉄鏃	刷出枕、蓋の嵌り込みあり
54	〃	2.3×1.5×0.2	隅丸楕	1.8×0.3～0.7×0.5	SK54→SK53		粘土塊落込み
55	—	—	隅丸長	1.2×0.3～0.5×0.2			
56	—	—	〃	1.8×(0.5)×0.5			
57	—	—	〃	1.6×(0.3)×0.3			
58	隅丸長	1.7×0.9×0.1	不整長	1.7×0.6×0.4		供献土器？(壺)	下段は傾る。枕？
59	—	—	〃	1.8×0.7×0.2			
60	—	—	長円	1.4×0.6×0.5	SK60→SK61		
61	不整長	2.2×1.9×0.6	隅丸長	1.8×0.4×0.4	SK60→SK61	供献土器(壺)	足位に礫石
62	隅丸長	2.6×1.4×0.5	〃	1.6×0.4×0.4			
63	—	—	不整長	2.2×0.8×0.3			発掘ミスか
64	隅丸長	2.6×(1.3)×0.4	隅丸長	1.5×(0.5)×0.4			発掘ミスか
65	〃	2.1×1.1×0.3	〃	1.5×0.5×0.3		石剣片	礫石
66	—		〃	1.7×0.5×0.4			
67	隅丸長	2.1(1.0)×0.2	隅丸楕	1.6×0.3～0.5×0.4			
68	—	—	不整楕	1.1×0.4～0.2×0.3			石蓋土壙
69	—	—	隅丸長	1.9×0.7×0.2			
70	隅丸長	(1.9)×(1.6)×0.4	〃	1.5×0.8×0.2			
71	〃	2.3×(0.7)×0.3	〃	1.5×0.6×0.5		供献土器(壺)	
72	〃	2.5×(0.7)×0.3	〃	2.1×(0.4)×0.1			下段は小口に傾り頭位に粘土
73	〃	2.0×1.2×0.3	〃	1.3×0.6×0.2			発掘ミスか
74	不整	(2.1)×1.7×0.2	〃	20.×0.6×0.3	SK74→SK47		
75	不整長	(2.0)×(1.0)×0.2	〃	1.5×0.5×0.3～0.5	SK74→SK75	刀子・石剣片	

遺構番号	上段		下段		切合	遺物	備考
	形	法量（長×幅×深）	形	法量（長×幅×深）			
76	—	—	不整長円	1.5×0.5×0.3			
77	隅丸長	(2.3)×1.3×0.8	隅丸長	1.9×0.6×0.6			刎出枕あり
78	＋	1.5×1.0×0.4	長	1.1×0.5×0.2			
79	不整長	2.5×1.6×0.4	楕	1.8×0.2～0.5×0.4		供献土器(壺)	
80	隅丸長	2.4×2.0×0.5	隅丸楕	2.0×0.3～0.5×0.4～0.3	ＳＫ81→ＳＫ69	供献土器(壺)	
81	—	—	隅丸長	(0.8)×0.8×0.3	ＳＫ82→ＳＫ83		
82	不整長	1.2×0.8×0.1	隅丸楕	0.9×0.2～0.4×0.2	ＳＫ82→ＳＫ83	供献土器(壺)	
83	—	—	隅丸長	0.7×0.4×0.1			
84	不整長	1.8×0.8～1.3×0.2	＋	1.5×0.5×0.2			刎出枕
85	—	—	＋	1.3×0.5×0.3			
86	—	—	＋	1.1×0.7×0.4			発掘ミス
87	隅丸長	1.6(1.2)×0.1(最上段)	＋	0.7×0.3×0.2			3段崩？
88	＋	1.9×0.6×0.1	隅丸楕	1.7×0.4～0.1×0.3			下段が片よる
89	—	—	長円	1.2×0.2×0.2			
90	—	—	隅丸長	1.1×0.7×0.1	ＳＫ91→ＳＫ92		張り出し？
91			＋	2.2×0.6×0.4	ＳＫ91→ＳＫ92		
92	—	—	隅丸楕(？)	1.9×0.4×0.2			
93	不整長	2.3×1.6×0.2	(—)	(—)		供献土器(壺)	発掘ミス
94	—	—	隅丸長	1.1×0.3×0.1			
95	隅丸楕	(2.0)×0.8～1.3×0.2	＋	1.7×0.6×0.3			
96	—	—	＋	(1.7)×0.8×(0.2)	ＳＫ96→ＳＫ65・ＳＫ72	供献土器(壺：所在不明)	層4　不明瞭
97	—	—	＋	1.7×0.5×0.3			
98	隅丸長	2.2×1.2×0.3	＋	1.5×0.4×0.2			
99	—	—	＋	(　)×1.2×0.3	ＳＢ６に切られる？		
100	—	—	＋	1.7×0.4×0.2			
101	—	—	長円	0.7×0.3×0.1			
102	隅丸長	2.0×1.5×0.2	隅丸長	1.0×0.4×0.4			部分的に3段
103	＋	2.8×1.6×0.3	不整長	2.2×0.8×0.2		磨製石鏃２	
104	不整長	3.1～(2.0)×2.1×0.2	隅丸楕	1.2×0.3～(0.5)×0.3	貯蔵穴を切る		層位発掘ミス
105	隅丸長	(2.7)×2.4×0.5	隅丸長	2.1×0.9×0.3			3段崩りか
106	＋	(1.8)×1.4×0.2	＋	1.7×0.7×0.3			
107	＋	1.8×1.8×0.3	＋	1.1×0.4×0.1	ＳＫ107→ＳＫ108		部分的に3段
108	＋	0.9×(0.6)×0.1	＋	0.5×0.3×0.4	ＳＫ107→ＳＫ108		
109	＋	3.1×2.0×0.5	＋	2.7×0.8×0.2	ＳＢ16に切られる		足位に粘土層位に刎出枕
110	＋	(2.2)×(1.0)+0.2	＋	2.0×0.7×0.2			下段は片よる、床中央に小ピット
111	—	—	楕	1.8×0.4～0.7×0.2			
112	隅丸長	(2.2)1.2×0.4	隅丸長	1.6×0.4×0.5			19号墳下層
113	—	—	隅丸長	1.0×0.4×0.7			
114	—	—	隅丸長	1.1×0.6×0.3			石敷土壙

町高木遺跡では弥生時代前期末～中期中葉にかけての土壙墓群等37基が調査(註８)されている。やや離れた所では行橋市下稗田遺跡で（石蓋）土壙墓・甕棺墓・箱式石棺墓等約250基(註９)が、同前田山遺跡では土壙墓174基・甕棺墓49基などの調査(註10)が実施され、やはり大部分が弥生時代中期に比定されている。甕棺墓では筑紫野市・小郡市などで数百基単位での調査が行われているものの、弥生時代中期の土壙墓群としては県下でも有数の規模である。

造営の時期

埋土中から前期に属する小片が出土しているが、直ちに土壙墓に伴うという状況ではなく、周辺に該当する時期の生活跡が密集して存在することからみて混入と考えている。

供献された土器から推して造営時期は弥生時代中期におさまるものであるが、特異な形態の土器が目立つ。ＳＫ３のような筒形の頸部を有するもの、ＳＫ30・31ように無頸あるいは短頸の形態で鋤先状の口縁部を有するもの等である。

口縁形態のみに注目するならば、５号土壙墓出土例が発達の度合・円形浮文の存在からみて中期後葉に比定できるものであり、93号土壙墓例もそれに近い時期の特徴を有するがより先出的である。他の壺は胴部の張りが強く、最大径部が中位にあること、頸部が締まることそして鋤先状口縁があまり発達していないことなどから須玖Ⅱ式の中でも古相に近いと考える。高杯も相似た口縁形態・脚部の発達度から同様の時期に属するものであろう。

上記のように比定するならば、生活跡と墓地の造営の間に時間的な空白はなくなり、生活の場を放棄して後に墓所と定めた、あるいは墓所を設定したがために生活の場を移動したものといえる。後者の想定がより実情に近いであろう。

墓地群の形成は、ＳＫ79・80出土の土器がＳＫ５・30・93等から出土した土器よりも古相を示すことすから、大きくみて北から南へと拡大して行ったと思われる。群の構成は一連の規制の枠内にあるといえ、比較的短期間に造営を終えたものであろう。ただ、墓壙の形態に連続的な変移・規則制等を認めることはできず、詳細は不明と言わざるを得ない。

土壙墓の配列

全体に痩せた尾根上に位置するために主軸は方位によらず等高線に添ったものとなり、したがって全体を見れば主軸方向に規則性をもって配列する格好となる。しかし、現状では列から大きく外れる例がある。ＳＫ50・51・67、そして15・17・19号墳周辺の数基である。先の３基は位置的にかなり下位にあるとはいえ、周辺が古墳築造時・開墾時に大きく改変されており当初から孤立した存在であったとは言い切れない。それに対して上記の古墳周辺の土壙墓はすでに住居跡・竪穴群が存在していることから尾根上の一群とは距離を置いて造営されたといえる。

尾根上の群は大きく見れば列状に配置する。配列の乱れは南端の一群、および24号墳下層の

一群で顕著に見られる。北端の一群についてはいずれも墓壙が一段である点で共通する。4基は長軸が1.1～1.4mと小型の部類に属するがＳＫ10のように長軸が1.8mを測る成人用と見られる例があり、一概には言い切れない。

24号墳下層の土壙墓群は位置的には最高所にあり、平坦面がもっとも広い地点でもある。等高線自体が本来は弧を描いていたためもあって、土壙墓の主軸方向も大きくはそれに従う。中で顕著に主軸を違えるものにＳＫ31・37・39・43・44・47・95等がある。これらはＳＫ39・95が1.6・1.7mの長さを有するものの、他はいずれも1.1m以下の小型の土壙墓である。また、15号墳下層のＳＫ108も同様である。以上のように見てくると異なる主軸を採用する土壙墓に小型―幼児あるいは小児用に供された例が多いという傾向が窺えよう。先にも記したようにすべてが幼少児ではなく、成人用と目される例もいくつかある。ＳＫ10・39・95等であり、またＳＫ13・15もその可能性がある。一方で、多くと同じ主軸を採る幼少児棺も多数存在するという事実もある。このような現象は甕棺墓群にも通有の事であり、葬法は異なるとはいえ、葬制としては共通点が少なからず存在したことを示す。

ＳＫ１は群の中にあって主軸を直行させる大型土壙墓として特異な存在である。が、それは副葬品として希少な鉄戈の出土によって裏打ちされるものである。先にも記したように占地面では決して他を圧する位置にはないが、鉄戈を所有しうる階層であるというその存在を誇示するために、集団内の規制を乗り越えた結果と考えられるのである。

出土遺物について

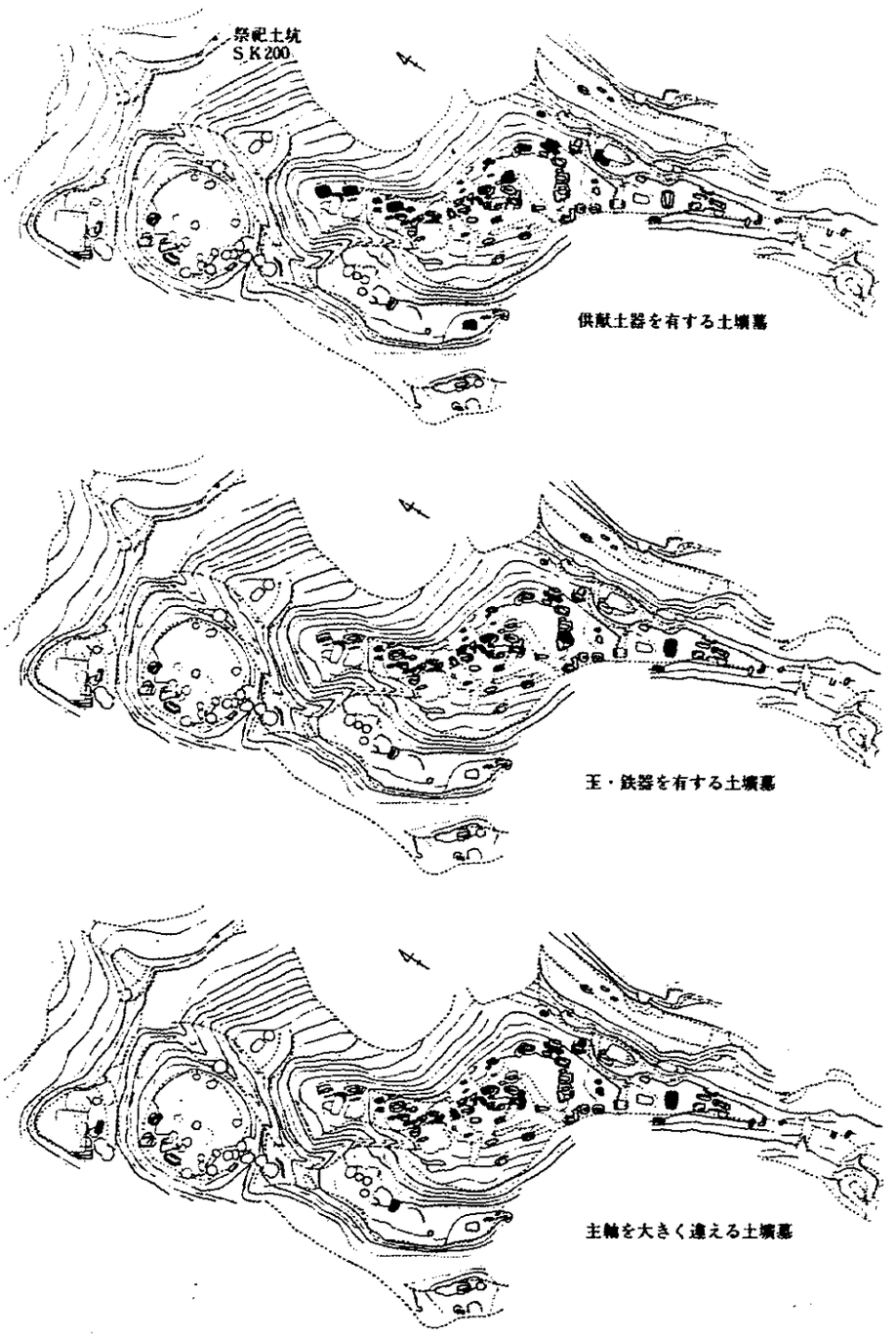
出土遺物は概して乏しい。確実に副葬されたものは鉄戈（ＳＫ１）・鉄鏃（ＳＫ53）・刀子（ＳＫ75）・管玉（ＳＫ18)、そして個別の土壙墓に供献された土器群である。

ＳＫ３出土の石鏃は床面よりやや浮いて、被葬者の胸部付近から出土していることから戦いの犠牲者の体内にあったものかもしれない。ＳＫ43・103出土の磨製石鏃は残存する部位・墓壙埋土上層から出土したことなどからそれぞれ混入、あるいは副葬に関わるものと考えられる。また、ＳＫ65・75出土の石剣片は残存する部位・破損の状態から混入と考えてよかろう。

ＳＫ53出土の鉄鏃は後期以降に出現する形式であると言う(註11)。しかし、先述したＳＫ52を除いて本遺跡では確実に後期に下る土壙墓はなく、構造的にもＳＫ53に特殊性は見られない。したがって調査の所見としてはこの鉄鏃も他の土壙墓群と同じ中期中葉ないし後葉に位置付けせざるをえない。

祭祀形態について

今回調査を行った土壙墓群に関しては、祭祀土坑ＳＫ200とした円形小土坑以外に、当該期の墓地群に一般的に付属する不定形祭祀土坑を検出していない。未調査部分を残すとはいえ、



第102図　副葬品のある土壙墓および主軸を違える土壙墓配置図

墓地群に接して営まれることが通有であり、本遺跡では設置されなかったとしてよいと考えている。9号墳南で採集した資料は土壙墓群に対する祭祀に供されたものに間違いなかろうが、これは明確な掘り込みを検出できていない。

祭祀土坑ＳＫ200は遺構配置図で見るように谷の入口部近くにあって、土壙墓群とはかなりの距離をおいており、個別土壙墓の祭祀とは考えられない位置にある。また規模からすると群全体に対するものとも思えない。検討する資料が乏しいが、ここでは思い付きの一案として「墓所として使用する行為に対して土地神の許諾を得るための行為の跡」としておきたい。もちろん中国的な買地の思想が存在していたとは思えないが、水に対すると似たような祭祀行為が行われていたことは充分予想されよう。

次に、本遺跡では土壙墓の墓壙内に壺（高杯）を供献する例が13例認められた。ＳＫ17が頭位の石蓋下に、ＳＫ82が頭位の中軸線上に、そしてＳＫ96が頭位西側にあったが、出土状態を確認できた他例ではすべて頭位の東側に規則的に埋置する（ただしＳＫ58・36では出土状態を確認できておらず、ＳＫ５は推測に基づく）。ＳＫ17・82はそれぞれ長軸が1.3・0.9mと小型の部類に属し、幼少児を葬ったものである可能性が高い。ＳＫ96は不明な点があるものの、深さ0.2mの一段墓壙からなり、それを切るＳＫ65が深さ0.6mであるのに比して浅く、やはり成人用でなかったと考えられる要素がある。したがって、数少ない例ではあるが成人に対しては頭位の右(東)側に、幼少児に対しては頭位の延長線上に供献するといった約束が存在していた可能性がある。このような例は土壙墓群を調査した鞍手郡若宮町汐井掛遺跡・同鞍手町高木遺跡・北九州市馬場山遺跡(註12)・同井手尾遺跡(註13)・行橋市前田山遺跡・同下稗田遺跡等の近隣の遺跡では確認できず、唯一知りえたものが第４図に示した市内光岡草場遺跡である。そこでは頭位の左(西)側に鋤先状口縁の壺を埋置する。供献の場所に左右の違いがあるものの同様な祭祀が行われたことが知られる。壺の胴張りが弱いことから本遺跡より少し後出的である。

供献された土器は詳細の不明なものを除くと大部分が上段墓壙中に埋め込まれた状態を示している。ＳＫ３では上段墓壙底に密着しているが、斜面の下位に位置し、墓壙の深さが不足したものと解される。また、各個体を見ると器表外面でも殊に上半の風化が著しく、かつ上半が押し潰されているものが大部分である。したがって、供献の方法としては一定程度墓壙を埋め戻した後に壺を据え、上半が露出するような状態にあったと思われる。

また壺供献の意味についてはＳＫ79・80の内面底部付近に光沢を持つ付着物があることから内容物を供えたものと解してよかろう。

ｖ）弥生時代後期～古墳時代初頭の住居跡

調査区の南端近くでＳＢ１～３を、そして北端近くでＳＢ10・13・17を調査した。いずれも削平が著しく、ベッド状遺構の一部は確認できたものの、その配置の全体を把握するに至って

いないが、「コ」字形あるいは主柱穴と直角方向の２辺に設置する形態が多い。主柱穴は詳細不明なＳＢ17を除いていずれも２本である。

時期的には弥生時代の後期あるいは古墳時代の初頭頃にかかるものと思われる。住居の廃絶後、間もなくして24号墳が造営され、再びこの丘陵は墓所として利用される。

註１．　宗像町教育委員会「石丸遺跡」（『宗像町文化財調査報告書』第４集、1980）

２．　宗像市教育委員会「大井三倉遺跡」（『宗像市文化財調査報告書』第11集、1987）

３．　福岡市教育委員会「板付」（『福岡市文化財調査報告書』第35集、1976）

４．　古賀町教育委員会「花見遺跡」（『古賀町文化財調査報告書』第４集、1984）

同上　「花見遺跡第２地点」（『古賀町文化財調査報告書』第６集、1986）

５．　同上　「浜山遺跡」（『古賀町文化財調査報告書』第１集、1982）

福岡県教育委員会「浜山遺跡Ｂ地点」（『福岡県文化財調査報告書』第62集、1982）

６．　宗像市教育委員会「曲香畑遺跡」（『宗像町文化財調査報告書』第７集、1984）

７．　福岡県教育委員会「汐井掛遺跡」（『若宮・宮田工業団地関係埋蔵文化財調査報告』—２—、1980）

８．　福岡県教育委員会「高木遺跡」（『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』—Ⅹ皿—、1977）

９．　下稗田遺跡調査指導委員会『下稗田遺跡』、1985

10．　行橋市教育委員会「前田山遺跡」（『行橋市文化財調査報告書』第19集、1987）

11．　大村直「鉄鏃」（『弥生文化の研究』９　弥生人の世界、1986）

12．　北九州市埋蔵文化財調査会『馬場山遺跡』、1975

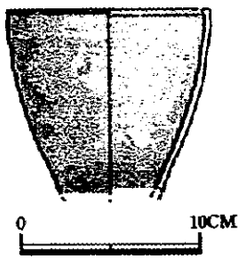
13．　北九州市教育文化事業団「井手尾遺跡」（『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第56集、1987）

補記　土壙墓ＳＫ６周辺出土の土器

冨地原梅木遺跡の遺物整理は古墳時代以降そして弥生時代とに分けて二年次にわたって行った。注記にしたがって――部は遺物を実見したが―分別したためにここに報告する土器は「ＳＫ６周辺出土」ということで今回の整理になったものである。しかし、その形態から古式に属する土師器長頸壺の口縁部でありここに改めて報告する。なお、ＳＫ６は３基の土壙墓が重複していることが判明したために欠番となっている。

図示した部分の約1/2が残存する。中位がやや膨らんで、口端部は内側へ小さくつままれる。内外全面に赤色顔料を塗布した痕跡が残る。

この土器は布留式の古い階段に属するものと思われ、数mの距離を隔てる24号墳に伴うものと考えている。先に溝ＳＤ５出土として示した二重口縁壺の残片、そして２号壺棺と同時期に属するとしてよかろう。



第103図　土壙墓ＳＫ６周辺遺物実測図（1/4）

図　版

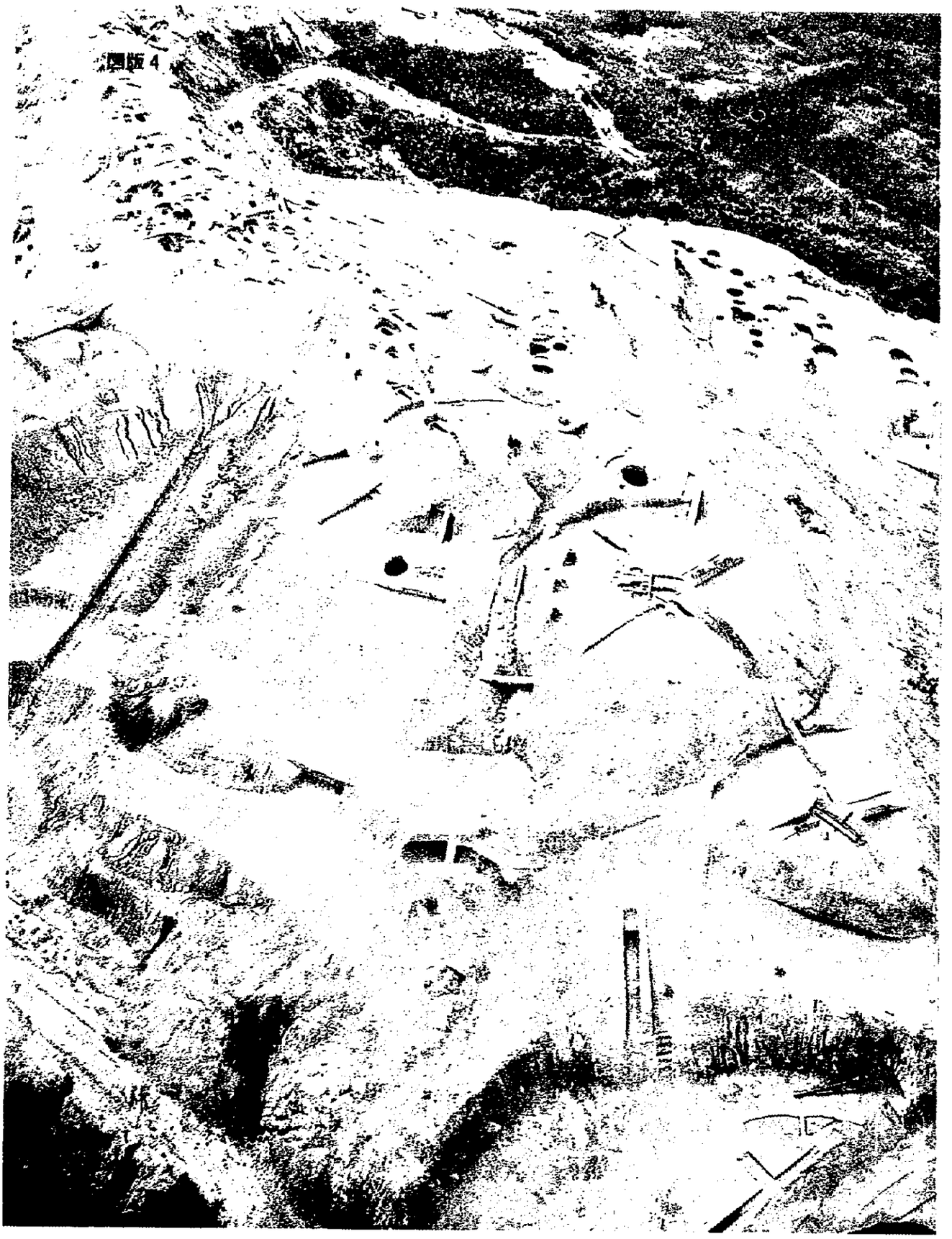
調査前全景（南上空から）

土壙墓・Ⅱ区竪穴群
（上空から）

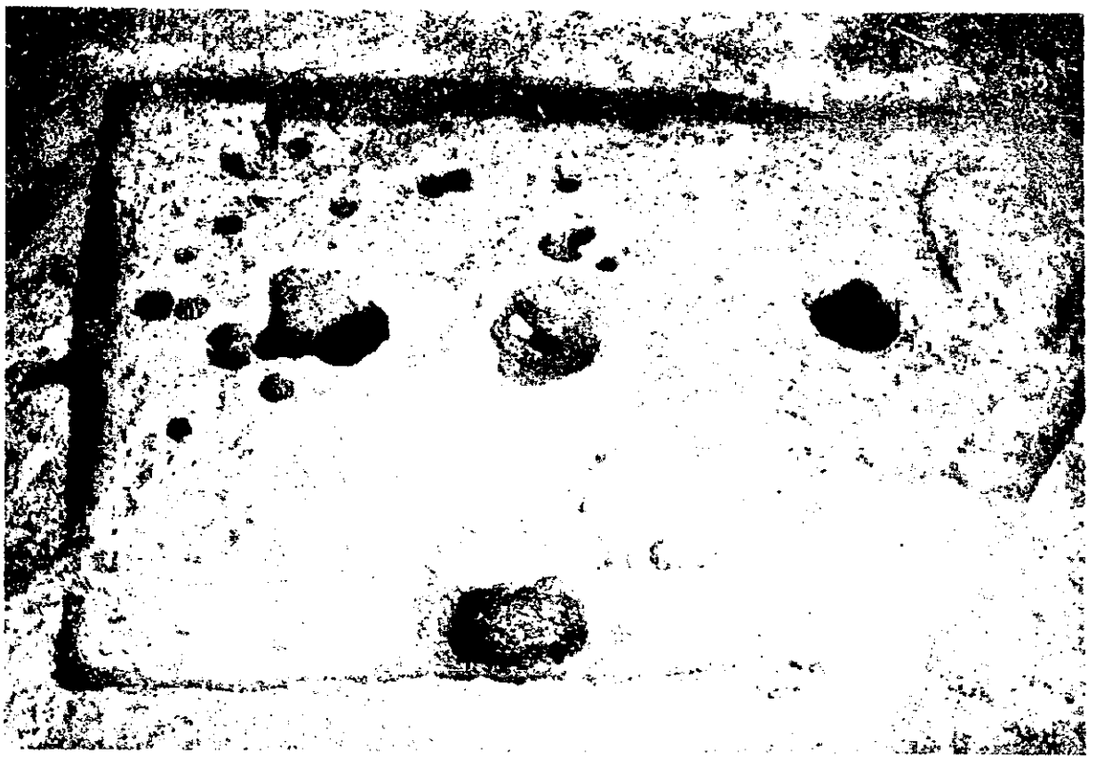
図版 2

全景（南上空から）

全景（南東上空から）



全景（北上空から）

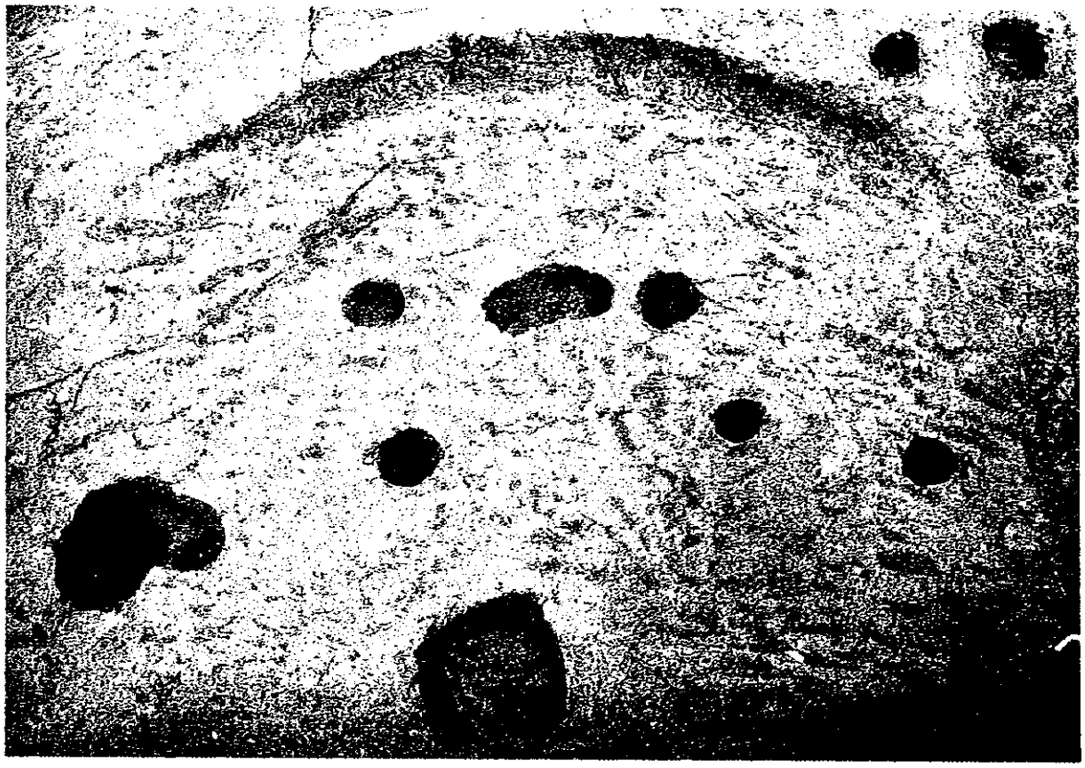


住居跡ＳＢ１（南東から）

住居跡ＳＢ２（西から）

図版 6

住居跡ＳＢ３（南東から）



住居跡ＳＢ４（北から）

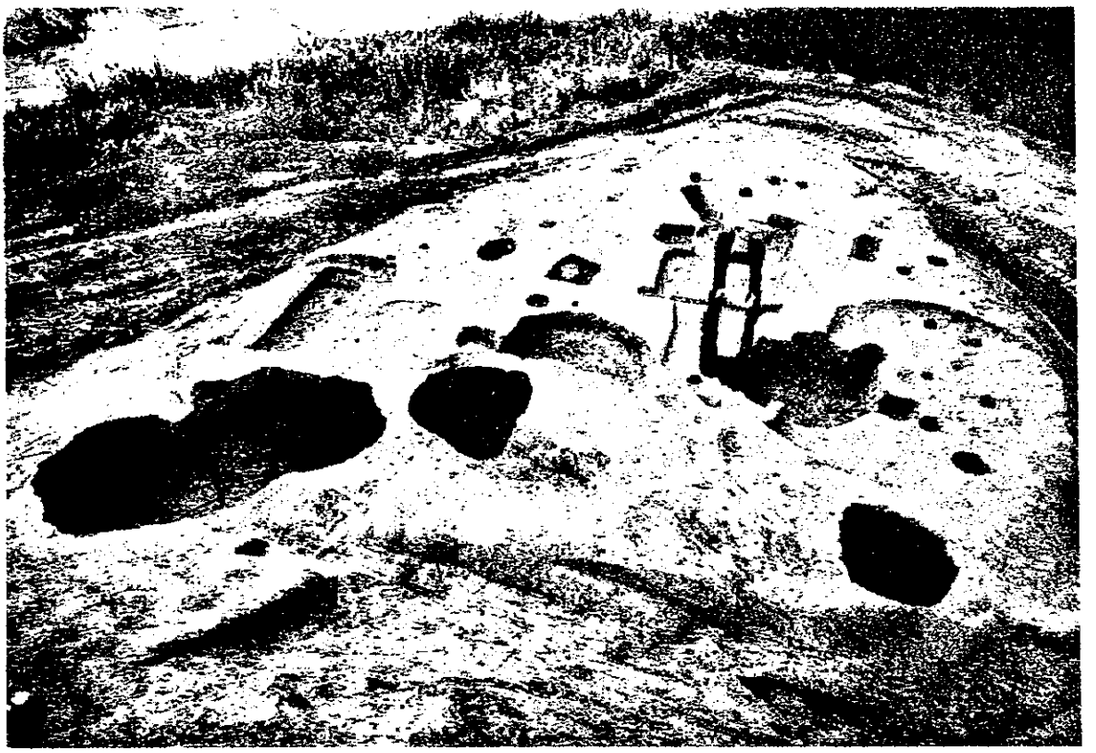
住居跡ＳＢ５周辺（北東から）

住居跡ＳＢ７・８周辺（東から）

図版 8

住居跡ＳＢ９周辺（南東から）

住居跡ＳＢ９内跡遺物出土状態（西から）



住居跡ＳＢ10・11周辺（南東から）

住居跡ＳＢ10屋内土坑遺物出土状態（西から）

図版10

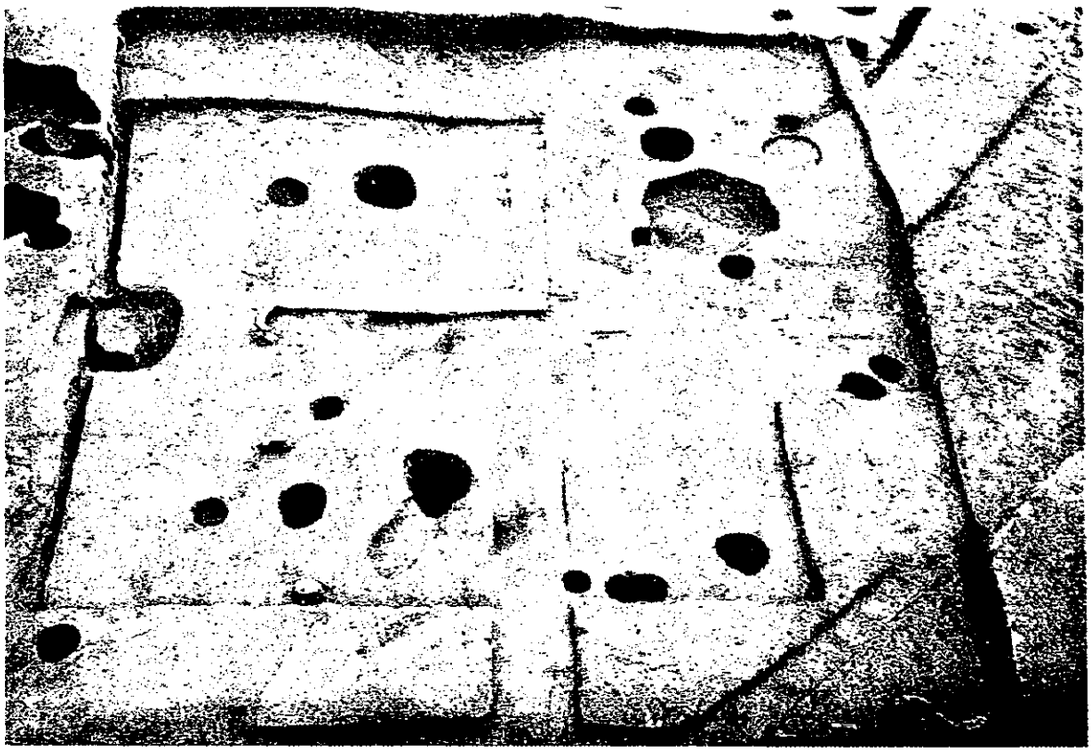
住居跡ＳＢ12～17周辺（南から）

住居跡ＳＢ12炭化材検出状態（北から）

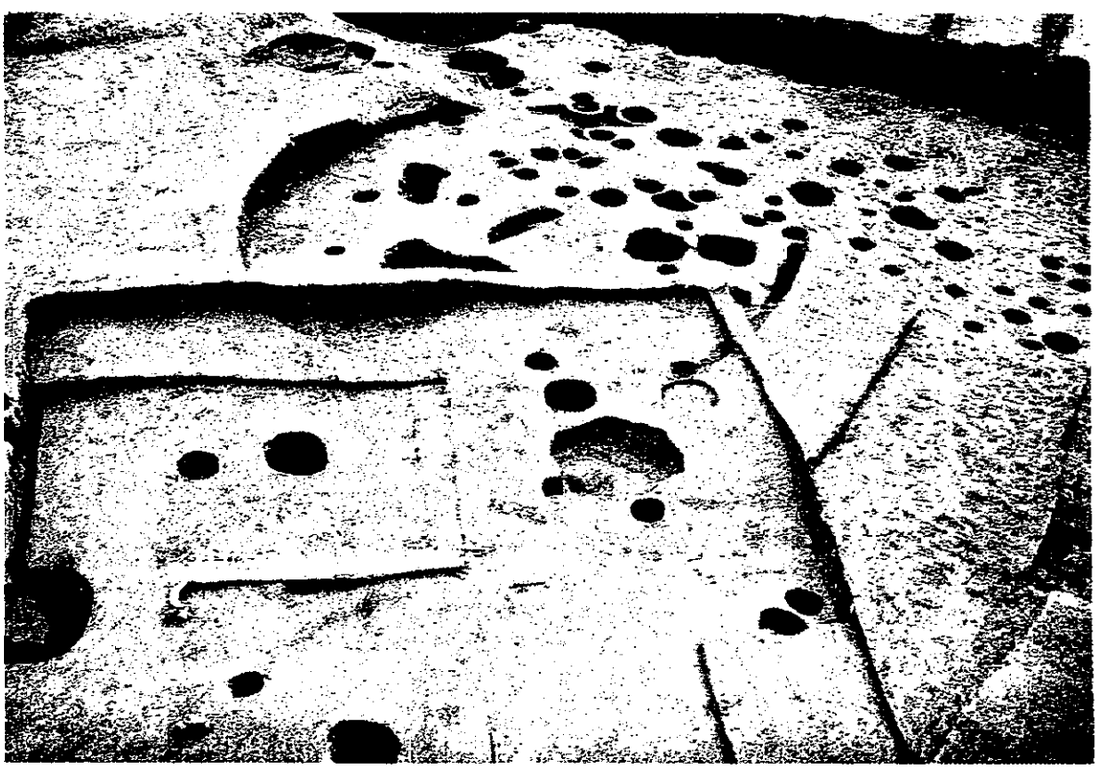
住居跡ＳＢ12炭化材検出状態（北から）

住居跡ＳＢ12（北から）

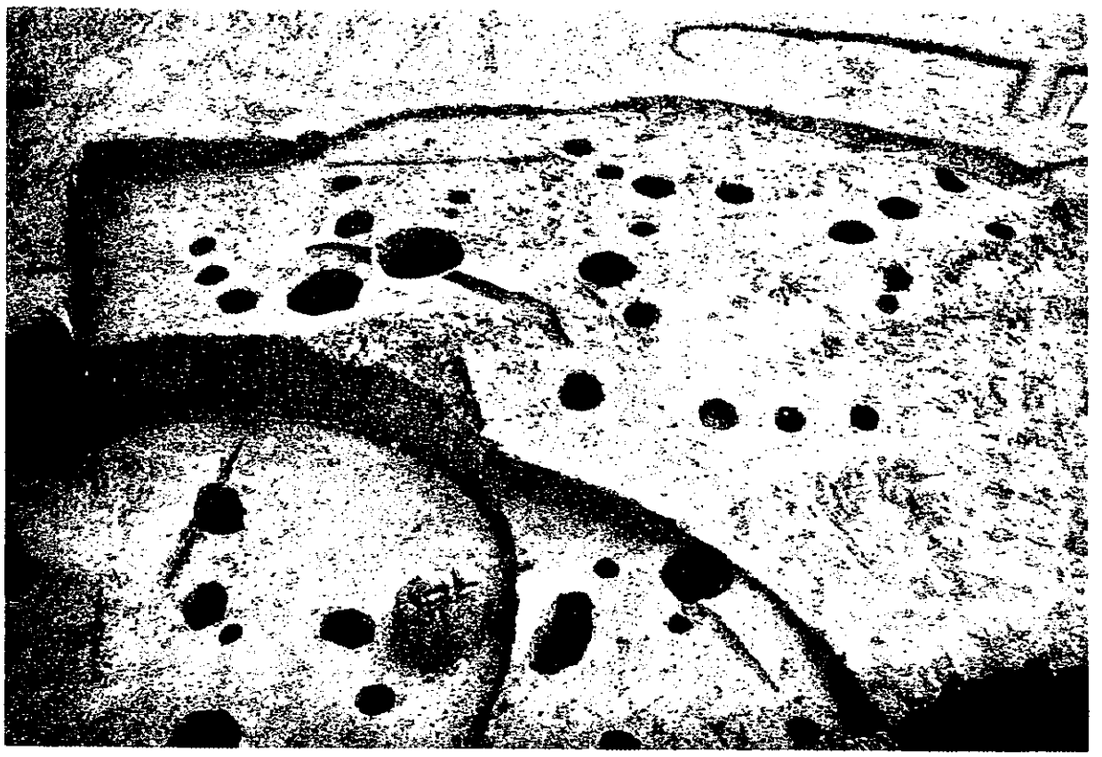
図版12



住居跡ＳＢ13（北から）



住居跡ＳＢ14（北から）

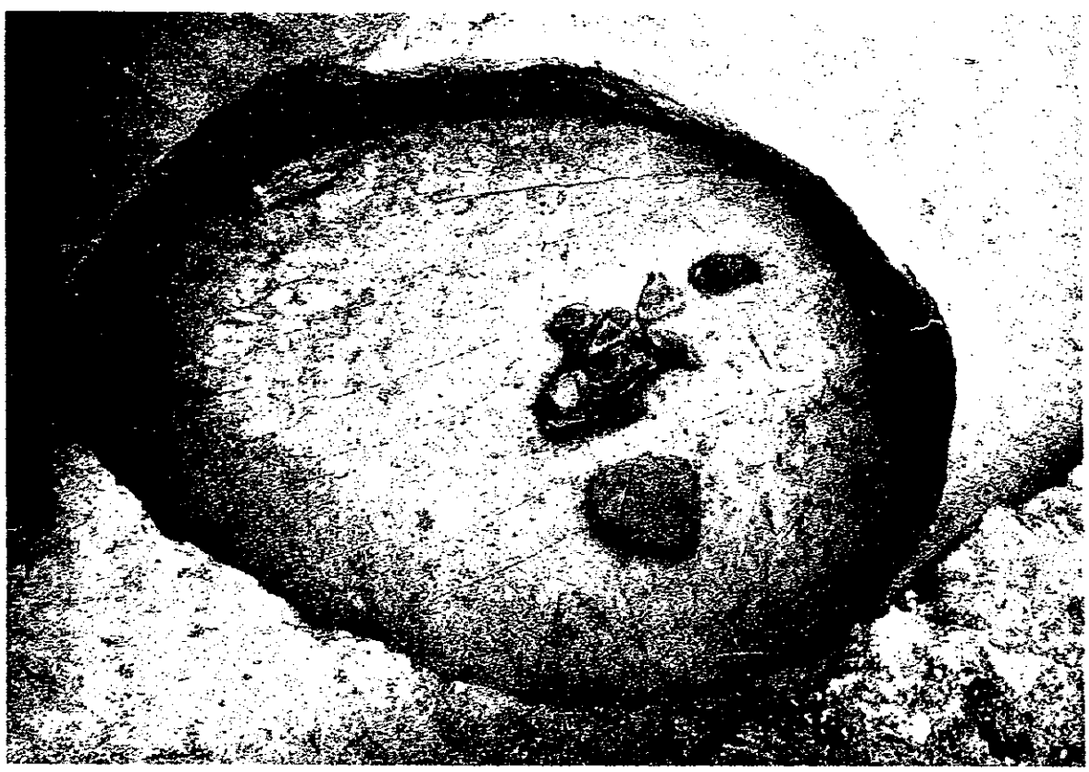


住居跡ＳＢ15（北から）

住居跡ＳＢ16（北から）

図版14

B区竪穴群（東から）

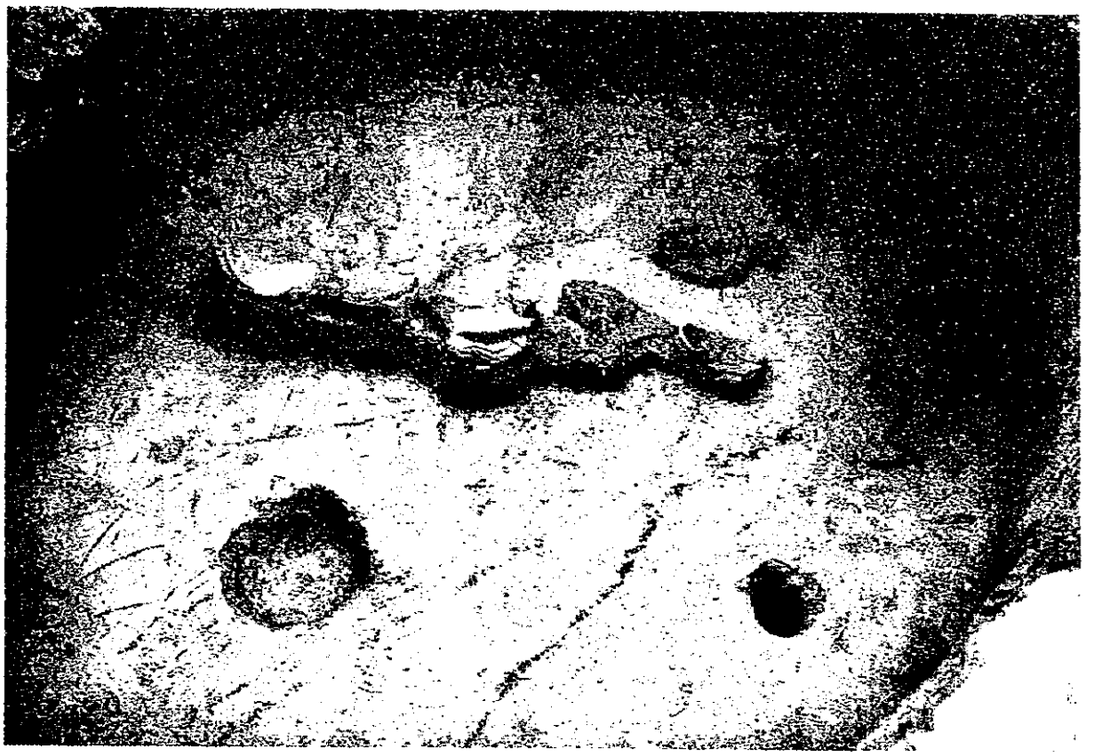


20号竪穴（南から）

23号竪穴（西から）

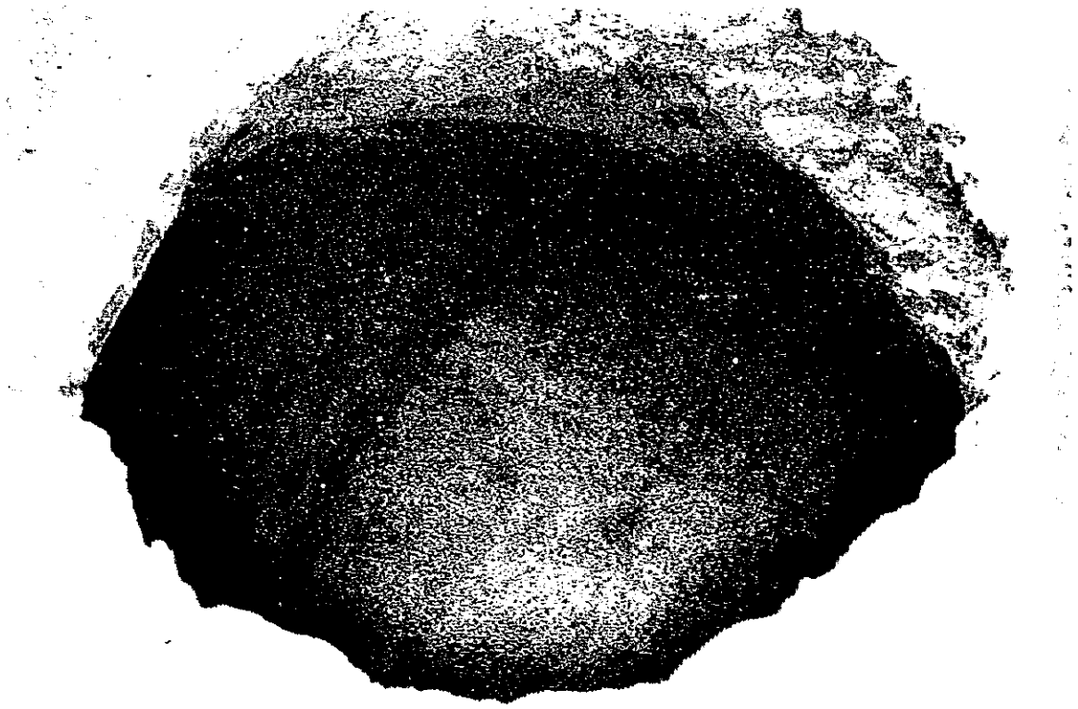
24号竪穴（北から）

図版16

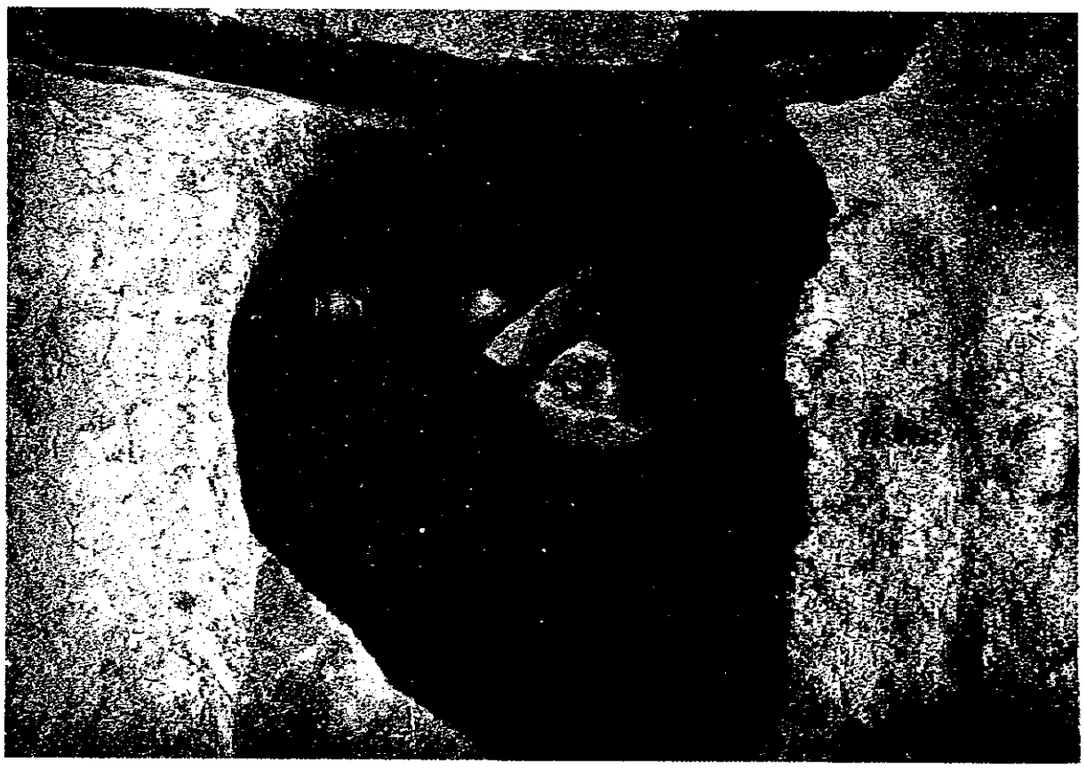


30号竪穴（北から）

33号竪穴（北から）



34号竪穴（北から）



54号竪穴（北から）

図版18

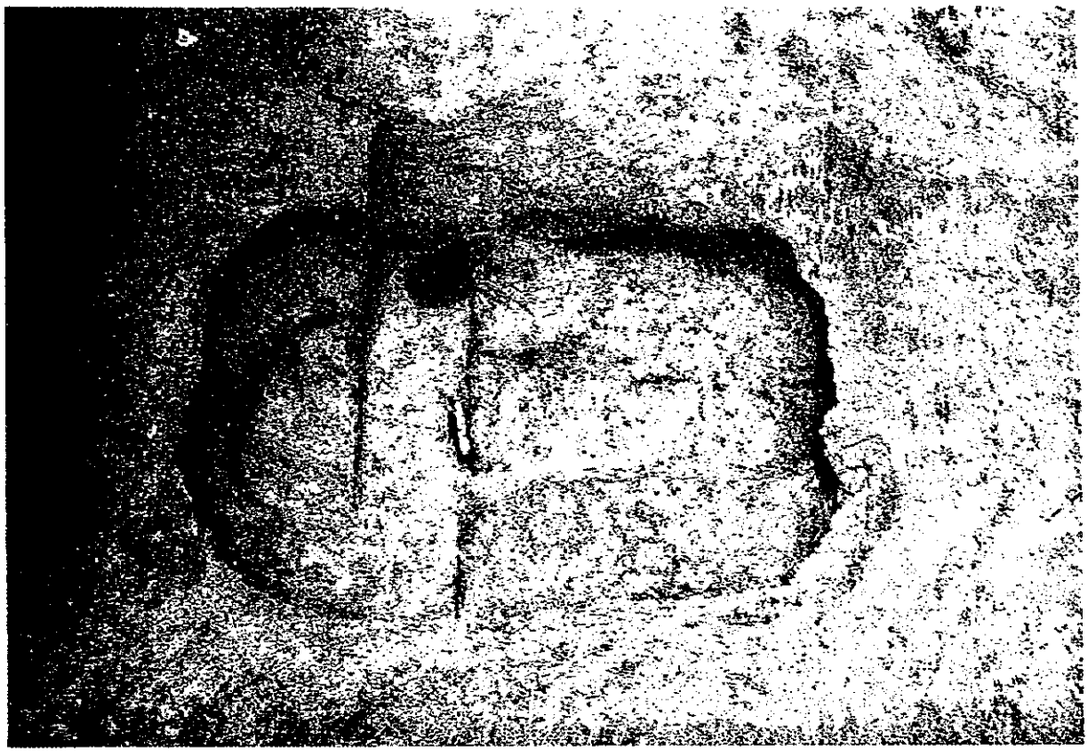
65号竪穴（西から）

80号竪穴（北から）

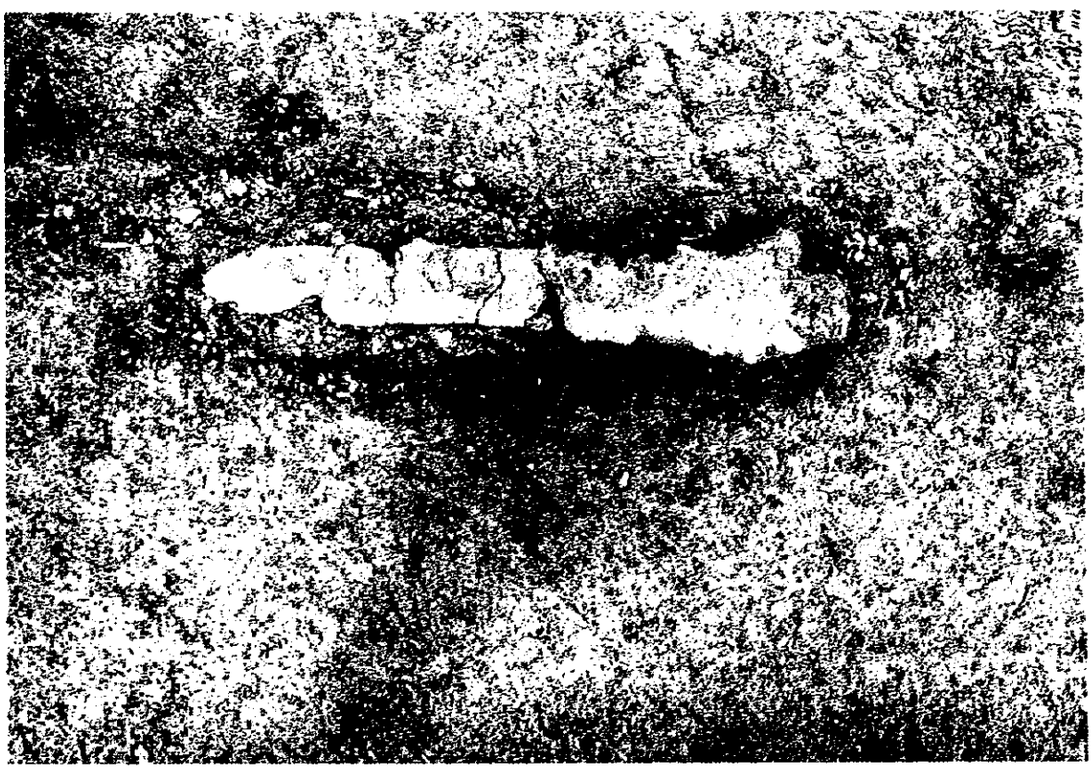
土壙墓群南端（南から）

土壙墓群南端（北西から）

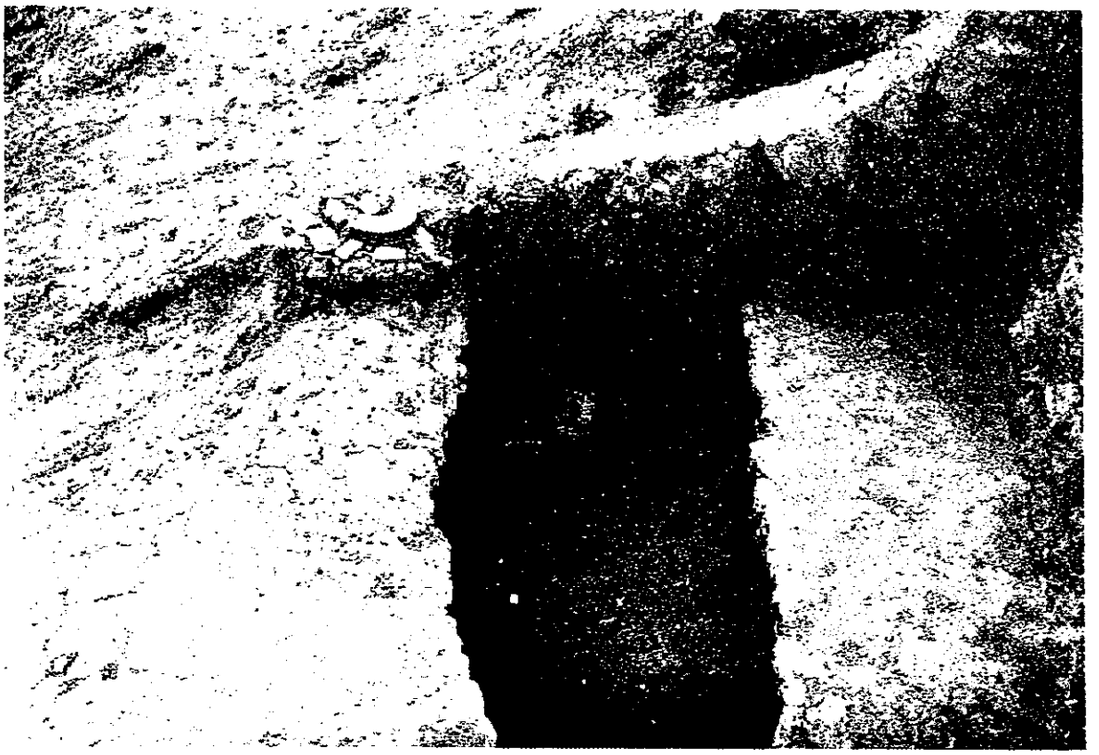
図版20



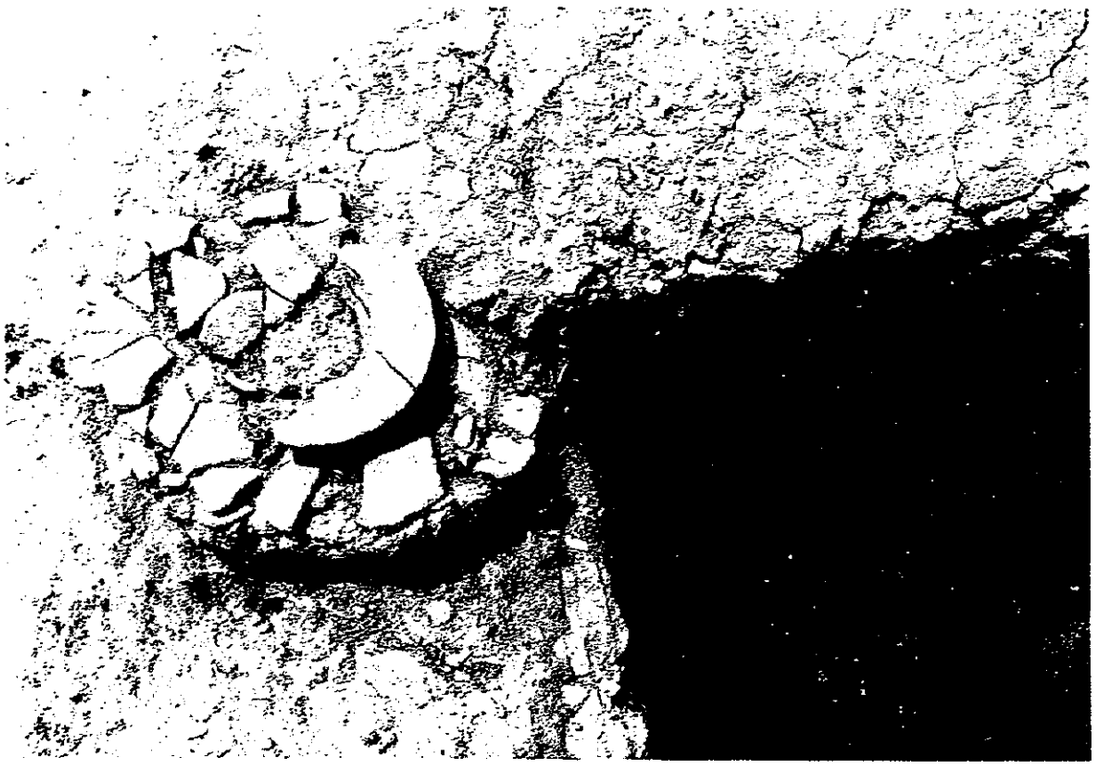
土壙墓ＳＫ１（北から）



土壙墓ＳＫ１鉄戈出土状態（東から）



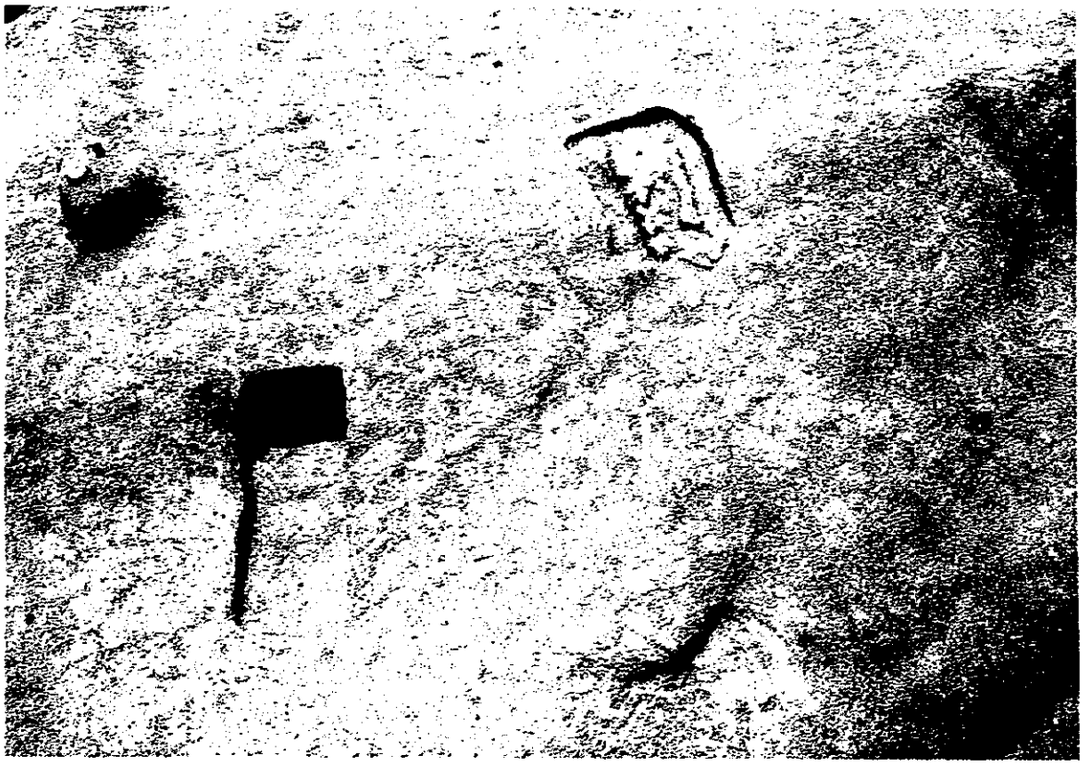
土壙墓ＳＫ３（北から）



土壙墓ＳＫ３遺物出土状態（北から）

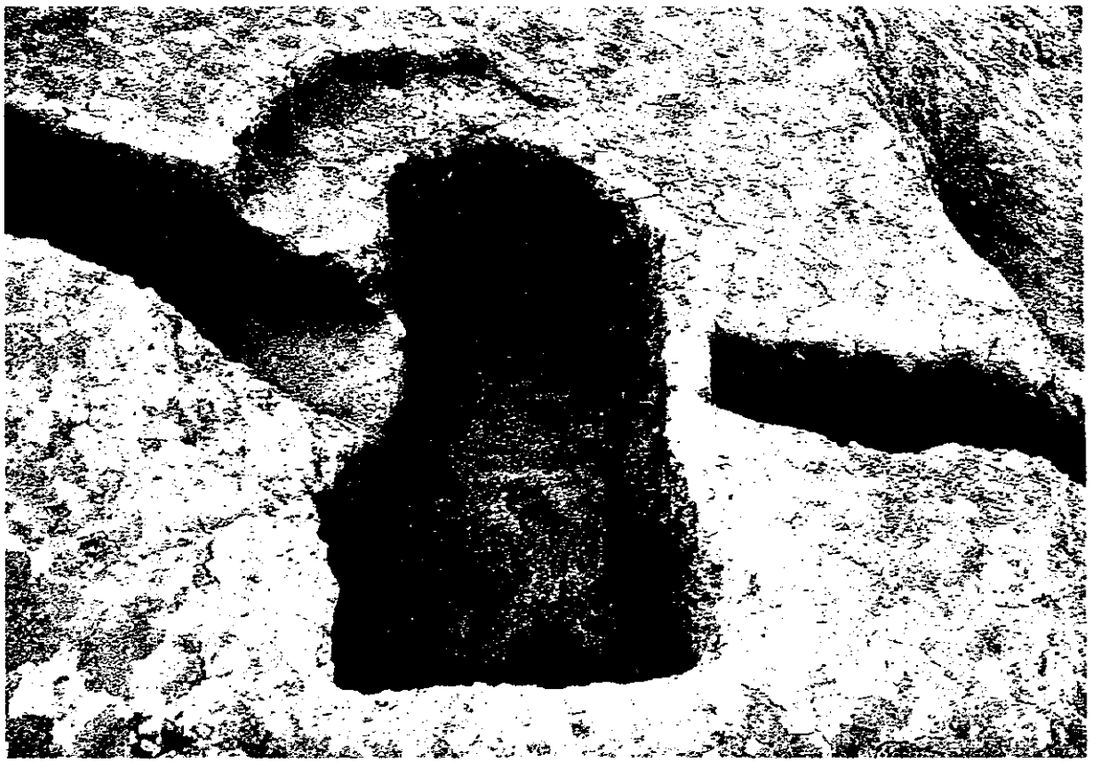
図版22

土壙墓ＳＫ22周辺（北から）



土壙墓ＳＫ14（右）・ＳＫ15（左）（東から）

石蓋土壙墓ＳＫ17（南から）

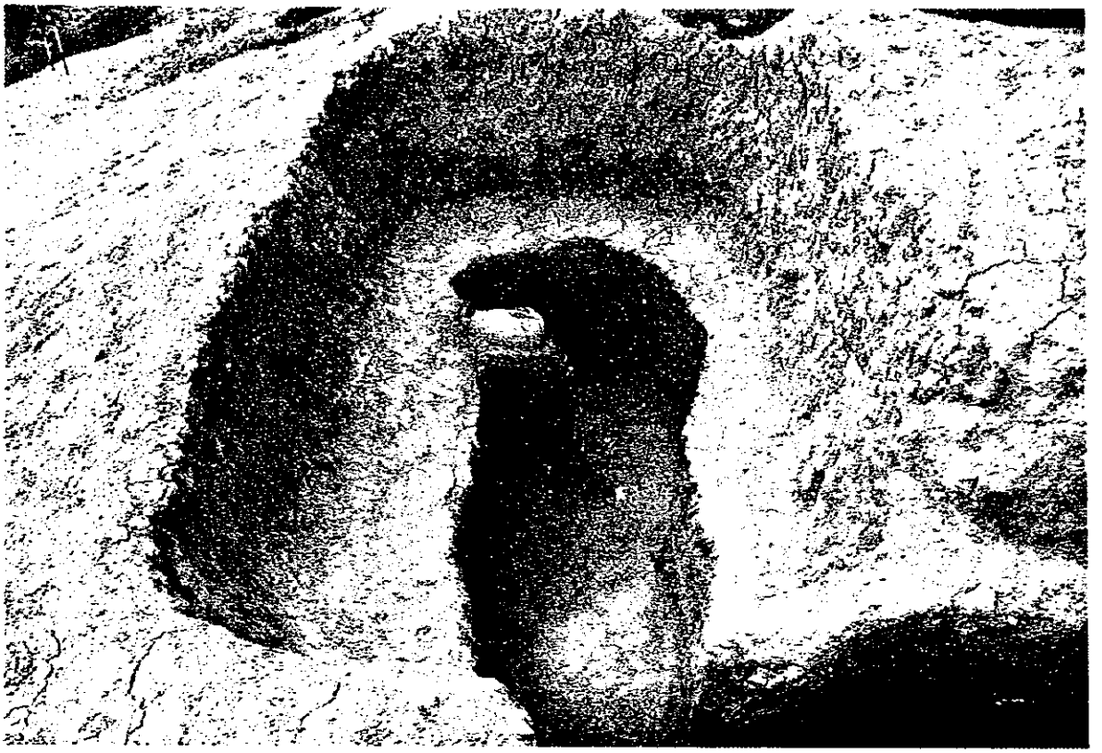


石蓋土壙墓ＳＫ17（北から）

図版24

石蓋土壙墓ＳＫ20（東から）

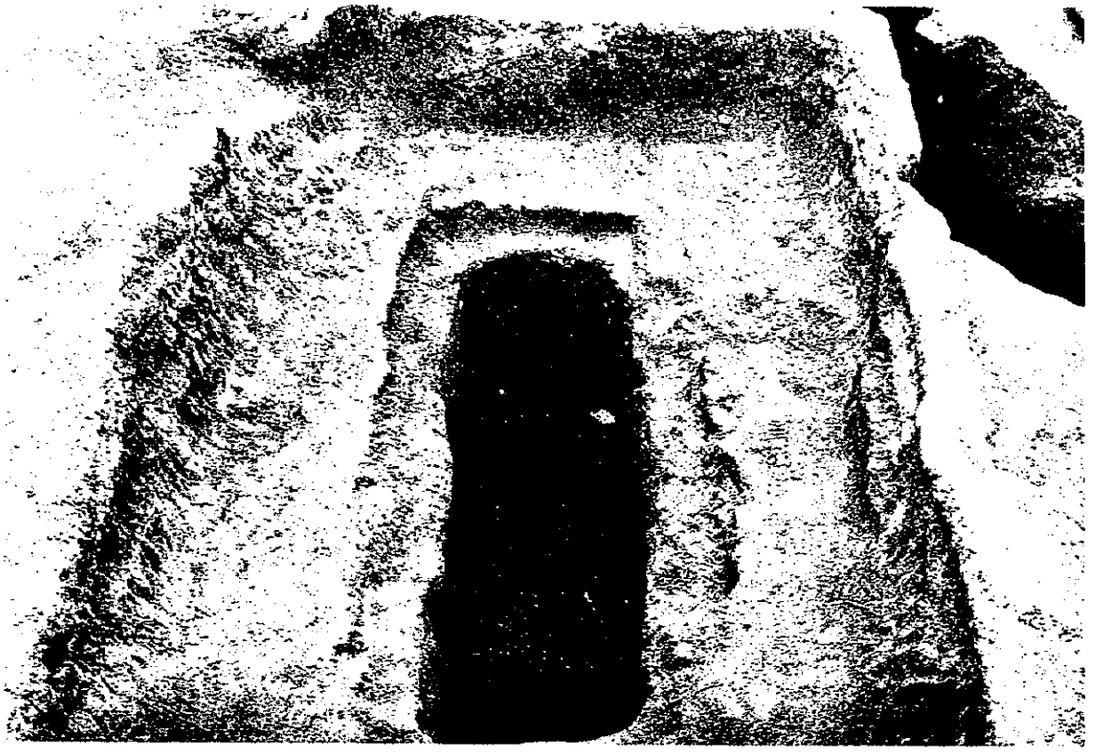
石蓋土壙墓ＳＫ20（東から）



土壙墓ＳＫ30（北から）

24号墳下層土壙墓群

図版26



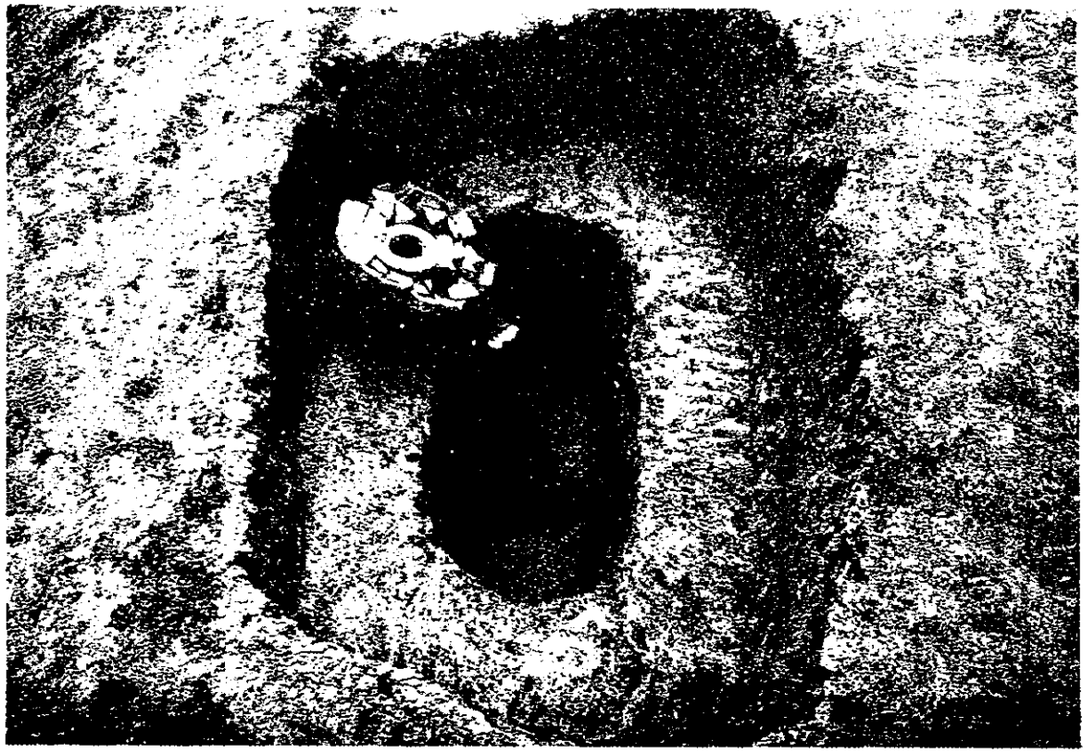
土壙墓ＳＫ53（西から）

土壙墓ＳＫ53鉄鏃出土状態（東から）

土壙墓ＳＫ54・ＳＫ53（西から）

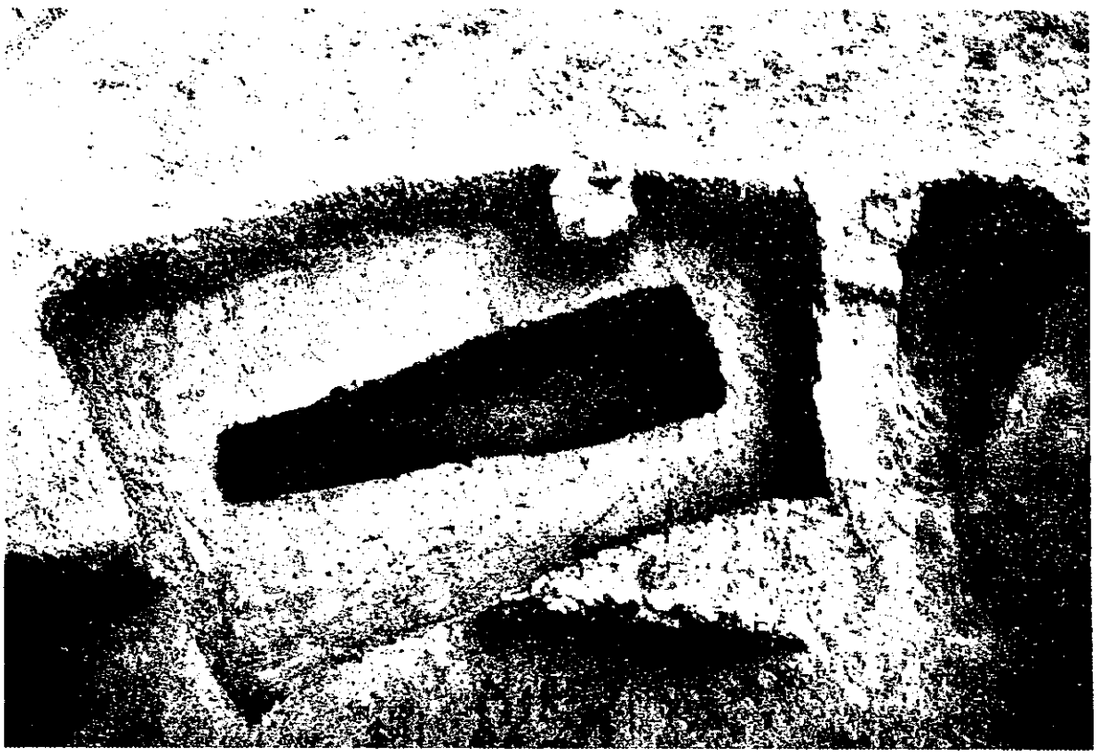
土壙墓ＳＫ53・ＳＫ54（東から）

図版28

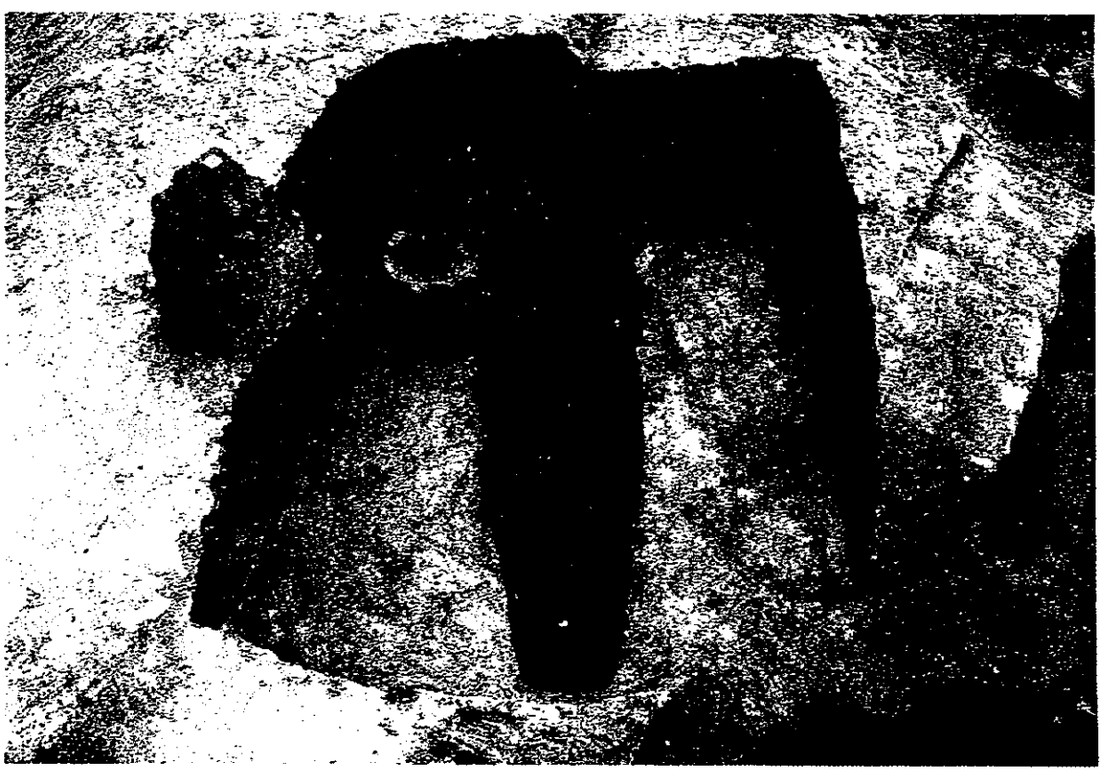


土壙墓ＳＫ71（北から）

土壙墓ＳＫ75（南から）

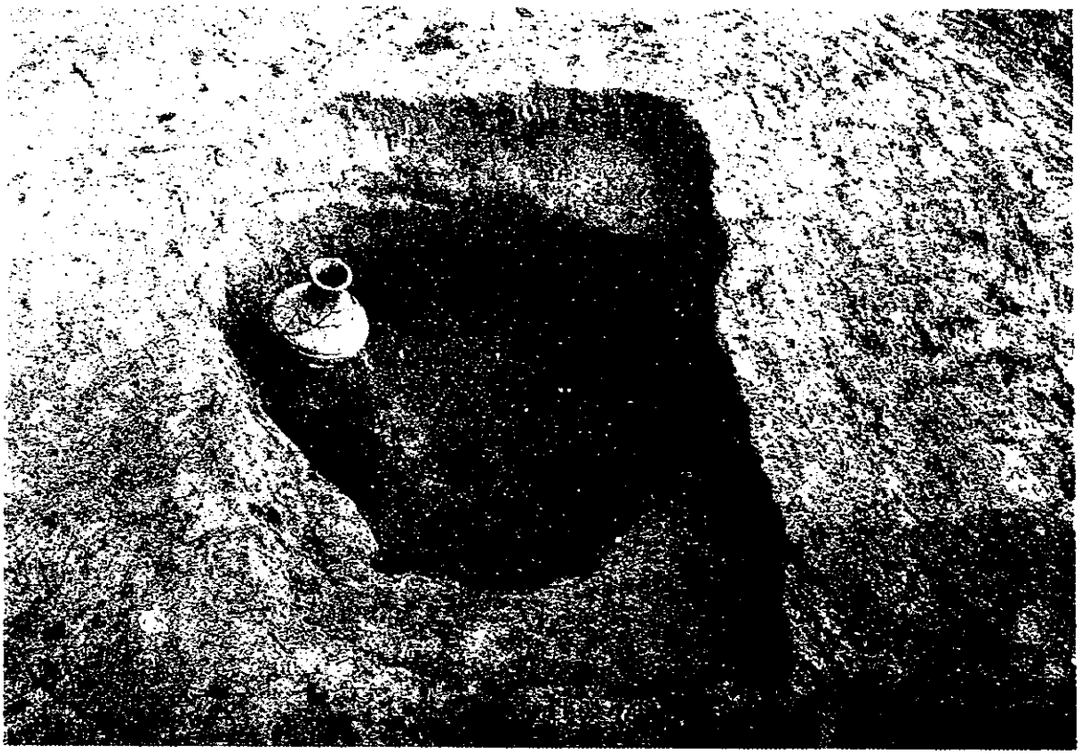


土壙墓ＳＫ79（西から）



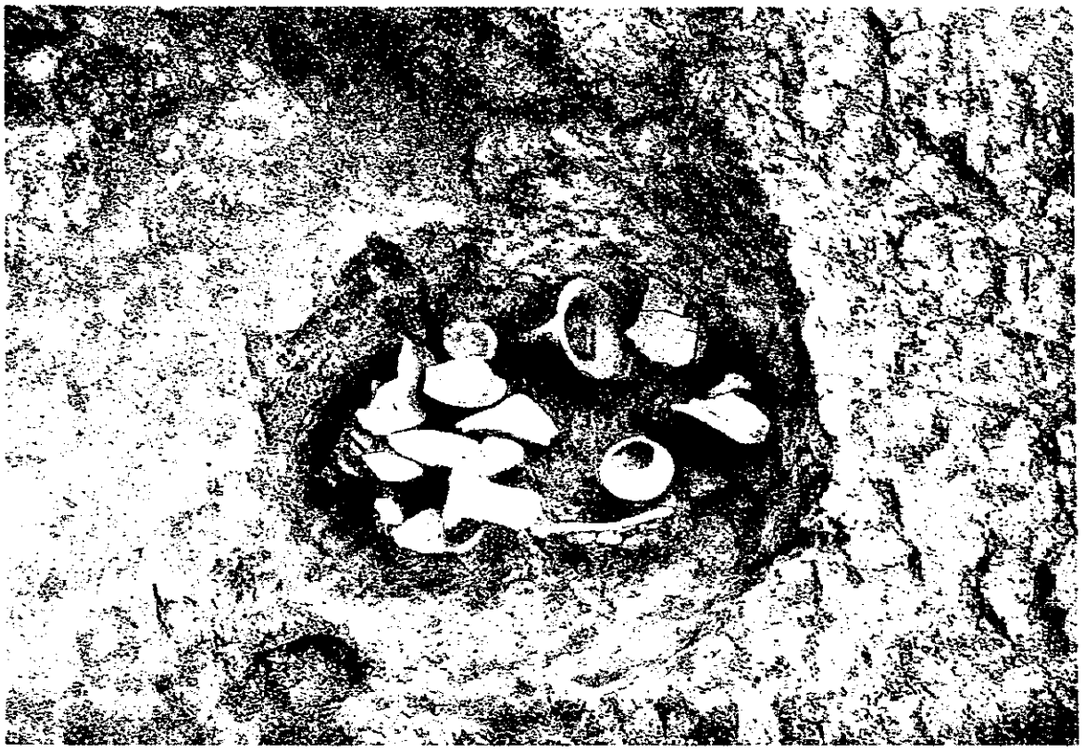
土壙墓ＳＫ80（北西から）

図版30



土壙墓ＳＫ93（北から）

甕棺墓（東から）

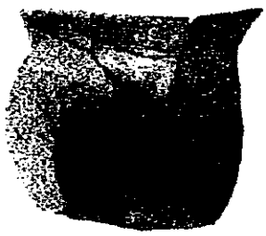


祭祀土坑ＳＫ200（北から）

18号竪穴土層

図版32

SB3—1

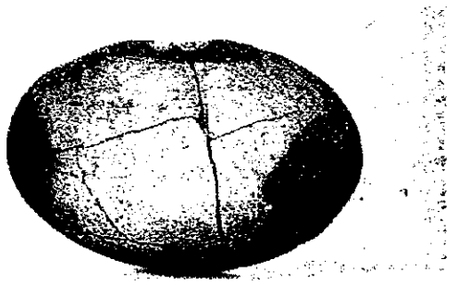


SB3—2

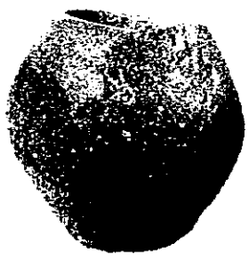
SB3—3

SB9—6

SB10—10



SB10—11



SB12—12

SB16—24

SB12—23

SB13—30

出土遺物1（住居跡）

P 2—1

出土遺物2（住居跡・竪穴）

図版34

P 3—8

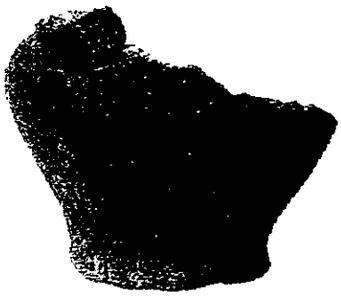
P15—39

P11—19

P15—41

P13—22

P17—44



P13—23

P18—45

P14—35

P18—47

出土遺物3（竪穴）

P 20—53

P 24—79

P 22—60

P 25—80

P 23—67

P 25—85

P 28—88

P 23—68

P 24—75

P 30—94

出土遺物 4 （竪穴）

図版36

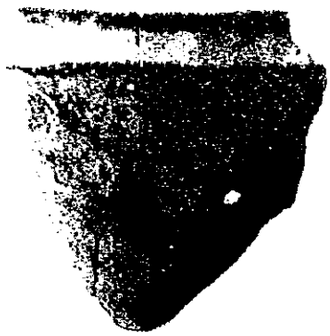
P 33—100

P 33—101

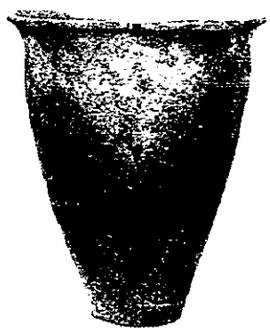
P 33—102

P 34—105

P 34—106



P 34—108



P 34—109

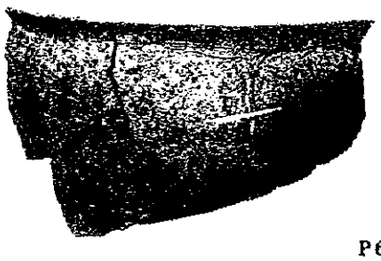
P 46—117

P 41—118

P 54—124

出土遺物 5 （竪穴）

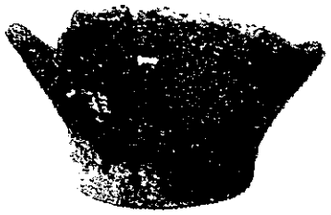
P 54—125



P 62—128

P 63—130

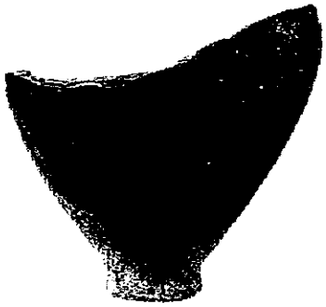
P 65—133



P 65—132

P 67—138

P 67—142



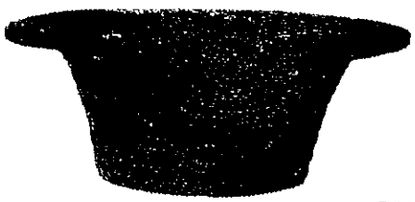
P 67—143

P 71—153

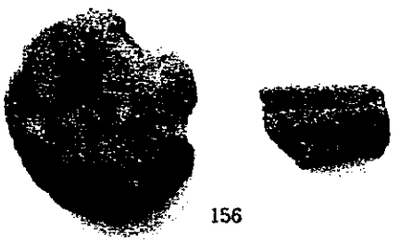
P 74—157

出土遺物 6 （竪穴）

図版38



P74—161



155

156

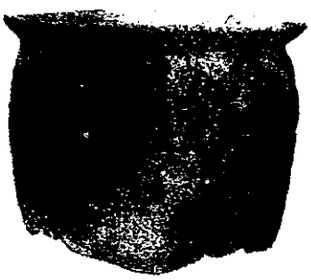
P74

P80—170

P80—172

P80—174

P80—173

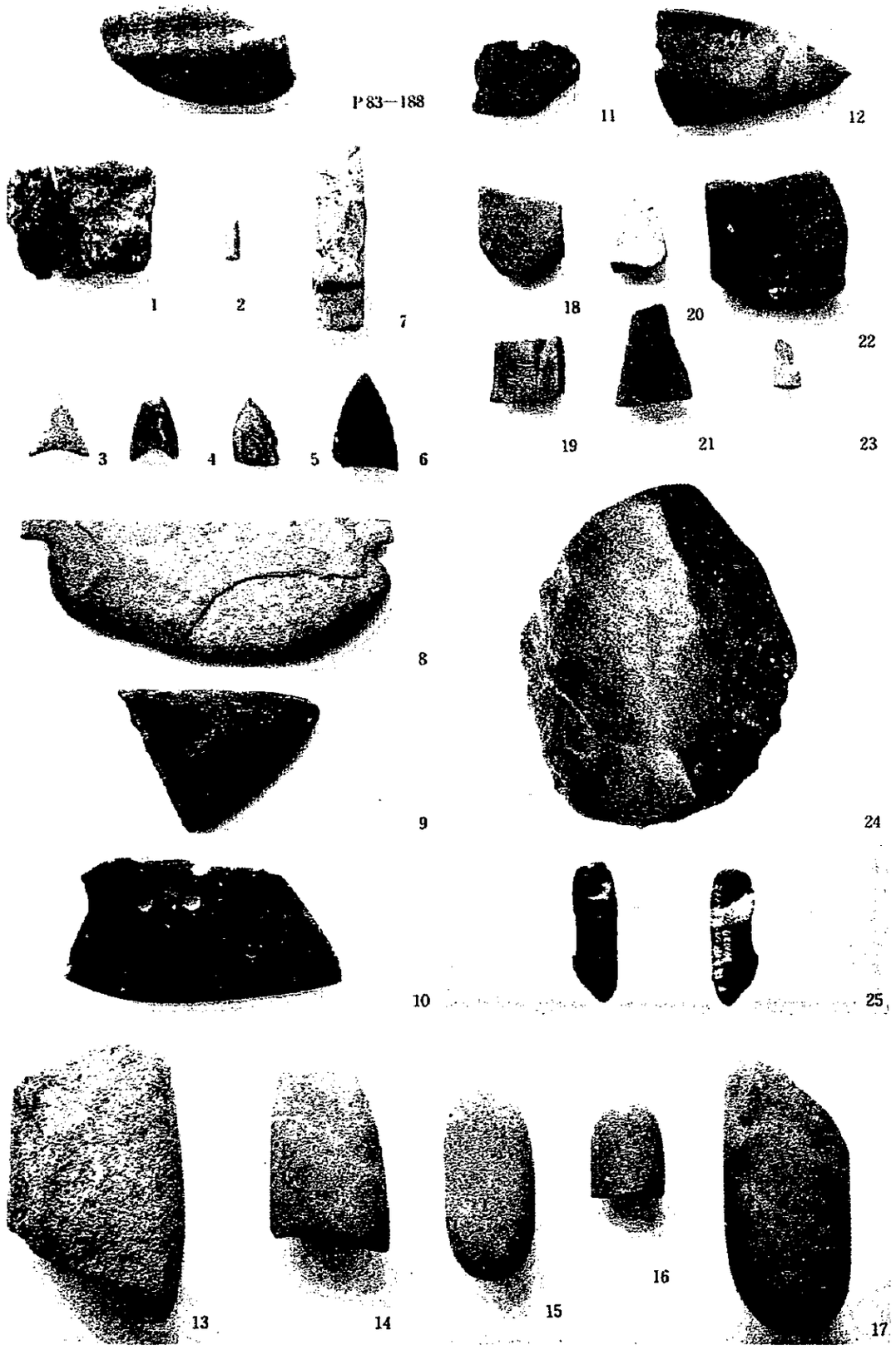


P80—175

P81—187

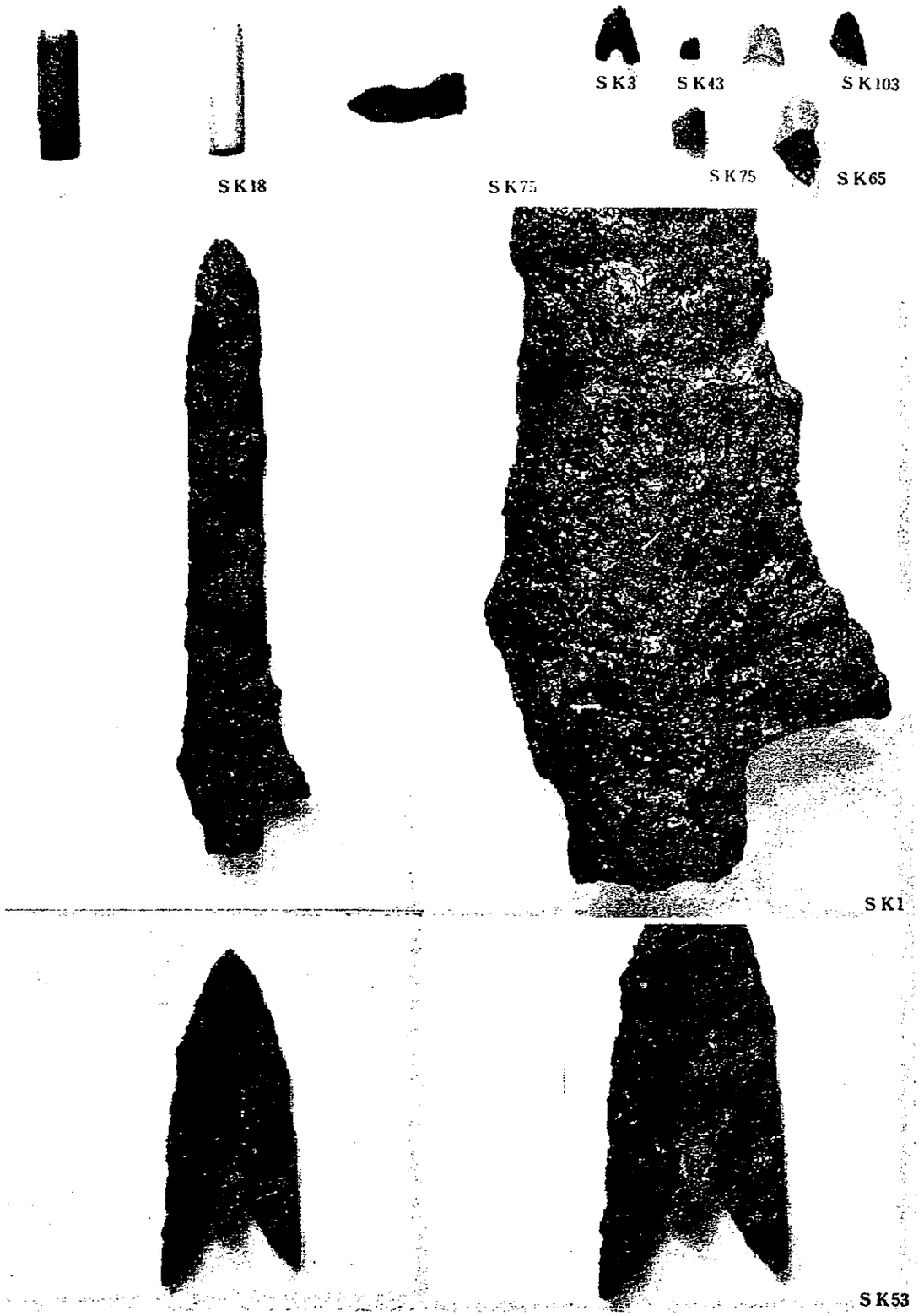
P81—188

出土遺物7（竪穴）



出土遺物8（竪穴）

図版40

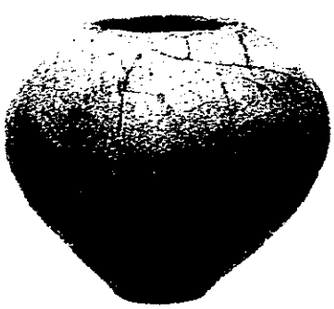


出土遺物9（土壙墓）

SK3

SK5

SK17



SK30

SK58

SK49

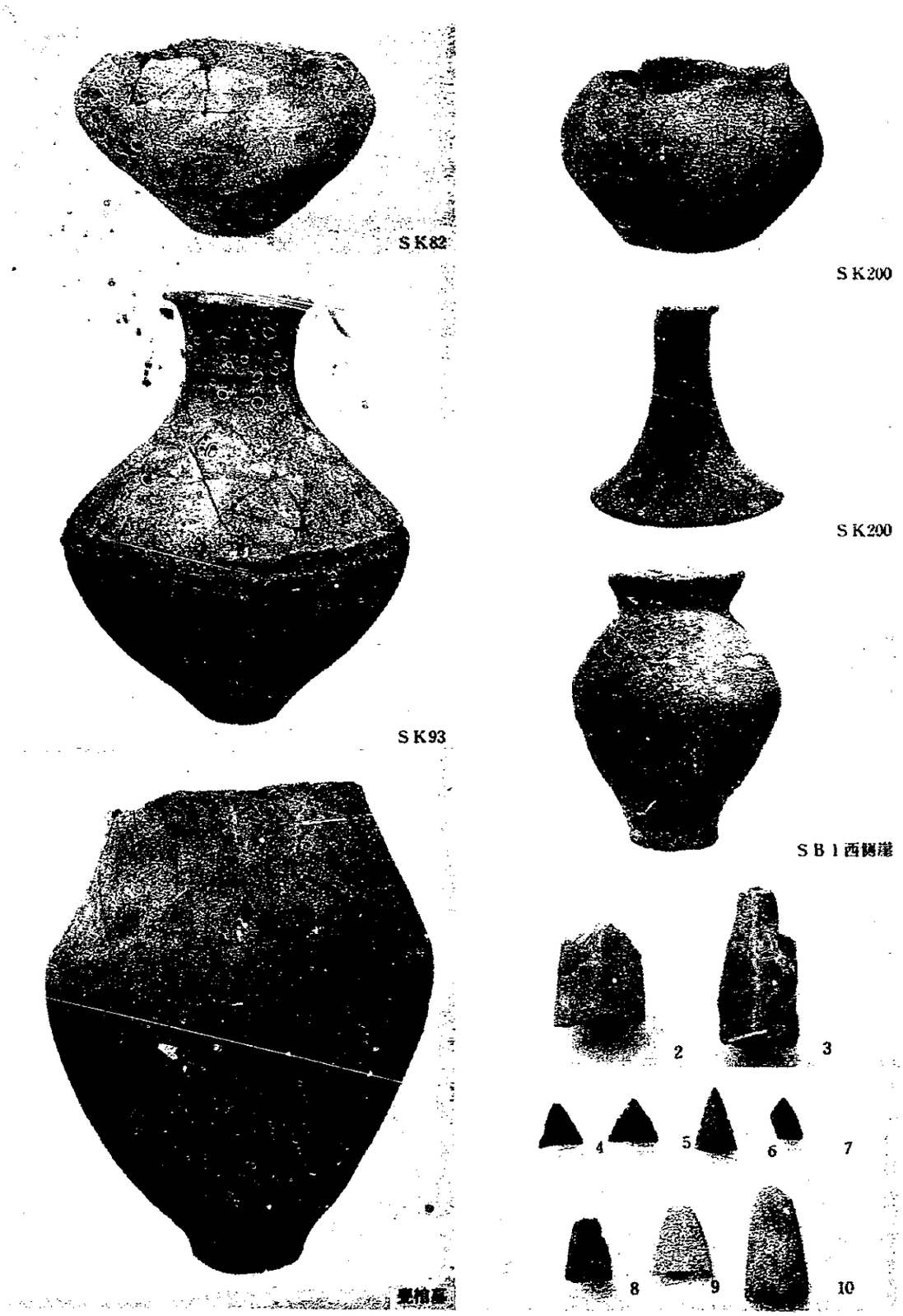
SK71

SK79

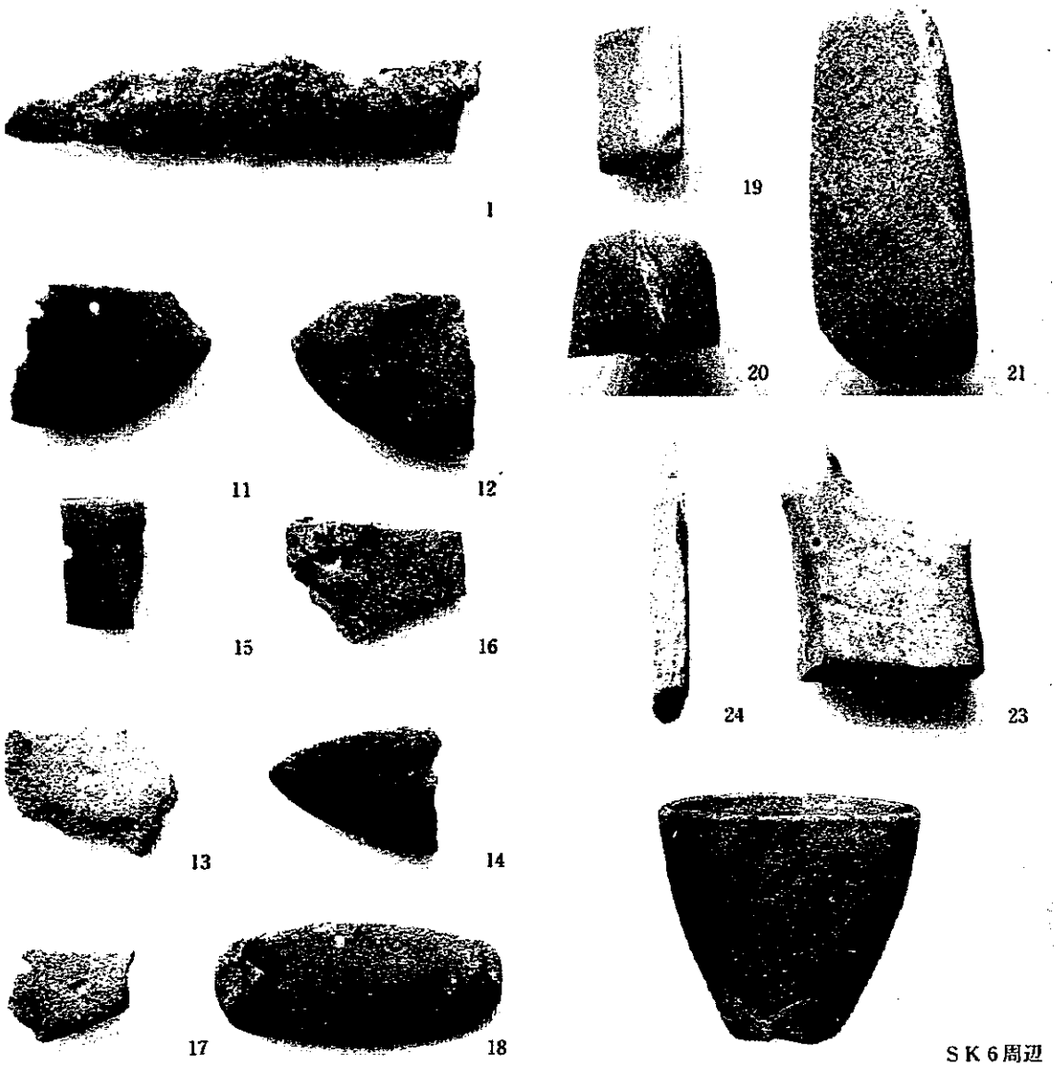
SK80

出土遺物（土壙墓）

図版42



出土遺物11（土壙墓ＳＫ200、その他）



出土遺物12（その他）

後　記

以上で冨地原梅木遺跡の報告を終える。幾度となく記してきたように悔いの残る点の多い調査であったが、一つの責任を終えて胸をなでおろす感がある。最後になったが暑い時期から寒い時期にかけて困難な発掘調査に携わっていただいた宗像市在住の方々、地形測量・遺構実測を手伝っていただいた福岡教育大学・福岡大学の学生諸氏、そして整理を完遂していただいた九州歴史資料館の方々にあらためて感謝いたします。

名　　残 Ⅳ

— 福岡県宗像市所在遺跡の発掘調査報告 —

宗像市文化財調査報告書 第29集

平成3年3月30日

発行　宗像市教育委員会
福岡県宗像市東郷995番地

印刷　隆文堂印刷株式会社
北九州市門司区畑田町1—1